平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）報告書

住吉・堺の歴史的景観

2017 年 3 月

関西大学なにわ大阪研究センター

平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）報告書

住吉・堺の歴史的景観

研究報告

住吉大社境内の石燈籠からみた大阪文化の伝播　黒田　一充　‥‥　1
住吉大社と大和川　岡　絵理子　‥‥　6
近世堺の地場産業　―鉄砲鍛冶屋敷井上家所蔵資料が語るもの―　藪田　貫　‥‥　8
靱永代浜住吉祭の造り物　藤岡　真衣　‥‥　10
「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について　井浦　崇・平尾　修悟　‥‥　12

「住吉周辺の歌碑・記念碑めぐり」　乾　善彦　‥‥　15
「明治弐拾八年十一月十五日 現今建物官営社営略図及明細書」について　橋寺　知子　‥‥115
『住吉松葉大記』からみた近世以前の住吉神宮寺 ―その創建と伽藍景観―
櫻木　潤　‥‥269

本報告書は、平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）「住吉・堺の歴史景観の復元」の研究成果として公開するものです。

研究期間　平成 28 年（2016）4 月 1 日～平成 29 年（2017）3 月 31 日

研究組織	研究代表	文学部	黒田　一充
	研究分担者	文学部	乾　善彦
		環境都市工学部	岡　絵理子
		環境都市工学部	橋寺　知子
		総合情報学部	井浦　崇
		高野山大学文学部	櫻木　潤
	非常勤研究員	関西大学名誉教授	藪田　貫
		関西大学非常勤講師	藤岡　真衣

住吉大社境内の石燈籠からみた大阪文化の伝播

黒田　一充

大阪市住吉区に鎮座する住吉大社は、古くから海の神、和歌・文学の神、摂津国一の宮として広く信仰を集めてきた。現在でも、人びとの信仰を集め、正月には多数の初詣の参拝者が訪れている。

海の神としての信仰は、『延喜式』に住吉大神に祈るための遣唐使発遣の祝詞が記載されており、紀貫之の『土佐日記』にも任国からの帰途に通りかかった住吉浦で、荒れた海の船中から鏡を投じて祈った記述がある。この海の神、航海の安全を祈る神としての信仰は全国へ広がり、2300 社をこえる住吉神社が各地でまつられている。

遣唐使の廃止後は、海浜に位置する神社のため、風光明媚なことから古くから和歌に詠まれていたこともあり、平安時代中期には和歌の神、文学の神としての信仰を集めるようになり、室町時代の『御伽草子』の「一寸法師」も住吉を舞台にした作品である。

江戸時代になると、各地で河川の掘削や港の整備が行われ、河川や海上の交通が盛んになっていった。それにともない、物資の移動が盛んに行なわれるようになると、輸送途中の船の安全を祈るため、廻船業者や物資の輸送を依頼した業者が輸送中の船の安全を祈って石燈籠を寄進するようになった。

江戸時代の寛永 21 年（1644）のものが一番古いため、歴史としては比較的新しいものだが、石燈籠の竿や台座の部分に刻まれた銘文には、全国各地の廻船問屋やさまざまな業種の仲間たちが共同で寄進したことが刻まれている。これらは造立当時のものもあれば、地震や台風などの自然災害で倒壊したものや、石の風化によって倒壊の恐れがあるものは撤去されたようである。なかには後継者たちが再建したことや修理したことも、碑面に記録されている。なかには、大坂翫物商寄進の石燈籠のように、後継の業種である玩具関係の組合や企業が補修のための寄進をし、そのたびに台座を加えて高さが増しているものもある。

この住吉大社の石燈籠については、これまでも個々の紹介などは行われていたが、全体をまとめて調査したものはほとんどない。昭和 7 年（1932）に住吉大社史料所員の梅原忠治郎氏が記録した調書と、今回の共同研究者に加わっていただいた神武磐彦権宮司が中心になってまとめた昭和 55 年（1980）4 月の台帳があるが、いずれも稿本のままである。わ

ずかに昭和 57 年（1984）に同社から発行された『すみのえ』通巻 165 号に地図と一覧表が載せられ、翌年の『住吉大社史』下巻（昭和 58 年・1983）に年次別一覧表が載せられている程度で、石燈籠一基ずつの銘文の内容までは詳しく触れられていない。

昭和 55 年の調査では、境内に 624 基の石燈籠があったようだが、その後 35 年が経過し、平成 7 年（1995）の阪神・淡路大震災で倒壊したため撤去したものや、境内の整備のために場所を移動させたものも多くなっている。平成 26 年（2014）から、住吉祭の記録調査にかかわって来たこともあり、石燈籠の悉皆調査をおこなう機会を与えていただくことになった。

今回の調査では、本社と住吉公園内を通る参道のほかにも、以前の調査ではおこなわれていない境外末社の堺市・宿院頓宮、大阪市港区・港住吉神社の境内もふくめて、石燈籠の位置確認と写真撮影、高さの測量を多数の学生たちの協力で行った。その結果、本社の境内と周辺の参道には 634 基、境外末社にも 22 基の石燈籠が現存していることがわかった。

その結果として分布地図が完成し、国土地理院の地形図にもとづくＧＩＳ地図も完成し、年代や地名など、エクセル表のデータと石燈籠の位置を関連付けることができるようになった。

年代が読み取れるものからは、寛永 21 年（1644）が一番古く、享保年間（1716～36）が一番多いことがわかった。さらに地名を旧国名で分類すると、大坂・堺が 54%を占めるが、あとは松前（北海道）から薩摩まで分布し、内陸部の信濃・飛騨と山陰地方などを除いて、ほぼ全国的に分布していることがわかった。ただし、関連資料の調査で、現在の石燈籠の位置は昭和 5 年（1930）年ごろに境内の奥に散在していたものを前面に動かして整備したものであり、造立当時のままの景観ではないことも明らかになっている。これらの知見にもとづいて、境内の石燈籠を紹介するイラストマップを作成した。今後、これを使ったガイドツアーを住吉大社で 3 月 25 日（土）に開催する予定である。

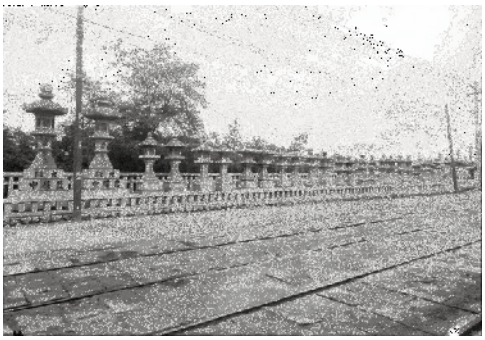
ほかに、これまでにわかった点を少しまとめておきたい。住吉大社に関しては、江戸時代の初め、17 世紀の半ばごろから、境内や祭礼行列が描かれた屏風などの絵画資料が残っているが、その初期の作品に描かれた境内には石燈籠が描かれていない。サントリー美術館が所蔵する「四天王寺・住吉大社祭礼図屏風」に、本殿瑞垣の前、現在卯の日参道とよばれるところに 6 基が描かれているのが唯一である。

これ以前にも石燈籠があったかどうかは不明だが、江戸時代の中期以降の絵画や境内図になると、石燈籠が描かれ、その数が次第に増えていることは、実際の銘文調査の結果とも一致している。

また、このような石燈籠の調査の前例としては、香川県琴平町の金刀比羅宮があり、668基の石燈籠が調査されて『金刀比羅宮庶民信仰資料集　第3巻』（日本観光文化研究所編、金刀比羅宮社務所　1984年）にまとめられている。同じ海上安全の信仰を集める神社であり、数も住吉と近いものだが、象頭山の麓から奥社を結ぶ参道の高低差を考えると、その調査時の苦労は比べものにならない。ただ、銘文から見た寄進者は、金刀比羅宮が瀬戸内海の沿岸地域が中心となっているのに対し、住吉大社の方は、現在の北海道にあたる松前から日本海側を通って九州の薩摩まで、太平洋側も江戸や仙台からの寄進者があるなど、全国的な広がりを見せている。

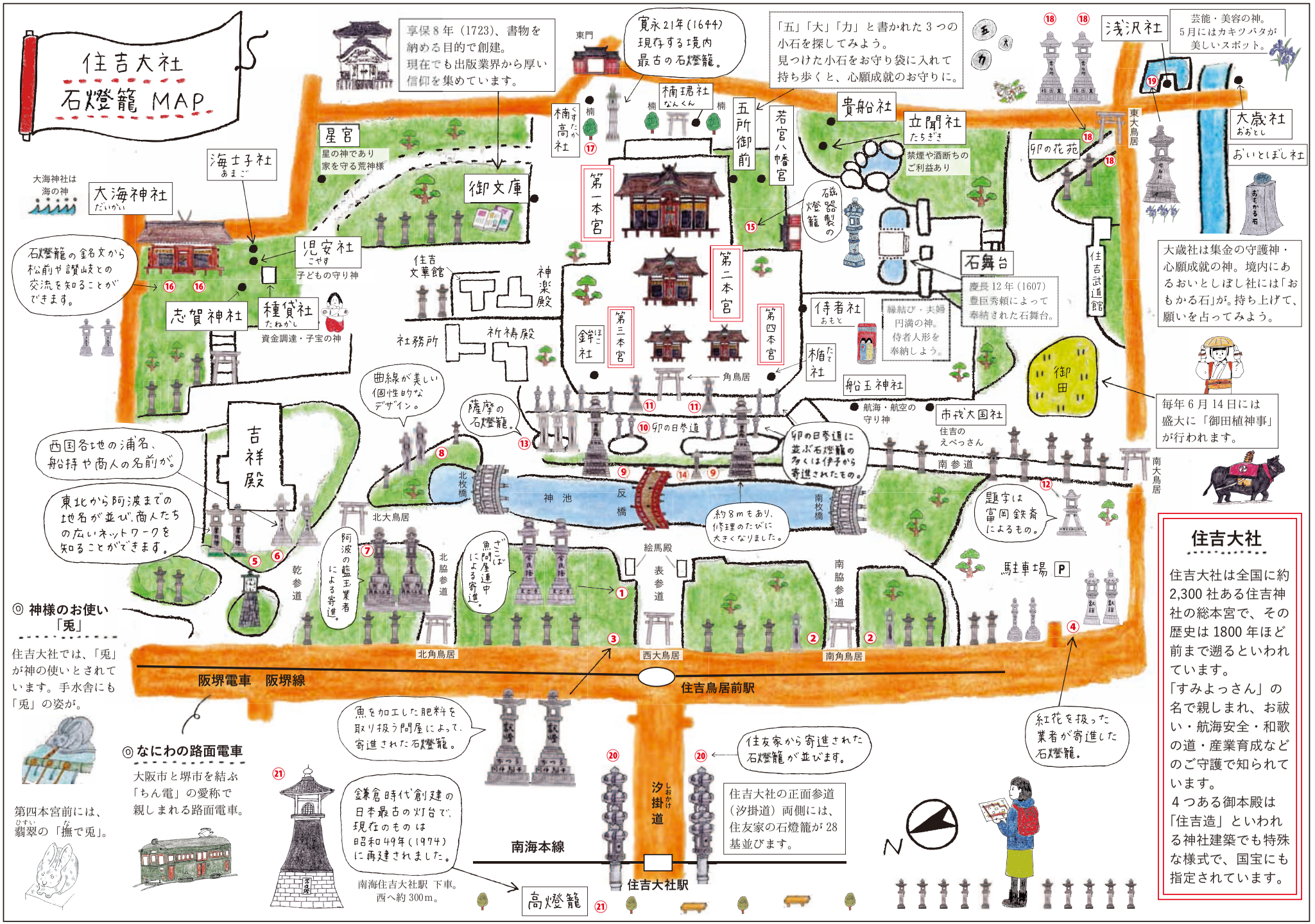
大阪文化の伝播については、石燈籠の銘文に記された場所の現地調査を行なっている。40基以上の石燈籠が寄進された伊予・松山については、江戸時代に松山藩の港町であった三津浜に住吉神社が残っており、地名に残っていることがわかった。

富山県高岡市は江戸時代から明治にかけて、大坂から綿が運ばれて加工されて栄えた町だが、市内の関野神社には、住吉大社にある石燈籠と同じ商人たちが寄進し、堺の石工がつくった石燈籠が残っている。また綿商人の旧室崎家住宅には住吉社の風景を彫った欄間が残っている。紅花業者が寄進した石燈籠についても、山形県中山町の旧家に寄進を募る文書が残っていることがわかり、現地調査に赴く予定である。このように石燈籠の銘文に記された業者や人名を手がかりに、大坂側からの視点だけではなく、寄進者の地元からの視点も交えて、大坂へ運ばれた品物と大坂から運んでいった品物、遠隔地の業者が品物の売買でつながっている様子など、近世以降の物資の輸送ルートやネットワークの問題を探っていきたい。



昭和前期のガラス乾板写真（住吉大社所蔵）

住吉大社 石燈籠 MAP



◎ 神様のお使い「兎」

住吉大社では、「兎」が神の使いとされています。手水舎にも「兎」の姿が。

第四本宮前には、翡翠（ひすい）の「撫（な）で兎」。

◎ なにわの路面電車

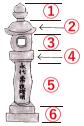
大阪市と堺市を結ぶ「ちん電」の愛称で親しまれる路面電車。

住吉大社

住吉大社は全国に約2,300社ある住吉神社の総本宮で、その歴史は1800年ほど前まで遡るといわれています。
「すみよっさん」の名で親しまれ、お祓い・航海安全・和歌の道・産業育成などのご守護で知られています。
4つある御本殿は「住吉造」といわれる神社建築でも特殊な様式で、国宝にも指定されています。

住吉大社 石燈籠図鑑

石燈籠の各名称



① 宝珠　頂上の玉ねぎ状の装飾。

② 笠　屋根の部分。六角形や四角形が主流。

③ 火袋　灯火が入る部分。

④ 中台　蓮の花弁などの装飾を施すことも。

⑤ 竿　もっとも長い柱の部分。

⑥ 基礎　一番下の足となる部分。

① さこば魚問屋の石燈籠

【献納年】
文化九年四月一日
(1812)

【場所】
大鳥居を入った左
北絵馬殿そば

江戸時代に大衆魚を扱った雑喉場魚市場の商人たちによって奉納された。題字は、江戸時代中期の儒学者・国学者五井蘭洲の筆。

② 南部・松前商客中、大坂近江屋仁右衛門の石燈籠

【献納年】
延享二年正月
(1745)

【場所】
南角鳥居の南北

大坂と南部・松前の間を往き来した商人が共同で奉納した石燈籠。ニシン・昆布・干しアワビなどを扱った蝦夷地や東北の商人との交流を知ることができる。

③ うつぼ干鰯仲間奉納の石燈籠

【献納年】
明治二十三年正月
(1890)

【場所】
表参道の北側

干物や肥料にする干鰯などが全国から集まる靱塩干魚市場（現在の靱公園付近）の商人たちによって奉納された。
①や⑨と並ぶ境内最大級。

④ 諸国紅花荷主中、京都紅花屋中奉納の石燈籠

【献納年】
天保七年三月
(1836)

【場所】
南角鳥居の南側

紅花を扱った業者が寄進した石燈籠。京都紅花屋中が、この石燈籠を立てるために寄付を依頼した文書が、山形県の旧家に残っている。

⑤ 江戸松坂屋、大坂南中買古手屋中の石燈籠

【献納年】
寛政五年五月
(1793)

【場所】
吉祥殿南西隅

古手屋とは、古着や古道具を売買する店のこと。東北から阿波までの地名が銘文に並び、大坂と東日本各地をむすぶ商人たちの交流がわかる。

⑥ 大坂新天満町天満屋、西国諸浦の石燈籠

【献納年】
延享三年九月
(1746)

【場所】
吉祥殿南西側

網元・船主・商人たちが寄進した石燈籠。
銘文に、瀬戸内・豊後・日向・土佐・阿波・紀伊の浦名が並ぶ。

⑦ 阿州藍玉大坂積の石燈籠

【献納年】
天保二年正月
(1831)

【場所】
北大鳥居の西側

阿波の名産である、藍玉を扱った業者によって寄進された。藍玉は、藍の葉を発酵・熟成させて臼でひき、乾燥して固めた染料。

⑧ 肥前唐津 練屋市郎兵衛ほかの石燈籠

【献納年】
享保二年六月
(1717)

【場所】
交通祓所の西側

銘文には、肥前唐津・出羽秋田・大坂の地名や商人の名前が見える。
笠の曲線が美しい、六角形の石燈籠。

⑨ 卯之日参道 翫物商の石燈籠

【献納年】
宝暦十二年九月
(1762)

【場所】
神池東岸の南北

おもちゃの問屋が奉納した石燈籠。後継者が再建修復を行うたびに石壇が増えて高くなり、現在まで500以上の人物・企業名が刻まれている。

⑩ 卯之日参道 豫州松山の石燈籠群

【献納年】
宝永六年～享保六年
(1709)　(1721)

【場所】
卯の日参道

角鳥居前の「卯之日参道」の両側には、高さ約3mの石燈籠が40基以上並んでいる。その多くは、伊予松山と大坂の商人から寄進された。

⑪ 大坂 吉文字屋清左衛門の石燈籠

【献納年】
享保二十年四月
(1735)

【場所】
角鳥居の南北

四角柱が珍しい角鳥居の左右にある石燈籠。
再建されたもので、題字は文人画家・書家として活躍した池大雅の筆。

⑫ 大阪巡航合資会社の石燈籠

【献納年】
明治四十年七月
(1907)

【場所】
南参道の西側

明治36年(1903)に設立された大阪巡航合資会社が奉納した石燈籠。
題字の筆者は、近代文人画家の富岡鉄斎。

⑬ 薩摩の石燈籠

【献納年】
承応三年～文化三年
(1654)　(1806)

【場所】
北枚橋東詰の南側

神池の東側に、薩摩の石燈籠が5つ並ぶ。そばにある誕生石は、薩摩藩主島津家の始祖・忠久が生まれた場所とされる。

⑭ 忍城主能登守阿部朝臣正敏の石燈籠

【献納年】
天明五年六月
(1785)

【場所】
反橋東詰の南側

石燈籠を寄進した阿部正敏は、武蔵国忍藩を統治した江戸時代中期の大名。大坂城代を勤めていたときに寄進された。

⑮ 陶器商 盟信社の燈籠

【献納年】
明治十四年六月
(1881)

【場所】
南瑞垣門の東側、
南中門との間

境内で唯一の磁器製の燈籠。鮮やかな彩色が美しい有田焼。
大阪・讃岐・尾張・美濃の陶磁器業者たちが奉納した。

⑯ 松前・塩飽の石燈籠

【献納年】
享保六年正月
(1721)

【場所】
大海神社の拝殿前

拝殿と本殿を仕切る金扉の蒔絵が美しい大海神社は、海の神を祀っている。松前と讃岐塩飽の廻船業者のつながりを知ることができる石燈籠。

⑰ 楠高社の石燈籠

【献納年】
寛永二十一年六月
(1644)

【場所】
楠高社の楠のところ

苔むした笠が美しい、境内で現存する最古の石燈籠。
楠高さんと呼ばれる大楠の祠には、巳神が祀られている。

⑱ 東國積　勢壽講 勢州積荷主中の石燈籠

【献納年】
明治二年九月
(1869)

【場所】
東大鳥居の東西

伊勢の廻船問屋たちが奉納した石燈籠。
京・大坂と江戸や東国を結んで品物を輸送した。

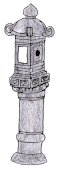
⑲ 浅沢社　松嶋廓有志者の石燈籠

【献納年】
大正六年二月
(1917)

【場所】
浅沢社・神池の島

かつて大阪市西区にあった松嶋遊廓の有志が奉納した石燈籠。
カキツバタが咲く神池の中の島に立つ。

⑳ 住友家奉納の石燈籠群



【献納年】
享保十二年～昭和四年
(1727)　(1929)

【場所】
住吉公園内の汐掛道の南北

海上安全と家内安全を願い、代々の住友家当主が寄進した28基の石燈籠。もとは境内に散在していたが、汐掛道の両側に集められた。

㉑ 住吉高燈籠

【献納年】
昭和四十九年再建
(1974)

【場所】
住吉公園前交差点
西側

日本初の灯台として、鎌倉時代末に創建されたと伝えられている。もとは、現在の場所から西へ200mほど離れた海浜に建っていた。高さは21m。

住吉大社と大和川

岡 絵理子

堺市役所高層館の１階ロビーには、「住吉祭礼図屏風」のレプリカが飾られている。「住吉祭礼図屏風」は江戸時代初期のもので、左右２隻あり、左隻は「夏越祓」での住吉大社の社殿から太鼓橋を渡り神輿行列が堺へ向かう姿が描かれており、右隻は堺の浜通から頓宮へ向かう町人たちの行列が描かれている。市役所１階にあるのは、この右隻である（図２）。屏風は桃山時代から江戸時代初期の堺のまちを描いているといわれている。

この図を見て以来、現在は大和川によって明確に分けられている大阪市と堺市の関係、特に住吉大社と堺市の関係に大いに興味を持った。さらに大和川の川違えについて調べたことがあり[1]、それが堺市にもたらした様々な影響を知るにつけ、住吉大社と大和川の関係にも関心を持つにいたった。そこで本稿では、住吉大社と堺の関係、その関係が大和川の川違えによりどのように変化し、現在に至っているかについて、既存の資料からまとめるものである。

■住吉大社と堺

一般に、祭時の神輿行列は氏地を巡るものである。しかし、住吉大社は氏神としての性格は持っておらず、太古から朝廷との関わりが強かったといわれている。とはいうものの、住吉大社が堺と強いつながりを持っていることは、先の屏風に描かれるようにもちろんよく知られていることで、住吉大社の頓宮（御旅所）は堺市堺区の宿院にあり、また住吉大社の田植神事は堺市から来てその役に着くことになっている[2]という。もともと堺の名の起こりは、中世の摂津国住吉郡堺北荘と和泉国大鳥郡堺南荘に分かれているその境界の荘園として発展したことにある。その両国の境が現在の大小路であるとされている。大小路通の国境としての役割は、1871 年（明治 4）9 月摂泉国境が大和川に変更されるまで続いた。

図１　住吉大社の堺の位置関係

一方、堺市堺区にある開口神社は、堺南組、すなわち大小路以南を氏地とする神社で、住吉大社の住吉三神（底筒男命、中筒男命、表筒男命）を一つにして神徳を現した神とされる塩土老翁神と、

図２　住吉祭礼図屏風
右隻（『堺市博物館優品図録』より）

1 岡絵理子「大阪内陸部の旧大和川埋め立てによる新田開発とその後」、『絵図から読み解く近世大坂三郷周辺地域の環境』、埋立都市大阪研究会、2012. 6

2 三浦周行著、朝尾直弘編『大阪と堺』、岩波文庫、1984. 6。底本は『日本史の研究』第１輯、1922. 5、第２輯、1930. 4

素盞嗚神（すさのおのかみ）、生国魂神（いくたまのかみ）を祀っており、「住吉の奥の院」といわれている。このように、氏地を持たないはずの住吉大社が、なぜ堺と強いつながりを持っているのかを疑問に思っていた。

三浦周行の大阪と堺に関わる論文を集めた「大阪と堺」によると、住吉大社の古文書から、1336年（延元元）から1958年（正平13）に至る間は、堺北荘、堺南荘とも住吉大社の社領であったことが明白であったとの記述があった。その後においても、南北朝時代を通じて「社家の管領するところなりしなり」とのことであった。また、開口神社の古文書によると、12世紀に開口神社の境内に念仏時が創建されたが、室町時代にいたるまでその賽銭は住吉神社の収入であったという。このように、住吉大社が堺市に御旅所をもち、奥の院を持つ理由は、この一帯が住吉大社の領地であったためであった。

■堺と大和川

大和川は、奈良盆地から柏原市の亀の瀬を通り大阪平野に流れ出て、そこからは上町台地の東の河内を北に上り、台地の北を巡って淀川と合流し、大阪の街を幾筋にもなり流れ大阪湾に注いでいた。この川の流れを人為的に流路変更したのが大和川の「川違え」といわれる、1704年（宝永元）に行われた付け替え工事である。工期はわずか8か月だったといわれている。上町台地を切って河内の水を大阪湾に流す試みは何度もされていたが、上町台地が岩盤でその開削は容易でなかった。その証拠に、新しい大和川も上町台地の岩盤に阻まれ、南に流路を変更せざる得なくたったため、浅香山で南にカーブした流路になっている。

堺にとって大和川の川違えはマイナスであったとされるのが一般的である。それは、第一に新大和川の氾濫で洪水が多発したこと（先述の浅香山のカーブも洪水を引き起こした一因である）、第二に土砂堆積で堺の港が埋没したこと、第三に住吉・堺地域という中世以来一体だった地域が大和川によって地理的に分断されたことがあげられる[3]。まさに、住吉大社と堺の地理的関係を断つことになったのである。しかし、大和川付け替え300年を記念して行われた堺市博物館の企画展[4]では、プラスととらえた展示が行われた。プラスとされたのは、第一に臨海部の新田開発がなされたこと、第二に大坂との関係が分断されたことによる和泉国一国での経済圏と文化圏が形成されたことの２点とされている。

■大和橋の300年

住吉大社と堺が大和川で分断されてから300年以上が経過している。文化圏、経済圏も異なって300年である。住吉大社の神輿渡御は、1561年（永禄4）のルイス・フロイスの「日本史」に記載があり、450年以上も前から行われている。大和川の川違えが行われると同時に、大和川にはたった1カ所のみ橋が架けられた。公儀橋である大和橋である。その後、大和橋に神輿火替所ができ、住吉浜では神輿洗神事が始まった。いつのころからか、大和橋があるにも関わらず、神輿が川を渡る「川渡り」が行われるようになった。明治に入り神輿渡御はコレラの流行、堺だんじり騒動、戦争のためとしばしば中止されるものの、1960年（昭和35）に人力による最後の大和川の川渡りが行われた。その後も神輿渡御は少しずつ形を変えたり、昔の姿に戻したりしながら続けられてきた。2004年（平成16）、大和川付け替え300年を記念した川渡りが再び行われた。大和橋があるにもかかわらず、神輿が川を渡る意味を考えるとき、大和川による地理的分断をどこか許さない、土地のつながりを感ぜずにはいられない。

---

[3] 西田一彦監修『大和川付替えと流域環境の変遷』、古今書院、2008.10

[4] 大和川水系ミュージアムネットワーク編『大和川付け替え三〇〇年　―その歴史と意義を考える―』、雄山閣、2007.11

近世堺の地場産業　―鉄砲鍛冶屋敷井上家所蔵資料が語るもの―

藪田　貫

堺市中浜町に所在する井上家は、鉄砲鍛冶屋敷として知られているが、その資料群が、堺市文化財課による確認調査を経て、なにわ大阪研究センターに運び込まれたのは平成27年4月のことである。その目的は、井上家文書の調査を通じて、江戸期における堺の鉄砲鍛冶の姿、さらに鉄砲生産の状況を把握することである。

平成27年度の調査の結果、文書の点数は箱1～30（計31箱）で10,803点（目録に記載する項目数）に及ぶ。ただし、白紙や断簡の束などは一括で1つの番号を与えているため、実数はこれよりも多いと予想される。文書の作成時期は確認された限りで、寛文13年（1673）から第二次世界大戦前に及び、とくに井上関右衛門寿次（文政7～明治41＝1824～1908）の時代のものが多い。

堺鉄砲といえば織豊期以降、近江国友とならぶ鉄砲産業の中心地であるが、とくに五鍛冶のひとつで、鉄砲鍛冶年寄を勤めた芝辻理右衛門家が著名である。しかし同家の文書の点数はわずか106点に過ぎず、しかも鉄砲生産や販売に関する史料を有していないこと（『堺市博物館研究報告』32、2013年）を考慮するとき、後発の鉄砲鍛冶とはいえ、所蔵点数の多さ、鉄砲鍛冶業に関する史料の豊かさにおいて、井上家資料は、堺鉄砲鍛冶の歴史を解明する上で最重要文書である。ここでは、平成27年度と28年度の調査を通じて明らかになった内容のうち、重要と思われる点に限って紹介する。

● 家の由緒

井上家は、慶長年中に堺で鉄炮職になったとの家伝を持つ。これは、慶長14年（1609）に井上伝兵衛正重という人物が、砲術稲富流の始祖、稲富一夢より秘伝を伝授されたという記録に基づくものと思われる。しかし実在が明らかなのは初代関右衛門で、承応2年（1653）、伊予国大洲藩主加藤泰興より「生得元気并気世話敷者」との理由で、「関右衛門」の名をもらったことで、以後、関右衛門が井上家代々の通名となった。

● 鉄炮の種類

井上家で製作されたと思われる鉄炮の注文図が、残されているが、そのほとんどは火縄銃であり、細筒・中筒・抱え大筒・据付型大筒（最長202センチ）・短筒・火矢筒・三連銃など、様々なサイズ・形式がある。その他、風炮（気炮）と管打（雷管）式西洋銃であり、とくに後者ついては安政2年（1855）、堺全体（鉄炮鍛冶17名）で国産の8匁玉ゲベール銃が775挺あり、井上家はそのうち75挺を保有していた。

● 取引関係

井上家で取り扱っていた鉄炮は、「武家方鉄炮」・「百姓威鉄炮」・「猟師鉄炮」である。そのうち、武家方に関する文書の割合が多く、大名・旗本（交代寄合の米良主膳のみ）合わせて61家に出入りしていた。幕末から明治初頭にかけては、伊予国大洲・吉田・宇和島藩、豊後国臼杵・岡・日出諸藩からの注文が多いが、つねに中心は大洲藩で、3人から7人の扶持を同藩から貰っている。

● 注文内容

武家方の注文は、鉄炮の誂えと直しに関するものが多く、現存している中で最も古いと考えられる注文は、寛文 13 年（1673）7 月の大洲藩からの鉄炮 40 挺の直しである。武家方とのやりとりについては、最初の注文以外にも度々の催促、注文の変更・取消し、仕様通りでなかったことや輸送時のキズなどのクレーム、返品・作り直し・値引き要求など、注文から納品までの間に紆余曲折も多い。鉄炮鍛冶職が単なる技術工であっただけではなく、商人としての才覚も必要としていたことがうかがわれる。

明治に入ると、版籍奉還・廃藩置県により、藩の武器庫の鉄炮は新政府に没収され、武家方の注文は終焉を迎える。そのようななか井上家では明治 14 年（1881）の第 2 回内国勧業博覧会、同 17 年の長野勧業博覧会に猟銃を出品している。明治 20 年代以降は、鉄砲の製造も若干見られるが、修理をおもにするようになり、やがて刃物など種々の金物の生産に移行したという。

● 業務帳簿

鉄炮鍛冶の業務帳簿としては、宝暦 2 年（1752）から明治 30 年代にかけて、「武家方誂鉄炮御窺帳」・「百姓威鉄砲誂御窺帳」・「大福帳」・「万覚帳」（一部が鉄炮関係）など数種類が残り、生産状況を把握することができる。武家方の注文のピークは 1839 年の 280 丁、百姓猟師方の注文のピークは 1866 年の 150 丁となり、従来の通説を覆し、堺の鉄砲産業が「徳川の平和」の下で決して斜陽化したものでなかったことが明らかとなった。

● 鉄炮製造技術

江戸時代の鉄炮製造法を知る手がかりについては、若林元敷「鉄炮作法秘伝書」「中島流砲術管闚録」「大小御鉄炮張立製作」などがあり、「鉄炮作法秘伝書」には、文化 9 年（1812）に 70 匁玉筒を造ったときの付紙がある。科学技術史の上からも注目される。また鉄炮製造技術の伝授を示すものとして、文化 10 年（1813）7 月の「鉄炮張立伝授事（写）」がある。史料には「口伝等伝授」・「不可他言他見」・「神文如件」との文言があり、伝授に当たっての厳粛な雰囲気を伝えている。

以上のように、井上家文書は、江戸時代を通じて堺の鉄砲産業の状況を余すところなく伝えるきわめて貴重な資料である。また鉄砲鍛冶屋敷としての敷地・家屋を一部、変更を加えながらも現在に伝えており、建造物としての価値も高い。今日、刃物や線香作り、緞通などが堺の地場産業として喧伝されているが、鉄砲もまたそのひとつであることが明らかである。鉄砲鍛冶屋敷として近い将来、整備され、公開されることが期待される。

靭永代浜住吉祭の造り物

藤岡　真衣

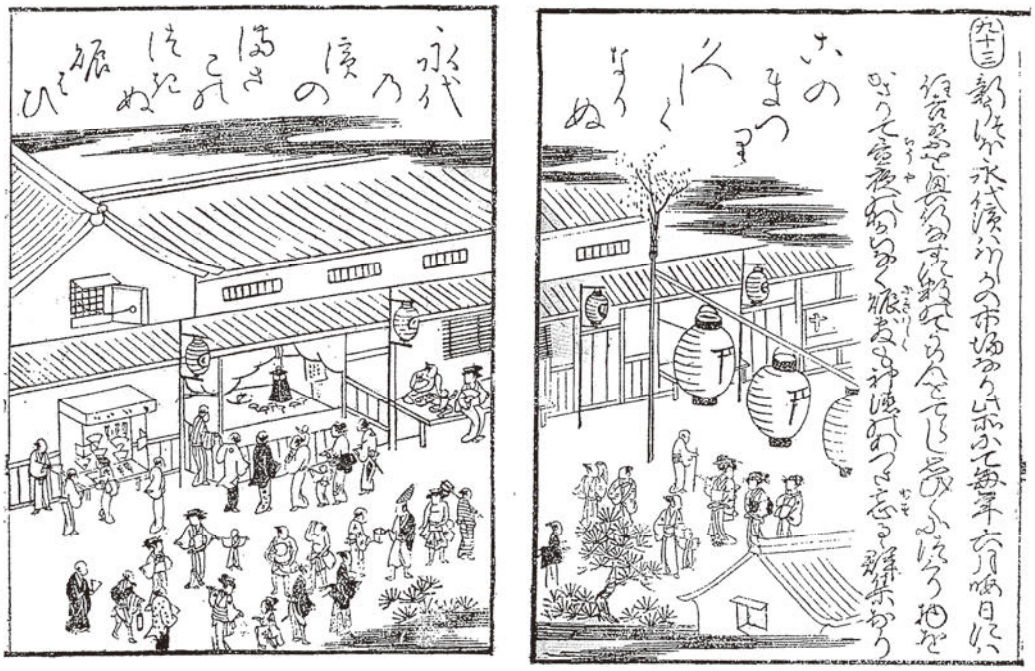
坐摩神社境内の火防陶器神社（大阪市中央区久太郎町４丁目）では、毎年７月 21～23 日の「せともの祭」に、大量の皿や茶碗を用いた陶器造りの人形が飾られている。その起源は、江戸時代に西横堀の瀬戸物町の陶器商が、夏の地蔵会に陶器造りの人形を奉納していたことに由来する。同じように、靭永代浜でも干鰯を使った造り物が飾られていた。

永代浜は、寛永元年（1624）に完成した後、諸国から運ばれた塩魚や干鰯の荷揚げと市場として賑わった地域であり、現在の靭公園（大阪市西区靭本町）付近にあたる。

住吉神社の祭日の旧暦６月晦日には、永代浜でも住吉祭が行なわれていた。寛政 12 年（1800）に刊行された『狂歌絵本 浪花のむめ』（四之巻。『浪速叢書』第十二、所収）に、つぎのような記事がある。

> 新うつほ永代浜ハほしかの市場なり 此所にて毎年六月晦日にハ住吉祭を興行なすに数のてうちんをてらし 思ひ思ひにつくり物をかさりて 昼夜のわかちなく賑敷（にきハしく）も神徳のあつさ忘るゝ群集なり

これによると、永代浜の住吉祭には、多くの提灯とともに「つくり物」が飾られていた。同書には「このまつり 久しくなりぬ永代乃 浜のまさこのつきぬ賑はひ」とも記されていることから、寛政年間には祭りが慣例となっていたようである。また、同書の挿絵に、鳥居の印が入った提灯を掲げた通りの光景や、店の間に飾られた住吉の高燈籠の造り物を見物する人びとの様子が描写されている。



『狂歌絵本 浪花のむめ』（四之巻。『浪速叢書』第十二より転載）

さらに、『摂津名所図会大成』（巻之九下。安政２年〔1855〕以後。『浪速叢書』第八、所収）には、永代浜での住吉祭の賑わいをつぎのように記している。

同所ニあり　六月廿九日・卅日浜辺に住吉の神社をかざり立　花麗なる提灯・幟・吹抜・旗等を立つらね　干魚塩魚の商家これを祭る　其壮観絶勝なり　さる程に遠近より詣人群参して賑わへること諸社の神事にひとし　尤平生ハ跡形もなく　此両日に限りて社頭の如し　浪花の一奇観也　是全く諸国運送の海上安全を大神にいのるがゆへなり　海舶運送にかゝわりし諸商売ハ　いづれ此両日ハ住吉大神を祭りて祝ふこと夥しく　浪花に限りて他に双びなき賑ひ也　就中当永代浜を以て魁とす

この記事から、６月 29 日・30 日に、干魚や塩魚を扱う永代浜の商人たちが、住吉祭に提灯や幟、吹抜、旗を飾ったことがわかる。また、海運に関わる業者たちも、海上の安全を祈って住吉神を祀っていたことがうかがえる。

ただし、永代浜のどの辺りに住吉神社があったかは、『狂歌絵本　浪花のむめ』や『摂津名所図会大成』の記事からはよくわからない。しかし、明治 21 年（1888）10 月に作成された「靭共同所有築地組申合規約書」（『資料大阪水産物流通史』三一書房、1971 年）には、

摂津国大阪西区靭中通二十一番地
　宅地二百五十八坪五勺
同四十九番地
　宅地五坪一合一勺
右両地ニ在ル
　住吉神社々殿幷ニ付属
　建家　一棟
　倉庫　二棟　七十五坪

とあり、住吉神社は、靭中通 21 番地と同 49 番地の辺りに鎮座していた。のちの明治 44 年（1911）に発行された『大阪地籍地図』をみると、両番地は永代浜の南側、海部堀川の東側に面する土地であり、現在の大阪市西区靭本町１丁目の靭交番交差点付近にあたる。なお、永代浜の住吉神社は、明治 40 年（1907）に天保町の住吉神社に合祀されることとなった（『大阪府神社史資料』上巻、大阪府、1933 年）。

明治期以降の新聞にも永代浜での住吉祭の記事があり、靭の海産物商の人びとが、干魚や塩魚を材料にした造り物を通りに飾ったという。その題材は、歌舞伎などの芸能の演目や、故事に関わるもの、新聞小説に関するものであった。

ちなみに、新聞記事では、明治 42 年（1909）まで確認することができるが、やがて作られなくなったようである。

戦後、地元の海産物問屋の人びとが、靭の楠永神社の祭りで造り物を一時復活させたという。

「浪花名所図屏風」のデジタルコンテンツ制作について

井浦　崇・平尾 修悟

１．はじめに

「浪花名所図屏風」は，江戸時代の後期から幕末に描かれた作品と考えられ，寺社仏閣や市場，川とそこに架かる橋の風景，市場，芝居町，遊郭など，大坂の名所がパノラマ的に描かれている類例のない唯一の屏風である。浪花名所図屏風における風景を描くにあたって，画家は何冊かの出版物の挿絵などを参考にしたと考えられており，参考にした可能性が強い『摂津名所図会』（寛政８年・1796）と浪花名所図屏風を比較するデジタルコンテンツを制作した。また，各名所について現在の地図，風景と比較することのできるコンテンツとした。

「浪花名所図屏風」に描かれた名所を『摂津名所図会』と比較し，現在の風景とあわせて見ることにより，歴史的景観の変遷をさぐる試みを行った。

２．コンテンツの機能について

過去に制作した「浪速名所図屏風と現在地図の比較」，「浪花名所図屏風と摂津名所図会の比較」を踏襲し，さらに解説文と合わせて比較できるコンテンツを新たに制作した。現在の風景については各名所で撮影された 2017 年現在の写真を使用した。

メイン画面には地図を表示させ，各名所の所在地にラベルを配置した。ラベルは右隻に描かれた名所か左隻に描かれた名所かで，赤と青に色分けしている。ユーザは知りたい名所のラベルを選択することで，各名所の詳細について閲覧できるようになっている。

詳細の画面には，「浪速名所図屏風」に描かれている風景，『摂津名所図会』に描かれている風景，2017 年現在の風景，コンテンツの解説文が表示される（図１）。「浪速名所図屏風」の風景と『摂津名所図会』の風景を比べると描かれている構図は似たものが多く，『摂津名所図会』を参考にして描かれたという可能性を感じることができる。また現在の写真と合わせて見ることで各名所の名残も感じることができるようになっている。

図 1.「和光寺の阿弥陀池」の詳細

過去に制作した「浪花名所図屏風と摂津名所図会の比較」に比べ，いくつかの改善を図った。以前のコンテンツでは画面左の矢印にカーソルをあてることで地図を動かしていたのに対し，本コンテンツではマウスのドラッグによって地図を移動できるようにした。これによってマップの移動時にわざわざ矢印上へカーソルを移動させる必要がなくなり，直感的な操作でスムーズな閲覧ができるようになった。また，画面中央下部に配置されたバーを動かすことで，マップの拡大縮小ができる機能を付与した。マップを拡大して見ることでより詳細な位置関係を確認することができ，縮小して見ることで名所全体の位置関係を確認することができるようになった（図２上）。この他にも画面右下には，コンテンツの使い方や，右隻と左隻の表示非表示を選択できるボタンを追加し，コンテンツとしての扱いやすさを向上させた（図２下）。

また画面左上のタイトルを選択することで，本コンテンツの解説が表示される。ここでは「浪速名所図屏風」の右隻と左隻も表示し，屏風の理解を深めることができる。

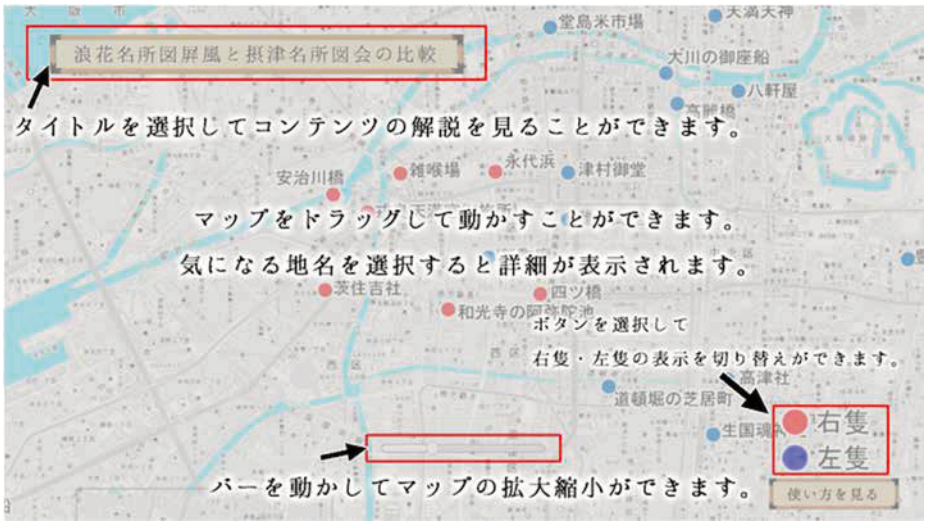


図 2.　マップ縮小時の全体図（上）と 使い方ガイド表示時（下）

３．おわりに

本コンテンツにおける比較では,「浪花名所図屏風」と『摂津名所図会』の各資料が似ている場面が多く，摂津名所図会を参考にして浪花名所図屏風が描かれたことがよくわかるコンテンツとなった。さらに，現在の写真や解説文と合わせて閲覧することで，各名所の名残を感じられる建造物や石碑を確認することができ，より深い理解を促すことのできる資料となった。

井浦　崇（関西大学総合情報学部）
平尾 修悟(関西大学大学院 総合情報学研究科 知識情報学専攻)

住吉周辺の歌碑・記念碑めぐり

関西大学なにわ大阪研究センター

はじめに

住吉は名所である。古来、和歌や文学作品に数多く、住吉は登場する。万葉集には、住吉（すみのえ）を詠んだ歌が神名も含めて四十首ほどあり、その中に、天平六（七三四）年春三月の難波宮行幸の時の歌うたがある。そのうちの一首、

従千沼廻　雨曽零来　四八津之白水郎　網手綱乾有　沾将堪香聞（⑥九九九）

（千沼回より　雨そ降り来る　四極の海人　網手綱干せり　濡れもあくむかも）

右一首遊覧住吉浜還宮之時道上守部王応詔作歌

この左注にあるように、住吉は難波の宮に赴いた官人たちの遊覧の地であった。官人たちが男女交えて住吉の浜辺に遊ぶ姿は、現在の浜寺のリゾート地を彷彿させる。

大夫者　御獵尓立之　未通女等者　赤裳須素引　清浜備乎（⑥一〇〇一）

（ますらをは　み狩に立たし　娘子らは　赤裳裾引く　清き浜辺を）

右一首山部宿祢赤人作

馬之歩　押止駐余　住吉之　岸乃黄土　尓保比而将去（⑥一〇〇二）

（馬の歩み　押さく留めよ　住吉の　岸の黄生に　にほひて行かむ）

右一首安倍朝臣豊継作

住吉の大神は、海の安全を守る神としてあがめられた。巻十九には、遣唐使を送る時に、住吉の神に旅の安全を祈る歌がある。

民部少輔丹治真人土作歌一首

住吉尓　伊都久祝之　神言等　行得毛来等毛　舶波早家无（⑲四二四三）

（住吉に　斎く祝が　神言と　行くとも来とも　船は速けむ）

天平五年贈入唐使歌一首〈并短歌〉作主未詳

虚見都　山跡乃国　青丹与之　平城京師由　忍照　難波尓久太里　住吉乃　三津尓舶能利　直渡　日入国尓　所遣　和我勢能君乎　懸麻久乃　由々志恐伎　墨吉乃　吾大御神　舶乃倍尓　宇之波伎座　舶騰毛尓　御立座而　佐之与良牟　礒乃埼々　許芸波氐牟　泊々尓　荒風　浪尓安波世受　平久　率而可畝理麻世　毛等能国家尓（⑲四二四五）

（そらみつ　大和の国　あをによし　奈良の都ゆ　おし照る　難波に下り　住吉の三津に船乗り　直渡り　日の入る国に　遣はさる　我が背の君を　かけまくの　ゆゆし恐き　住吉の　我が大御神　船の舳に　うしはきいまし　船艫に　み立たしまして　さし寄らむ　磯の崎々　漕ぎ泊てむ　泊まり泊まりに　荒き風　波にあはせず　平けく　率て帰りませ　もとの朝廷に）

反歌一首

奥浪　辺波莫起　君之舶　許芸可畝里来而　津尓泊麻泥（⑲4246）

（沖つ波　辺波な立ちそ　君が船　漕ぎ帰り来て　津に泊つるまで）

古事記には、朝鮮半島に向かう神功皇后の夢に墨江の大神の神託があったことが記されるが、万葉人にとって、住吉の神を斎くのは、それがそのまま海の安全を祈ることであった。

これらの歌うたを刻んだ万葉歌碑が、住吉大社周辺に五基ほどある。一九九一年に建立された⑩の住吉万葉歌碑はその代表例。石柱に古代の船を配したユニークな碑形に、十七首の万葉歌が刻まれている。今回は、都合で行けなかったが、安立町の、霰松原公園と異名を持つ安立南公園には、慶雲三（七〇六）年の難波行幸時に長皇子のよんだ、

霰打　安良礼松原　住吉乃　弟日娘与　見礼常不飽香聞（①65）

（あられ打つ　安良礼松原　住吉の　弟日娘子と　見れど飽かぬかも）

の歌碑もある。

住吉大社は歌道の神でもある。伊勢物語に登場する、

むかし、帝、住吉に行幸したまひけり。

われみても　ひさしくなりぬ　住吉の　岸の姫松　いくよへぬらむ

おほむ神、現形したまひて、

むつましと　君は白波　みづがきの　ひさしきよより　いはひそめてき

（百十七段）

のやりとりについては、古今集や伊勢物語の古注、あるいは歌学書などに多くの伝承を伝える。玉津島明神、柿本人麻呂とならんで、和歌三神とされ、多くの歌人、俳人の詣でるところとなった。住吉周辺には、そんな歌碑や句碑も数多く存する。

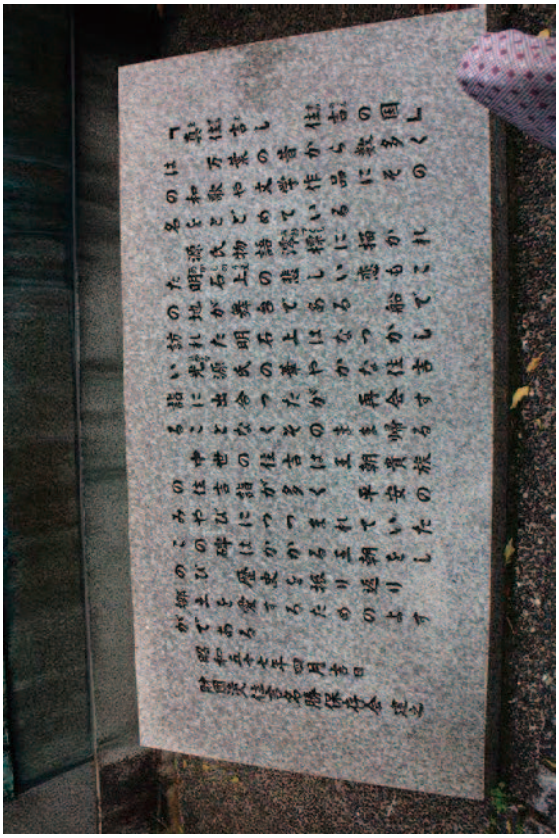
そんなわけで、今回、住吉大社周辺の歌碑や句碑といった文学碑を訪ねて住吉周辺を歩くたよりにすることを企画したのだが、文学碑以外にもさまざまの碑があり、それらは、それぞれの建立の由緒書も含めて、住吉の歴史を知るうえで貴重な情報をわれわれに与えてくれていることに気づいた。たとえば、⑱～⑳の碑では、御田植神事と新町との関係を知ることができる。また、荘厳浄土寺の後村上天皇の歌碑㉜からは、太平記の世界がしのばれるし、西鶴の句碑からは、住吉大社社頭での大矢数の興行が思い描かれる。そこで、この報告書においては、贅言をひかえて、シンプルに碑の写真と資料との構成によって、住吉を歩くしるべとするものである。

なお、本報告は、碑の撮影、資料の収集と整理など、全面的に本学大学院学生の大久保北斗、山口翔平、山口龍輝、鷲尾亜莉沙四氏の献身的な協力を得てなったものである。

目次

①住吉記念碑 …… 1
②松尾芭蕉句碑 …… 4
③汐掛道の記 …… 7
④中村若沙句碑 …… 9
⑤高木石子句碑 …… 11
⑥阿波野青畝句碑 …… 13
⑦宮本竹逕歌書碑 …… 16
⑧大橋桜坡子句碑 …… 19
⑨都鳥社歌碑 …… 21
⑩住吉万葉歌碑 …… 23
⑪海竜王処碑 …… 30
⑫井原西鶴句碑 …… 33
⑬大伴大江丸句碑 …… 35
⑭川端康成碑 …… 37
⑮津守国美歌碑 …… 39
⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑 …… 41
⑰安江不空歌碑 …… 45
⑱木原茂平翁遺績碑 …… 49
⑲此式自上古 …… 51
⑳新町廓 …… 53
㉑御文庫 …… 56
㉒安田青風歌碑 …… 60
㉓生田南水句碑 …… 62
㉔光台院親王歌碑 …… 65
㉕浅沢の杜若 …… 67
㉖蜀山人狂歌碑 …… 69
㉗一運寺句碑 …… 72
㉘法然歌碑 …… 73
㉙摩耗不明碑 …… 75
㉚神明穴立石 …… 76
㉛万葉歌碑 …… 78
㉜後村上帝歌碑 …… 81
㉝細江川碑 …… 83
㉞藤原俊成歌碑 …… 85
㉟藤原定家歌碑 …… 86
㊱宗良親王歌碑 …… 87
㊲顕昭歌碑 …… 88
碑の所在地 …… 89
参考・引用文献一覧 …… 92

①住吉記念碑



【碑面】

「真住吉し住吉の国」は、万葉の昔から数多くの和歌や文学作品にその名をとどめている。

源氏物語澪標に描かれた明石上の悲しい恋もこの地が舞台である。船で訪れた明石上はなつかしい光源氏の華やかな住吉詣に出合ったが、再会することなくそのまま帰る。

中世の住吉は王朝貴族の住吉詣が多く、平安のみやびにつつまれていたこの碑はかかる王朝をしのび、歴史を振り返り、郷土を愛するためのよすがである。

昭和五十七年四月吉日

財団法人住吉名勝保存会　建之

【裏面】

記念碑建立記念
昭和五十七年四月吉日
財団法人住吉名勝保存会
理事長　高野光男
常任理事　東武
常任理事　天野要
理事　池永政彦
理事　絹巻薫
理事　小山育太
理事　笹川了太
理事　中井武兵衛
理事　中野正治郎
理事　西本泰
理事　橋口新太郎
理事　吉村鉄太郎
監事　高木幸太郎
監事　平田英一
事務局長　奥野茂寿
（下部に横書き）設計施工㈱大阪美術設計

【出典】

「真住吉し住吉の国」は風土記逸文『摂津国風土記』に登場する。

【住吉と源氏物語】

住吉と源氏物語の関係について、大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』では以下のように述べている。

平安時代の住吉信仰が豊かに描かれているのは『源氏物語』であります。須磨巻・明石巻には、光源氏の父帝と明石入道の住吉明神への厚い信仰が、また、澪標・若菜下には、光源氏の住吉詣が描かれています。光源氏は、賢木巻の朧月夜内侍との逢瀬に端を発して、横ざまの罪にあい、須磨の地に謫居させられます。通常は、それで政治生命は終わってしまいますが、光源氏は、須磨で三月上巳の祓を行うとき、にわかに暴風雨が起こり、住吉明神のお陰をもって、異例の道を歩みます。

源氏は帰洛ののち三十歳の秋、中央に復帰できたときの御礼参りとして住吉詣を行います。二度目は、源氏との間に生まれた明石の姫君は東宮妃になり、やがて東宮が新帝に即位されて女御となり、その一の宮の皇太子をみることになります。源氏四十六歳の栄光の御礼参りであります。このような展開をみますと作者紫式部自身の住吉明神への信仰が並々でなかったこと、明石入道が熱烈な住吉明神の信者であったことも事実であり、明石の地は『住吉神代記』にも播磨一円が住吉神領であった中でも「魚次浜一処」とあってとくに密接な関係がありました。こうして、住吉現人神の信仰は、「住吉の松」の歌枕とともに、謡曲「高砂」にみられる住吉・高砂の相生のめでたさをうたう円満長寿・寿福慶賀の意を表象する神として現代に継承されています。

②松尾芭蕉句碑

【碑面】

升買て分別かはる月見かな　翁

【解説看板】

松尾芭蕉句碑

升買て分別かはる月見かな　翁

芭蕉は元禄七年（一六九四）九月九日、故郷の上野から奈良を経て大坂に入り、十三日には住吉の宝の市で名物の升を買っている。これはその翌日の句席での挨拶の発句。

住吉の津は古くから海外貿易の拠点として栄え、定期的に市が開かれ、経済だけでなく文化の発展にも大きな役割を果たしてきた。宝の市はその名残りで、江戸時代には社前で売られる升を求める参詣人で賑わった。

芭蕉は同年十月十二日、南御堂近くで没しているので、住吉詣でと、宝の市は生涯最後の旅で、ここがゆかりの地となっている。

この句碑は元治元年（一八六四）芭蕉没後百七十年を記念して、大阪の俳句結社「浪花月花社」が建てたものである。

㈶住吉名勝保存会

【出典】

加藤楸邨（一九六〇）「松尾芭蕉集（上）」、『古典日本文学全集　３０』筑摩書房

弓場史郎（一九七七）「大阪と芭蕉―住吉升市の句―」『すみのえ』一四五号、住吉大社社務所

【補足情報】

おもては不鮮明なため翻刻不能だが、おそらく説明の冒頭の通り。

前記の解説看板には「句席での挨拶の発句」とあるが、真弓（二〇〇三）『住吉信仰』には以下のように説明されている。

元禄時代の文人では、松尾芭蕉も社参して一句を読んでいます。元禄七年（一六九四）九月十三日、宝の市の管でありました。宝の市というのは神功天皇が三韓よりの貢物を庶民に頒たれたという故事に因んで社頭に市が立ち、とくに升を売ったので「升の市」とも呼ばれたものです。その升を用いると、住吉さんのご利益でよくもうかるという信仰があって、人々はこぞって升を買ったのです。

芭蕉はこの日、神前に額ずいたあと、一合升一つ買いました。そのことは芭蕉自身が近江膳所の門人水孫右衛門に宛てた手紙に記していて、

十三日は住よしの市に詣でて

升かふて分別かはる月見哉

壱合升一つ買ひ申候間かく申候

とあるものです。

風流な月見をしようと思って住吉に詣でたのが、升を買ったことによって心境の変化を来してとりやめた、というのです。

この芭蕉の行動について、住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では、四天王寺女子大学教授の富山秦氏の解釈を引いて、以下のように説明する。

芭蕉が升を買ったのは事実であるが、「分別かはる」とはじつは事実ではなく虚構である。『笈日記』の中に門人の各務支考が、その日の芭蕉の行動を記しているところによると、昼頃より雨が降って、ことに日暮悪寒になやまされ、いそいで帰ったようで、雨が降るくらいであるから月も明らかでなかったろう。身体の不調や天候で月見を取りやめたのでは詩にはならない。升を買った結果、急に世帯気がついて月見をやめたといえば、そこに笑いがある。この笑いは「興の詩情」である。つまり、升を買うことは風流とはおよそ縁遠い世俗の行為であるが、ことさらに世俗の行為に及んで庶民性の中に自ら分け入るところに詩興の実践があり、升を買ったことを月見のとり止めの理由のように言いなしたところが興詩の創作である、というのである。

③汐掛道の記

【碑面】

すみのえの　粉浜のしじみ
開けも見ず
こもりにのみや　恋ひ渡りなむ
万葉集　読人知らず

【副碑上部】

汐掛道の記

ここは昔、住吉大社の神事の馬場として使われた場所で、社前から松原が続き、すぐに出見（いでみ）の浜に出る名勝の地であった。

松原を東西に貫く道は大社の参道で、浜で浄めた神輿が通るため「汐掛道」と称され、沿道の灯籠は代々住吉家当主の寄進になり、遠近の参詣や行楽の人々で賑わった。

古くから白砂青松の歌枕の地として知られ近世には多くの文人・俳人がここを往来し、大阪文芸の拠点の一つとなっていた。

財団法人住吉名勝保存会

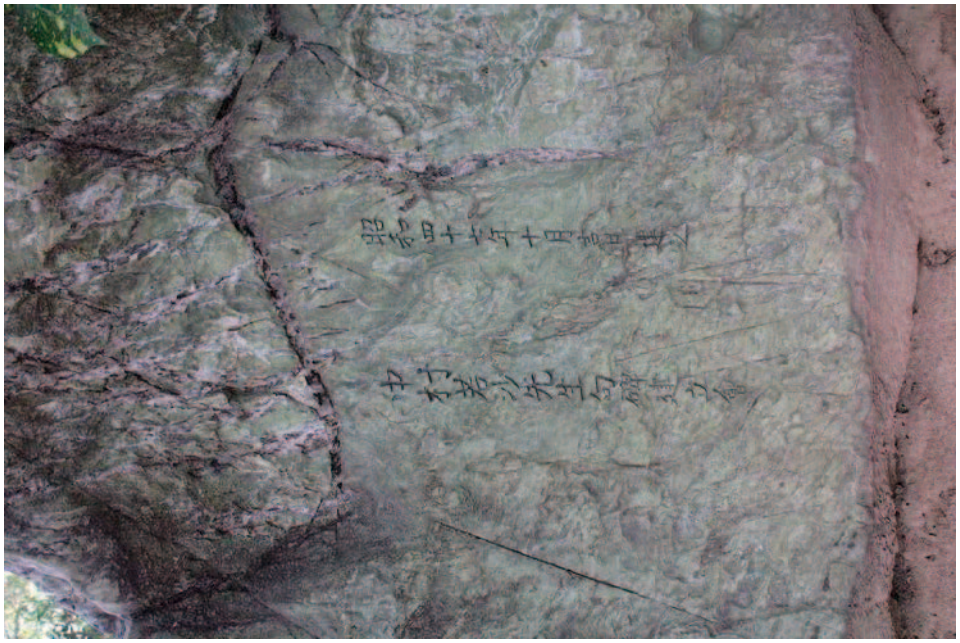
【副碑背面】

平成二年十一月六日建立
財団法人住吉名勝保存会
理事長　高野光男
設計施工㈱大阪美術設計
石工　川端造園石材㈱

【出典】

万葉集　巻六　九九七
住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉戀度南

④中村草沙句碑



【碑面】

若沙

初夢の
あまたの
歌の神に
逢ふ

【裏面】

昭和四十七年十月吉日建之
中村若沙先生句碑建立会

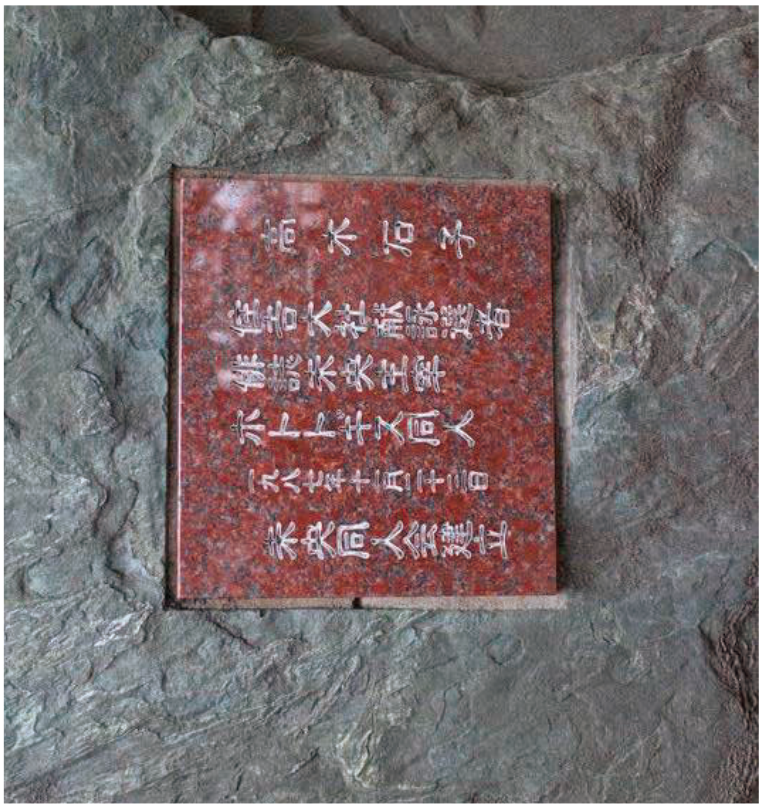
【略伝】

中村若沙（なかむらじゃくさ）　明治二十七年二月十八日、愛知県岡崎市康生町にて父百合之允の長男として医家に生まれる。大正三年大阪医科大学（阪大前身）予科に入学。大正十年大阪医科大学卒業。その間発足した医大俳句会にて句作に励み、大正十年に「ホトトギス」雑詠に初巻頭を占む。大正十一年十二月「山茶花」が創刊され、初学欄を担当する。大正十五年財団法人山口厚生病院外科医長兼務。昭和五年医学博士の学位を取得。医学部講師となる。昭和六年六月より「山茶花」の編集及発行人名儀となる。青畝、木国、桜坡子、爽雨、誓子、草城、梅史、鹿郎、夜半、旭川、一杉、白楢、暁水らと「無名会」を興しメンバーとなる。昭和十年大阪北区に病院開設。昭和十四年「山茶花」の雑詠を桜坡子、爽雨、木国らと四名にて選者となる。昭和十九年、「山茶花」が俳誌統合で廃刊したので「磯菜」を創刊す。昭和五十三年二月二十八日脳梗塞症にて死亡、享年八十四歳。洗礼名「アレクセイ」、吹田市大阪ハリストス正教会にて葬儀並びに告別式。宝塚市宝梅町の墓所に埋骨。（『大阪の俳人たち　1』より）

【出典】

不明。

⑤高木石子句碑



【碑面】
住吉の
松にちりばめ初霰
石子

【裏面】
高木石子
住吉大社献詠選者
俳誌未央主宰
ホトトギス同人
一九八七年十一月二十三日
未央同人会建立

【建立の経緯】

『すみのえ』（一九八八年、一八七号）における本句についての特集には以下のようにある。

高木石子
句碑建立

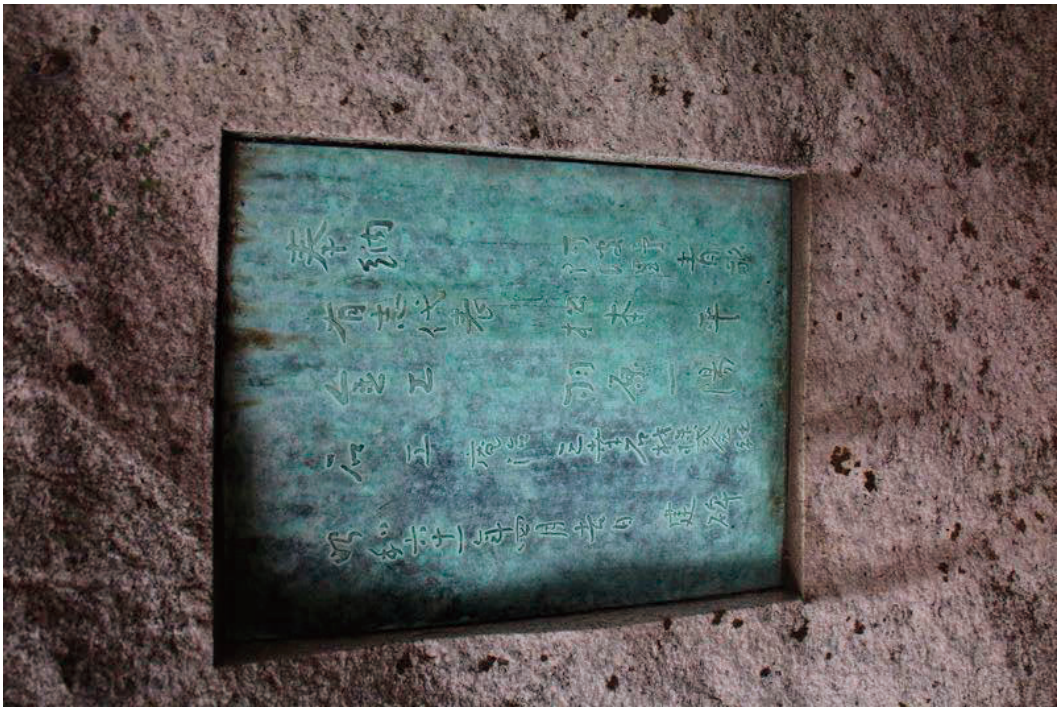
十一月二十三日の新嘗祭の佳日に、住吉大社境内表神苑に於て、俳誌「未央」主宰の高木石子氏の句碑建立除幕式が行われた。

氏はお若い頃大阪商船㈱に勤めておられ、俳句を中村若沙氏に師事、永年中村氏の「磯菜」同人として活躍され、中村氏歿後はその跡を継ぎ誌名を「未央」と改め主宰となられ、又師が住吉大社献詠俳句の選者であった為これもお願いした方である。

氏は昭和五十八年より毎月住吉公園にて句会を催し、住吉大社や住吉公園の風趣や神事が好個の句材となり数多くの俳句が作られ、住吉句会も五十回も数えました。これを記念して「松苗新集」を刊行するとともに、門下の吉年康次氏が発起人となり、未央同人によって高木石子句碑が建立奉納された。

句は写真の通り奈良時代の萬葉集にも多く詠まれている名勝の松に因んだ句で、住吉句会にて作られた作品です。境内の松尾芭蕉の句碑、蜀山人の歌碑、藤沢南岳・川端康成の文学碑などと共に敷島の歌の神様の御神徳発揚に寄与することであろう。

⑥阿波野青畝句碑



【碑面】
松苗や
高知る
千木に
まで
のびむ
青畝

【裏面】
奉納　阿波野青畝
有志代表　松本　平
金工　羽原一陽
石工　庵治　三幸石材株式会社
昭和六十一年四月去日　建碑

【出典】

阿波野青畝（一九三九）『阿波野青畝全句集』花神社

【略伝】

阿波野青畝（あわのせいほ）　明治三十二年（一八九九）二月十日、奈良県高市郡高取町大字上子島に父橋本長治、母かねの五男として生まる。本名は敏雄。小学校入学のころから中耳炎にかかり、その後難聴。特に左耳が遠い。県立畝傍中学三年のとき「ホトトギス」の読者となり、原田浜人に師事。五年生のとき、浜人居にて西下中の虚子に初対面。この年、「ホトトギス」初入選。大正十二年、大阪の阿波野家に入る。翌年、「ホトトギス」の課題句選者となる。昭和四年、郷里大和から創刊の「かつらぎ」主宰となる。同年「ホトトギス」同人。昭和十四年ごろ連句に熱中。昭和二十年三月、空襲により本宅焼失、以後、兵庫県西宮市甲子園に住む。古俳諧のよろしさを現代に生かす稀有の作風を樹立。「あまたの経験に基づく写生」を主張し、高齢化とともに自由無碍の境地に入る。蛇笏賞、大阪市芸術賞、兵庫県文化賞・勲四等瑞宝章を受けた。俳人協会顧問、日本伝統俳句協会顧問、大阪俳人クラブ初代会長、大阪俳句史研究会顧問。連句協会顧問。（安達しげを他（一九八九）『大阪の俳人たち　1』）

【建立の経緯】

本句碑について雑誌『すみのえ』（一九八六年、一八一号）に敷田権宮司の書いた記述がある。

阿波野青畝句碑建立

去る四月二十七日日曜日に当社に於いて写真の句碑の除幕式があった。奉納されたのは、関西俳界の最長老大御所阿波野青畝氏である。

氏は奈良県高市郡高取町の生れで大正七年県立畝傍中学を卒業、高浜虚子に師事、長年「ホトトギス」の同人として活躍、昭和四年俳誌「かつらぎ」創刊以来、主宰として多数の門下を育てられている。また、戦後住吉大社献詠俳句の選者として奉仕して来られた方である。

この句碑は、今年米壽八十八歳になられたのを記念して、門下の松本平氏他「かつらぎ」社中の人等によって奉納建立された。場所は正面参道反橋前神馬舎裏の神苑で、

松苗や
高知る
　千木に
　　まで
　のびむ

と、松の名所住吉大社に因んだ句で、境内の松尾芭蕉の句碑、蜀山人の歌碑其他数々の碑と共に文学の神様の御発揚に寄与することであろう。

⑦宮本竹逕歌碑

【碑面】

清水もて
端渓の硯すゝきつゝ
何書かんかと想ひは
翔る

竹逕

【裏面】

清水もて端渓の硯
すすぎつつ何書かん
かと想ひは翔る
歌　書
竹逕　宮本顕一
平成四年十一月吉日建之
宮本竹逕先生傘寿歌碑建立委員会
寒玉書道会
書芸公論社
昭和六十一年歌会始詠進歌

【裏面下部】

施工　㈲額田石材
畔柳寛次
刻者　中根石材店
中根義朗

【出典】

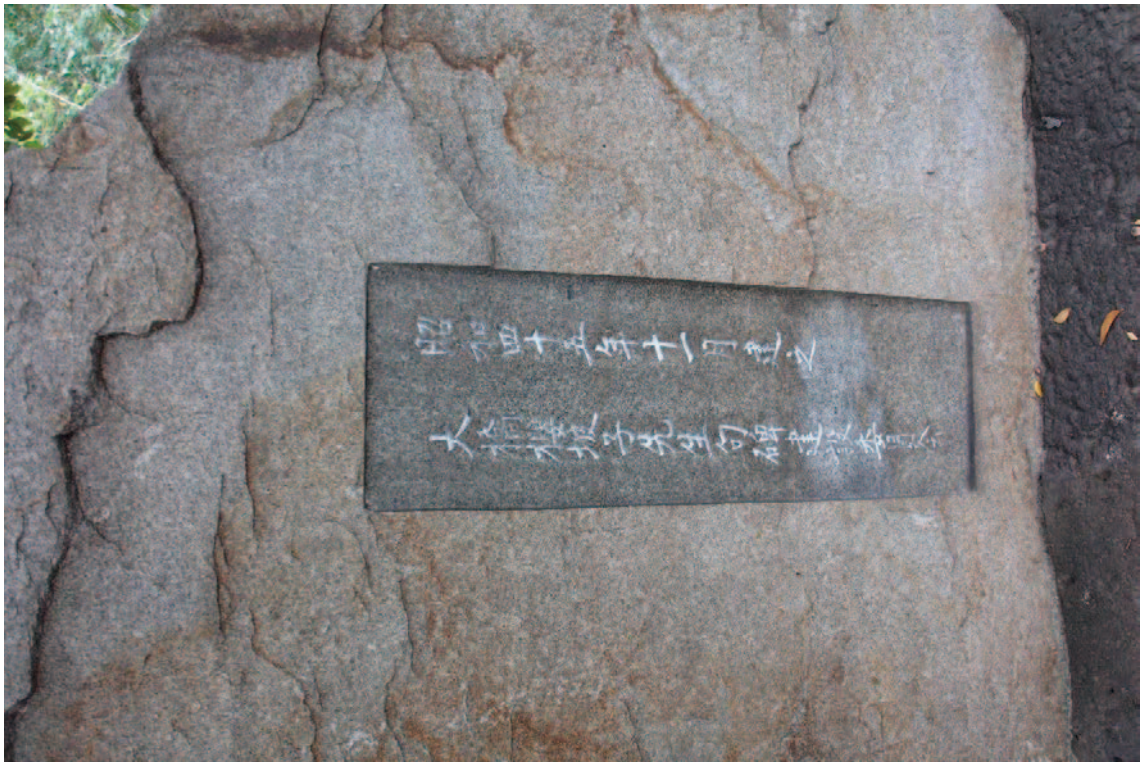
昭和六一年歌会始お題「水」にて詠まれた歌。
宮内庁のウェブページに記載あり。
〈http://www.kunaicho.go.jp/culture/utakai/utakai-s61.html〉

【略伝】

宮本竹逕（本名：宮本顕一）は一九一二年九月二五日広島県沼隈郡赤坂村（現福山市赤坂町赤坂）に生まれ、二一歳で広島県師範学校卒業、二七歳で戦前の文部省検定試験（習字科）に合格し、かなを桑笹舟に漢字を炭山南木に師事、かな作家の道を歩みだした。一九五〇年にはそれまで誰も注目しなかった関戸本古今集を研究し、この倣書風の小字がなで日本美術展覧会（日展）の特選を受賞し書壇としての一歩を歩みだす。一九五七年より日展審査員五回歴任、一九六七年には文部大臣賞を受賞後、二〇〇二年九一歳で没するまでに、日展評

議員、日本書芸院顧問、和様書作家協会事務局長、一楽書芸院副会頭、書芸公論編集、寒玉会主宰を務めた。一九八六年七四歳の時に新年歌会始召人に選ばれ、一九九二年には大阪市住吉大社に新年歌会始召人詠進歌碑建立された。ふくやま書道美術館に多く作品が収蔵されている。

⑧大橋桜坡子句碑



【碑面】

桜坡子

住吉に

歌の神あり

初詣

【裏面】

昭和四十五年十一月建之

大橋桜坡子先生句碑建設委員会

【出典】

大橋英次（一九三八）『句集雨月』句集「雨月」刊行会

【略伝】

大橋櫻坡子（おおはしおうはし）　明治二八年六月二九日滋賀県伊香郡木之本村に生る。本名英次。大正三年敦賀商業卒。同時に住友電線製造所に入社。大正二年敦商の学生時代より旧派紫雲亭藤月宗匠に就き句作を始む。六年二月高濱虚子の謦咳に接し、虚子の指導を受け、淀川俳句会を創立す。一一年「山茶花」創刊され、その同人たり。昭和二年誓子、青畝、夜半、木国、爽雨、梅史、草城、一杉、鹿郎、若沙、暁水らと無名会を興す。七年「ホトトギス」同人。一一年爽雨、木国、若沙らと「山茶花」の選者。一九年戦時下俳誌統合により「山茶花」廃刊。二二年名古屋に転勤。二四年「雨月」創刊。二五年住友電工定年退職。二九年吹田市千里山に帰阪。三八年俳人協会創立と同時に評議員。四六年一〇月三一日死去。句風は生涯高濱虚子の「花鳥諷詠」客観写生の道を遵守す。（大阪俳句史研究会（一九九五）『大阪の俳人たち4』）

⑨都鳥社歌碑

【碑面】

都鳥社

敷島のみちひの玉は昔にも光いや増言の葉の神　菊山人

御け人も濁らぬ御代に住吉のすみわたりたるうき忘水　玉丸

わすれ草忘る程に年積て鶴も巣をくむ住吉の松　姫丸

敷島の道の栞は住吉の神か誓し松の言の葉　花弟丸

華盤のたまの数々つもりなるこのさしひきすみの江の宮　賤丸

千代迨も栄る松の言の葉をかき残し置住吉の岸　むら丸

御宝の玉手の岡に人みちて干る事しらぬ住よしの宮　七宝丸

畏き神の御末にて世は住吉の浦安の国　都柳軒

訪（跡書？）れていく代長狭に住の江やみいつもたかき四柱の神　田鶴丸

【裏面】

執次

田中直衛

明治廿六歳在癸己六月

奉納之

柳原庄左衛門㊞

今田赤翁㊞

新町七宝亭㊞

村井松之助㊞

新宮東祐㊞

西田清七㊞

姫田音助㊞

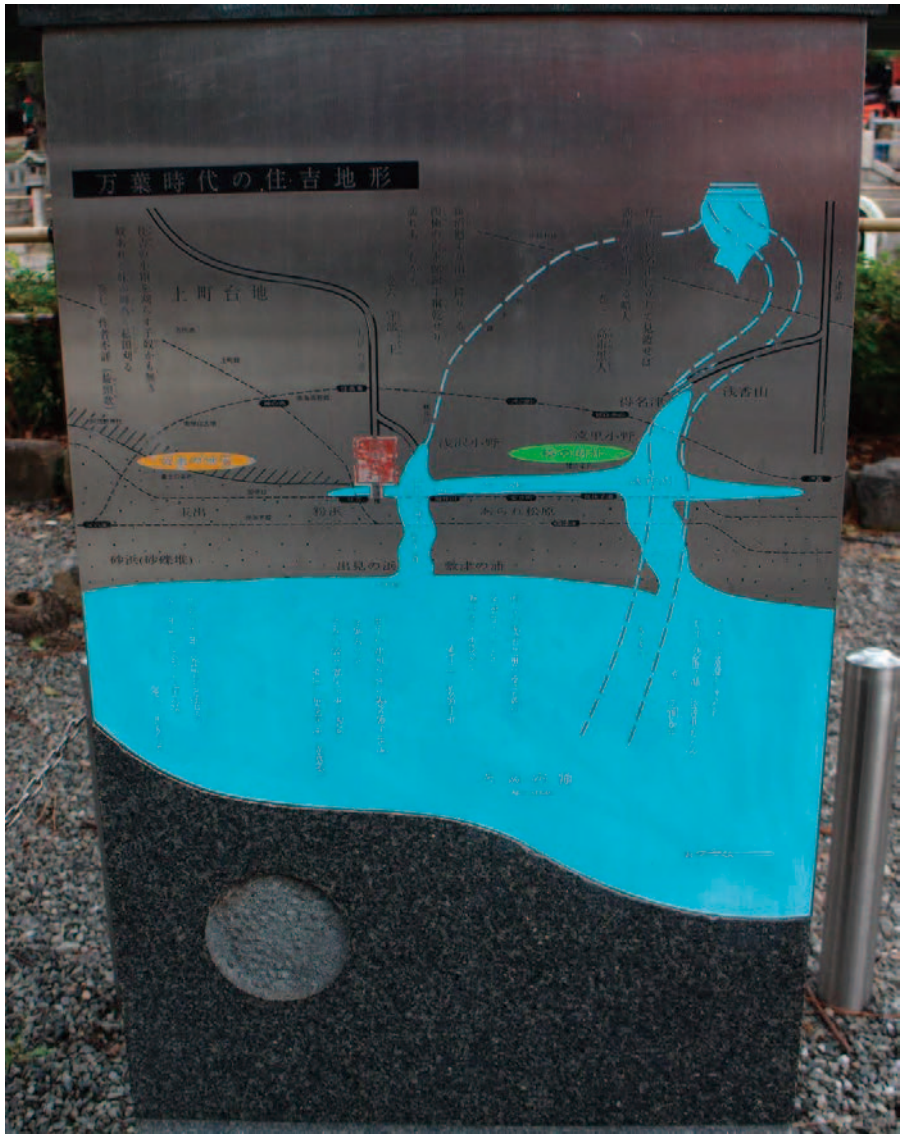
朝井松之助㊞

菊山徳兵衛㊞

【出典】

不明。

⑩住吉万葉歌碑



【碑面上部】

住吉に斎く祝が神言と
行くとも来とも船は早けむ

巻十九　多治比真人土作、遣唐使に餞する歌

草枕旅行く君と知らませば
岸の黄土ににほはさましを

巻一　清江娘子、長皇子に進る歌

【碑面下部】（地図上に在歌）

万葉時代の住吉地形

住吉の得名津に立ちて見渡せば
武庫の泊ゆ出づる船人

巻三　高市黒人

血沼廻より雨ぞ降りくる
四極の白水郎網手綱乾せり
濡れあへむかも

巻六　守部王

住吉の小田を刈らす子奴かも無き
奴あれど妹か御為と私田刈る

巻七　作者不詳（旋頭歌）

夕さらば潮満ち来なむ
住吉の浅鹿の浦に玉藻刈りてな

巻二　弓削皇子

住吉の敷津の浦の名告藻の
名は告りてしを
逢はなくもあやし

巻十二　作者不詳

住吉の出見の浜の柴な刈りそね
未通女らが
赤裳の裾の濡れてゆく見む

巻七　作者不詳（旋頭歌）

白波の千重に来寄する住吉の
岸の黄土ににほひて行かな

巻六　車持千年

【裏面上部】

住吉の遠里小野の真榛もち摺れる衣の盛り過ぎ行く　巻七　作者不詳

住吉の岸の松が根うちさらし寄せ来る波の音の清けさ　巻七　作者不詳

馬の歩み押さへ止めよ住吉の岸の黄生ににほひて行かむ　巻六　安倍豊継

住吉の浅沢小野のかきつばた衣に摺りつけ着む日知らずも　巻七　作者不詳

【裏面下部】

暇あらば拾ひに行かむ住吉の岸に寄るとふ恋忘貝　巻七　作者不詳

住吉の里行きしかば春花のいや愛らしき君に逢へるかも　巻十　作者不詳

住吉の岸を田に墾り蒔きし稲のさて刈るまでに逢はぬ君かも　巻十　作者不詳

住吉の波豆麻の君が馬乗衣さひづらふ漢女をすゑて縫へる衣ぞ　巻七　作者不詳（旋頭歌）

【前面下部】

住吉万葉歌碑

この歌碑は建立趣旨賛同の一般応募者や万葉愛好家および「難波万葉と古代を歩く会」会員など多数有志によって建立されたものである。海浜の美しい景観と港の活況を誇ったこの住吉には万葉人たちが住吉大社参詣の任務を兼ねて度々訪れ、数多くの万葉歌を遺した。その中から17首を採録し、併せて万葉時代を推定する住吉地形図を刻した。また、港にふさわしい表象として古代船を配した。

この歌碑が万葉の宝庫である当地の新たな記念碑となり、多くの人に親しまれることをここに念願するものである。

なお、この台下に〈30世紀へのメッセージ〉を埋蔵する。

平成3年（1991）5月15日

発起人

住吉大社宮司　奥野茂壽
難波万葉と古代を歩く会代表　金子　晋
万葉地形原図　立命館大学教授　日下雅義
碑デザイン　造形作家　今井祝雄
製作施工　紋郎美術工房

【右側面】
３０世紀へのメッセージ
タイムカプセル
歌碑の台下に〈３０世紀へのメッセージ〉を収納するタイムカプセルを埋蔵する。
これは、私たちが現代に生きた証を１０００年後の人類に贈ろうとする貴重なメッセージであり、また、３０世紀の人類に私達が検証されるであろう重要な人間資料である。
世界が永久に平和であることを祈り、１０００年後もこの歌碑が健在であることを願って、ここに多数応募者のメッセージを収納する。

開封　２９９１年５月１５日

【主な収納作品】
１　応募者から寄せられた文章・詩歌・絵画・写真など
２　英訳万葉秀歌「万葉・その愛と人間」
３　記録〈現代の私達はこんな生活をした〉
　Ａ　文字表現編　　Ｂ　映像表現編
　Ｃ　音声表現編　　Ｄ　統計表現編
４　未来座談〈私たちが予想する３０世紀〉

【タイムカプセル】
長方体型　銅製

【収納方法】
窒素ガス充填による
塩化ビニール包装

【左側面】
碑形　出土埴輪古代船と角柱
天然の良港に恵まれ、往古から国内外の船舶の出入りで賑った港住吉を記念して古代船をこの歌碑の表象とした。

この古代船は、大阪市平野区長原遺跡から出土した5世紀初めの船形埴輪をモデルに、原形の約2倍の大きさで制作したものである。
この船を中空に支える形で、万葉歌と住吉古代地形図を刻した角柱碑が垂直に建つ構成とした。

【古代船】
240×70×60cm　ブロンズ
【角　柱】
244×50×40cm　御影石　ステンレス
【碑文台】
50×50×50cm　御影石　ステンレス

【建立の経緯】

『すみのえ』（一九九一年、二〇一号）に次のように記述がある。

☆住吉万葉歌碑建立除幕式

住吉大社境地、反橋の北直ぐ脇に、「住吉万葉歌碑」が建立され、平成三年五月十五日、盛大除幕式が執り行われました。発起人は大養孝（大阪大学名誉教授）・奥野茂壽（住吉大社宮司）・金子晋（難波万葉と古代を歩く会代表）・日下雅義（立命館大学教授）今井祝雄（造形作家）の各氏で、主に「難波万葉と古代を歩く会」の会員の方々により、準備が進められてまいりました。高さ二百四十四㎝の角柱にブロンズの長原遺跡出土船形埴輪をモデルとした古代船を配置し、「住吉に斎く祝が神言を行くとも来とも船は早けむ」の歌等十七首が誰にでも読める活字で刻まれております。歌碑の台の下には二十世紀に生きた証を伝える爲、千年後にも生きていたいと未来に夢を乗せて〈三十世紀くのメッセージ〉タイムカプセルを設けました。

【出典】

すべて万葉集の歌である。
碑面上部
住吉尓伊都久祝之神言等行得毛来等毛舶波早家无（巻十九　四二四三）
草枕客去君跡知麻世婆崖乃埴布尓仁竇播散麻思呼（巻一　六九）

碑面下部
墨吉乃得名津尓立而見渡者六兒乃泊従出流船人（巻三　二八三）
従千沼廻雨曽零来四八津之白水郎網手乾有沾将堪香聞（巻六　九九九）

住吉小田苅為子賤鴨無奴雖在妹御為私田苅（巻七　一一一七五）
暮去者塩満来奈武住吉乃淺鹿乃浦尓玉藻苅手名（巻二　一一一一）
住吉之敷津之浦乃名告藻之名者告而之乎不相毛恠（巻十二　二〇七六）
住吉出見濱柴莫苅曽尼未通女等赤裳下閏将往見（巻七　一一一七四）
白浪之千重来縁流住吉能岸乃黄土粉二寶比天由香名（巻六　九三二）

裏面上部
住吉之遠里小野之真榛以須礼流衣乃盛過去（巻七　一一五六）
住吉之岸之松根打曝縁来浪之音之清羅（巻七　一一五九）
馬之歩押止駐余住吉之岸乃黄土尓保比而将去（巻六　一〇〇二）
墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛（巻七　一三六一）

裏面下部
暇有者拾尓将往住吉之岸因云戀忘貝（巻七　一一四七）
住吉之里行之鹿齧春花乃益希見君相有香聞（巻十　一八八六）
住吉之岸乎田尓墾蒔稲乃而及苅不相公鴨（巻十　一二二四四）
住吉波豆麻公之馬乗衣雑豆臈漢女乎座而縫衣叙（巻七　一一七三）

⑪ 演竜王処碑

【碑面】

海竜王処

大阪府知事渡辺昇書（在印）

玉出与里爰二移志弖

功奈紀加美濃神門屋

立栄由良無

宮司従五位津守国美（在押）

【側面】
発起人
早川兼松
松本勇七
取次人
大阪■■■
■■■■
小山■■

【裏面】
大阪府下
北新地　席貸　芸娼　諸商人　信者中
席貸取締
〔人名等〕
紀元弐千五百三十九年明治十二年卯三月

【出典】
不明。

【略伝】
津守国美は津守家第七十四代神主として住吉大社の隆盛に努めた人物である。中古から中世において勤皇家や歌人として知られた津守家の家名を幕末・明治の動乱期に見事守り抜いた。津守国美の歌が入った歌集は大阪・京都を中心とする旧派歌人と結社の歌集で、配り本と思われるものが多いが、京都の近衛忠熙卿に和歌を学んでいた国美は公家流のなだらか平明な調子の和歌を詠んでいる。歌人として名高く、和歌の神である住吉大社の神主であった津守国美と交流を求める旧派歌人は多かったのではないかと菅宗次氏は『すみよし』において述べている。また近世後期の津守家は和歌に秀れた人が多く、中でも津守国礼（七十二代）は京都の賀茂季鷹の門人で著名である。

⑫井原西鶴句碑

【碑面】

むかし男の詠め捨てしかた野の花にゆきて
何と世に桜も咲す下戸ならは　西鶴

【裏面】

井原西鶴は住吉の社頭で一日一夜大矢数二万三千五百句の独吟を行なった。その記念すべき地に西鶴の真蹟を写して句碑とする。
昭和五十五年三月二十六日
奉建　小谷省三

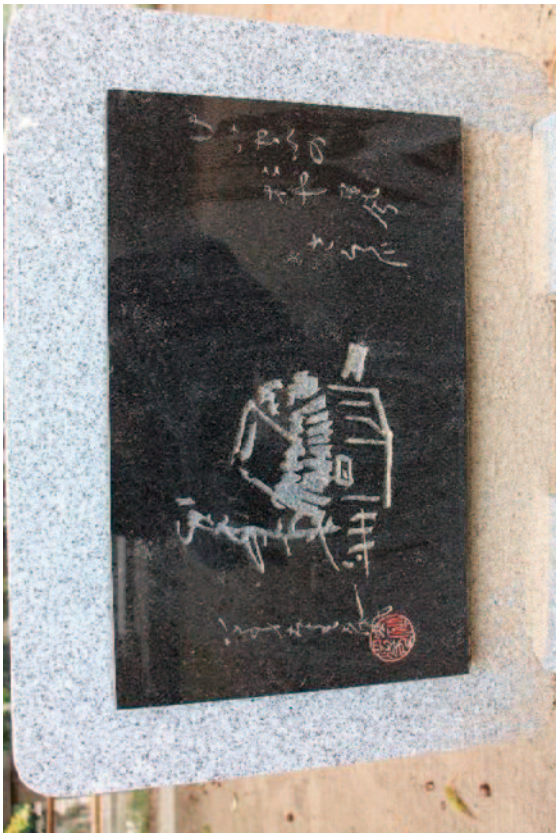
【出典】

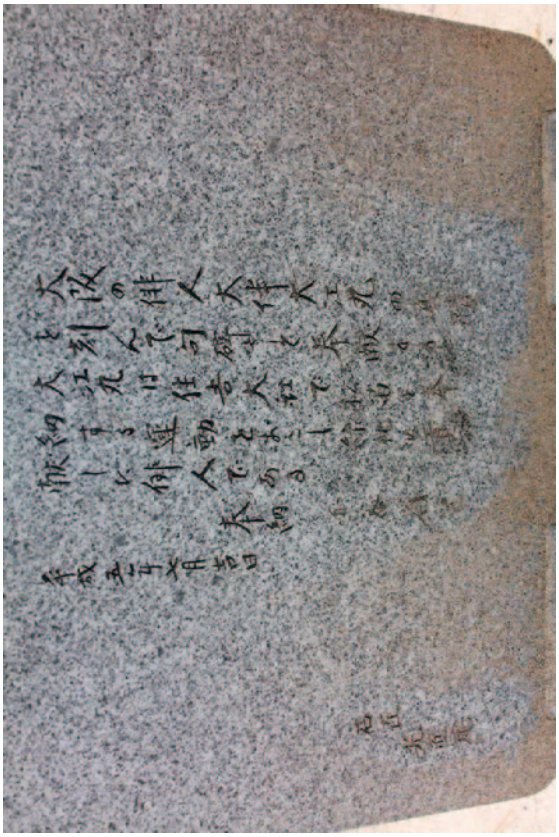
天理図書館が真蹟の短冊を所蔵。

西鶴得意の発句と見えて、少し詞書を異にする真蹟短冊が他にも多く伝在する。例へば早稲田大学図書館水口文庫のものなど。句は片岡旨恕著貞享四年（一六八七）九月十一日奥好色旅日記巻二第五丁裏に見える。なほ大田南畝の一話一言巻一に「西鶴句」として引く「なくて世に桜かさかす下戸ならは」はこの句の誤伝か。（天理図書館（一九六五）『西鶴』）

『好色旅日記』の文中に、渚の院で業平が有名な歌「世の中に絶えて桜のなかりせば春のこころはのどけからまし」を詠んだことを想起した記事があり、そこにこの句が記載されている。その古歌は春の心の楽しさを逆説的に表現しているのだが、本句はむしろ、この春はつまらないというのである。（吉江久彌（二〇〇八）『西鶴全句集』）

⑬大伴大江丸句碑





【碑面】

けいせいの
おや里も今
さくら哉

八十五才　大とも大江丸（在印）

【裏面】

大阪の俳人大伴大江丸の真蹟を刻んで句碑として奉献する。大江丸は住吉大社で松苗を奉納する運動をおこし、緑化に貢献した俳人である。

奉納　小谷省三

平成五年七月吉日

石匠　光匠庵

【丑典】

章末に挙げた参考資料にあたったが、本句に関する情報は一切認められなかった。

文人（一九五九）には、「彼の句は殆ど『俳懺悔』『はいかい袋』に見えるものであり、『松苗集』によって加えられるところは少ない」とあるが、『俳懺悔』は寛政二年（一七九〇・大江丸六九もしくは七〇歳）、『はいかい袋』は享和元年（一八〇一・大江丸八〇歳）の出版であることから、碑の情報に従えば、これらの句集によるものではないと思われ、住吉大社に句碑が建立されていることを考えると、『松苗集』（江戸時代・天明七年（一七八七）～文化七年（一八一〇））に収められた句であるのではないだろうか（編集者）。真弓（二〇〇三）『住吉信仰』では、松苗集について以下のように説明されている。

『松苗集』十三冊は、献木の松苗に添えた献詠の歌句です。古来、歌枕となり、神のしるしともされた「住吉の松」が、天明年間（一七八一～八八）枯れるきざしを見せたことがありました。このとき風流人の間に期せずしておこったのが松苗奉納の企てで、俳人加部仲ぬりの妻吉女が、大伴大江丸とはかって、松苗の献木を斡旋し、それに添えて献詠の歌句を求め、奉納したものです。

〈中略〉

これは現に「住吉御文庫」に保存されています。

また、これを記念して俳句の献詠と松苗の献木を行う「松苗行事」は、毎年四月三日に現在も行われています。

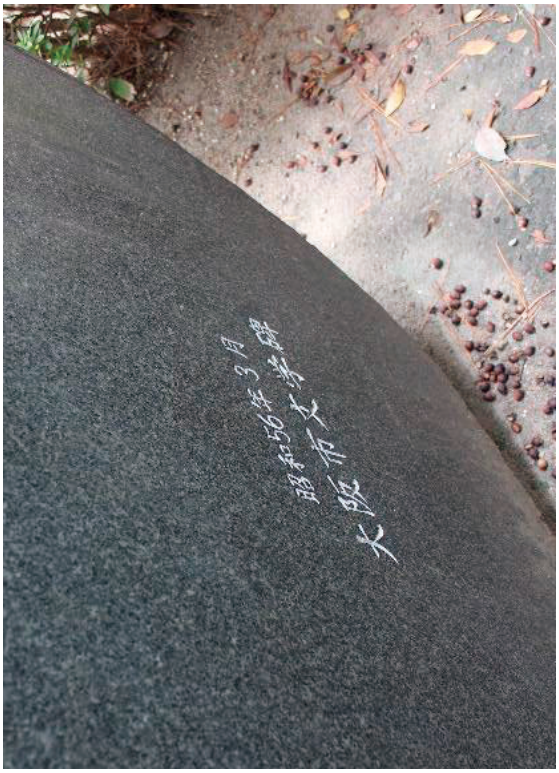
【略伝】

享保七年（一七二二）壬寅の十月五日戌刻、大阪高麗橋一丁目南浜側の家に生まれた。道頓堀で知られる安井道頓の血をひき、安井氏の六代目にあたる。名は政胤、通称は大和屋善右衛門。幼名を利助、隠居したのちは宗二という。俳号は最初に芥室(かいしつ)、旧国（旧州）と改め、のちに大伴大江丸を名乗る。文化二年（一八〇五）年三月一八日没。享年八四歳。享年に関しては八六歳説、歳説などがあるが、自ら書記した稿本『きのふの吾』に従い八四歳と考えるべきである。

俳歴は『きのふの吾』に「二十歳　元文六年　辛酉　此此活々坊く入門して芥室と号」とあるにはじまる。が、『はいかい袋』には、十二、三歳の頃、鳴海の千代倉鉄叟の依頼で、半時庵淡々に状を届けたことから、半時庵に折々通い、「此道覚ゆべしとも思はで、只おもしろく賑やかに有しになづみ参し」とあり、また「大江丸が江戸堀にて相見せしは元文之初、翁六十四歳也し」と淡々と回想していることからみて、享保末、元文初年から、俳諧に興味をもったことがわかる。

⑭川端康成碑

川端　康成
1899（明治32）年　大阪市の天満に生まれ
幼くして孤児となった　日本人の繊細な美と官能
を追求し　ノーベル文学賞を受けた　この文章に
は　うつつならぬ母性への思慕が結晶されている
大　阪　市


昭和56年3月
大阪市文学碑

【碑面】
反橋は上るよりも
おりる方がこはいも
のです
私は母に抱かれて
おりました
川端康成「反橋」より
川端康成

【裏面】
昭和５６年３月
大阪市文学碑

【副碑】
川端康成
１８９９（明治３２）年、大阪市の天満に生まれ、幼くして孤児となった。
日本人の繊細な美と官能を追求し、ノーベル文学賞幼くして孤児となった。日本人の繊細な美と官能を追求し、ノーベル文学賞を受けた。この文章には、うつつならぬ母性への思慕が結晶されている。
大阪市

【小説「反橋」について】

新潮社による『川端康成全集第七巻』三七五頁六行目に当該部分は掲載されている。巻末で、小説「反橋」について以下のように説明されている。

「別冊風雪」創刊号（昭和二十三年十月十五日刊）に、「手紙」と題して発表された。同誌の創作欄は他に「縁切りの章」（舟橋聖一）、「アリマンの村」（楢戸運二）、「亡友」（井伏鱒二）、「雁帰る」（田村泰次郎）、「うしろ姿」（真杉静枝）、「妖呪」（北川晃二）、「奇童」（中山義秀）が掲載された。創作八篇だけが収められた号である。

『哀愁』（細川新書５）（昭和二十四年十二月十日、細川書店刊）に、「反橋」と題を改めて、初めて収められた。

本全集では、新潮社版十九巻本全集の第七巻（昭和四十五年一月二十五日刊）を底本として用ゐ、初刊本を参照して、本文を作成した。

【橋梁の反橋について】

大阪市立美術館編（二〇一〇）では反橋について以下のように説明している。

正面の神池に架けられた神橋は、俗に太鼓橋と呼称されますが、正式には「反橋」といいます。石造の橋脚は慶長年間に淀君の奉納によるものと伝えられ、半円形の大きな傾斜をもつ反橋を渡るだけで「おはらい」になるとの信仰もあり、参詣者の多くがこの橋を渡ります。

⑮津守国基歌碑

【碑面】
幾千世も
むつひかはして
二本の
松の緑は
栄えゆくらん
七十一老
正四位国美書（在印）

【裏面】
【剥落】三月拾日建之
【剥落】海苔商組合

【出典】
不明。

【略伝】
「⑪海竜王処碑」を参照。

⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑

【碑面】

御製

いくさのあと
いたましかりし町々も
わか訪ふことに
立ちなほりゆく

【碑台】

天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑

【裏面】

御製は、昭和三十一年関西に御巡幸あそばされたときに詠まれたものである。
戦後（大東亜戦争）瓦礫の中に焼け出された人々は、急造のバラックに雨露をしのぎ、深刻な食料難に飢え、戦争は終わったとはいえ辛く悲しい日々が続いていた。
そのような時、天皇陛下は国民を慰め、励まされるため、全国御巡幸に旅立たれ、大阪でも親しく府民をお励ましになった。その後、わずか十年にして見事に立ち直りつつある大阪府民の活力を愛で、励まし給うた。
天皇陛下御激励の御心を深く体し、更に精励努力、大阪の繁栄に寄与する決意を永く後世に伝えるため「天皇陛下御在位六十年奉祝」の年を記念しこの碑を建立する。

昭和六十一年十一月

建立　天皇陛下御在位六十年奉祝大阪実行委員会会長勲一等　若槻哲雄
御製題字揮毫　芸術院会員　村上三島
撰文　津村忠臣
施工　藤本石材店

【碑台裏面】

建立委員
犬養　孝
奥野　茂寿
加藤　知衛
加藤　良雄
口野　義典
佐治　敬三
佐分利艶子
笹川　建次
菅沼　清
竹内　繁秋
土田　良戒
寺井　種茂
中川　晃一
能村龍太郎
日向　方齊
広岡　栄
増田　五郎
森下　泰

柳澤　寮
吉田　利幸

【左碑】
奉祝　御大典記念植樹

【左碑裏面】
御大典奉祝会
平成二年十一月吉日

【建立の経緯】
天皇陛下御在位六十年記念
御製碑建立
天皇陛下御在位六十年奉祝
大阪実行委員会より奉納

去る昭和六十一年十一月九日、天皇陛下が本年、御在位六十年をお迎えになられた事を記念し、御製碑が天皇陛下御在位六十年奉祝大阪実行委員会（会長若槻哲雄）により建立され、住吉大社に奉納されました。

御製は、

いくさのあといたましかりし町々も
わが訪ふごとに立ちなほりゆく

と、昭和三十一年関西御巡幸あそばされたときに詠まれたものです。

戦後瓦礫の中に焼け出された人々は、急造のバラックに雨露をしのぎ、深刻な食糧難に飢え、戦争は終ったとはいえ辛く悲しい日々が続いていました。そのような時陛下は国民を慰め、励まされるため全国御巡幸に旅立たれ、大阪でも親しく府民をお励ましになられました。その後、わずか十年にして見事に立ち直りつつある大阪府民の活力を愛で、励まし給うた陛下御激励の御心を深く体し、更に精励努力、大阪の繁栄に寄与する決意を永く後世に伝えるため、「天皇陛下御在位六十年奉祝」の年を記念し、御製碑が住吉大社境内の南手水舎南側に建立されました。

御製の揮毫は、書道家の村上三島先生によるもので、住吉の神苑にまたひとつ新しい名所が生まれました。

⑰安江不定歌碑

【碑面】

安江不空歌碑

あらありかたやよろこはしや水無月の
水も足らひて時しくに降るや小雨の
しく〳〵と天の水分國の水分罔象の
これそ神慮畏こけれ
早乙女の被く菅笠丹紐垂り見のよろし
もよ浪花すけ笠　ならふすけかさ
住吉絵所
平の真鉄
不空しるす

【裏面】

敬神尊皇の歌人にして住吉大社絵所預を奉仕せられし安江不空大人帰幽後十年を経たり不空会同人大人の徳を慕ひて志を結ひ歌碑建立の願望せつなるものあり
住吉大神は古来和歌の守護神に在し其神域をは先人悉く謹み畏みて憚り多き霊地なりとせり　さりながら大人神勤の功労に稽へ昭和卅年春　大人謹詠御田植神事寿歌の一節を小林美春氏彫金の銘版におさめ永く同神事の精神と意義を雅の和歌にて伝へ昂むるは御神慮に叶ひ奉るものと言ふへし
行幸啓を仰きたる光栄の年の夏日　神田の吉方乾の地をトし御田植神事寿歌の石文を仰き

寿く
昭和四十五年夏八月吉日
住吉大社宮司高松忠清謹書

【裏面下部】
昭和四十五年十一月三日建之
不空会
万葉艸舎同門会
神道天行居
あけび歌会
施工
株式会社田中家

【略伝】

安江不空は、明治十三年（１８８０）一月二日に出生。父、安江静は元稲荷大宮司（当時大和広瀬神社宮司）である。明治三十一年１９歳の時に岡倉天心日本美術院を創設するや天心に従って美術院に入り研究部員となる。このとき、岡倉天心・橋本雅邦に指導を受ける。明治三十三年、不空２１歳の時の七月に正岡子規門に入る。後根岸短歌会の同人となる。明治三十九年２７歳の時、これまでの号「秋水」を廃し、はじめて「不空」の号を用いる。明治四十二年３０歳の時に都門を去り、大阪天下茶屋（無憂樹林、万葉艸舎）に住む。この年に林英代と結婚する。翌年に関西同人根岸短歌会発会式があり、妻英代との間に子供を授かる。大正四年、不空３６歳の時に父安江静が６８歳で逝去。大正十一年４３歳の時に当麻寺にて大作を揮毫し、翌年４４歳の時に大長歌「天殃行」が完成する。昭和三年４９歳の時に住吉小浜垣内に移り住む。昭和十九年６５歳で神道天行居の権中道士に任命される。昭和二十七年、不空７３歳の時に夫人英代が逝く（享年６３歳）。昭和二十九年、住吉大社の絵所預に任命される。昭和三十三年の７９歳の時に権大道士となる。昭和三十五年、３月２３日、安江不空長去、大道士に昇進する。８１歳の時である。

【補足情報】

あけび歌会（大阪）〈http://web1.kcn.jp/narakappa/index.html〉の安江不空プロフィール〈http://web1.kcn.jp/narakappa/yasuepro.html〉に以下のような記述がある。

・昭和４５年　　住吉大社の歌碑建立

６月１４日に住吉大社の「御田植神事」がある。約２０アールの御田の中央に舞台が設けられており、「植女」から「替植女」に渡された早苗が御田に植え付けられる。植え付けと並行して、舞台上では「田舞」次に「神(み)田代(としろ)舞(まい)」が奉納される。こ

の「神(み)田代(としろ)舞(まい)」の作詞が安江不空で、御田植神事寿歌と題する一連の歌の一部が使われている。不空全歌集p364には全歌が収録されている。
歌碑の表面は次のとおりで、これも御田植神事寿歌の一部である。

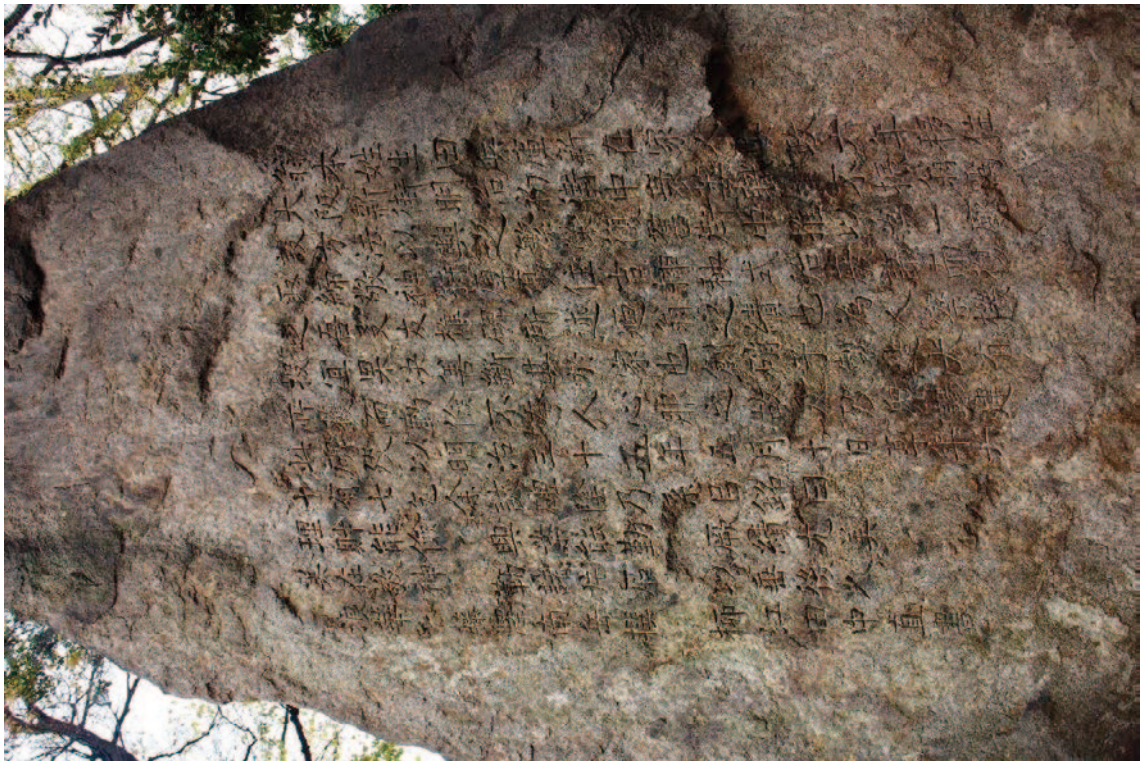
御田植神事寿歌

「あら阿りがたやよろこばしや　水無月の水も足らひて時じくに降る雨や小雨のしくしくと天の水分国の水分罔(みづ)象(はめ)のこれぞ神慮(みこころ)畏こけれ
早乙女の被く菅笠丹(に)紐(ひも)垂り見のよろしもよ浪花すげ笠

住吉絵所
平の真鉄
不空記す

裏面には住吉大社宮司　高松忠清　謹書の銘文がある。

⑱木原茂平翁遺績碑



【碑面】
木原茂平翁　遺績碑

【裏面】
翁本姓生田兵庫新在家人安政六年移住大阪新街明治初街中衰萎職業不振翁為設方法以興之繁栄復旧街中推以為一廓取締敬神特厚憂住吉挿秧式殆廃議而復之吾友友樵碑所述廼翁之績也為人察機投宜果決善断其於家也創硝子製造大有所獲而勤倹不夸人心服之故及歿衆議建此碑歿以明治三十五年五月十日享年六十有七乞余誌碑陰乃系㠯銘曰
理財能倹　興業能勤　厥績尤美
美在敬神　勒諸片石　以垂後人
浪華　藤沢南岳撰　柳江田中直書

【略伝】
珍物子編（一九〇九）には、木原茂平翁について以下のように書かれている。

大阪新町の名物男と呼ばれて一方には芸妓屋の主、一方には硝子製造業の大将と立てられた若い時から扮装を構はず真黒の厚司を着て貸座敷と工場とを掛持にする、朝は五時から起て表廻りの掃除をする、ある年京都島原の役員が来て「もし木原さんはお目覚めですか」と尋ねる「内へ入ってお尋ねなさい」と遣る、内へ入ってご主人はと聞き表で竹箒を持て穢い爺さんがそれであると知つて驚いた時「木原茂平は人でござる、衣類ではござらぬ」と遣つた、又或年廓の正副議員が綺羅を飾つて角座へ見物に行つた時、例の厚司で割り込んで大に奢侈を戒めた事もある、常には些とも怒らぬが怒る時は誰彼の差別なく怒鳴り附ける、慈善と歌舞が道楽で妻も妾も舞の上手なのを選んで迎へた、温習会に役員や芸妓がぐつ〳〵云ふとそれなら皆なお断りぢや、と刎ねつけ一手で立派な温習会を開いた事が度々ある、こんな商売をする者は日頃の心掛が第一ぢやと云つて町内に売地があると必ず共有財産に買はせる、廓に三十万円からの財産を作つたは此の人である、常には厚司を着て硝子工場の金屑と硝子の破片とを拾つて少しも驕つた事をせなんだ、この名物五年前ころりと死んで新町に秋風が吹き荒む。

古十四光年⑲

【碑面】

書曰先知稼嗇之艱難稼嗇豈可忽乎世之乱田卒汙萊其治也民皆勤於農功且百穀不足則孝悌不生教化不可施天之生百物穀莫重焉況吾瑞穂国乎住吉神社有挿秧之式也久矣毎歳五月二十八月堺市乳守之娼為植女之儀而明治八年其田為民有十年其式亦廃焉翌歳六月十四日大阪市新町廓撰妓十名行植女之儀二十年夏五月購故田献為神田於是乎其式益興焉遂以六月十四日為例嗟乎此式也殆将廃而復興者安識非神意乎凡為植女者恭敬粛慎敢莫違其儀人亦不徒観其覩妝而観稼穡之艱難則可也

妻鹿雍撰并書

明治二十三年庚寅夏五月

【説明文】

左にある石碑は住吉大社御田植神事と大阪市西区新町との関りを記したものです。

石が風化し碑文が読み難くなったので、設立時の拓本を反転して陶板に焼いて残しました。

石碑の概要

書経に、農作を軽んじてはいけない、手を抜くと直ぐ田は荒れ地となると記されている。多くの収穫を得ることは瑞穂の国日本においてはきわめて重要であり、昔からここ住吉神社でお田植の儀式を行っている。

毎年、堺市乳守廓の娼が植女となって行っていたが、明治八年の土地が民間に払い下げられ、私有地となり、明治十年途絶えた。

翌年六月十四日、大阪市新町の廓の撰妓十名が植女の儀式を行い、明治二十年には田を神田として献じた。是より毎年式が行われている。

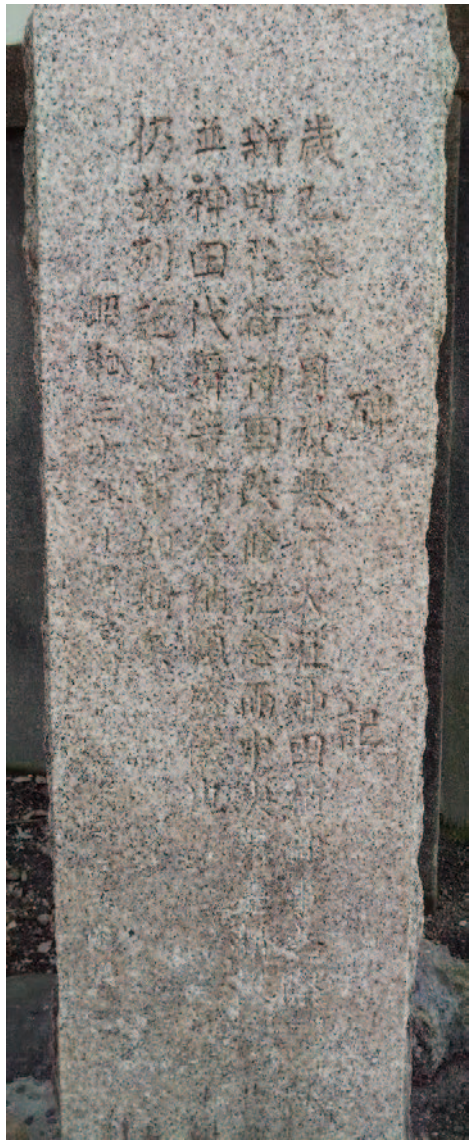
このように一度廃れた式が復活したのは神の意志であろう。植女となる人は敬虔でつつましく式を違えることなく行わなくてはいけない。見学する人はその装を楽しむのではなく、農業の重要性を観てほしい。

篆額「此の式上古より」住吉大社宮司　津守国敏

撰文・書　漢学者　妻鹿雍（新町住人　号友樵）

平成二十二年　六月吉日　妻鹿友弘　建立

⑳新町廓



【右碑】
昭和三十年五月
御田改修
奉納　住吉区内農業協同組合代表　滝口　浩
奉耕者代表　白柳菊太郎
工事奉仕　株式会社河野組社長　河野長太郎

【中央碑】
新町廓

【左碑】
碑記
歳乙未六月被挙行大社神田植神事之際新町花街神田改修記念而中央舞台新設並神田代舞等
有奉納頗盛儀也
仍茲列記人名事斯矣
昭和三十年十月吉日

【左碑裏面】
奉納者
〔人名略〕

㉑御文庫

文庫（おぶんこ）と呼ばれるこの土蔵造り
の建物は、享保八（一七二三）年、書物を納
める目的で創建された。施主は大坂を中心に
京・江戸の書籍商たちである。この年、大坂
の書籍商は排他的同業組合である株仲間の結
成を公許されている。これを機に仲間の店が
上梓した書籍の成功を祈念して住吉神前に奉
納した。それ以降、明治六（一八七三）年の
株仲間廃止まで、わずかな中断はあったもの
の奉納された書物は膨大な数に上る。和書漢
籍洋装本を併せると一万点以上、数万冊に
及び、研究者も注目する貴重書も多い。

講員
大阪書籍商之碑

大阪最古之文庫

【右碑】
大阪最古之文庫

【右碑側面】
大阪書林御文庫講

【右碑裏面】
講員
〔人名略〕
石匠【写真不鮮明】

【左碑】
御文庫（おぶんこ）と呼ばれるこの土蔵造りの建物は、享保八（一七二三）年、書物を納める目的で創建された。施主は大坂を中心に京・江戸の書籍商たちである。この年、大坂の書籍商は排他的同業組合である株仲間の結成を公許されている。これを機に仲間の店が上梓した書籍の成功を記念して住吉神前に奉納した。それ以降、明治六（一八七三）年の株仲間廃止まで、わずかな中断はあったものの、奉納された書物は膨大な数に上る。和書漢籍・洋装本を併せると一万点以上、数万冊に及び、研究者も注目する貴重書も多い。

【左碑裏面】
平成二十三年吉日
大阪書林御文庫講

【御文庫について】

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では、御文庫について以下のような説明をしている。

近世の住吉大社が遺した文化施設に、いまひとつ「住吉御文庫」がある。享保八年九月、大阪・京都・江戸の書肆二十人が発起・勧誘して創建せられた。白壁土蔵造り二階建、八坪四合六勺の御文庫には、大永住吉社歌合・奉納千首和歌・奉納法楽百首等和歌の神としての崇敬を示す蔵書をはじめ、俳諧関係はもちろん、中世の写本である『月かげ』や『讃岐典侍日記』、あるいは大塩平八郎（中斎）の『洗心洞割記』の初版本を中斎自ら奉納したもの、坂本竜馬が英語を習ったという土佐の川田白竜筆にかかる、漁夫万次郎の漂流聞書である『漂流紀略』の稿本もあり、写本・版本等貴重な文献が約三万冊納められる。

その後大阪書林仲間有志は住吉御文庫講を結び、奉納本を整理保管し文政八年には講員七十余名を数え、現在も在阪の出版社・書籍商がその伝統を継いで、毎年献本、参詣を欠かさない。昭和二十六年、田中卓博士著の『住吉大社神代記』を刊行したのも、この御文庫講の人々であった。近世ではこうして住吉大社が大阪の文化の中心となり、文化を推進する役割を果たしたのである。

これらの説明に加えて、真弓（二〇〇三）『住吉信仰』では、「いわば大阪における図書館のはじまりです」、「文政八年、住吉・天満御文庫講が合併して」ということも述べられている。

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』では御文庫に収められている文献を「約三万冊」としているが、大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』では「写本・版本をはじめ貴重な奉納書籍が約五万冊保存されている」と説明している。

㉒安田青風歌碑

【碑面】
青風
松の間にひかりていつも海はありとこしくにかくあれ松と海

【裏面】
昭和四十年十一月
白珠社

【出典】
『白珠』（一九七二年、二七巻一号）の「白珠二十五年史」の昭和四〇年の項に次のように記述がある。

社中消息的な事項の第一は、白珠社中の協力によって青風の歌碑が、大阪の住吉大社に建設（十一月二十一日）されたことである。除幕式には社内だけで一七〇名余名の出席があった。

松の間に光ていつも海はありしとこしくにかくあれ松と海

㉓生田南水句碑

【碑面】
（在印）長閑さや
岸の姫松
忘れ貝　南水（在印）

【裏面】
先考夜雨荘生田南水、万延元年四月四日浪速東郊上之宮に生る、諱は宜人、百済、通称福太郎
かの日本記の「引南水以入西海」に基き其の号となす、別に呦々居、萩垣内、鹿鳴艸舎など万葉集の百済野の萩の古枝による、又上之宮の樗の大木によせて、あふちの家ともいへり、曽祖父義文は国学にくはしく狂歌師として知られ祖父宜当は京都吉田家の卜部として亀卜の事を掌り太政官の神祇官に出仕し維新の際、温明殿の御番をつとむ、父幼より家学に親しみ国学びを岩崎長世、敷田年治両大人に漢史を伊藤介夫先生に和歌の道を渡忠秋、平尾季夫両大人に又黄花庵南齢翁の門を敲き俳諧を学ぶ、考古癖の父は日常古瓦陶片の裏にあり篆刻も画も亦おのが風をたのしむ、明治年間得田俊齢服部自咲等と共に俳誌さゝ啼を刊行し浪速俳壇に一石を投ず又大江丸の松苗集に倣ひ反り橋西畔に松苗茶屋を設け広く松苗勧進を計る、賽者松苗と共に一筆を以てす、集めて続松苗集と題し当社御文庫に納む、勧進の松苗二千を数へ明治四十二年四月十七日古式を以て神域に植え松苗祭を再興す、現在は四月三日祭事を行はる、敬神と愛郷とに終始せる父は生涯寡欲風雅に一市井人として日夜阪都

衆庶の文事に労を惜まず自ら暁鐘成の後となせり、南地の芦辺踊、新町の浪花踊の歌詞など長年にわたる作品の一、地方民謡も其の数を知らず、霜のあした花のゆふべ斗酒辞せず、酔ふては筆をとり醒めては浪速の史を語る父の童顔尚目のあたりにあり悠々たる大阪弁は尚耳に新たなり

母峰は郡山藩本多八十郎の三女、早苗、笑と私稔の三児を挙ぐ、昭和九年一月十二日父逝く享年七十五、年と共に変り行く住吉の浜、松吹く風のまに〳〵ありし日をしのびつゝ

昭和四十一年一月十二日　花朝女識（在印）

碑面は四天王寺ちりゝたらりの一碑と共に恩師菅楯彦先生の御筆を頂く

【副碑】

昭和四十一年一月十二日
先考生田南水句碑
花朝建之

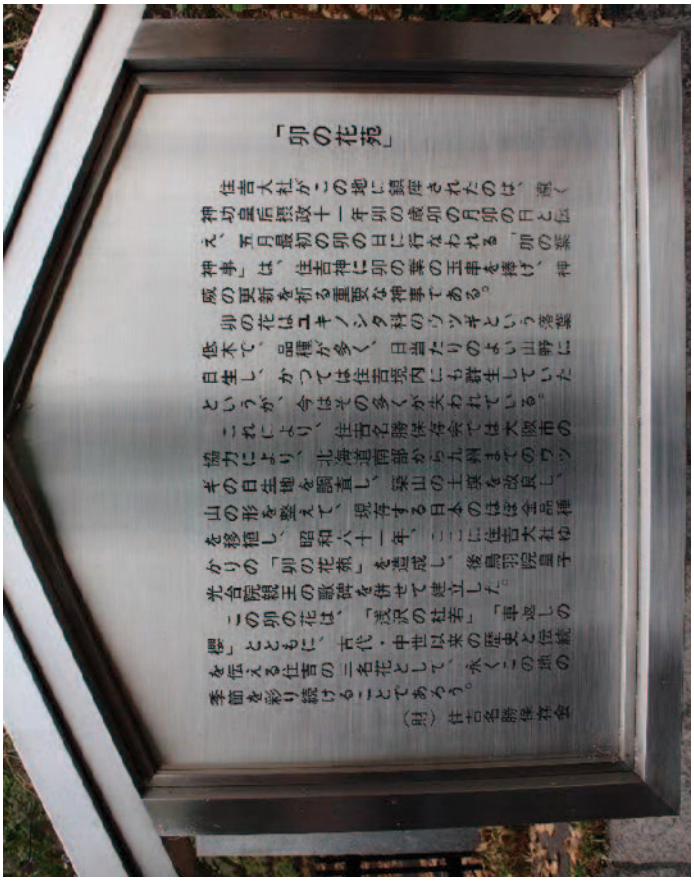
【出典】

不明。

【略伝】

碑裏面参照。

㉔光台院親王歌碑



「卯の花苑」

住吉大社がこの地に鎮座されたのは、遠く神功皇后摂政十一年卯の歳卯の月卯の日と伝え、五月最初の卯の日に行なわれる「卯の祭神事」は、住吉神に卯の事の主事を捧げ、神威の更新を祈る重要な神事である。

卯の花はユキノシタ科のバイマンサクという落葉低木で、品種が多く、日当たりのよい山野に自生し、かつては住吉境内にも群生していたという。今はその多くが失われている。

協力により、北海道南部から九州までのウツギの自生地を調査し、深山の土壌を改良し、山の形を整えて、現存する日本のほぼ全品種を移植し、昭和八十一年、ここに住吉大社はかりの「卯の花苑」を造成し、後鳥羽院皇子光台院親王の歌碑を併せて建立した。

この卯の花は、「浅沢の社若」「事愛しの櫻」とともに、古代・中世以来の歴史と住吉の三名花として、永くこの地の季節を伝える住吉の三名花として、永くこの地の季節を彩り続けることであろう。

（財）住吉の名勝保存会

【碑面】

すみよしの
ゆふしでなびく
松風に
うらなみしろく
かくるうのはな
光台院親王

【看板】

「卯の花苑」

住吉大社がこの地に鎮座されたのは、遠く神功皇摂政十一年卯の歳卯の月卯の日と伝え、五月最初の卯の日に行なわれる「卯の葉神事」は、住吉神に卯の葉の玉串を捧げ、神威の更新を祈る重要な神事である。

卯の花はユキノシタ科のウツギという落葉低木で、品種が多く、日当たりのよい山野に自生し、かつては住吉境内にも群生していたというが、今はその多くが失われている。

これにより、住吉名勝保存会では大阪市内の協力により、北海道南部から九州までのウツギの自生地を調査し、築山の土壌を改良し、山の形を整えて、現存する日本のほぼ全品種を移植し、昭和六十一年、ここに住吉大社ゆかりの「卯の花苑」を造成し、後鳥羽院皇子光台院親王の歌碑を併せて建立した。

この卯の花は、「浅沢の杜若」「車返しの櫻」とともに、古代・中世以来の歴史と伝統を伝える住吉の三名花として、永くこの地の季節を彩り続けることであろう。

（財）住吉名勝保存会

【出典】

夫木和歌抄　巻第七　夏部一　二四五三

家五十首歌、社卯花　光台院入道二品みこ

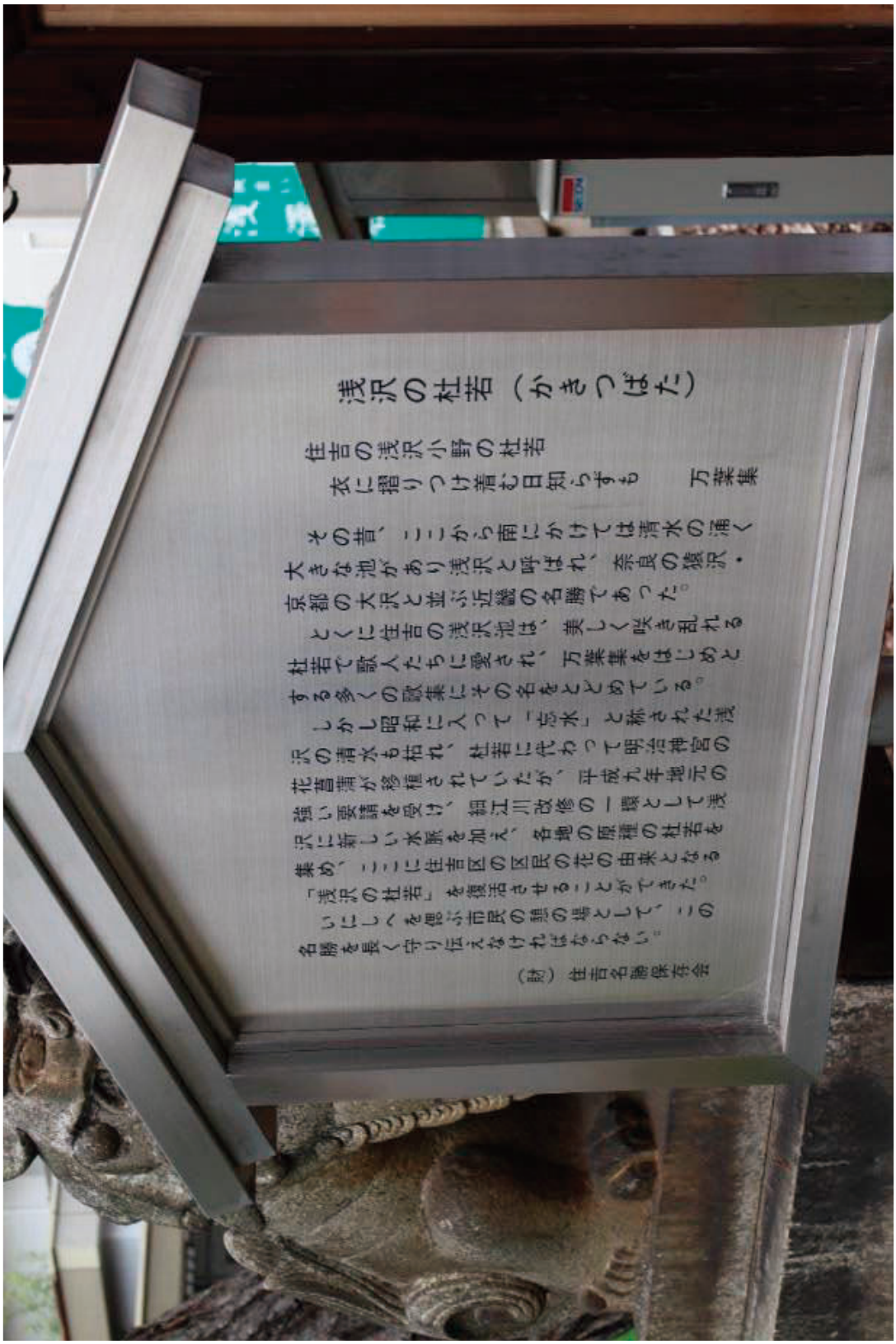
すみよしのゆふしでなびく松風にうらなみしろくかくるうのはな

道助法親王家五十首　光台院五十首

夏　社卯花

すみよしやゆふしでなびく松かぜにうら波しろくかかる卯の花

㉕浅沢の杜若



浅沢の杜若（かきつばた）

住吉の浅沢小野の杜若
　衣に摺りつけ着む日知らずも　　万葉集

その昔、ここから南にかけては清水の涌く大きな池があり浅沢と呼ばれ、奈良の猿沢・京都の大沢と並ぶ近畿の名勝であった。

とくに住吉の浅沢池は、美しく咲き乱れる杜若で歌人たちに愛され、万葉集をはじめとする多くの歌集にその名をとどめている。

しかし昭和に入って「忘水」と称された浅沢の清水も枯れ、杜若に代わって明治神宮の花菖蒲が移植されていたが、平成九年地元の強い要請を受け、細江川改修の一環として浅沢に新しい水脈を加え、各地の原種の杜若を集め、ここに住吉区の区民の花の由来となる「浅沢の杜若」を復活させることができた。

いにしえを偲ぶ市民の憩の場として、この名勝を長く守り伝えなければならない。

（財）住吉名勝保存会

【看板】

浅沢の杜若（かきつばた）

住吉の浅沢小野の杜若
衣に摺りつけ着む日知らずも　　万葉集

その昔、ここから南にかけては清水の湧く大きな池があり浅沢と呼ばれ、奈良の猿沢・京都の大沢と並ぶ近畿の名勝であった。

とくに住吉の浅沢池は、美しく咲き乱れる杜若で歌人たちに愛され、万葉集をはじめとする多くの歌集にその名をとどめている。

しかし昭和に入って「忘水」と称された浅沢の清水も枯れ、杜若に代わって明治神宮の花菖蒲が移植されていたが、平成九年地元の強い要望を受け、細江川改修の一環として浅沢に新しい水脈を加え、各地の原種の杜若を集め、ここに住吉区の区民の花の由来となる「浅沢の杜若」を復活させることができた。

いにしくを偲ぶ市民の憩の場として、この名勝を長く守り伝えなければならない。

（財）住吉名勝保存会

【出典】

万葉集　巻七　一三六一

墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛

㉖蜀山人狂歌碑

【碑面】
【剥落】しのまつくきものをうら波のたち帰【剥落】こころなき　蜀山人
（柵内にあり他は判読不能）

【出典】
暁鐘成（一九七六）『摂津名所図会大成』には、以下のように記述がある。

柱形之碑　同北の傍ニあり勒して云　享和二のとしむつき朔日すみよしにまうでけるに蕪坊の来てあらさるよしきゝて苫やのはしらに書つけけるをこゝに写す
住よしのまつゞきものをうら波の立帰りしそしづ心なき　蜀山人
此狂詠は東都蜀山人住坂の砌天王寺の医家蕪坊と共に住吉に詣んことを約せられしにより蕪坊は先くいたりて浜辺の茶や松屋の本にいたりて待ども〳〵来らざりければ蕪坊は溜りかね終に此茶店の柱に　契りてし人を待わびて尾生が信にそむきながら立帰る　ト書つけて
墨の江の岸に夜から来る人をまつは久しきものと社しれ　蕪坊
ト書つけて帰られしが其後く漸に蜀山来りて是を見るより同じ柱に筆をとりて　かならずまつと言ひし人の見くざりければ同じ柱に　ト書て
住吉のまつゞきものをうら波のたち帰りしそしづ心なき　蜀山人
ト書つけられしとぞ今も其柱を松屋に珍蔵せりとぞ然るを文政五年の秋浪花の狂歌連蕪坊の歌を略して碑を建しなり石の形丸く長く作りしはいさゝか柱の意味をふくみしものなるゞし然れども蕪坊と約せし縁由をしるさゞれば前後つまびらかならず惜むゞし

また、真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』には次のようにある。

柱形の碑

住吉さまにお詣りしますと、北側に大海神社（たるかこ）という第一の摂社があります。その社前に、柱形の碑が立っています。その碑文には、
享和二のとしむつき朔日すみよしにまうでけるに蕪坊とく来て帰りけるよしをきゝて茶屋のはしらに書つけけるをこゝにうつす
すみよしのまつゞきものをうら波のたち帰りしそしつゝろなき　蜀山人
文政五の年
壬午の仲秋建立　催主　種丸
梅千丸
年布留

とあります。これは享和二年（一八〇二）正月元旦蜀山人太田南畝が、天王寺の医師蕪坊と住吉社参を約束して、蕪坊は早くから浜辺の茶屋に来て、蜀山人の来るのを待っていましたが、待てども待てども姿が見えないのでしびれを切らせて、茶店の柱に狂歌を書いて帰ってしまいました。

契りてし人を待ちわびて、尾生が信にそむきながら、たちかくるとて松屋のはしらに

墨の江のきしによるから来るひとを
まつは久しきものと社しれ

蕪　坊

ところが、そのあとく、おっとりときた蜀山人、これを見て同じ柱に、

かならず待つと言ひし人の見えざりければ同じ柱に書きつけける　蜀　山

として書いたのが右の一首です。

「まつ」は「待つ」「待ちわびる」の「まつ」ですが、歌枕で神のしるしとする「すみのえの松」を踏まえているのです。まことに風流な話ですが、それをまた、後世に遺そうと、浪速の狂歌師たち、種丸・梅千丸・年布留が催主となって、文政五年に建てたのが、柱形の碑であります。

㉗一運寺句碑

【碑面】
忽然と紅吹きぬける曼珠沙華
白童

【出典】
一運寺の住職によると、先代の住職による碑。

㉘法然歌碑

法然上人は建永の法難（二二〇七）により讃岐の国（香川）に流罪となったが、その年赦免され都に帰る途中、夏に襲われ家利津和田く漂着、船が住吉まで流された。船の修理する間、上人は近辺に長く滞在され、説法された。法然上人当時七十五歳の時である。

その時詠まれた御歌が

「ゆきめぐる山路も里も吉水の流れのつきじとぞおもふ」である。

（吉水とは知恩院周辺地域の呼び名でありそこから順々とつづく浄土の教え）

※建永の法難　法然上人ひきいる念仏教団が、既存仏教教団より弾圧され、後鳥羽上皇によって専修念仏の停止と、法然の門弟四人の死罪、法然と親鸞ら中心的な門弟七人が名刑人流罪に処された事件。

【碑面】

法然上人御詠歌
ゆきめぐる山ちも
里もよしの
きよきながれの
つきしとそおもふ

【裏面】

平成二十三年
法然上人
八百年大遠忌記念
寄贈　一運寺役員会

【副碑】

法然上人は建永の法難（一二〇七）により讃岐の国（香川）に流罪となったが、その年赦免され都に帰る途中、嵐に遭われ泉州岸和田へ漂着、船が住吉まで流された。船の修理する間、上人は当寺に長くご滞在されご説法された。法然上人当時七十五歳の時である。
その時残された御歌が「ゆきめぐる山路も里も吉水の清き流れのつきしとそおもふ」である。（吉水とは知恩院周辺地域の呼び名でありそこから脈々とつづくお念仏の教え）
※建永の法難　法然上人ひきいる念仏教団が、既存仏教教団より弾圧され、後鳥羽上皇によって専修念仏の停止と、法然の門弟四人の死罪、法然と親鸞ら中心的な門弟七人が各地へ流罪に処された事件。

一運寺のご住職にいただいた、一運寺に関する情報が載せられたプリントには、本碑についてさらに詳しく以下のように説明されている。

法然上人受難

建永の法難（一二〇七）で法然上人は讃岐の国（香川）に流刑となった。讃岐に流されていた法然上人はすぐに赦免されましたがまだ都に帰ることは許されませんでした。勅命で箕面の勝尾寺に入る事になり一路箕面を目指し船にお乗りになりました。しかし途中嵐に遭われ泉州岸和田へ漂着、船が住吉の浜まで流されました。船の修理する間法然上人は当山に長くご滞在され、またご説法され「ゆきめぐる山路も里も吉水の清き流れの尽きしとぞ思う」と御歌を詠まれて当寺を去られたのであります。法然上人七十五歳の時でありました。そしてその年の十二月八日に無事勝尾寺に入られたということであります。

㉙摩耗不明碑

【碑面】

■おほ(?)く■■
こ■のや■かに(??)
やかてち■■む
露のし■■
妙喜■
八十丸

【出典】

不明。住職に尋ねたが、よくわからないとのこと。

㉚神明大石

【碑面】
何首
〔下部に人名〕

【裏面】
月■■■人万
往■門■■幾
千秋

【由来】

生根神社の看板に記載されている御由緒略記には以下のようにある。

「神明穴立石」御本殿東側に有り、「何首烏」（薬草名）と刻し霊石とされている。

また、「CVV（シビル・ベテランズ&ボランティアーズ）主催　2009年度第2回市民見学会、上町台地の緑の森を訪ねて　パート5、「帝塚山（てづかやま）から　七道（しちどう）へ」〈http://www.cvv.jp/uemachidaichi5/10.html〉」には以下のようにある。

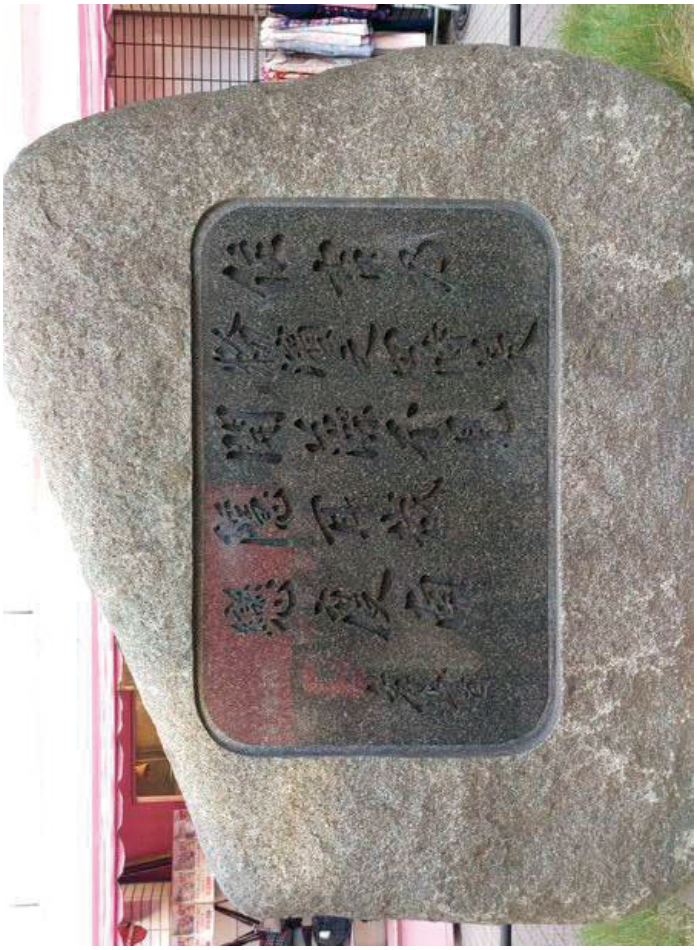
本殿東側に立つ石です。表面に漢字が刻まれているものの、よくわからないままでいましたが、「御由緒記」に以下のように書かれています。

「少彦名命が海外に行かれし時の浜の石をここに運び、『何首烏』と刻し（薬草名）、霊石とされし時代もあり、一夜のうちに和歌浦より住吉浜に来たりし妙石なりとの伝説も今は古老の人のみが知る仮説である。」

『何首烏』は、「ツルドクダミ」と読み、タデ科の植物で、根茎から落葉性木質の蔓を伸ばし、からみつく葉はハート型でとがっているそうです。秋に無数の白い小花を開き、薬用部は、地中にある塊根だそうです。この薬草の効能は、発赤痛みを伴う皮膚炎や湿疹、便通をよくするなどです。

石の上部に穴が開いている「穴立石」は、後に行く住吉大社には、木製ですが、あります。住吉大社の「穴立板？」は、伊勢神宮の遥拝のためのようですが、ここの「穴立石」は、伊勢神宮遥拝石か、御祭神の少彦名命が薬の神様であり、生根神社の「根」に関係づけて立てたのかな？と考えます。

㉛万葉歌碑



【碑面】

住吉乃
粉浜之四時美
開藻不見
隠耳哉
恋度南

孝書

【裏面】

昭和五十九年七月七日
東粉浜社会福祉協議会

【看板】

住吉の　粉浜のしじみ　開けも見ず
隠りてのみや　恋ひ渡りなむ
（万葉集、巻六・九九七）

この歌は、天平六年（七三四）春三月、聖武天皇難波行幸の時の作者未詳の歌で、粉浜の美しい風土と人びとの奥ゆかしい心が、うたわれたもので、粉浜の歴史を知り、郷土の誇りを、永遠に伝えるため、大阪大学名誉教授犬養　孝先生の揮毫により、この歌碑を建立した。

昭和五十九年七月七日

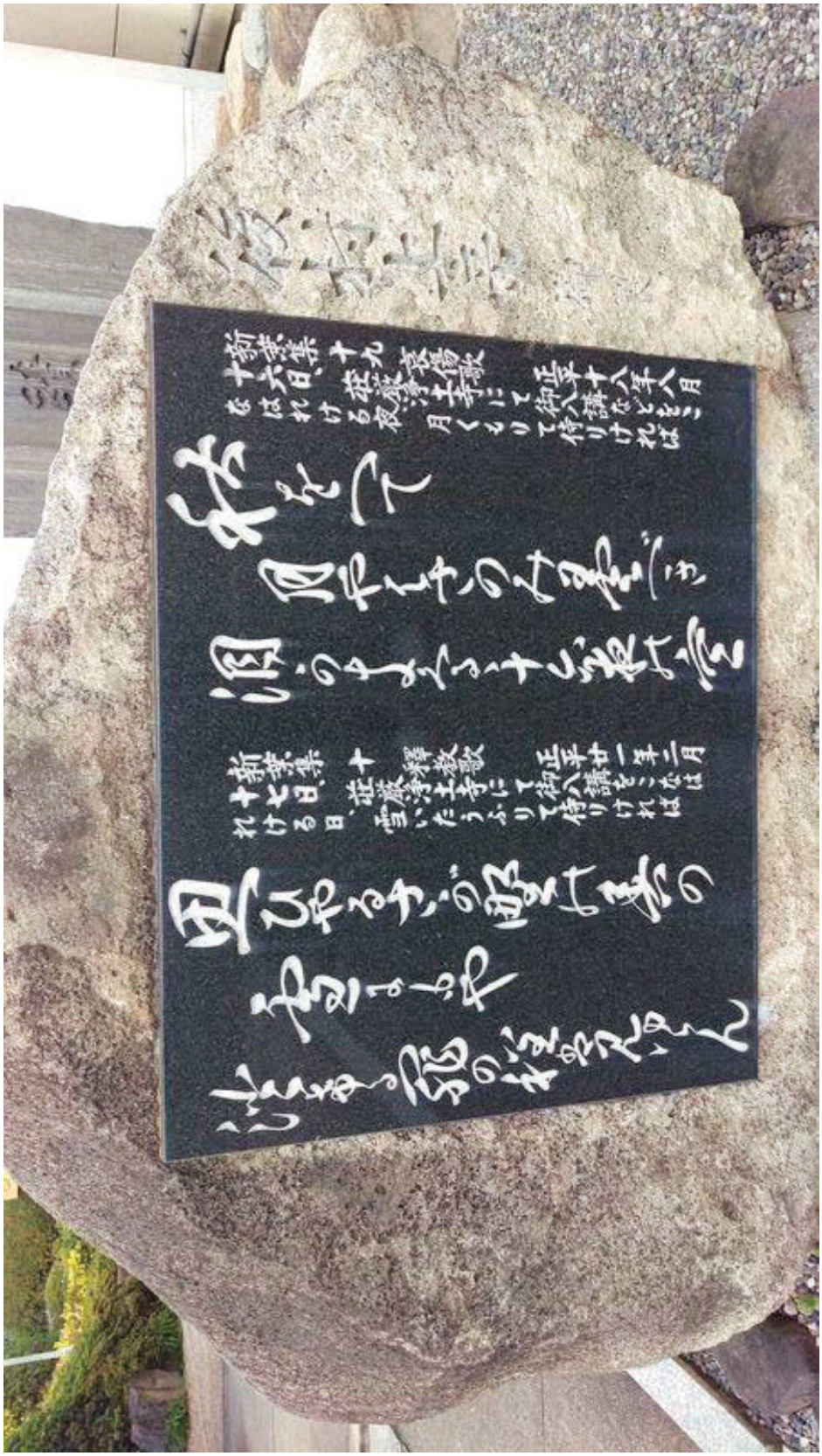
東粉浜社会福祉協議会

【出典】

万葉集　巻六　九九七

住吉乃粉濱之四時美開藻不見隠耳哉戀度南

㉜後村上帝歌碑



【碑面】

後村上帝　御製

新葉集　十九　哀傷歌　　正平十八年八月

十六日、荘厳浄土寺にて御八講などをこ

なはれける夜、月くもりて侍りければ

秋をくて

月やはさの み曇〻き

涙かきくるゝ十六夜の空

新葉集　十　釋教歌　正平廿一年二月

十七日、荘厳浄土寺にて御八講をこなは

れける日、雪いたうふりて侍りければ

思ひやるさが野の春の

雪にもや

消ける罪の程はみゆらん

【出典】

どちらも新葉和歌集に収められている後村上帝の御製歌である。

・新葉和歌集　巻第十九　哀傷歌　一三五二

正平十八年八月十六日荘厳浄土寺にて御講などおこなはれける夜、月くもりて侍りけれ

ばよませ給ける　　後村上院御製

秋をくて月やはさのみくもる〻き涙かきくるるいさよひの空

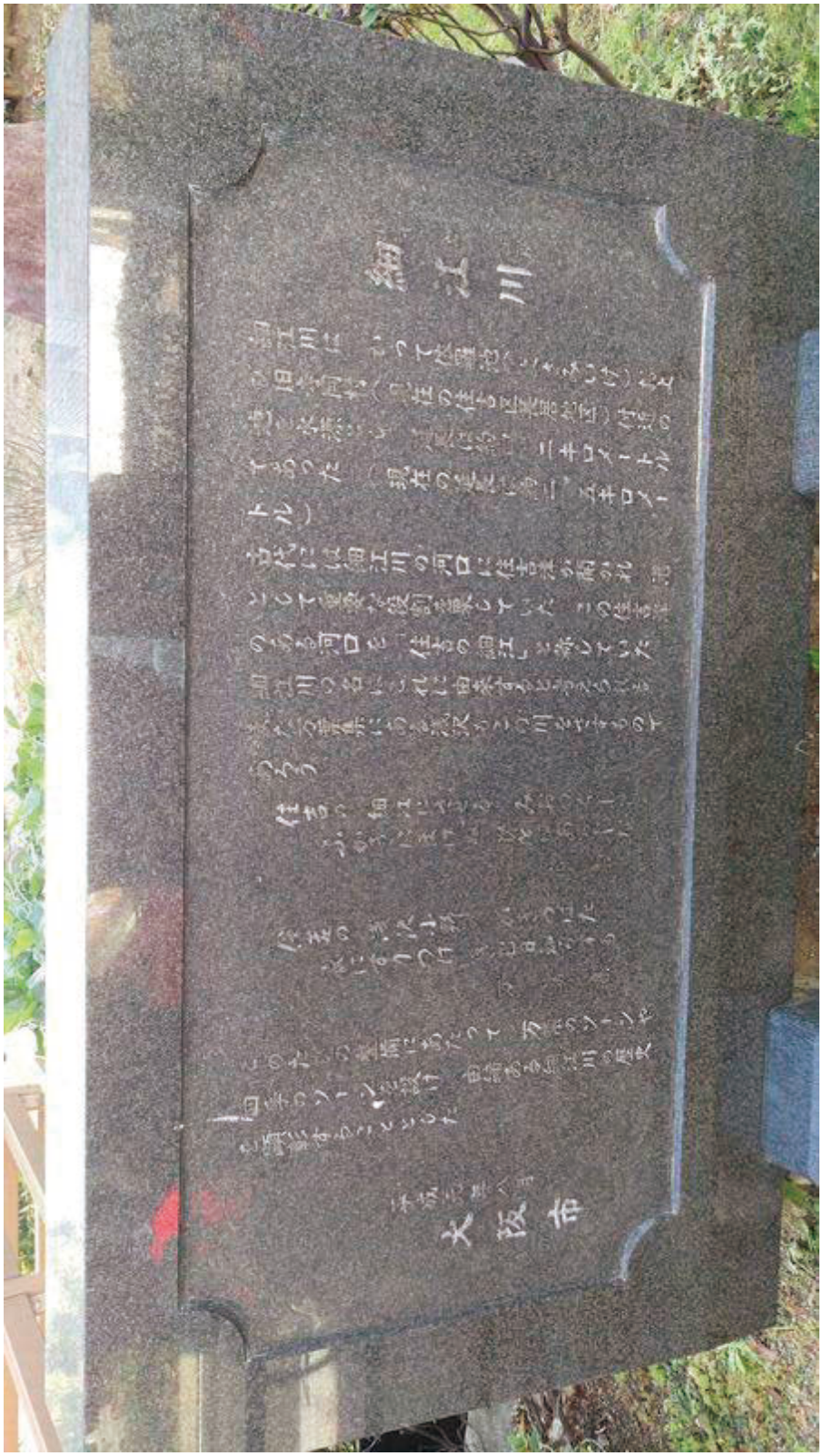
・新葉和歌集　巻第十　釈教歌　六一七

正平廿一年二月十七日荘厳浄土寺にて御八講おこなはれける日、雪いたうふりて侍りけ

れば妙光寺内大臣もとくつかはされける　　後村上院御製

思ひやるさがのの春の雪にもやきえけるつみのほどはみゆらん

地三兵衛㉝



【碑面】

細江川

細江川は、かつて依羅池（よさみいけ）および旧寺岡村（現在の住吉区長居地区）付近の池を水源とし、延長は約四、二キロメートルであった。（現在の延長は約二、五キロメートル）古代には細江川の河口に住吉津が開かれ、港として重要な役割を果たしていた。この住吉津のある河口を「住吉の細江」と称していた。細江川の名はこれに由来すると考えられる。また万葉集にある浅沢もこの川をさすものであろう。

住吉の　細江にさせる　みおつくし
　ふかきにまけぬ　ひとはあらじな
　　詞　華　集

住吉の　浅沢小野の　かきつばた
　衣にすりつけ　きむ日知らずも
　　万　葉　集

この整備にあたって、万葉のゾーンや四季のゾーンを設け、由緒ある細江川の歴史を顕彰することとした。

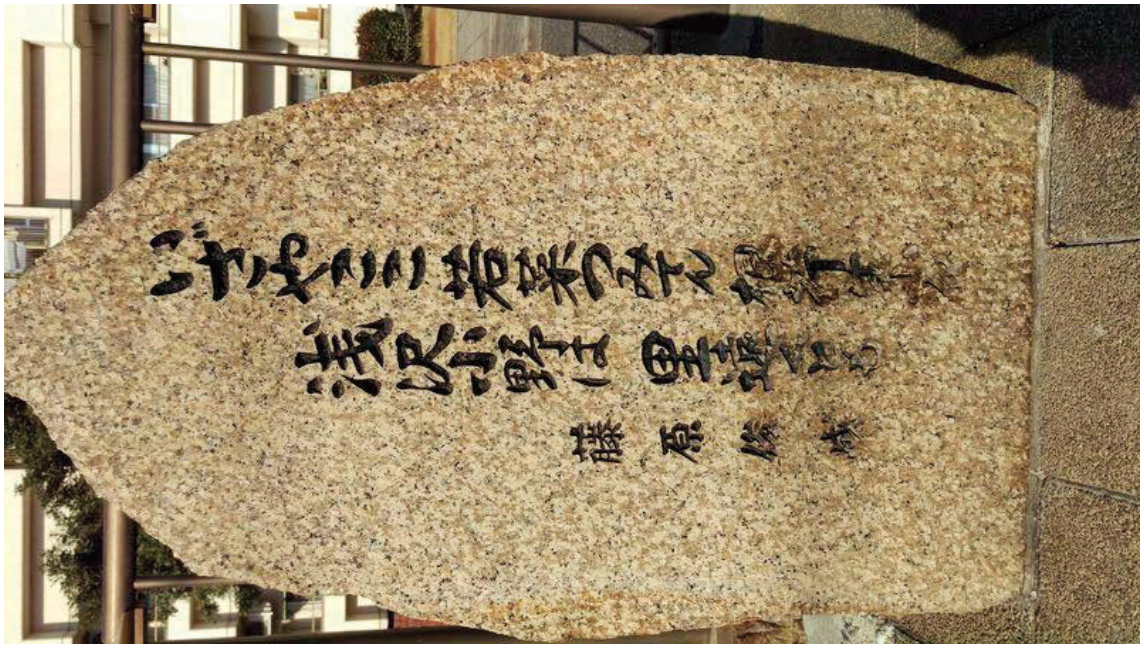
平成元年八日
大阪市

【出典】

詞華和歌集　巻第九　雑上　三二二
　題しらず　　相模
すみよしのほそえにさせるみをつくしふかきにまけぬ人はあらじな

万葉集　巻七　一三六一
墨吉之淺澤小野之垣津幡衣尓揩著将衣日不知毛

㉞藤原俊成歌碑



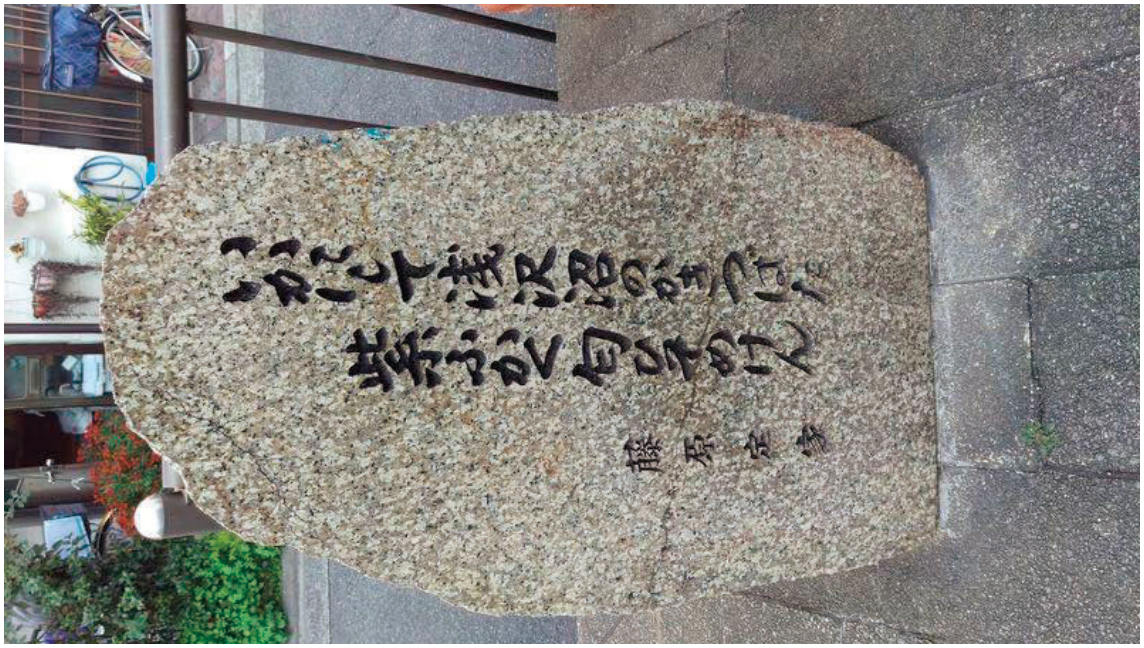
【碑面】

いざやこの若菜つみてん根芹生ふる
浅沢小野は里遠くとも
藤原俊成

【出典】

・風雅和歌集　巻第一
　春歌上　一六
　住吉社にたてまつりける百首の歌の中に、若菜を　皇太后宮大夫俊成
いざやこの若菜つみてんねぜりおふるあさぢはをのは里とほくとも
・夫木和歌抄　巻第一
　春部一　二四五
　文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成卿
いざやこのわかなつみてん根芹生ふる浅沢をのは里とほくとも
・俊成五社百首　三〇五
　住吉社百首和歌
　春二十首
　若菜
いざやこの若菜つみてんねぜりおふるあさぢはをのは里遠くとも

㉟藤原定家歌碑



【碑面】

いかにして浅沢沼のかきつばた
紫ふかくにほひ染めけん
藤原定家

【出典】

拾遺愚草員外　六八七

春十首　堀河題略之

いかにしてあさぞはぬまのかきつばたむらさきふかく匂ひそめけん

㊱宗良親王歌碑

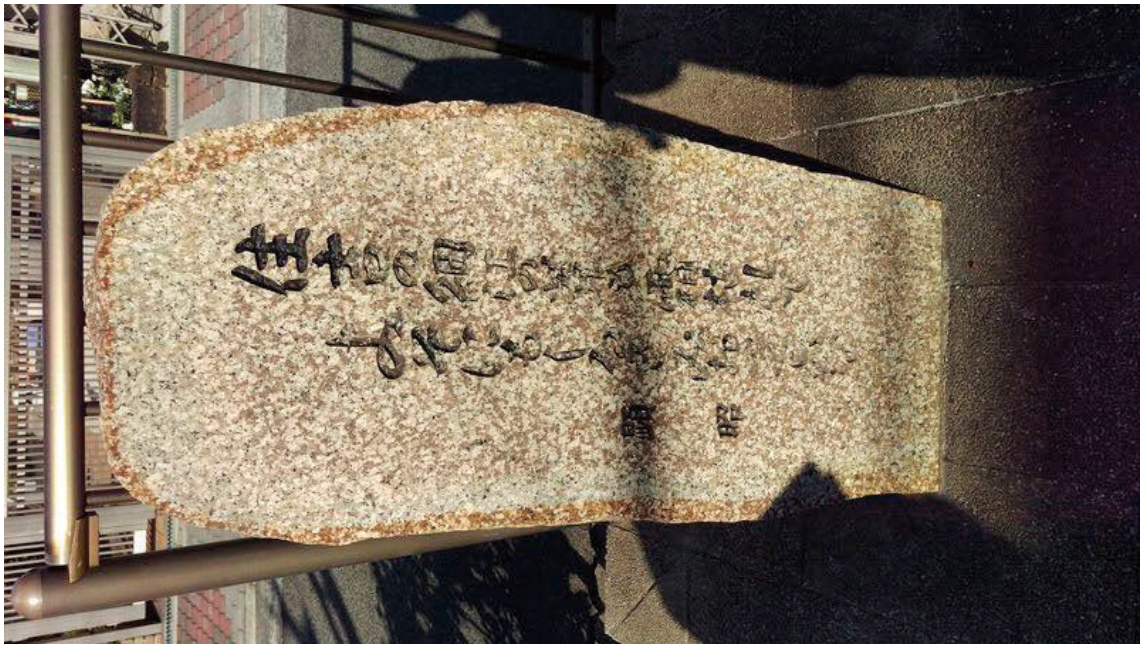
【碑面】

住吉の細江漕ぎ出づる海士船の
葦間あらそう夜半の月影
宗良親王

【出典】

宗良親王千首　詠千首和歌　四四九
秋二百首
舟月
住よしのほそ江こぎ出づるあま舟の蘆間あらそふよはの月かげ

㊲顕昭歌碑



【碑面】

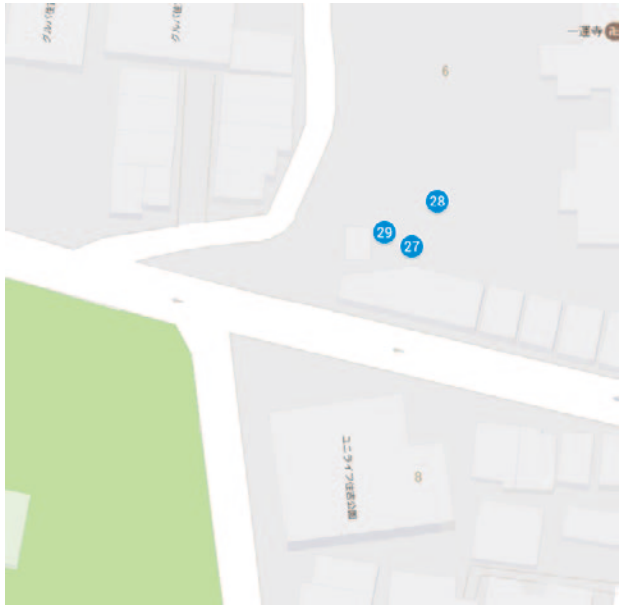
住吉の細江の葦も霜枯れて
よそにもしろきみをつくしかな
顕　昭

【出典】

千五百番歌合　一八五八
九百三十番　左　　顕昭
すみよしのほそえのあしもしもがれてよそにもしろき身をつくしかな

碑の所在地

南海高野線
阪堺電軌上町線
神ノ木
住吉東
住吉
住吉公園
住吉大社
住吉大社古祥殿
住吉公園
住吉税務署
慈光寺
浜口東
細井川
荒谷医院
阪急オアシス・住吉店
浜口医院
(株)栗玄
南住吉第9住宅
南住吉1丁目
長居公園通
住吉行宮正印殿趾
宝林寺
万代 南住吉店
白木診療所
浄光寺
西之坊
上住吉
真願寺
東大禅寺
住吉消防署万代出張所
平嶋歯科医院
住吉霊園
大領
万代
小林医院
大阪府立急性期総合医療センター
コクミンドラッグ大阪府立病院前店
帝塚山東
帝塚山西
帝塚山四丁目
住吉幼稚園
阪和第二住吉病院
大阪市立住吉小
東粉浜
粉浜
妙典寺
順照寺
粉浜支店
粉浜3丁目
ウエムラサイクル・パーツ
西願寺
松岸寺
生根神社
大阪府住吉警察署
一運寺
十三佛宝泉寺
小宮クリニック
住吉
住吉
住吉



Google マップを元に作成
（2017 年 2 月 21 日作成）
© 2015 Google Inc, used with permission. Google および Google ロゴは Google Inc. の登録商標であり、同社の許可を得て使用しています。

①住吉記念碑
②松尾芭蕉句碑
③汐掛道の記
④中村若沙句碑
⑤高木石子句碑
⑥阿波野青畝句碑
⑦宮本竹逕歌書碑
⑧大橋桜坡子句碑
⑨都鳥社歌碑
⑩住吉万葉歌碑
⑪海竜王処碑
⑫井原西鶴句碑
⑬大伴大江丸句碑
⑭川端康成碑
⑮津守国美歌碑
⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑
⑰安江不空歌碑
⑱木原茂平翁遺績碑
⑲此式自上古
⑳新町廓
㉑御文庫
㉒安田青風歌碑
㉓生田南水句碑
㉔光台院親王歌碑
㉕浅沢の杜若
㉖蜀山人狂歌碑
㉗一運寺句碑
㉘法然歌碑
㉙摩耗不明碑
㉚神明穴立石
㉛万葉歌碑
㉜後村上帝歌碑
㉝細江川碑
㉞藤原俊成歌碑
㉟藤原定家歌碑
㊱宗良親王歌碑
㊲顕昭歌碑

参考・引用文献一覧

①住吉記念碑

大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』

武田祐吉編（一九三七）『風土記』岩波書店

②松尾芭蕉句碑

住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』学生社

真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

③汐掛道の記

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

⑤高木石子句碑

住吉大社社務所（一九八八）『すみのえ』通巻一八七号、五七頁

⑥阿波野青畝句碑

安達しげをほか（一九八九）『大阪の俳人たち　1』和泉書院

阿波野青畝（一九九九）『阿波野青畝全句集』花神社

住吉大社社務所（一九八八）『すみのえ』通巻一八号、三九頁

⑦宮本竹逕書歌碑

福山誠之館同館〈http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinmeiroku/miyamoto-tikukei/miyamoto-tikukei.htm〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

プロフィール宮本竹逕〈http://www.all-japan-arts.com/swf/miyamoto-pro.swf〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

宮本竹逕（一九七一）『書道技法講座〈かな・関戸本古今集〉』二玄社

⑧大橋桜坡子句碑

大阪俳句史研究会編（一九九五）『大阪の俳人たち　4』和泉書院

⑩住吉万葉歌碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

住吉大社社務所（一九九一）『すみのえ』通巻二〇一号、四一頁

⑫井原西鶴句碑

天理大学附属天理図書館（一九六五）『西鶴』便利堂

吉江久彌（二〇〇八）『西鶴全句集　解釈と鑑賞』笠間書院

⑬大伴大江丸句碑

乾猷平（一九二四）『秋存分・常盤の香』古俳書文庫第拾篇、天青堂

上田高嶺（一九九四）『大江丸旧国　遺稿と生涯』

大阪市立美術館編（二〇一〇）『特別展　住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』

大谷篤蔵（一九五九）「大江丸書翰集」『ビブリア』一五巻、天理図書館

岡野知十校訂（一八九八）『一茶大江丸全集』俳諧文庫第一一編、博文館

鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（一）」『国語教育』一七巻五号、育英書院
鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（二）」『国語教育』一七巻六号、育英書院
鈴木重雅（一九三二）「俳人大江丸の研究（三）」『国語教育』一七巻一〇号、育英書院
文人宗義（一九五九）『俳句講座３　拝伝人評　下』明治書院
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

⑭川端康成碑

川端康成（一九八一）『川端康成全集第七巻』新潮社

⑮津守国美歌碑

菅宗次（一九八八）「津守国美について」『すみのえ』一九〇号、住吉大社社務所
津守国美（一八八一）『津守国美和歌集』

⑯天皇陛下御在位六十年奉祝記念碑

宮内庁侍従職編（一九九〇）『おほうなばら　昭和天皇御製集』八六頁、読売新聞社
住吉大社社務所（一九八六）『すみのえ』通巻一八三号、四七頁

⑰安江不空歌碑

原清治編（一九六四）『安江不空全歌集』安江不空全歌集刊行会
安江不空プロフィール〈http://web１.kcn.jp/narakappa/yasuepro.html〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

⑱木原茂平翁遺績碑

珍物子編（一九〇九）『珍物書傳』楽山堂書房（国立国会図書館デジタルコレクション）〈http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/778379/88〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

㉑御文庫

大阪市立美術館編（二〇一〇）『住吉さん　住吉大社一八〇〇年の歴史と美術』
住吉大社編（二〇〇二）『住吉大社〈改訂新版〉』学生社
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

㉒安田青風歌碑

安田喜一郎（一九七二）『白珠』二〇巻一号、白珠社

㉔光台院親王歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八四）『新編国歌大観　第二巻　私撰集編　歌集』角川書店
「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅲ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

㉕浅沢の杜若

佐竹昭広ほか（二〇一二）『改訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

㉖蜀山人狂歌碑

暁鐘成（一九七六）『摂津名所図会大成』柳原書店
真弓常忠（二〇〇三）『住吉信仰』朱鷺書房

㉘法然歌碑

「浄土宗　一運寺」（二〇一七年二月一八日に一運寺住職から拝受したパンフレット）

㉚神明穴立石

10.生根神社〈http://www.cvv.jp/uemachidaichi5/10.html〉（二〇一七年二月二一日アクセス）

㉛万葉歌碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

㉜後村上帝歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八三）『新編国歌大観　第一巻　勅撰集編　歌集』角川書店

㉝細江川碑

佐竹昭広ほか（二〇一二）『補訂版萬葉集本文篇』補訂版九刷、塙書房

「新編国歌大観」編集委員会（一九八三）『新編国歌大観　第一巻　勅撰集編　歌集』角川書店

㉞藤原俊成歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅲ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

「新編国歌大観」編集委員会（一九八四）『新編国歌大観　第二巻　私撰集編　歌集』角川書店

㉟藤原定家

「新編国歌大観」編集委員会（一九八五）『新編国歌大観　第三巻　私家集編Ⅰ　歌集』角川書店

㊱宗良親王歌碑

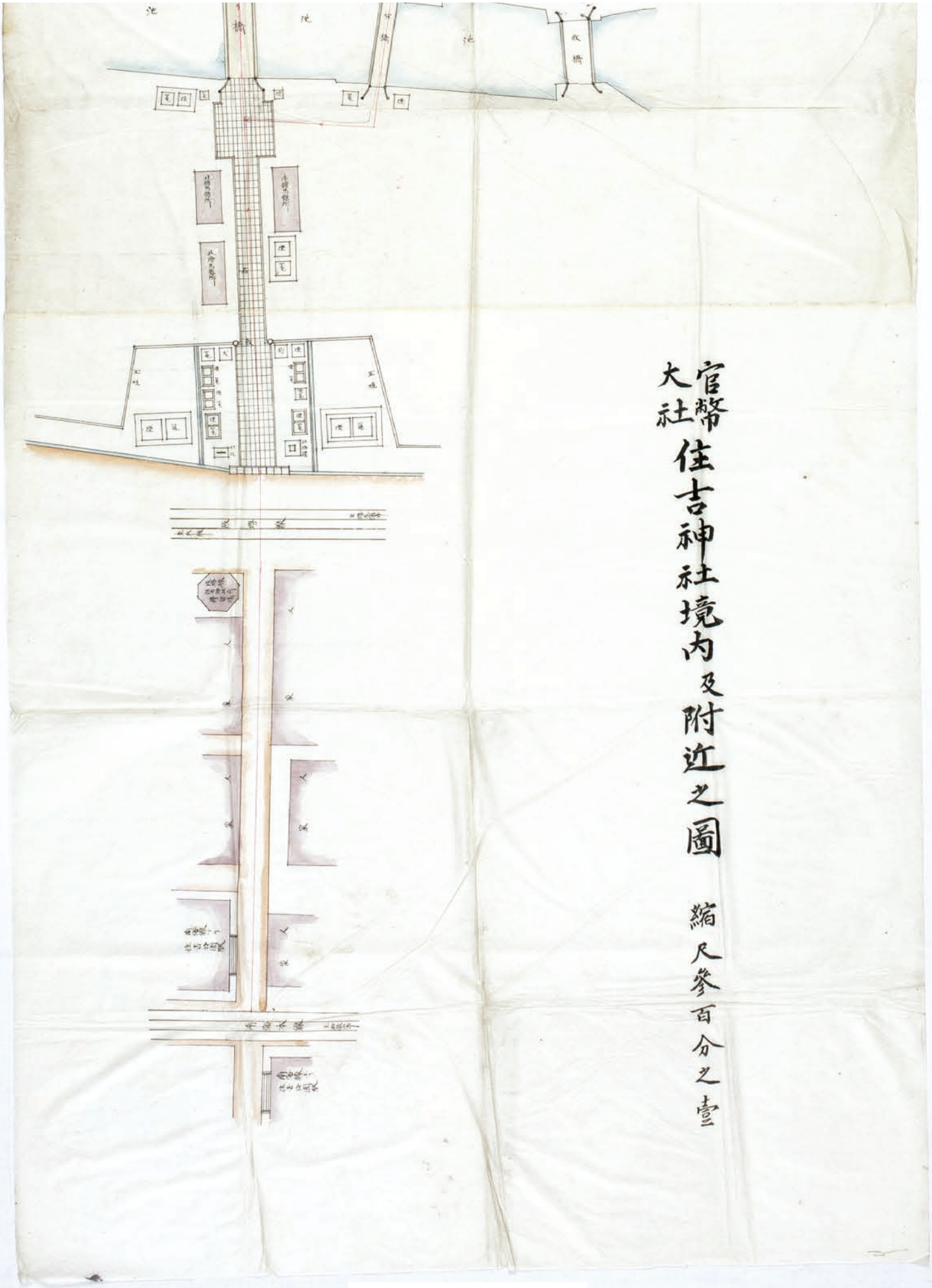
「新編国歌大観」編集委員会（一九九二）『新編国歌大観　第十巻　定数歌編Ⅱ、歌合編Ⅱ、補遺編　歌集』角川書店

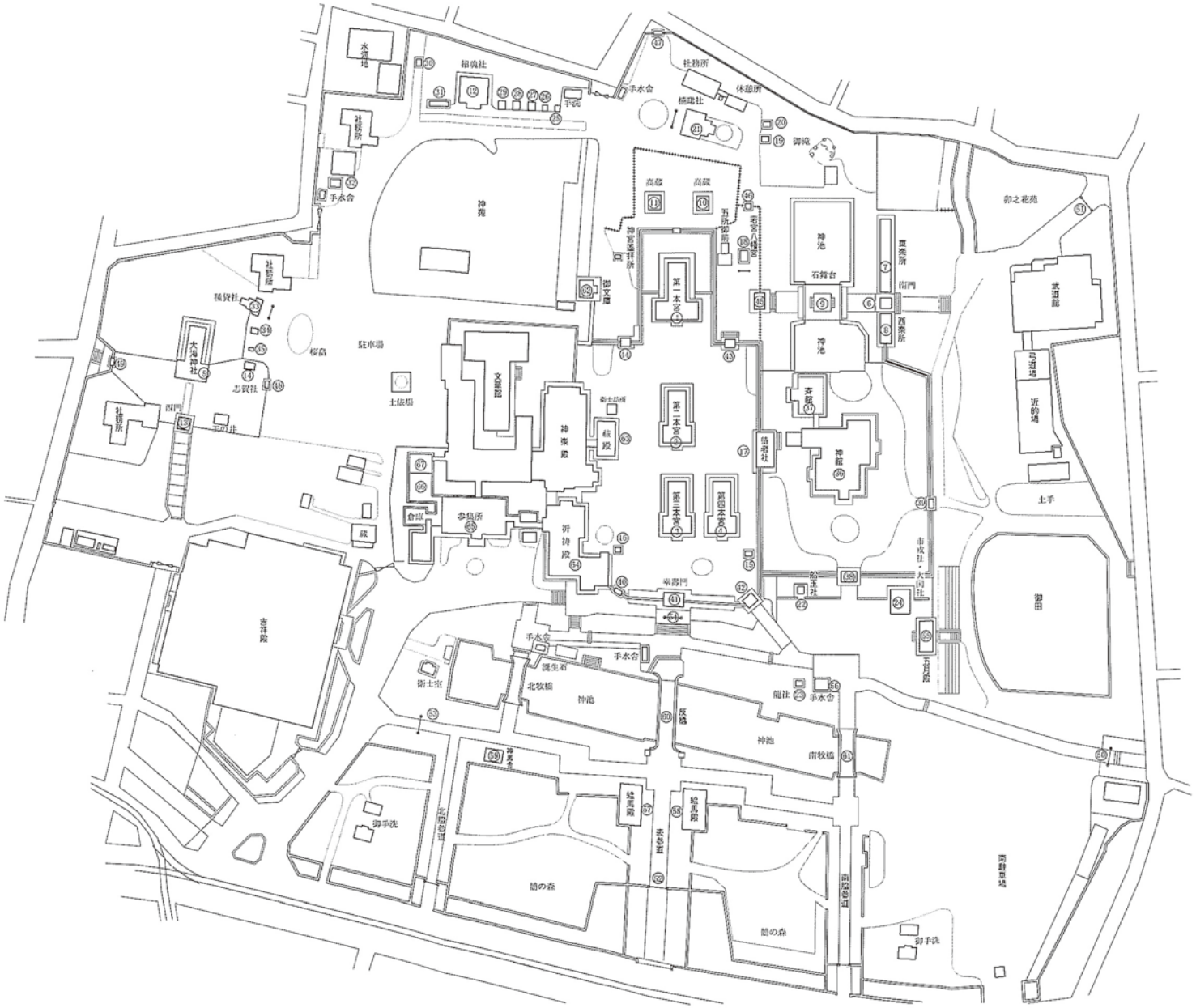
㊲顕昭歌碑

「新編国歌大観」編集委員会（一九八七）『新編国歌大観　第五巻　歌合編、歌学書・物語・日記等収録歌編　歌集』角川書店

明治弐拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書

関西大学なにわ大阪研究センター


官幣大社
住吉神社境内及附近之圖
縮尺參百分之壹



番号	建造物名称	番号	建造物名称
①	第一本宮	㊱	神館
②	第二本宮	㊲	斎館
③	第三本宮	㊳	神館西門
④	第四本宮	㊴	神館南門
⑤	大海神社	㊵	幸禄門
⑥	南門	㊶	幸寿門
⑦	東楽所	㊷	幸福門
⑧	西楽所	㊸	南瑞籬門
⑨	石舞台	㊹	北瑞籬門
⑩	南高蔵	㊺	南中門
⑪	北高蔵	㊻	東薬医門
⑫	招魂社本殿	㊼	東門
⑬	大海神社西門	㊽	大海神社南小門
⑭	志賀社	㊾	大海神社北小門
⑮	楯社	㊿	南大鳥居
⑯	鉾社	51	東大鳥居
⑰	侍者社	52	西大鳥居
⑱	若宮八幡宮	53	北大鳥居
⑲	立聞社	54	角鳥居
⑳	貴船社	55	五月殿
㉑	楠珺社	56	南手水舎
㉒	船玉社	57	北絵馬殿
㉓	龍社（御井殿社）	58	南絵馬殿
㉔	市戎社・大国社	59	神馬舎
㉕	新宮社	60	反橋
㉖	八所社	61	南牧橋（平橋）
㉗	今主社	62	御文庫
㉘	斯主社	63	蔵殿
㉙	薄墨社	64	祈祷殿
㉚	后土社	65	参集所
㉛	五社	66	連歌所
㉜	星宮	67	宮司室
㉝	種貸社		
㉞	児安社		
㉟	海士子社		

『住吉大社歴史的建造物調査報告書（本文編）』（2008年）から引用

〈目　次〉

口絵「官幣大社住吉神社境内及附近之図」

現在の境内図

「明治弐拾八年十一月十五日
現今建物官営社営略図及明細書」について　・・・・・・・・・・・・　1

「明治弐拾八年十一月十五日
現今建物官営社営略図及明細書」　・・・・・・・・・・・・　5

表紙写真「住吉神社境内」（住吉大社所蔵）
裏表紙写真「反橋」（住吉大社所蔵）

「明治弍拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」について

橋寺知子

ここに翻刻した文書は、「明治弍拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」と題された大阪市住吉区・住吉大社の建築に関する記録文書である。この文書には、明治二十八年（一九〇五）当時、境内に存在した建造物の正面図、側面図、平面図等が略図で示され、建造物の来歴、修理や建替えの年月や内容等が付記されている。また、本宮本殿のみならず、末社の建物から神楽所や各種の門、鳥居、蔵、木柵に至るまで、境内の工作物の多くが書き留められている。しかし、表紙の左下に欠損があり、その作成者あるいは作成機関は明らかではない。

古代以来の長い歴史をもつ住吉大社だが、明治期には廃仏毀釈による神宮寺の破却、境内地の近代公園化、それに伴う境内面積の大幅な減少など、大きな変化に見舞われた。また明治期には二回の遷宮を伴う修理が行われており、建物や工作物は変化し、神社空間にも「近代化」が進んだ。「明治弍拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」は、その二回の大修理の間に作成されたものである。住吉大社にはさまざまな歴史資料が保管されているが、実は明治中期の社務日誌や建築関係書類等の所蔵は少なく、この文書はその空白期を埋める資料となり得る。

住吉大社の建築に関しては、住吉大社歴史的建造物調査委員会編著『住吉大社歴史的建造物調査報告書』（平成二十一年十月）が出版されている。この報告書は、第四十九回式年遷宮（平成二十～二十三年）に際し、取りまとめられたもので、住吉大社の歴史的建造物について詳細に論じられている。だが明治期の建造物の状況については、上述の通り、住吉大社所蔵の資料では詳細がわからない部分があるため、概要を示すにとどまる部分が見られる。

上記報告書に関わる調査結果の一部を発表したものに、水田丞「住吉大社末社招魂社（旧住吉神宮寺護摩堂）の復原」（平成二十二年度日本建築学会近畿支部研究発表会研究報告集、計画系九一七～九二〇ページ、二〇一〇年）がある。境内にあった神宮寺は、明治期に消滅したが、遺構は移築・転用されていることが知られている。この研究は、住吉大社末社招魂社として現存する旧神宮寺護摩堂を調査し、復原を試みたものである。直接、近代の住吉大社の建築を取り扱うものではないが、明治期の住吉大社では、施設面で大きな変化が起こっていたことがわかる。

「明治弍拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」と、住吉大社に残るその前後の時期の資料を比較検討することで、いままで空白期となっていた明治期の住吉大社の建築および境内の様子を連続的に把握する一助になることが期待される。

○明治期の修営と本文書の作成時期

『住吉大社歴史的建造物調査報告書』によると、明治期には建造物の修理や屋根の葺替えなどの実施に伴い、二度の遷宮が行われている。まず一度目は明治十年代で、明治十年六月に第一本宮の仮遷宮が実施され、修理が行われた。同年十二月には、最も破損が甚だしかった第四本宮の仮遷宮が行われた。修理や屋根の葺替えを行い、明治十一年五月に第一・第四本宮、翌十二年三月に第二・第三本宮の正遷宮が行われている。二度目の遷宮は明治三十年代で、第一本宮の棟札の記載によると、前回の遷宮から二十年目の明治三十一年に屋根の葺替えが出願されたが、許可を得るのに二年を要し、明治三十四年に着手・落成したことが分かる。第二本宮以下の修繕は

先に延ばされ、明治三十九年から四十年にかけて完成した。

「明治弐拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」は、この二回の遷宮を伴う大規模な修繕工事の間に作成されており、作成年を考えれば、明治三十年代の明治期二回目の大規模修繕の計画をいよいよ具体化しようとする頃に作成されたものと推測できる。

○書きとめられた建物や工作物

「明治弐拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」には、第一本宮から始まって主な社殿、それらに付属する垣や土塀、付属建物、鳥居や門、そして末社や蔵、橋などの工作物も含め、一〇一件の物件が列挙されている。本宮では、本殿、拝殿、渡殿は、別々の一件と数えての一〇一件である。一件ごとに、基本的に正面図と側面図、簡単な平面図が作成され、建坪や高さ等の記載がある。全ての物件ではないが、建立時期、修理時期、修理内容の記載、そしてその資金を寄付した団体等が記されている。明治十年から十二年にかけての大修理以後の小規模な修理についての言及もところどころ見られ、近代の住吉大社の造営史を詳しくみる上で、新たな知見をあたえてくれるだろう。

細かな工作物は省略して、記載されている主な建造物名称を列挙すると、次のようなものが取り上げられている。

第一之本宮
第二之本宮（本殿正面図は見当たらない）
第三之本宮
第四之本宮
第一之本宮瑞籬南四足門、北四足門
仮社務所、仮社務処西薬医門
高倉
東神饌所
神楽所
神輿庫
文庫

第一本宮拝殿（現況）

第一本宮本殿（現況）

第三本宮および第四本宮（現況）

神馬屋
蓮池北側絵馬掛所
楽所（右方、左方）
皇典研究所・講社取扱所
絵馬掛所（南、北）
角鳥居
反橋、便宜橋
西大鳥居、東大鳥居、南大鳥居、北大鳥居
摂社大海神社
摂社大海神社鳥居
摂社志賀神社
摂社船玉神社
摂社若宮神社
末社斯主社
末社児安社
末社楯社
末社八所神社
末社鉾社
神饌所（侍者社か？）
末社市社
末社新宮社
末社海士子社
末社龍社
末社今主社
末社后土社
神宮遥拝所
末社長岡社
末社貴船社
末社苗見社
末社誕生石
末社五所御前
招魂社

（門や籬、塀などは省略）

これらの建造物・工作物は、それぞれ丁寧に記されているものの、境内のどこに位置しているのか示した図はない。実は、明治中期の境内の様子は、前述の報告書『住吉大社歴史的建造物調査報告書』でもあまり明らかではない。同書には住吉大社所蔵の絵図や指図など、境内の様子がわかる資料の紹介がある

角鳥居と幸壽門（現況）

御文庫（現況）

若宮八幡宮と南中門（現況）

が、そのうち明治期に作成されたものは四点で、明治十四年以前に作成されたと判断できるものが三点、残る一点「摂津国坐官幣大社住吉神社之図」は、明治十六年の境内図である。明治中期以降の境内図は見当たらない。便宜的に、現在の境内配置図に記された建造物と対応させてみると、配置図にリストアップされている六十七件のうち、少なくとも四十二件の記載が確認できた。大正期から昭和期にかけて、住吉大社の境内は大きく変化しており、明治二十八年の記録を現在の境内配置図と比較するのは妥当とは言えないのだが、この翻刻にある一〇一件の建造物・工作物の姿図や記述を確認しながら、その前後の境内図、さらに既往研究での知見を合わせて検討していくことで、明治期の住吉大社の境内の様子が明らかになることが期待できる。

○「官幣大社住吉神社境内及附近之圖」（口絵）

関西大学なにわ大阪研究センターが「明治弐拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」を入手した際、文書の綴りとともに、一枚の境内の配置図が含まれていた。和紙に着彩の配置図で、「官幣大社住吉神社境内及附近之圖」と題され、縮尺三百分の一で、第一本宮付近から南海本線住吉公園駅付近まで、境内の主要な建物や工作物、参道などが描かれている。この配置図には作成年月の記入がないが、記述内容から、「明治弐拾八年十一月十五日　現今建物官営社営略図及明細書」の付図とは考えられない。それより後の作図と推察される。

配置図の記述内容をもう少し詳細に見る。南海本線住吉公園駅と阪堺線の住吉神社前停留所が描かれている。南海本線は明治十八年、阪堺線は明治四十三年の開業であるので、この配置図は明治末以降の様子を表したものと判断できる。境内に関しては、四つの本宮より南側しか記されていないが、大正三年に新築された社務所や大正四年新築の神館が本宮の南側に描かれている。社務所が現在の位置、つまり本宮の北側に移築されるのは昭和五年であるので、この配置図は、大正中期以降昭和五年以前の様子を記したものと考えられる。

またこの配置図には、矢印付きの線などの書き込みがなされている。凡例には「御休憩所」や「舞楽台覧所」、「御参向道」、「御下向道」といった語が並んでいる。御休憩所は神館内中央の一番奥に設けられ、舞楽台覧所は、石舞台が望める神池の西側に設けられている。凡例での言葉遣いから、皇族、あるいは高位にあった人物の参詣に際しての計画図ではないかと推測される。

反橋（現況）

第一本宮東側の高蔵２棟（現況）

明治弐拾八年十一月十五日

現今建物官営社営略図及明細書

〈凡例〉

一、旧字体・俗字・異体字は新字体・正字に改めた。ただし、「仝」のみ原文のまま表記した。

（例）

壹 → 壱、廳 → 庁、亠 → 事、旺 → 時、昼 → 書

迚 → 迄、尓 → 爾、侭 → 儘、宜 → 宜、脩 → 修

舩 → 船、署 → 略、メ → シテ、匕 → トモ

一、助詞に用いられる漢字は、小字で表記した。

一、判読不明な文字は、その字数に相当する数の□で表した。

一、文字に疑義があるものは、ルビで（　）に推定される文字を入れた。

一、○は文の順序を訂正する記号として、必要に応じて原文のまま表記した。

一、読み易さを考慮して、適宜読点を補った。

一、段落・行替えなどはそのまま再現した。

一、朱字は『　』で表記した。

一、取消線については、黒線は一重線、朱線は二重線で表記した。

一、軽微な挿入文字は、そのまま文中に挿入した。

一、翻刻に際しての注記は、原文の頁末尾に【　】で表記した。

一、史料は便宜上、表紙・裏表紙を含めた通し番号を打った。

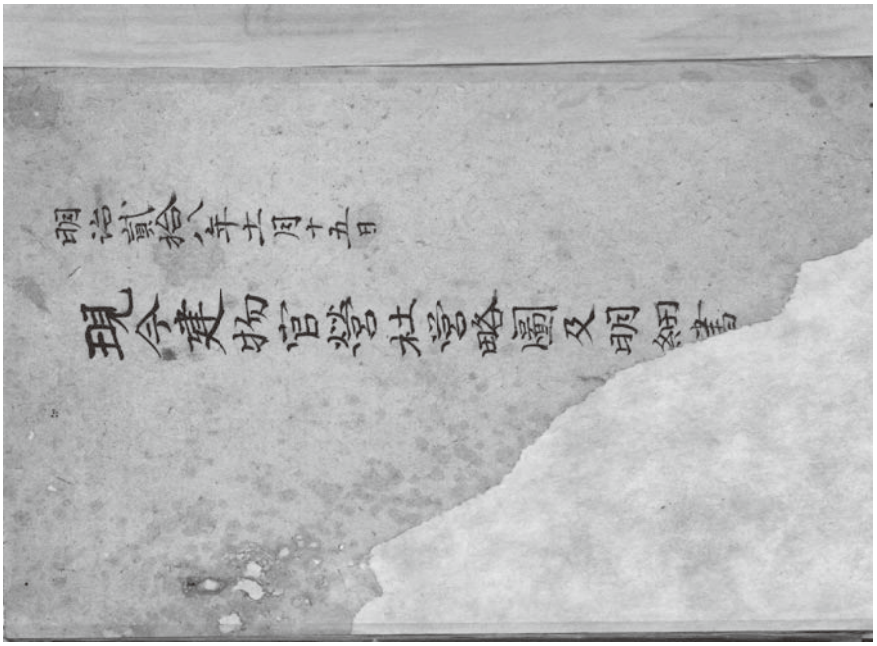
一、「通し番号」「建築物名」「建築形式」は、見出しとして右端に表記した。

（例）

（通し番号）　「社名、建築物名、向き」

「建築形式（造り、破風、拝殿）、素材、塗装法」

（1）　（表紙）

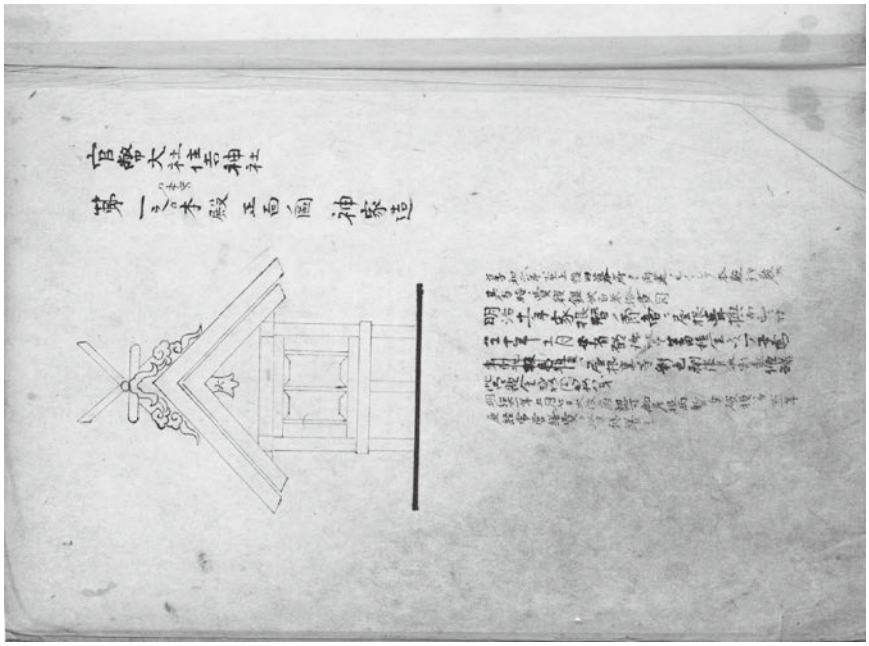


明治弐拾八年十一月十五日
現今建物宮営社営略図及明細書

（2）

官幣大社住吉神社

第一之本宮本殿　正面ノ図　神家造



享和二年炎上後旧幕府ヨリ再建ノモノニシテ本殿拝殿并

其当時ノ費額銀弐百参拾貫目

明治十一年家根替ノ節茅ニ屋根葺換而ニ付

仝十年十一月本省願済、社費蓄積金ヲ以一ノ本宮

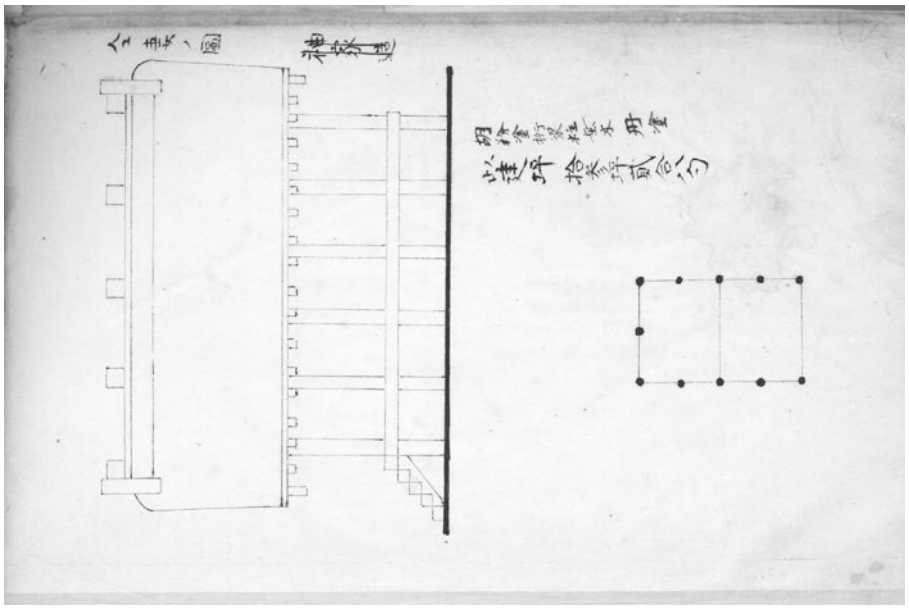
東南北板忌垣并十屋根裏等彩色剥落ノ処彩色修繕

此費額金弐拾円弐拾八銭

明治卅一年五月七日大阪府認可、御屋根両暫付破損ニ付卅一年

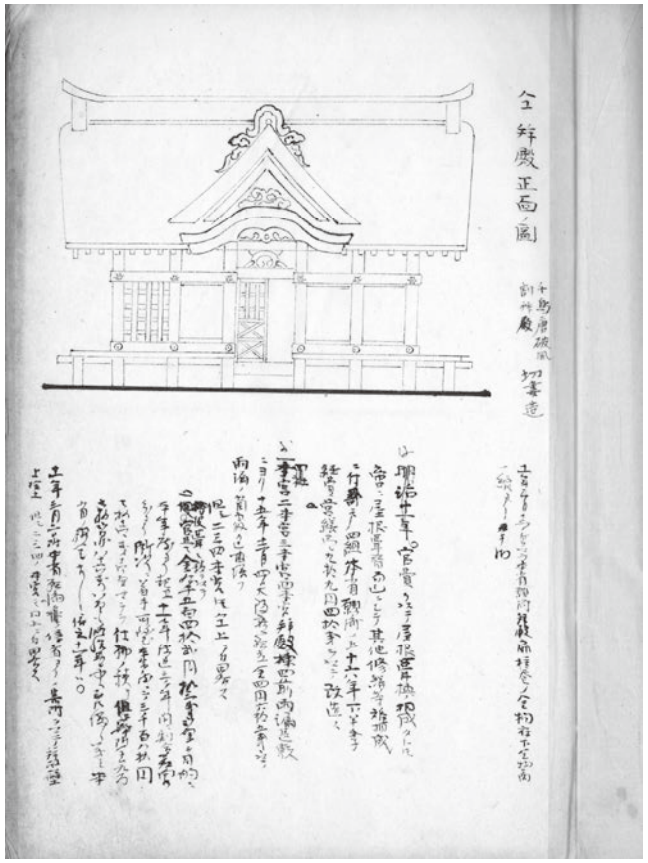
度経常営繕費ヲ以テ修繕ス

（3）　全　妻ノ図
神家造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



（4）

仝拝殿　正面ノ図
切妻造、千鳥唐破風、割拝殿



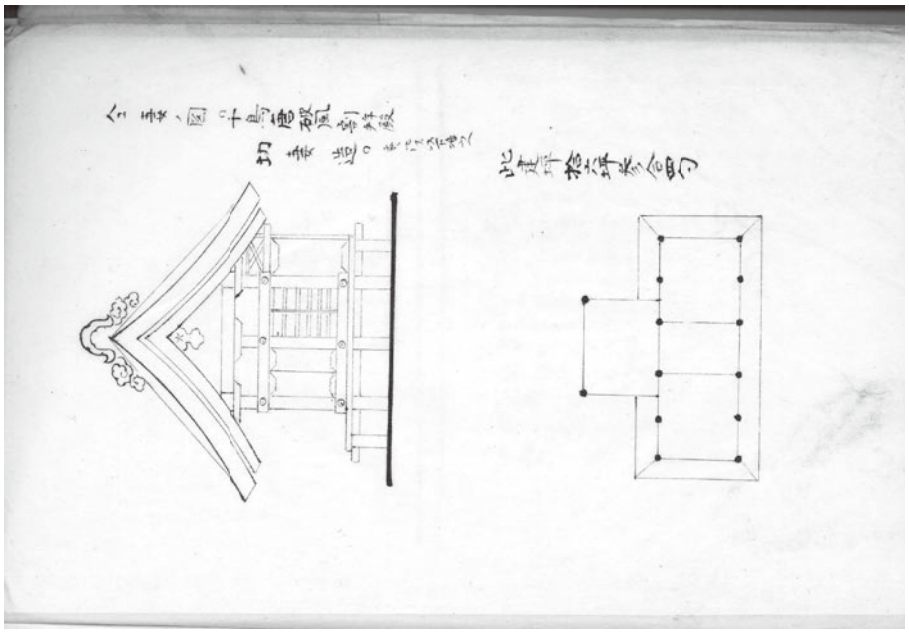
十一年三月十三日付ヲ以テ本省願済、拝殿扉柱巻ノ金物府下金物商一統ヨリ惣(カ)テ納

後明治十一年○官費ヲ以テ屋根葺換相成タレトモ
啻ニ屋根葺替而已ニシテ其他修繕等難相成
ニ付、蔀戸四組本省願済ノ上、十六年下半季
経費営繕費九拾九円四拾銭ヲ以テ改造ス

四社

前一本宮二本宮三本宮四本宮拝殿棟四前雨漏甚敷
ニヨリ十五年十二月四日大阪府へ願立、金四円六拾五銭ヲ以テ
雨漏ノ箇処而已取繕フ
但シ二三四本宮トモ仝上ニ付略ス
檜皮葺之積ヲ以テ
但シ官費金九千五百四拾弐円拾三銭弐厘ヲ目的ニ
本年度ヨリ起工十一年度迄三ヶ年間ニ割合、若宮
分ヨリ漸次ニ着手可致、尤本年度ニテ三千百八拾円
七拾壱銭壱厘マテヲ仕払ノ積リ、但シ寄附金九百
七拾弐円八十六銭八厘も修繕費中へ差備候義と本
省ノ指(カ)令有之、依之十一年八〇
十一年三月二日附本省願済ヲ以テ信者ヨリノ寄附ヲ以テ拝殿壁
上塗、但シ二三四ノ本宮モ同上ニ付略ス

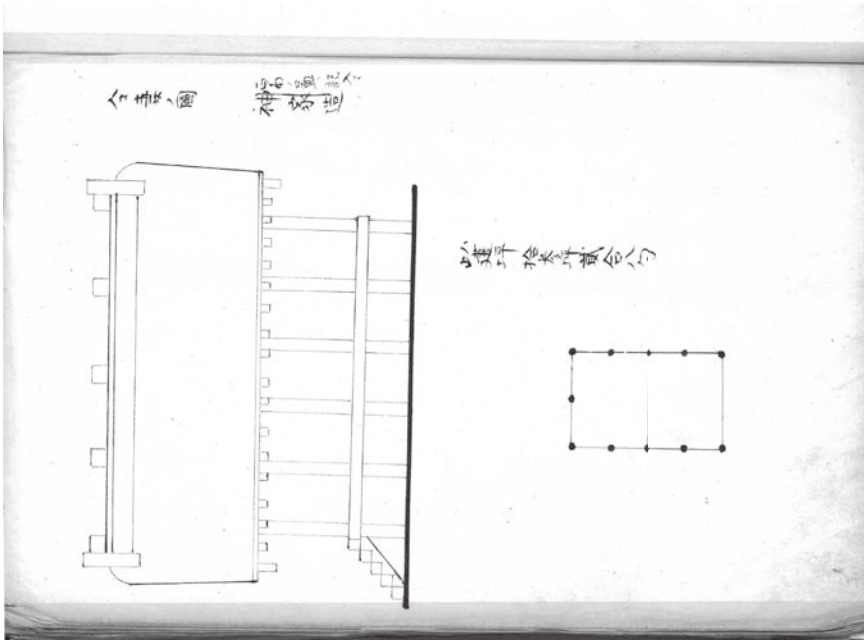
（5）　仝　妻ノ図
切妻造、千鳥唐破風、割拝殿　表ニ記ス、以下准之



此建坪　拾六坪参合四勺

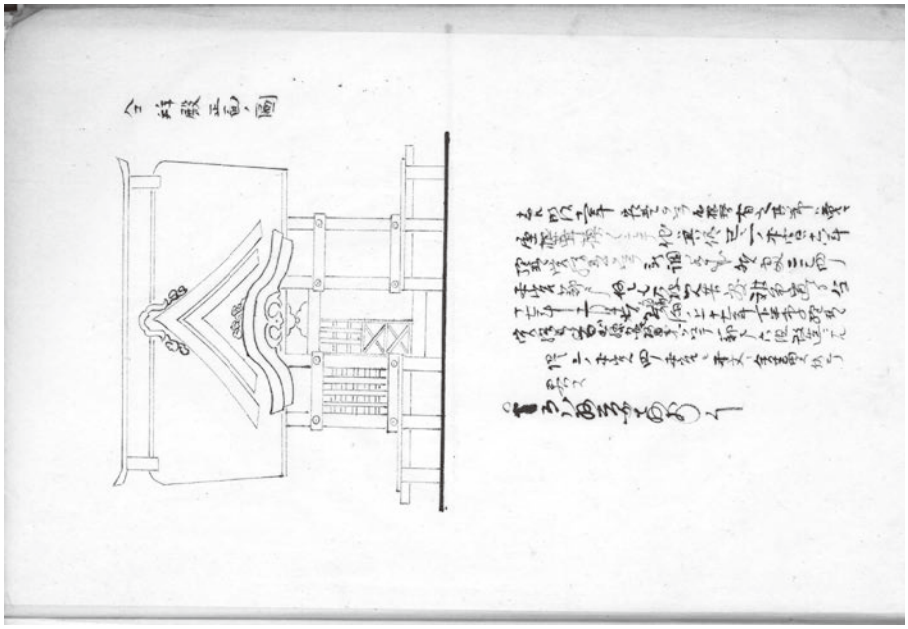
【この後に落丁あり。「第一本宮拝殿の廊下図」「第二本宮本殿の正面図」が抜けたものか。】

（6）　仝　妻ノ図　　正面ノ図ニ記入ス
神家造



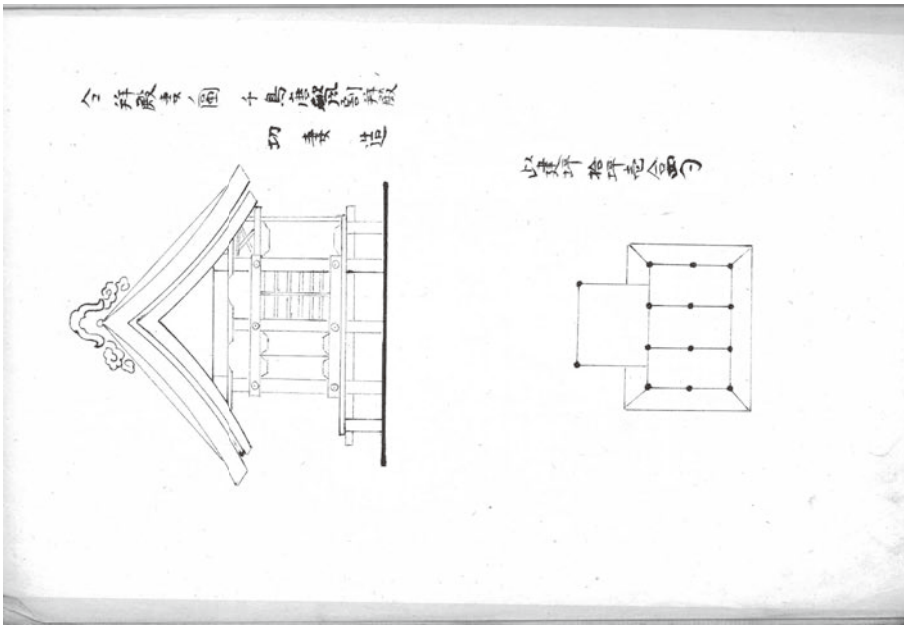
此建坪　拾参坪弐合八勺

(7)　全拝殿　正面ノ図

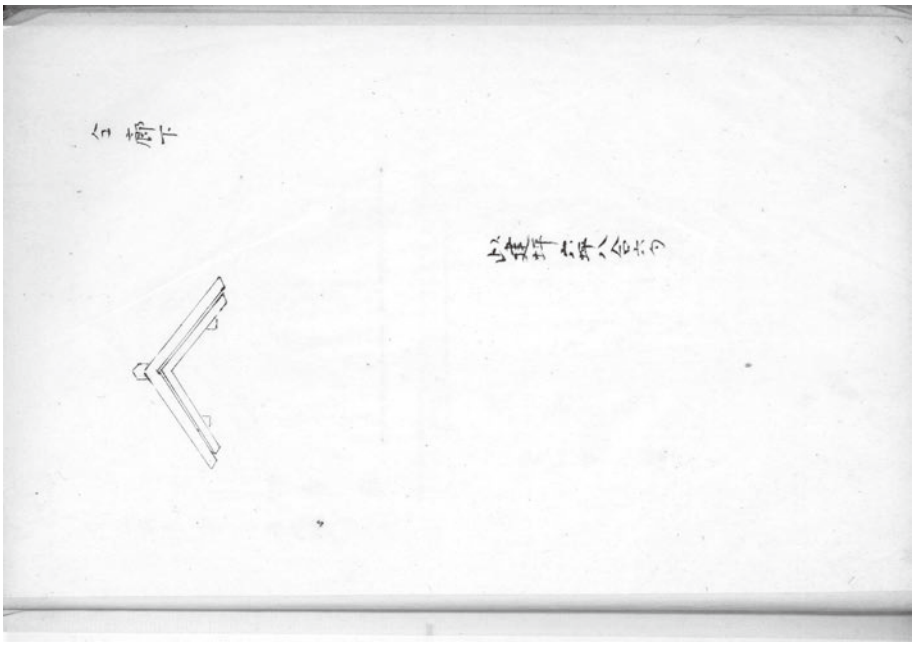


去ル明治十一年官費ヲ以テ屋根替有之、其節ハ普ニ
屋根葺換ノミニシテ他ハ其儘已ニ一ノ本宮ハ十六年
経費営繕費ヲ以テ新調ニ相成、然ル処ニ三四ノ
本宮部戸何レも大破見苦敷難差置ニ付、全
十七年十一月十七日大阪府ヘ願済ノ上十七年下半季経費
営繕費百八拾弐円七拾四銭ヲ以テ部戸六組改造ニナル
　但シ三ノ本宮四ノ本宮モ本文ニ含蓄ス、仍テ
　略ス
○金百八拾二円七拾銭ノ事

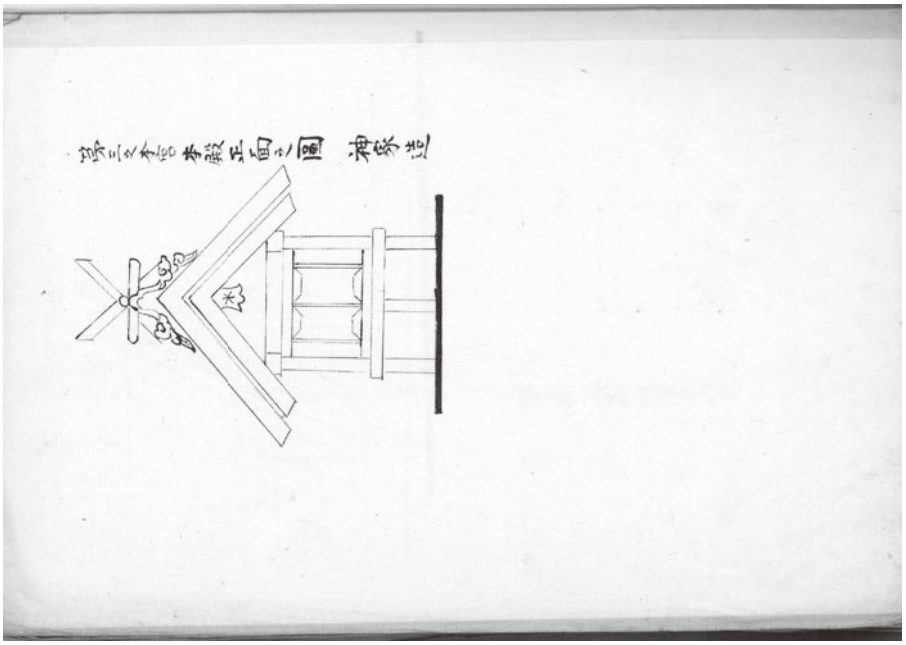
（8）　全拝殿　妻ノ図
切妻造、千鳥唐破風、割拝殿



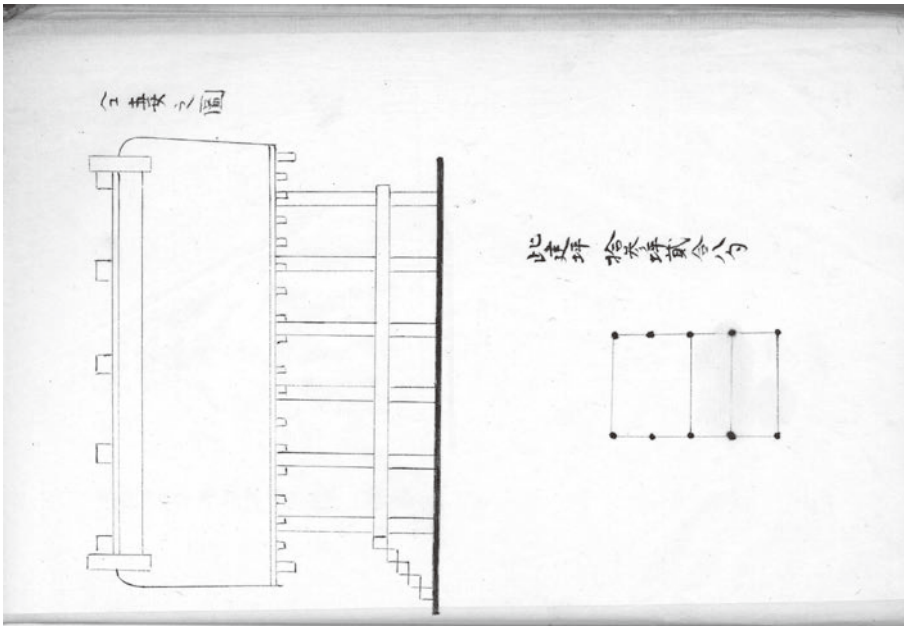
（9）　全　廊下



（10）第三之本宮本殿　正面之図
神家造

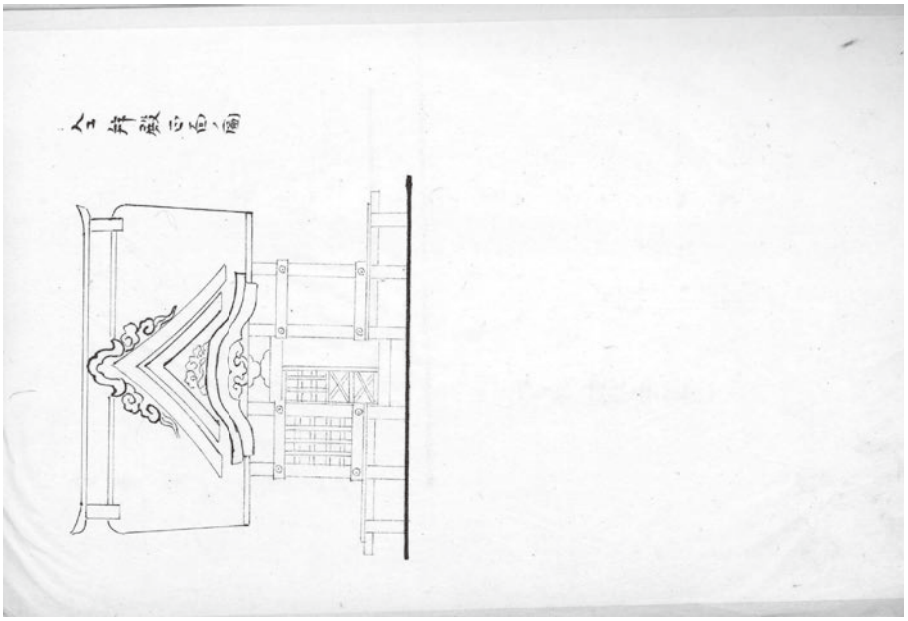


（11）仝　妻之図

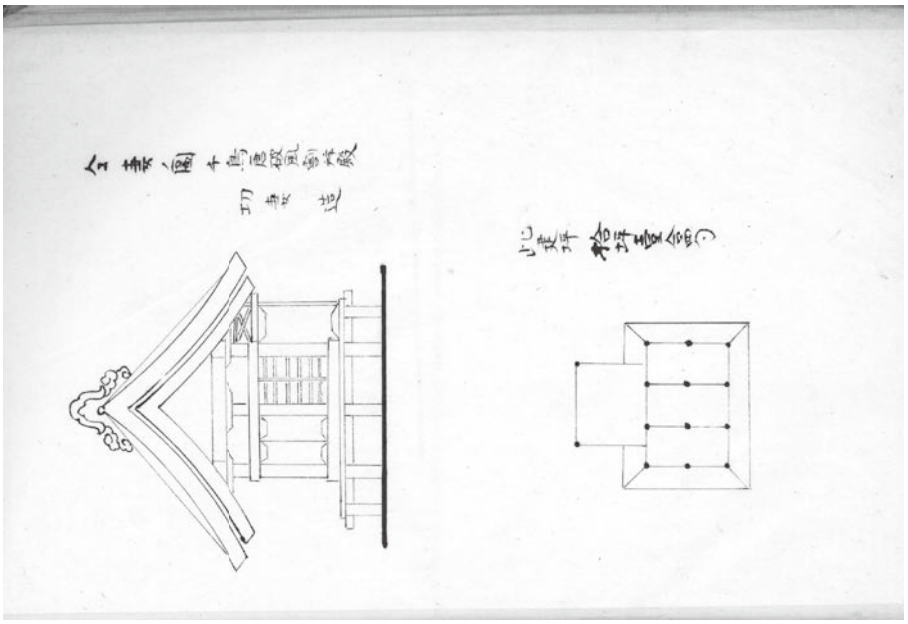


此建坪　拾参坪弐合八勺

（12）全拝殿　正面ノ図

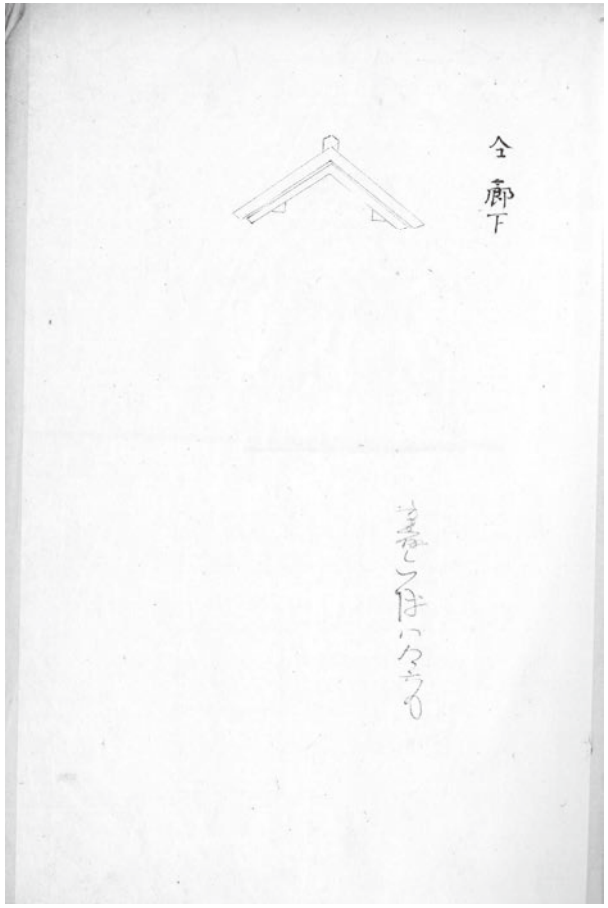


（13）全　妻ノ図
切妻造、千鳥唐破風、割拝殿



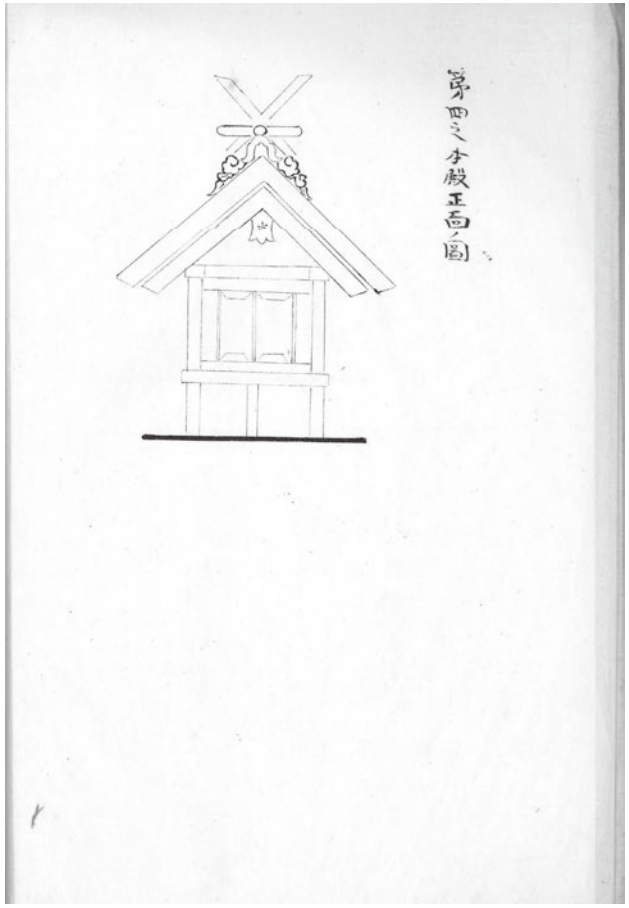
此建坪　拾坪壱合四勺

（14）全　廊下

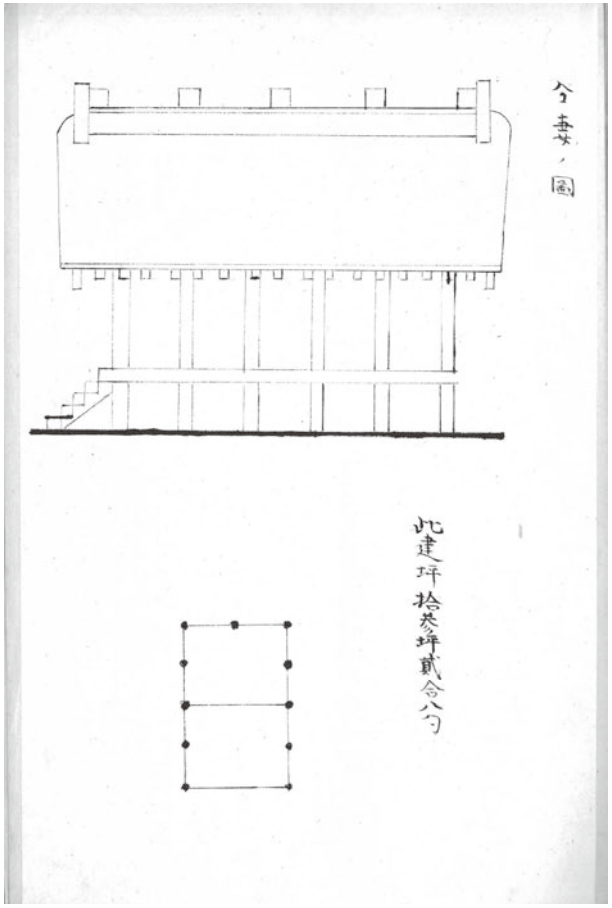


此建坪　六坪八合六勺

（15）第四之本殿　正面ノ図

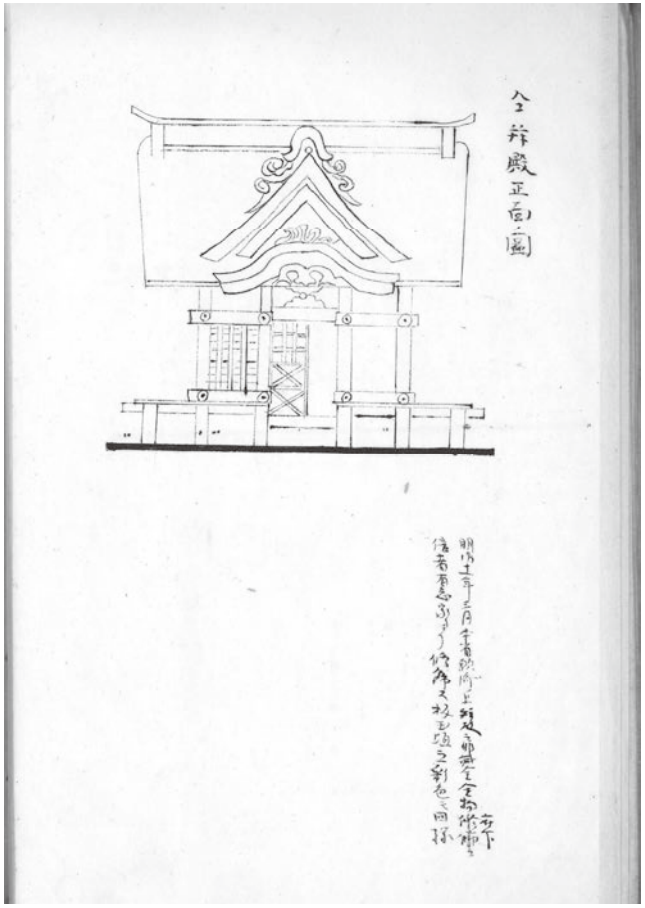


（16）全　妻ノ図



此建坪　拾参坪弐合八勺

（17）全拝殿　正面ノ図

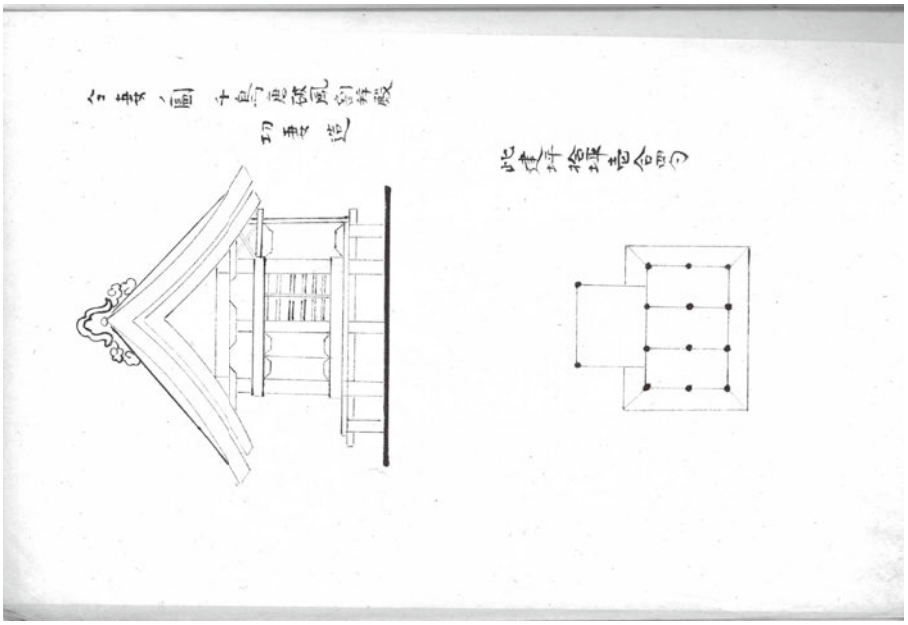


府下

明治十一年三月本省願済ノ上拝殿之扉掛金金物修飾ヲ

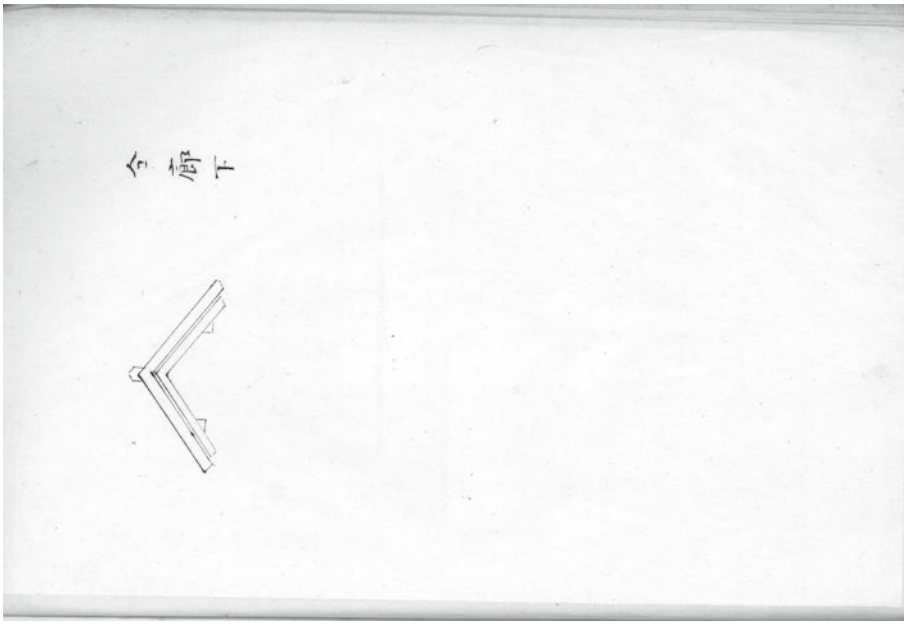
信者有志家ヨリ修飾ス、板玉垣之彩色モ同様

（18）　仝　妻ノ図
切妻造、千鳥唐破風、割拝殿

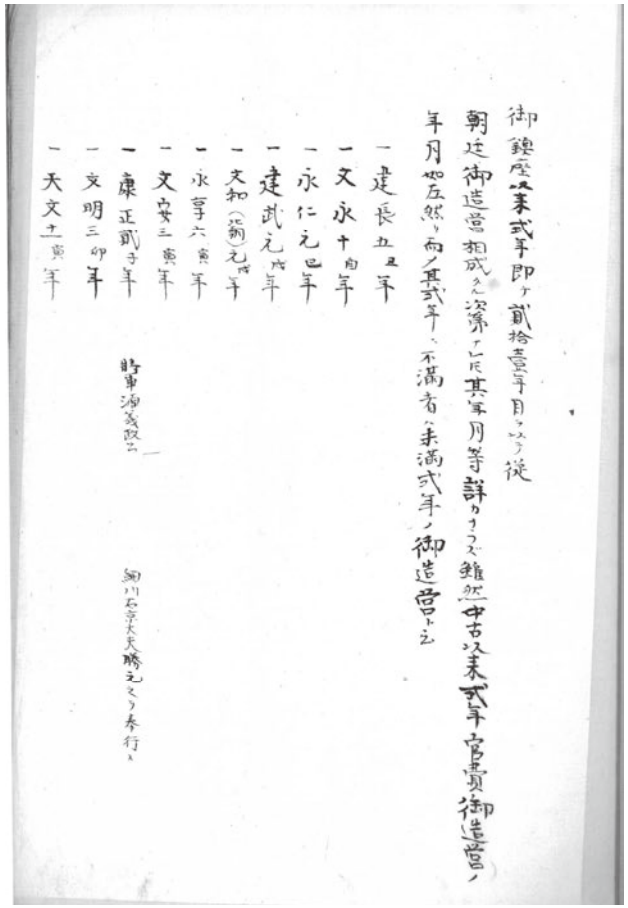


此建坪　拾坪壱合四勺

（19）　仝　廊下



（20）官費御造営ノ年月（一）



御鎮座以来式年、即チ弐拾壱年目ヲ以テ従
朝廷御造営相成タル次第ナレトモ其年月等詳カナラズ、雖然中古以来式年官費御造営ノ
年月如左、然リ而シテ其式年ニ不満者ハ未満式年ノ御造営ト云

一建長五丑年
一文永十酉年
一永仁元巳年
一建武元戊年
一文和（北朝）元戊年
一永享六寅年
一文安三寅年
一康正弐子年　将軍源義政公　細川右京大夫勝元之ヲ奉行ス
一文明三卯年
一天文十一寅年

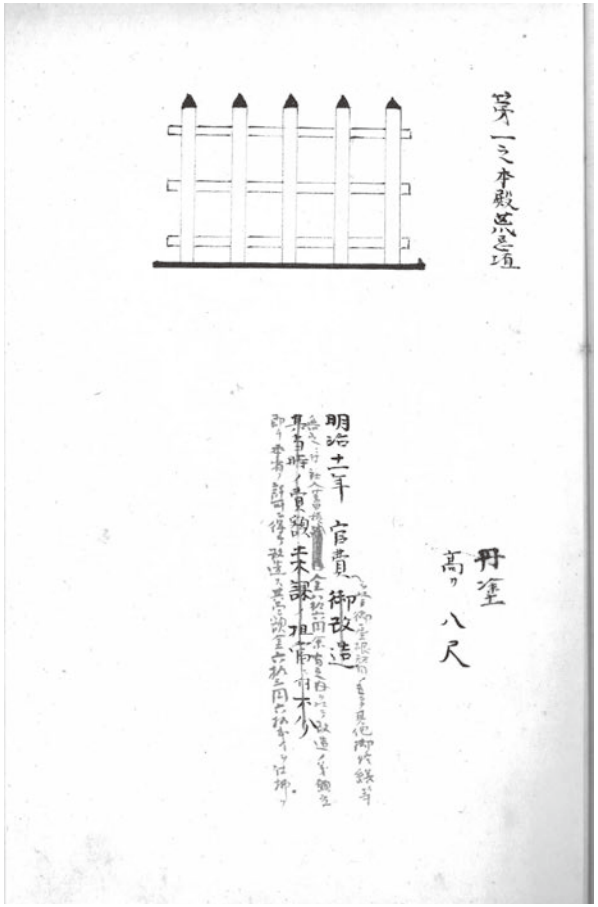
（21）官費御造営ノ年月（二）

一慶長十一年　内大臣豊臣秀頼公　片桐東市正且元之ヲ奉行ス
一元和四戊年　将軍源秀忠公　石河伊豆守三好越後守等之ヲ奉行ス
一承応三酉年　将軍源家綱公　石河土佐守之ヲ奉行ス
一宝永五子年　将軍源綱吉公　秋元但馬守之ヲ奉行ス

爾後式年ノ御造無之、大破ニ及ビタル毎ニ御造営或ハ修繕相成タル年月ハ即チ如左

一延享四卯年　将軍源家重公ヨリ金千両寄附、府内并ニ五畿内被免勧化御改造
一寛政十一未年　将軍家斉公ノ時府内并ニ七ヶ国被免勧化御修覆
一文化元子年　将軍家斉公ヨリ金千両寄附、府内并ニ七ヶ国被免勧化御改造
一天保七申年　諸国信者ノ寄附金ヲ以テ御修覆
一明治十一年　四社本殿及拝殿瑞籬境内周囲木柵ニ至ル迄、且摂社大海神社本殿并ニ拝殿
五百四十二円十三銭二厘
神饌所等ノ屋根葺換ニ付、営繕費トシテ大阪府庁ヨリ金九千円ヲ受取猶
九千七十一円八十六銭八厘
又諸方有志者ヨリ金六百円寄附有之ヲ以テ四社本殿拝殿瑞籬、摂社大海神社神饌所等ノ屋根葺換、周囲木柵建換ニ相成、其当時ノ仕様目論見ハ府庁土木課ノ担当ニシテ悉知スル能ハス

（22）第一之本殿荒忌垣
丹塗



高サ　八尺

『ヲ以テ御屋根替ノミニテ其他御修繕等』

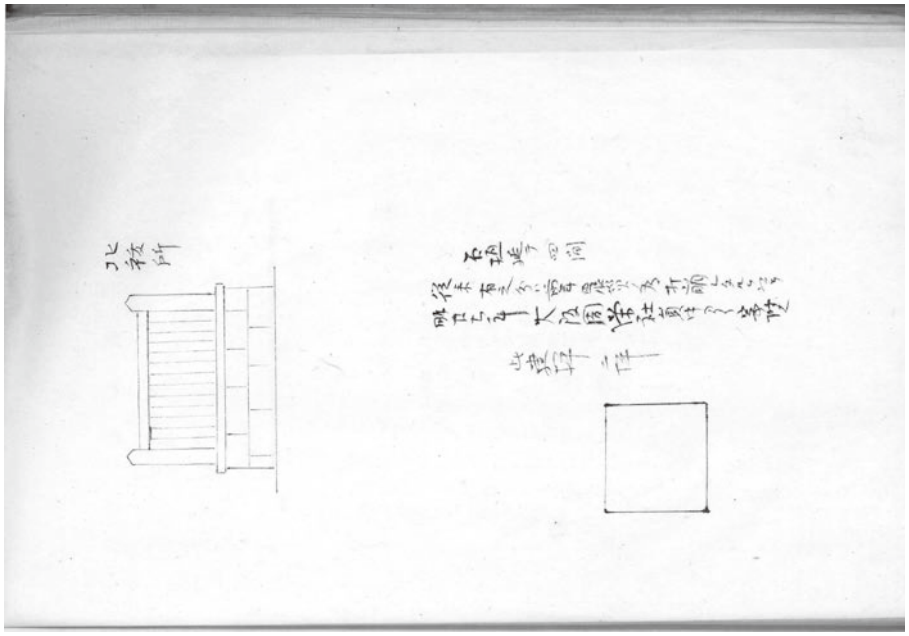
明治十一年　官費御改造

『無之ニ付社入蓄積残金内金八拾六円余有之内ヲ以テ改造ノ義願立』

~~其当時ノ費額二木課ノ担当ニ付不分~~

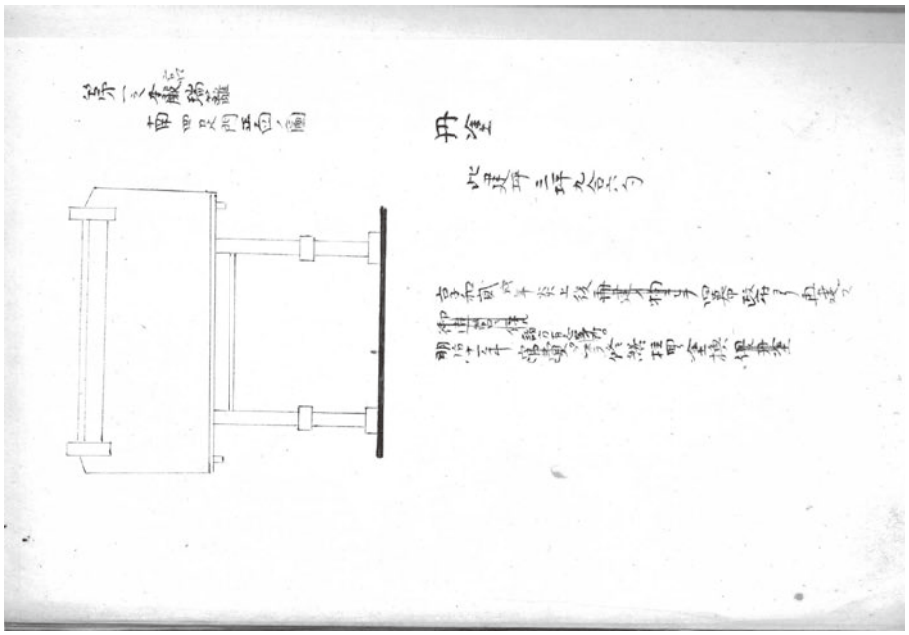
『即チ本省ノ許可ヲ得テ改造ス、其費額金六拾三円六拾銭ヲ仕払フ』

（23）北祓所



石垣延テ四間
従来有之分ハ前年震災ノ為打崩レタルヲ以テ
昨廿七年大阪周栄社員中ヨリ寄附ス
此建坪　三坪

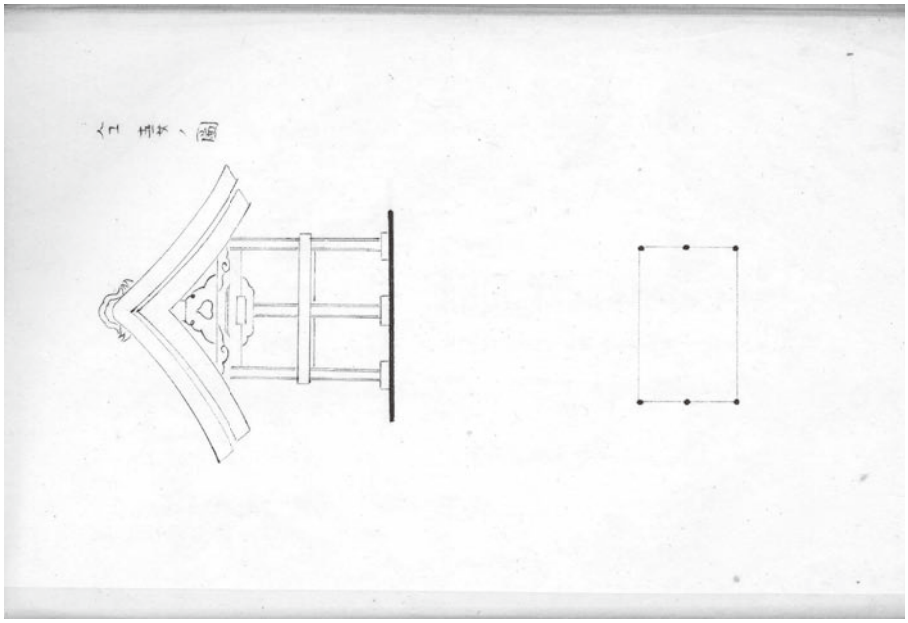
（24）第一之本殿瑞籬（宮）　南四足門　正面ノ図
丹塗



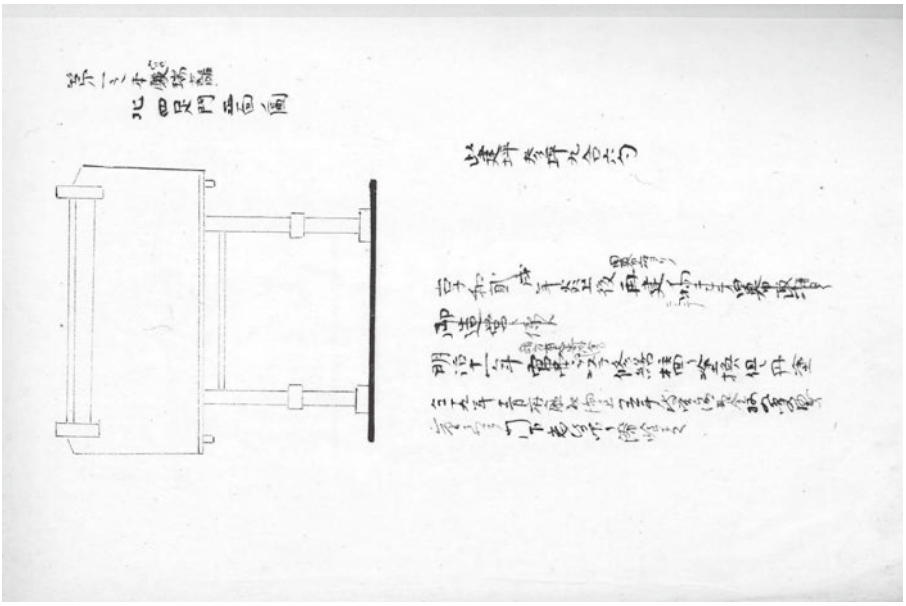
此建坪　三坪九合六勺

享和弐年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ヨリ再建ス
御造営ニ係ル
明治十一年事業諸方有志寄附ヲ以テ修繕柱回リ塗換、但シ丹塗

（25）　全　妻ノ図



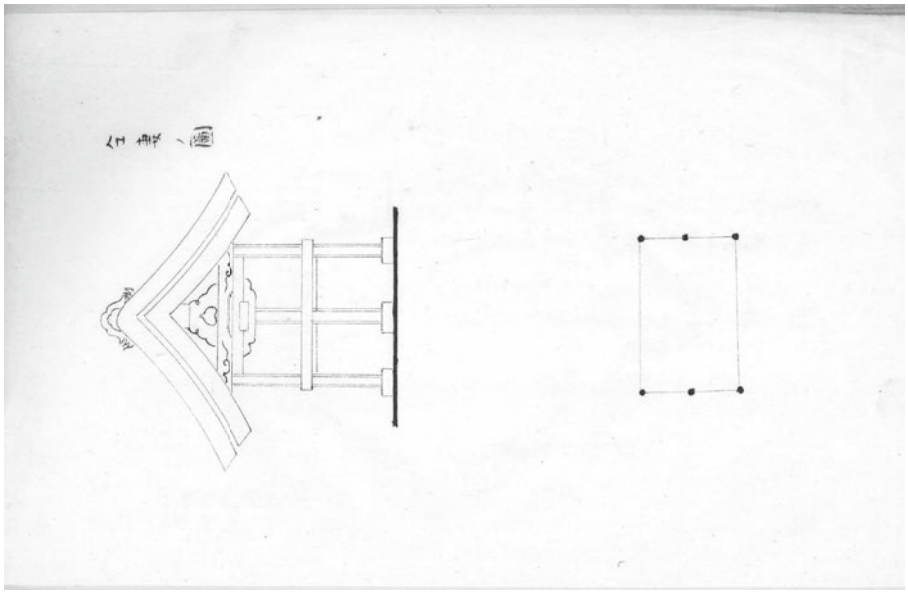
（26）第一之本殿瑞籬（宮）　北四足門　正面ノ図



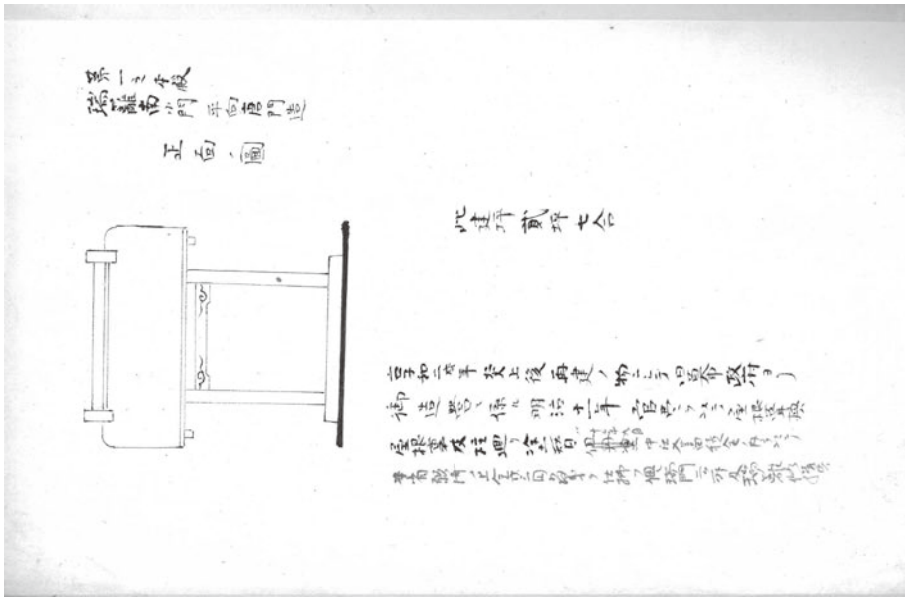
此建坪　参坪九合六勺

享和弐戌年炎上後再建ノ物（旧幕府ヨリノ）ニシテ旧幕政府ヨリ
~~御造営ニ係ル~~
明治十一年宮殿ヲ以テ修繕、柱回リ塗換、但シ丹塗（諸方有志寄附金）
全十九年十二月府庁願済ノ上全年度営繕費金拾九円九拾銭
三厘ヲ以テ門下悉皆叩キ漆喰ニス

（27）　全　妻ノ図



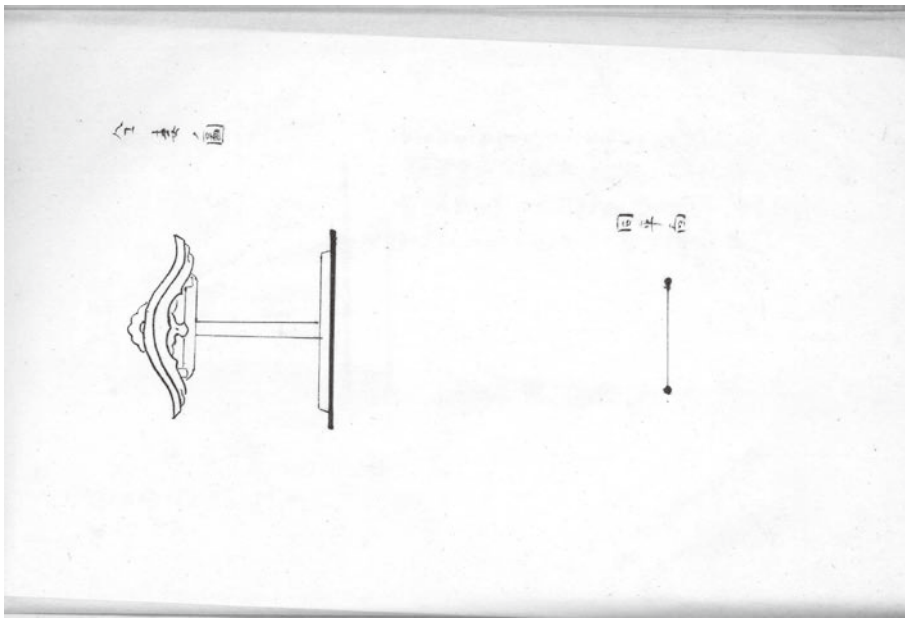
（28）第一之本殿瑞籬　南小門　正面ノ図
平向唐門造



此建坪　弐坪七合

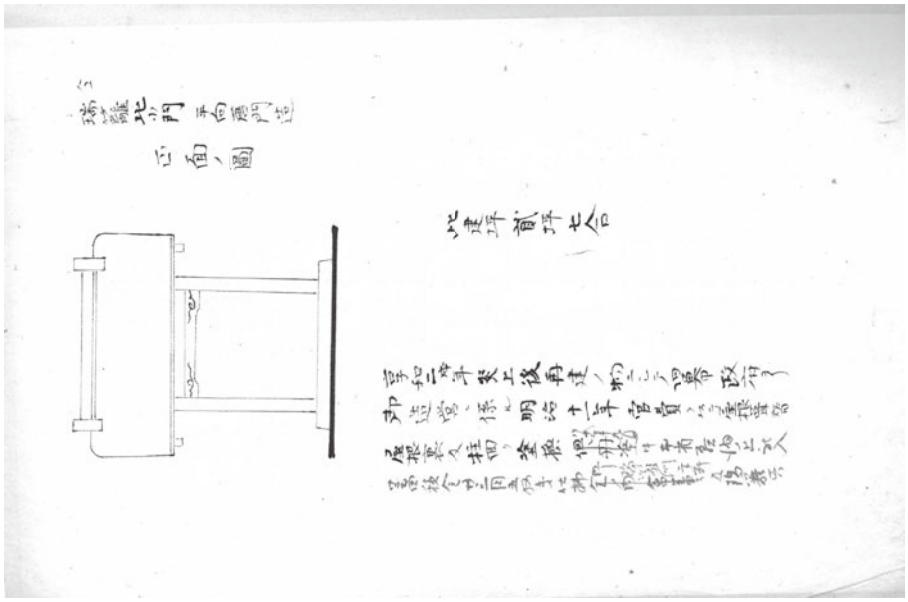
享和二戊年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル、明治十一年官費ヲ以テ屋根葺換
『八十年九月』
屋根裏及柱廻リ塗替、但丹塗『中社入蓄積金ノ内ヲ以テ』
『本省願済ノ上金廿三円五拾銭ヲ仕払フ、但シ瑞門二ケ所及瑞籬修繕共』

（29）全　妻ノ図



同平面

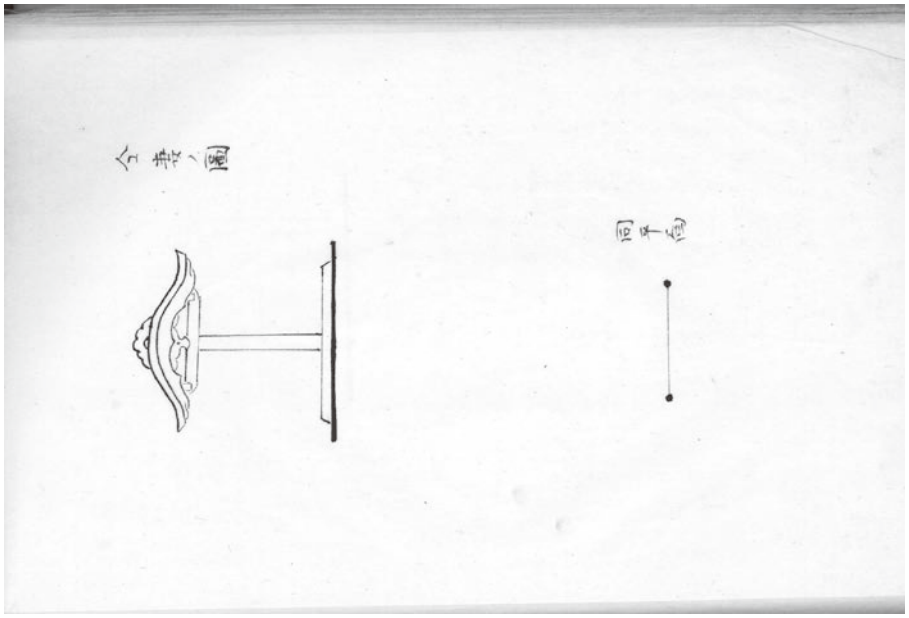
（30）　全瑞籬　北小門　正面ノ図
平向唐門造



此建坪　弐坪七合

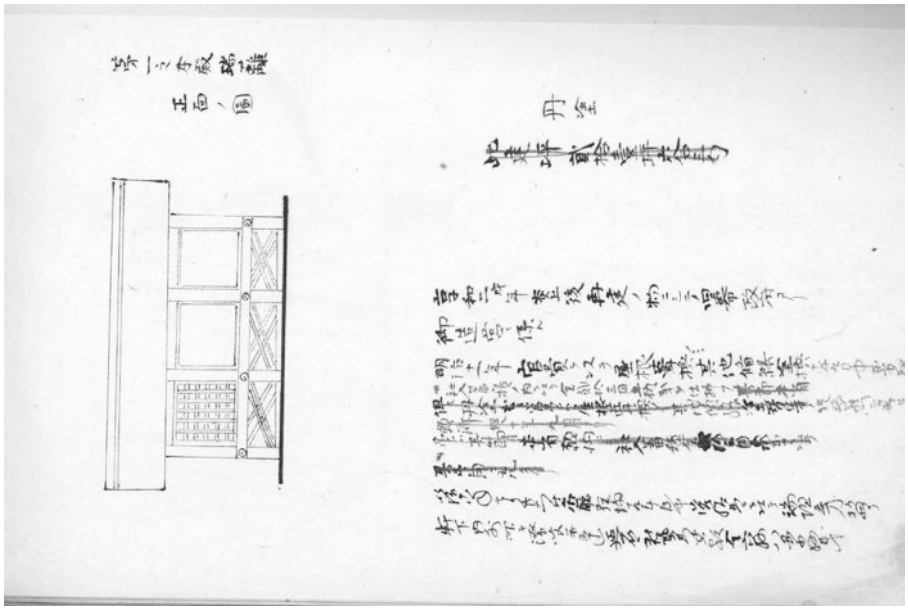
享和二戊年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル、明治十一年官費ヲ以テ屋根葺替
『八十年九月』
屋根裏及柱回リ塗換、但シ丹塗『中本省願済ノ上社入』
『但し瑞籬門二ケ所』
『蓄積金廿三円五拾銭支払金ノ内手当蓄不及瑞籬共』

（31）　全　妻ノ図



同平面

（32）第一之本殿瑞籬　正面ノ図
丹塗



~~此建坪　弐拾壱坪六合三勺~~

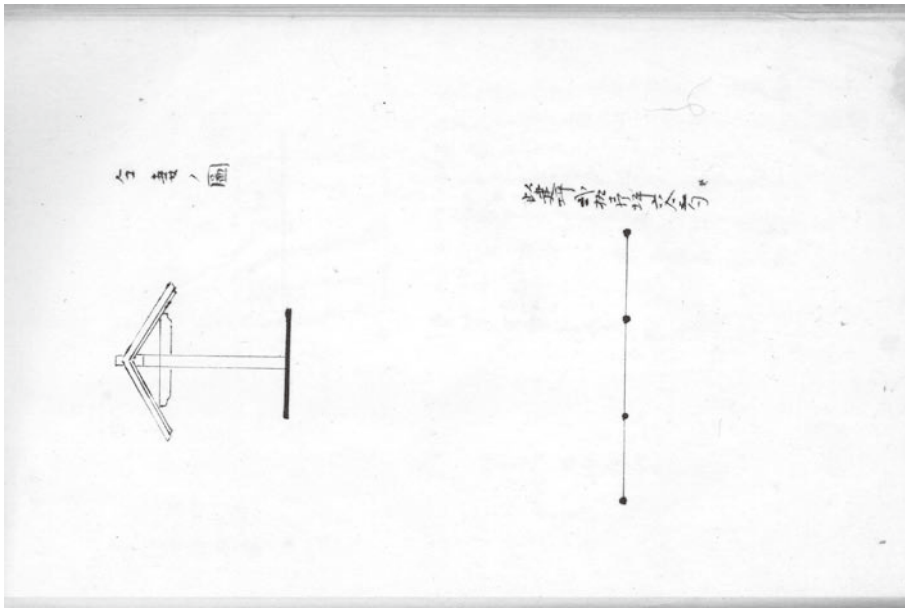
享和二戊年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル

『ノ〃』

明治十一年官費ヲ以テ屋根葺換、其他修繕塗換『十年九月中本省願済』
『□社入蓄積ノ内ヲ以テ金弐拾三円五拾銭ヲ支払フ兼節本省』
~~但シ丹塗、元ヨリ官費ヲ屋根葺換ノミ、其他修繕塗替等ヲ~~『但シ瑞籬門二ヶ所共』
『願済、但シ十年九月十日』
~~費ヲ其節本省願済ヲ社入蓄積金弐拾三円五拾銭ヲ以テ~~
~~其費用ヲ充タリ~~

明治十八年七月廿二日付府庁願済、十九年度中営繕費ヲ以テ瑞垣三方相廻リ
軒下内外叩キ漆喰井口延石新築費、其額金六拾八円五拾銭

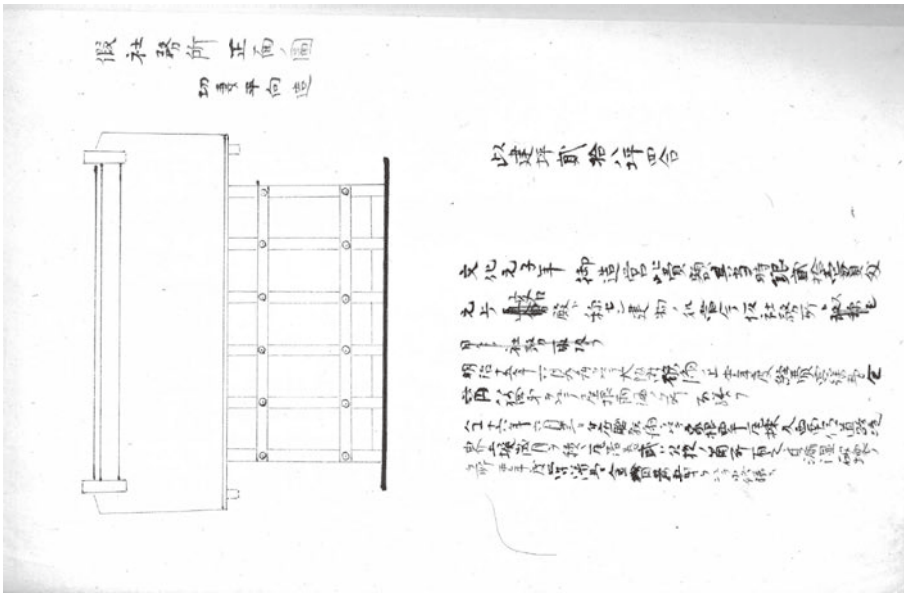
（33）　全　妻ノ図



此建坪　弐拾壱坪六合三勺

（34）仮社務所　正面ノ図

切妻平向造



此建坪　弐拾八坪四合

文化元子年御造営、此費額其当時銀弐拾壱貫匁

元上ノ直殿ト称セシ建物ノ処当今仮社務所ト改称シ

~~申々ノ社務取扱ヲ~~

明治十五年六月九日附ヲ以テ大阪府願済ノ上本年度経費営繕費金

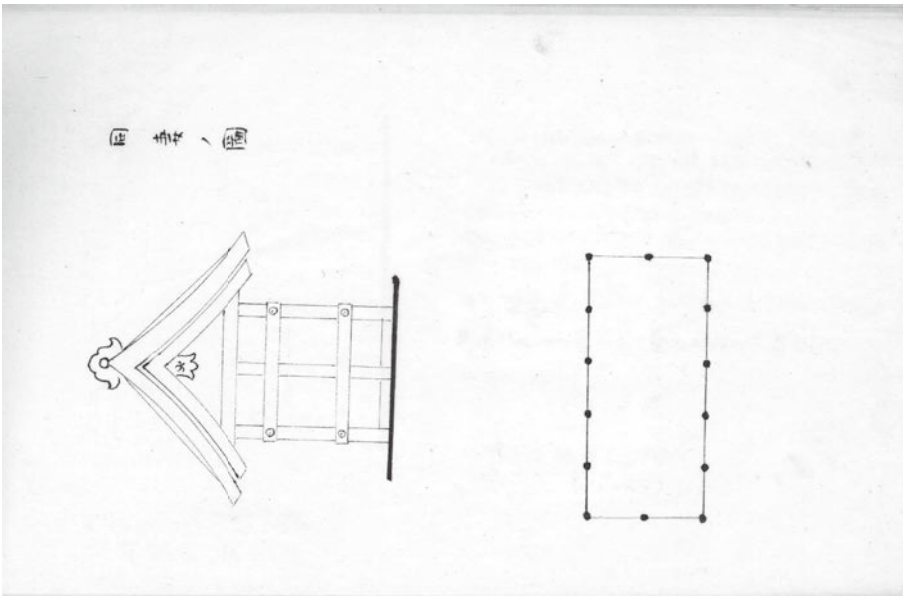
六円八拾四銭ヲ以テ屋根雨漏ノ ケ所取繕フ

仝十六年六月十二日付府庁願済ヲ以テ家根西手瓦棟及西南側道路境

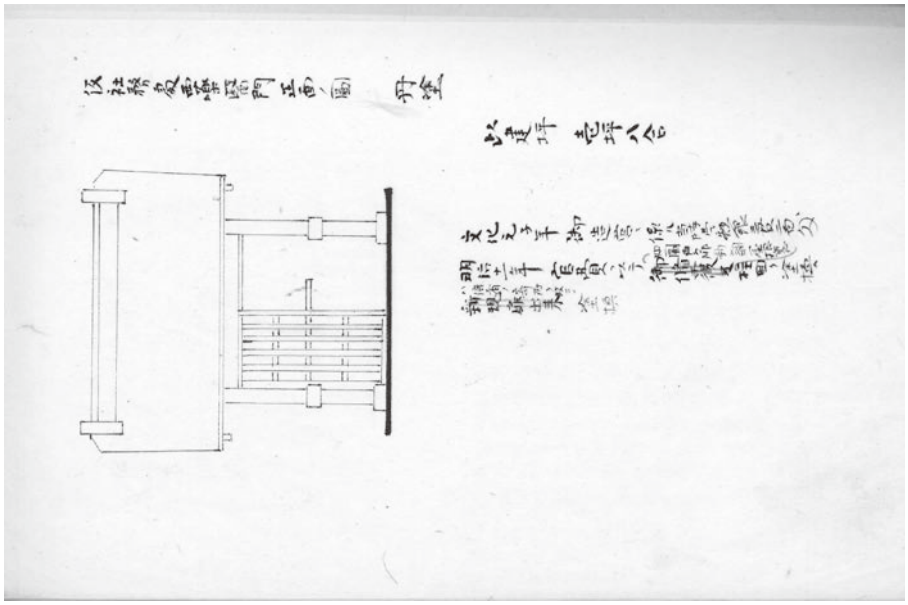
界土塀、歳月ヲ積ミ瓦落失ハセ、或ハ欠損ノ箇所有之、其漏湿破壊ノ

ケ所本年度営繕費金拾円五拾五銭ヲ以テ小修繕ス

（35）　同　妻ノ図



（36）仮社務処西薬医門　正面ノ図
丹塗



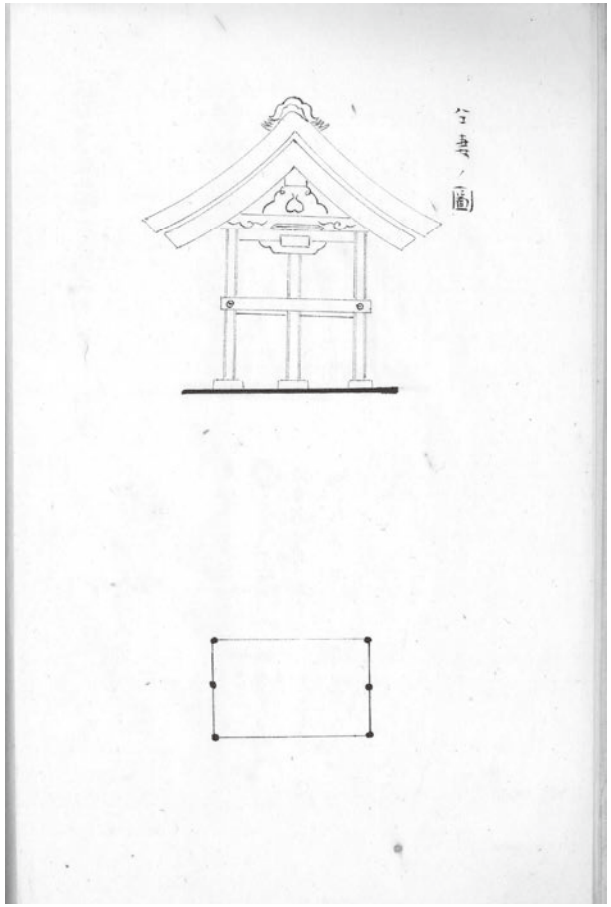
此建坪　壱坪八合

文化元子年御造営ニ係ル、当時費額銀三貫二百匁

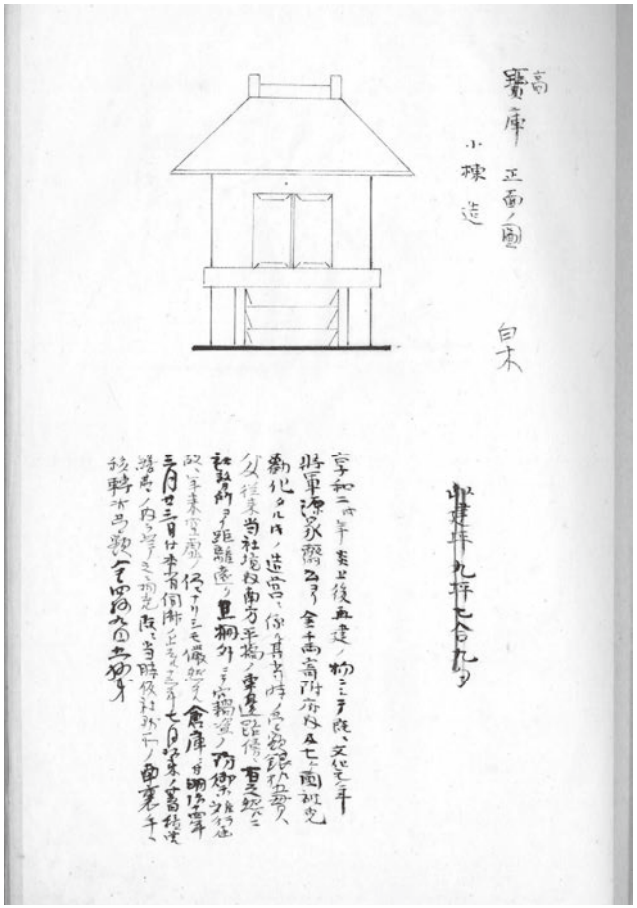
明治十一年官費ヲ以テ御修繕及柱回リ塗換（如図両扉新調、屋根葺）

（信者ノ寄附ヲ以テ）新規扉出来塗換

（37）全妻ノ図



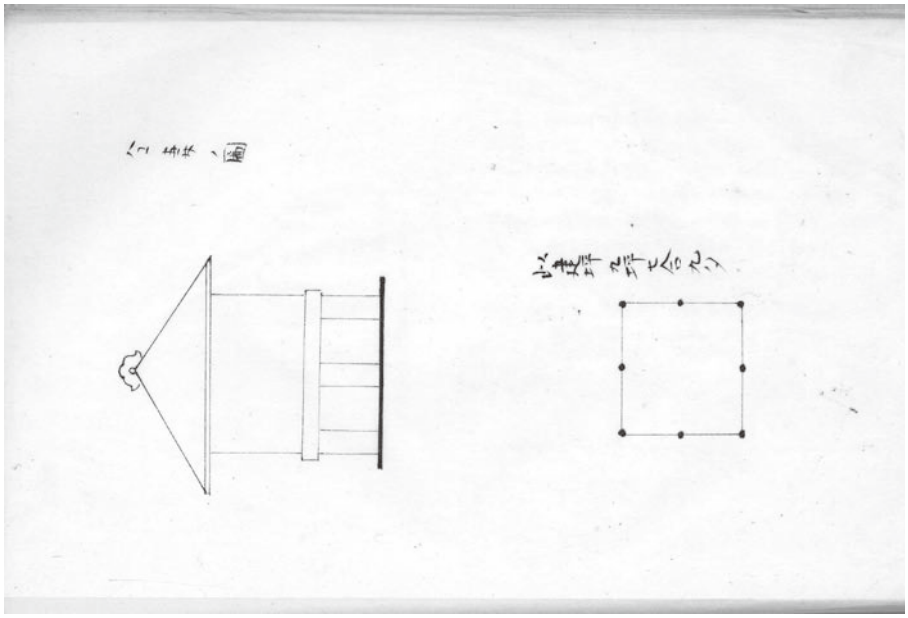
（38）高宝庫　正面ノ図
小棟造、白木



此建坪　九坪七合九勺

享和二戊年炎上後再建ノ物ニシテ既ニ文化元年
将軍源家斉公ヨリ金千両寄附、府内及七ヶ国被免
勧化タルトキノ造営ニ係ル、其当時ノ費額銀拾五貫
匁、従来当社境内南方平橋ノ東辺路傍ニ有之、然ルニ
社務所ヨリ距離遠ク、且柵外ニテ窃盗ノ防禦難行届、
故ニ年末空虚ノ儘ナリシモ、厳然タル倉庫ニ付、明治十四年
三月廿三日付本省伺済ノ上、去ル十三年七月以来ノ蓄積営
繕費ノ内ヲ以テ之ニ相充、既ニ当時仮社務所ノ南裏手ヘ
移転、其費額金四拾九円五拾銭

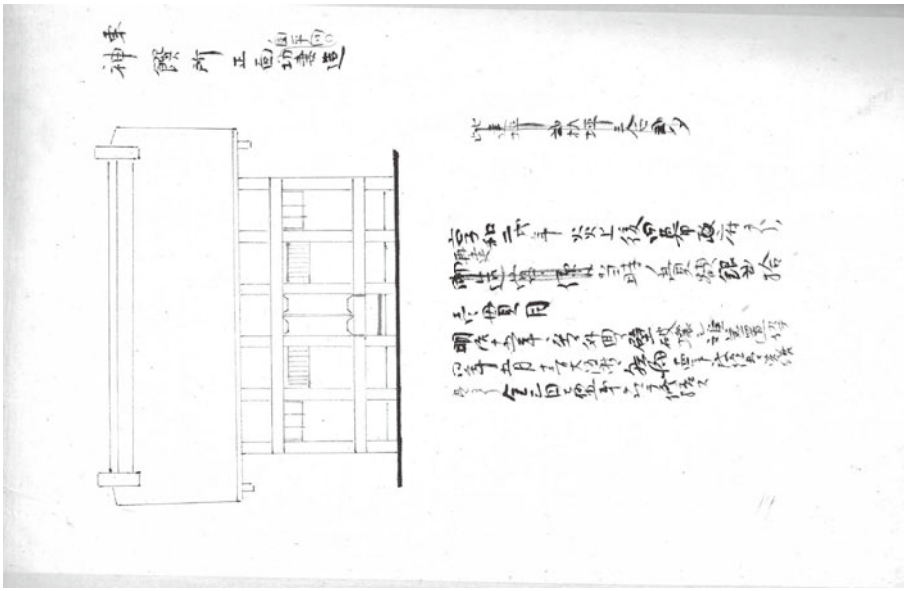
（39）　全　妻ノ図



此建坪　九坪七合九勺

（40）

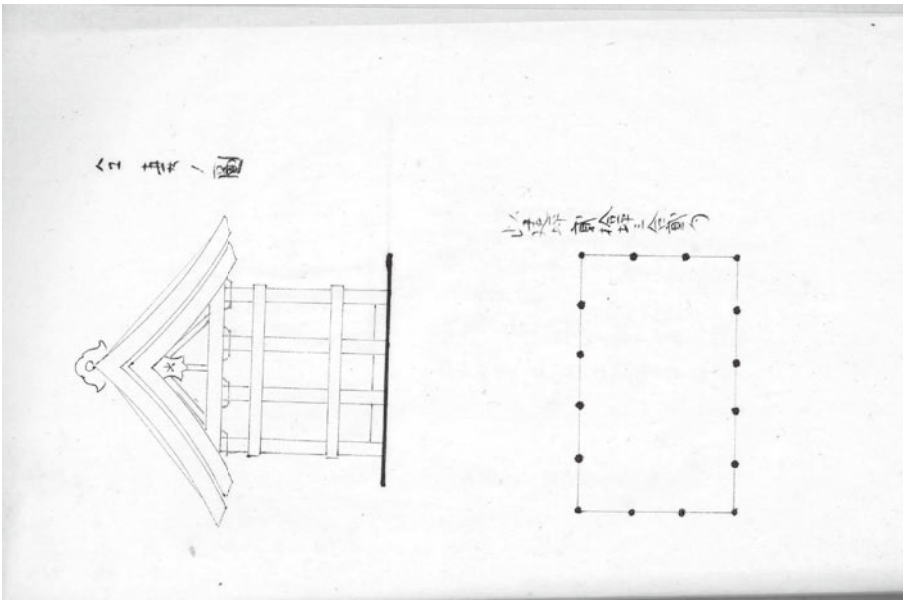
東神饌所　正面ノ図
平向切妻造



此建坪　弐拾坪壱合弐勺

享和二戊年炎上後旧幕政府ヨリノ
再建
御造営ニ係ル、当時ノ費額銀弐拾
壱貫目
明治十五年ニ至リ外回リ壁破壊シ難差置、仍テ
同年五月十三日大阪府ニ願済、十四年度経費営繕
費ヨリ金三円七拾五銭ヲ以テ修繕ス

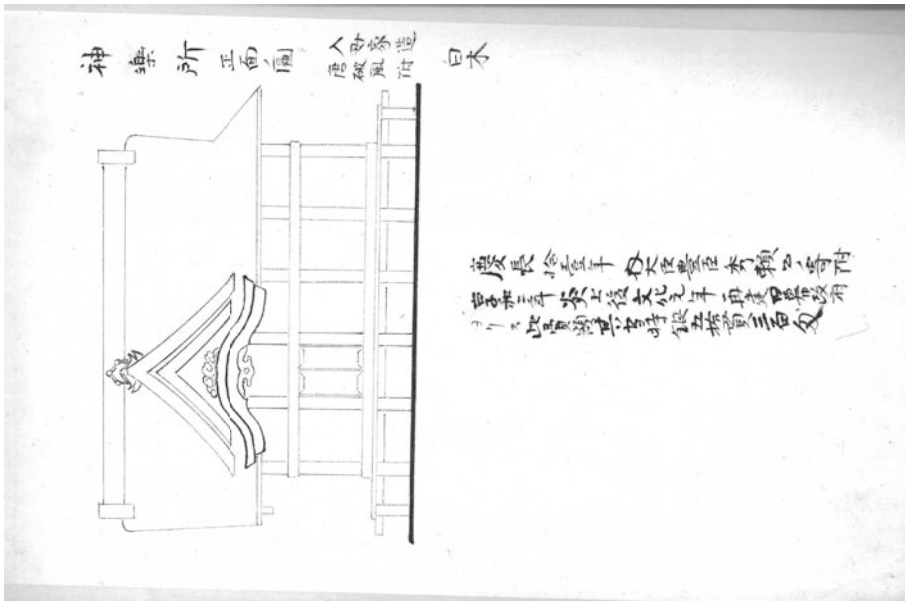
（41）　全　妻ノ図



此建坪　弐拾坪三合弐勺

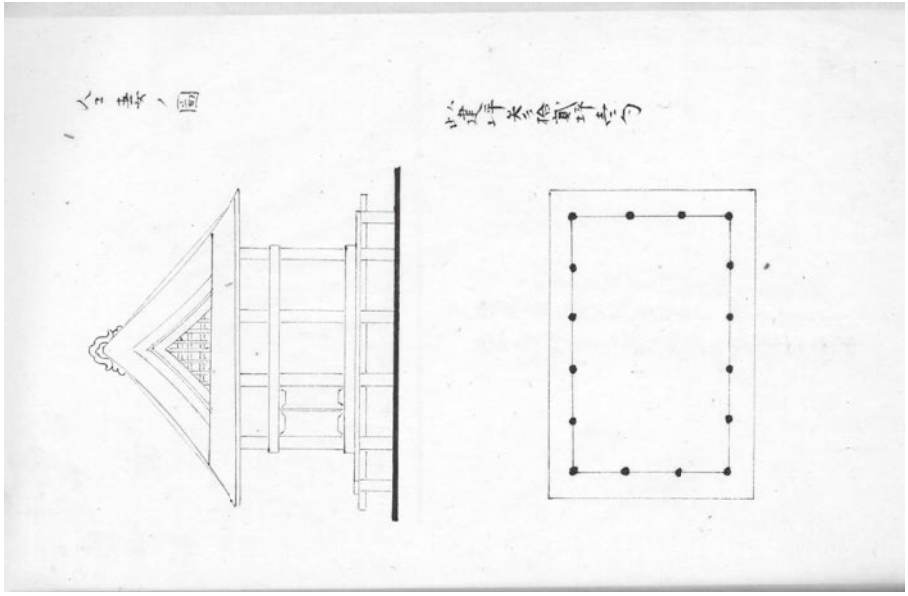
（42）

神楽所　正面ノ図
入母家造、唐破風附、白木



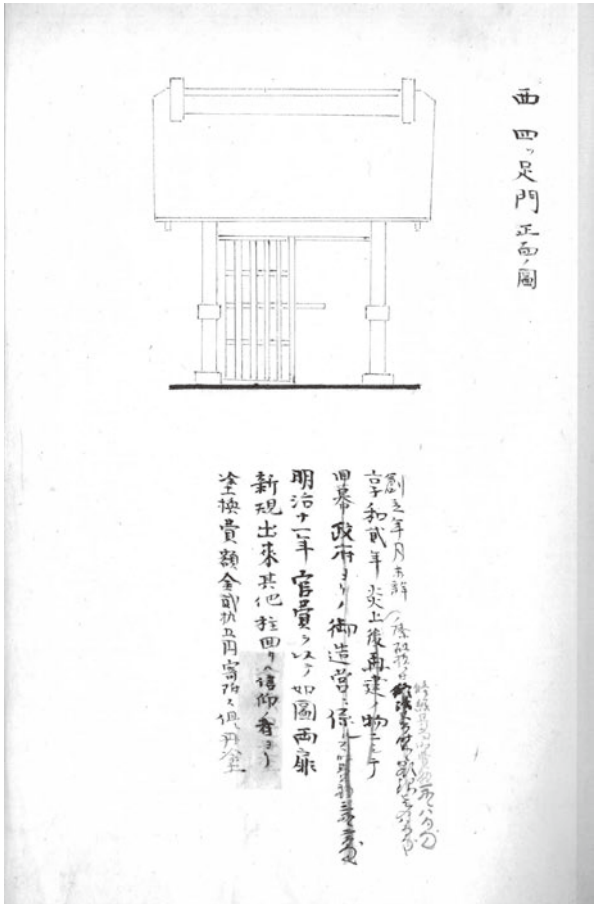
慶長拾壱年内大臣豊臣秀頼公ノ寄附
享和二年炎上後文化元年再建、旧幕政府
ヨリス、此費額其当時銀五拾貫三百匁

（43）　全　妻ノ図



此建坪　参拾弐坪壱勺

（44）西四ツ足門　正面ノ図



創立年月未詳

『修繕、其当時費額一貫八百匁』

享和弐年炎上後再建ノ物ニシテ

ノ際破損ニ付修繕費当時費額銀壱貫八百匁

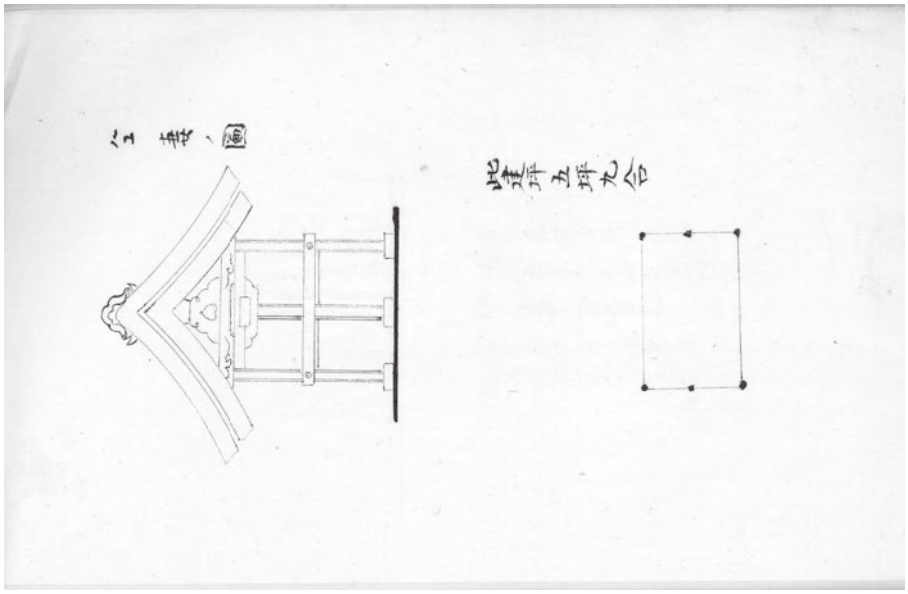
旧幕政府ヨリノ御造営ニ係ル、当時費額三貫二百匁

明治十一年官費ヲ以テ如図両扉

新規出来、其他柱回リハ信仰ノ者ヨリ

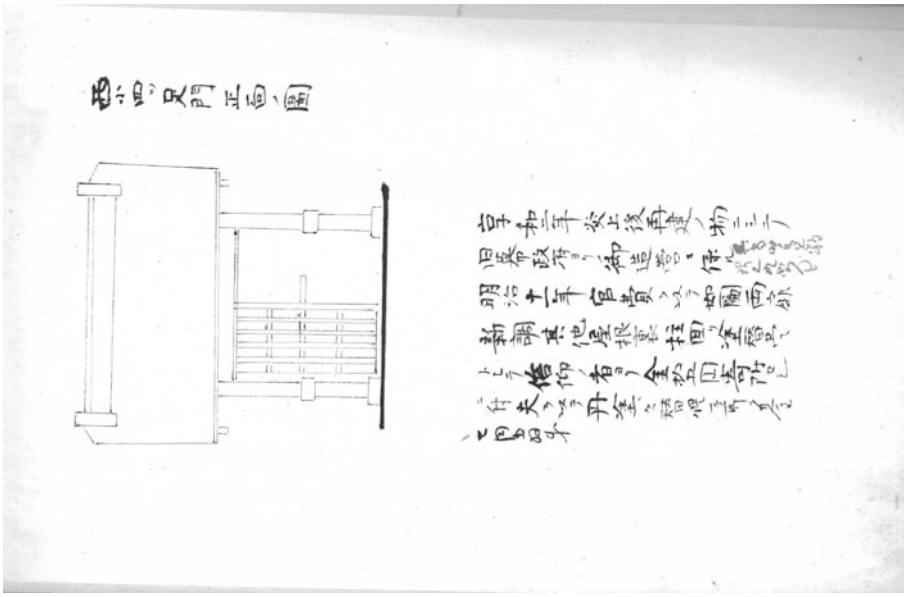
塗換費額金弐拾五円寄附ス、但シ丹塗

（45）　全　妻ノ図



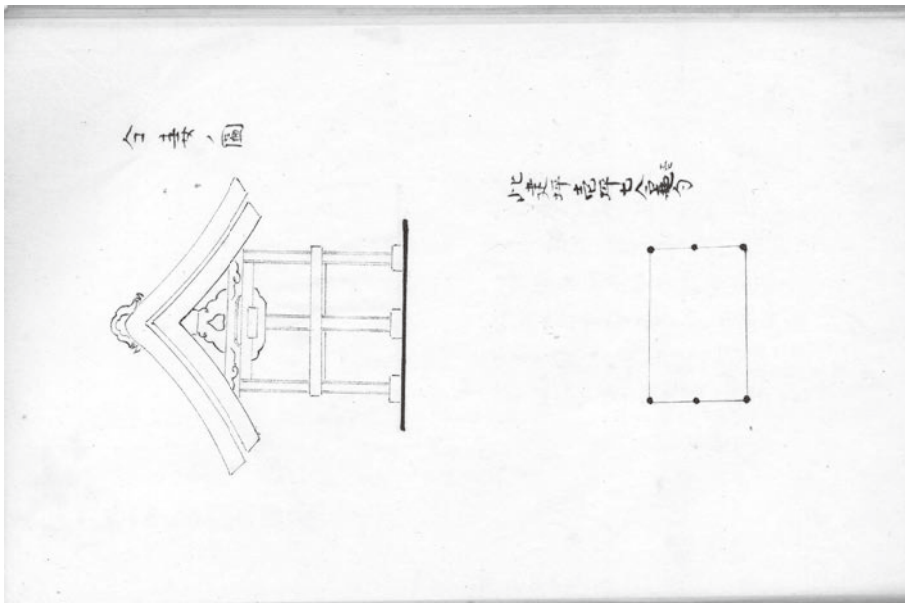
此建坪　五坪九合

（46）　西小四ツ足門　正面ノ図

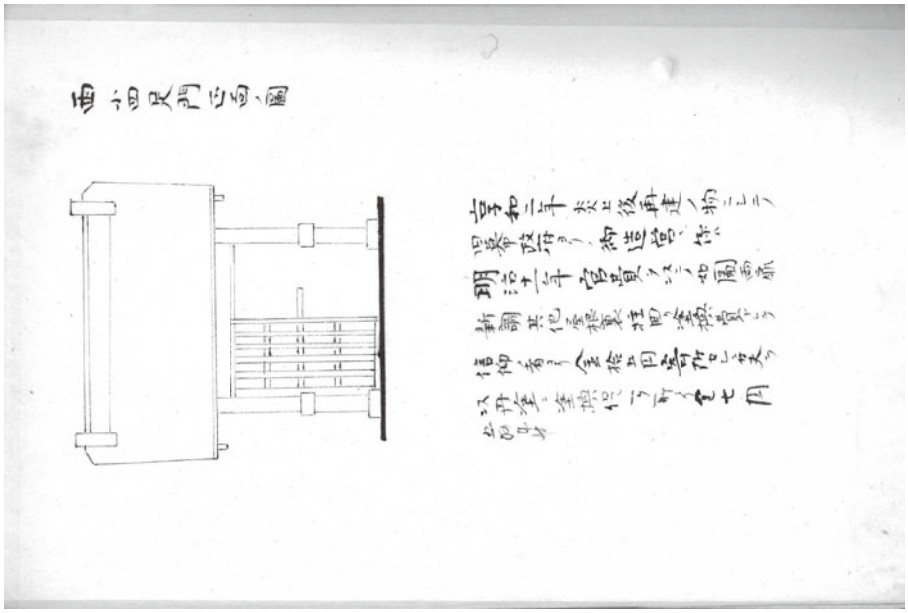


享和二年炎上後再建ノ物ニシテ
旧幕政府ヨリノ御造営ニ係ル『其当時ノ費額銀三貫弐百匁』
明治十一年官費ヲ以テ如図両扉
新調、其他屋根裏柱回リ塗替費
トシテ信仰ノ者ヨリ金拾五円寄附セシ
ニ付、夫ヲ以テ丹塗ニ々替、但シ一ケ所ニ付金
七円五拾銭

（47）　全　妻ノ図

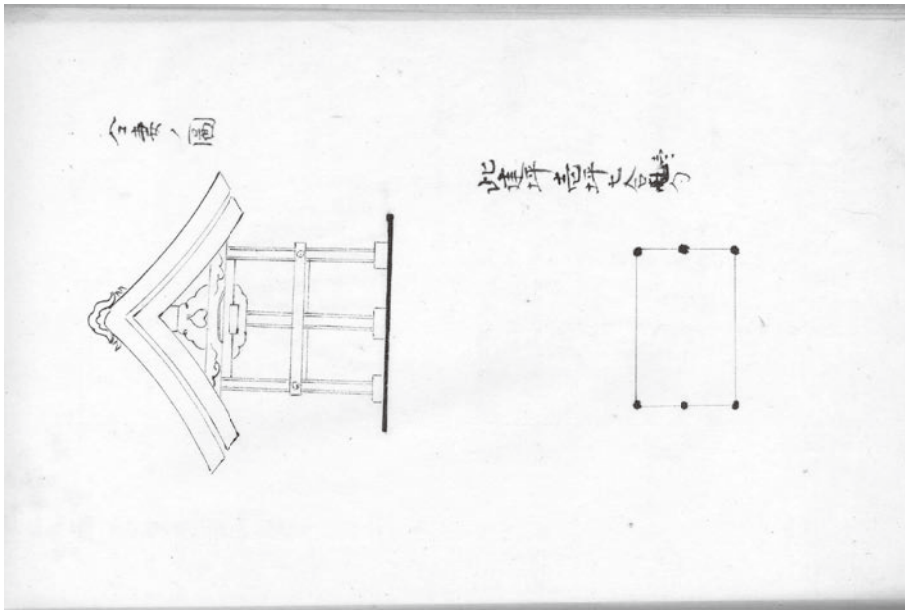


（48）　西小四足門　正面ノ図



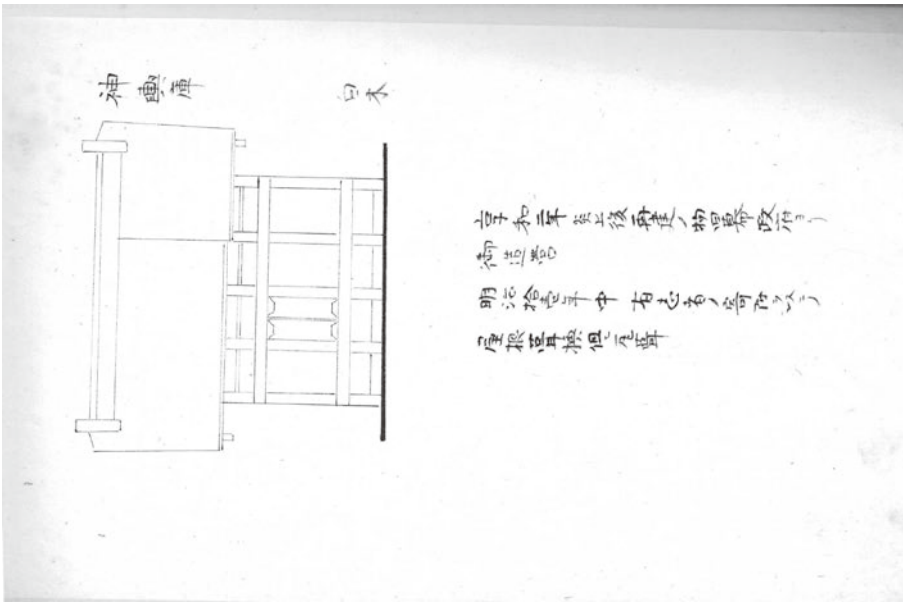
享和二年炎上後再建ノ物ニシテ
旧幕政府ヨリノ御造営ニ係ル
明治十一年官費ヲ以テ如図両扉
新調、其他屋根裏柱回リ塗換費トシテ
信仰ノ者ヨリ金拾五円寄附セシニ付、夫ヲ
以丹塗ニ塗換、但シ一ケ所ニ付金七円
五拾銭

（49）　全　妻ノ図



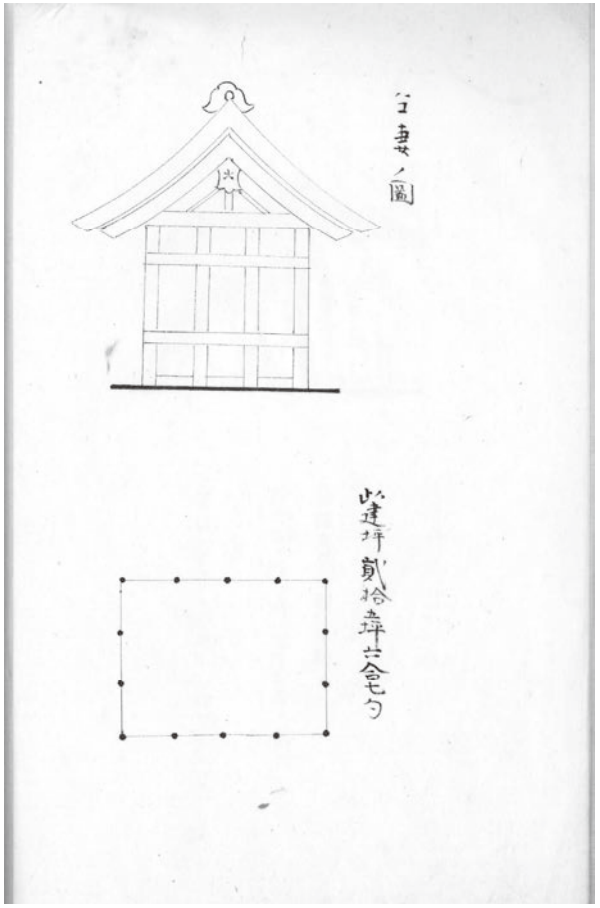
此建坪　壱坪七合壱勺

（50）神輿庫
白木



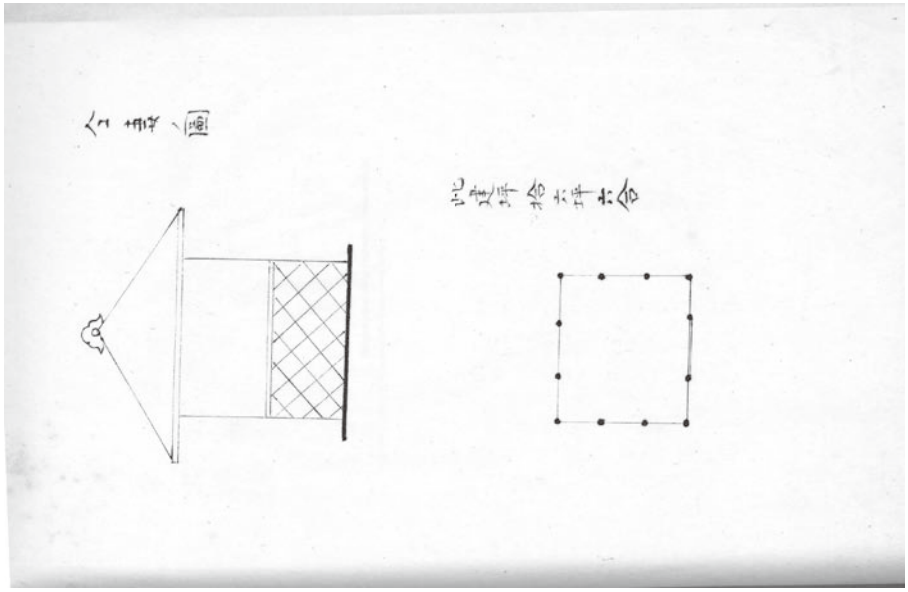
享和二年炎上後再建ノ物、旧幕政府ヨリ
御造営
明治拾壱年中有志者ノ寄附ヲ以テ
屋根葺換、但シ瓦葺

（51）全　妻ノ図



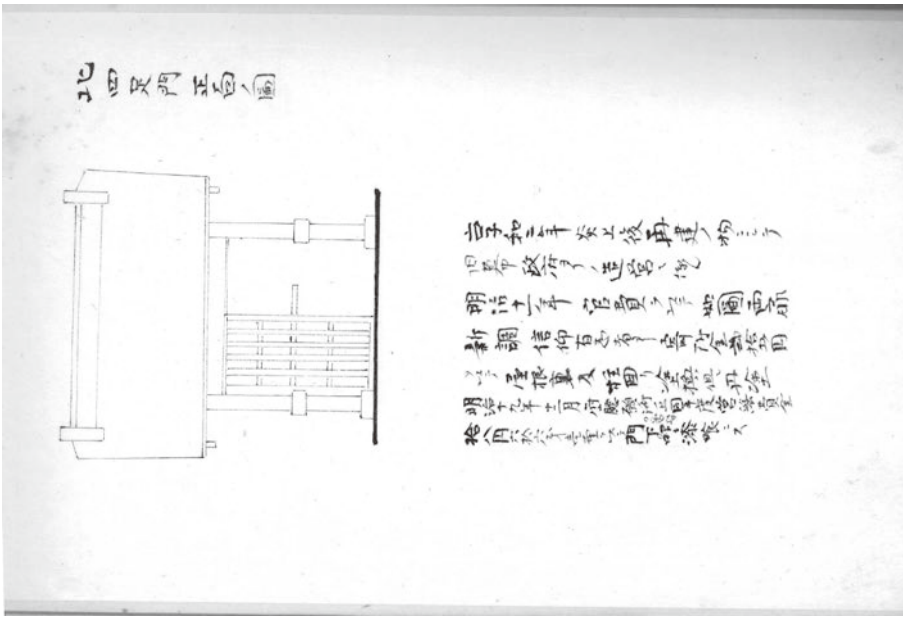
（52）文庫　正面ノ図
小棟造

（53）　全　妻ノ図



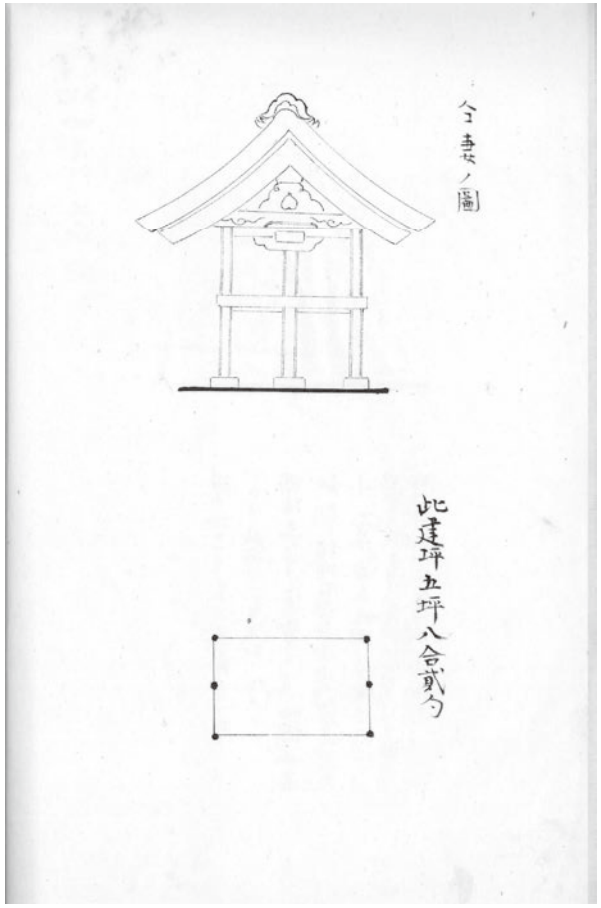
此建坪　拾六坪六合

（54）　北四足門　正面ノ図



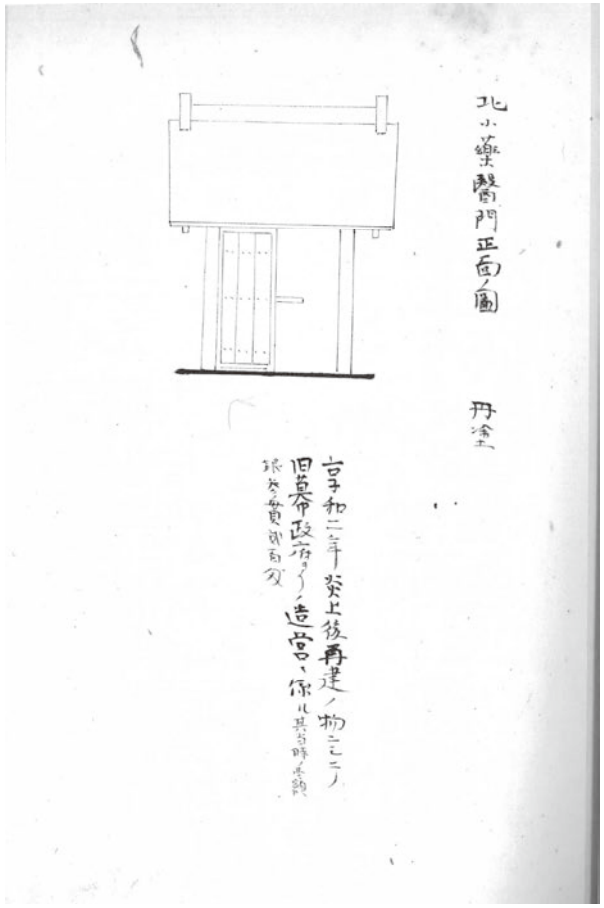
享和二年炎上後再建ノ物ニシテ
旧幕政府ヨリノ造営ニ係ル
明治十一年官費ヲ以テ如図両扉
新調、信仰有志者ヨリ寄附金弐拾五円
ヲ以テ屋根裏及柱回リ塗換、但シ丹塗
明治十九年十二月府庁願済ノ上、同年度営繕費金
拾八円六拾六銭壱厘ヲ以テ門下悉皆叩キ漆喰ニス

（55）全　妻ノ図



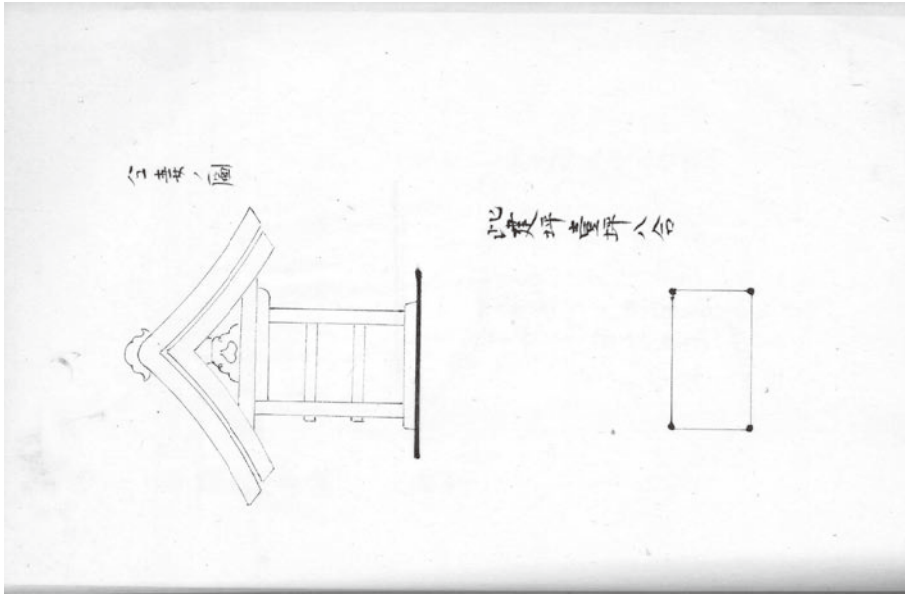
此建坪　五坪八合弐勺

（56）北小薬医門　正面ノ図
丹塗



享和二年炎上後再建ノ物ニシテ
旧幕政府ヨリノ造営ニ係ル、其当時ノ費額
銀参貫弐百匁

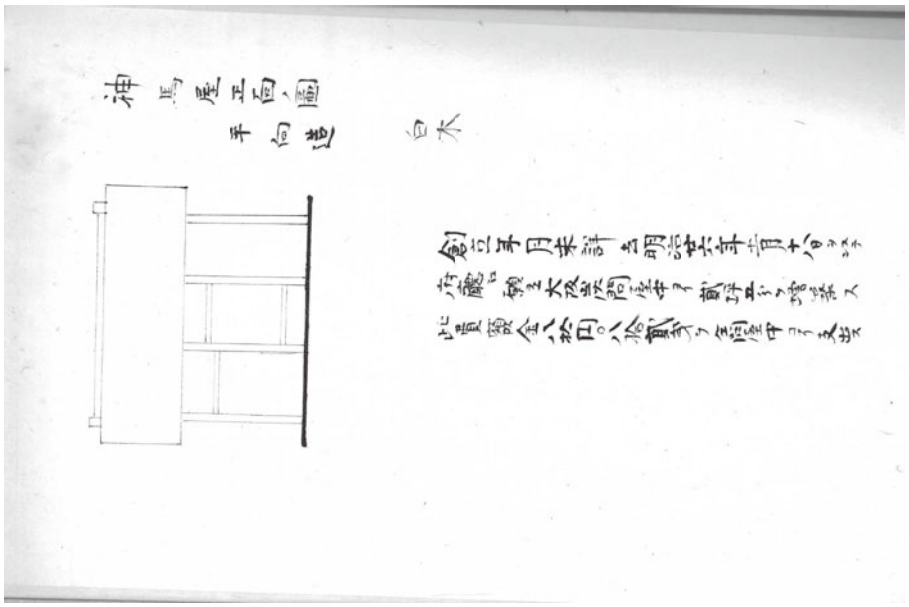
（57）　全　妻ノ図



此建坪　壱坪八合

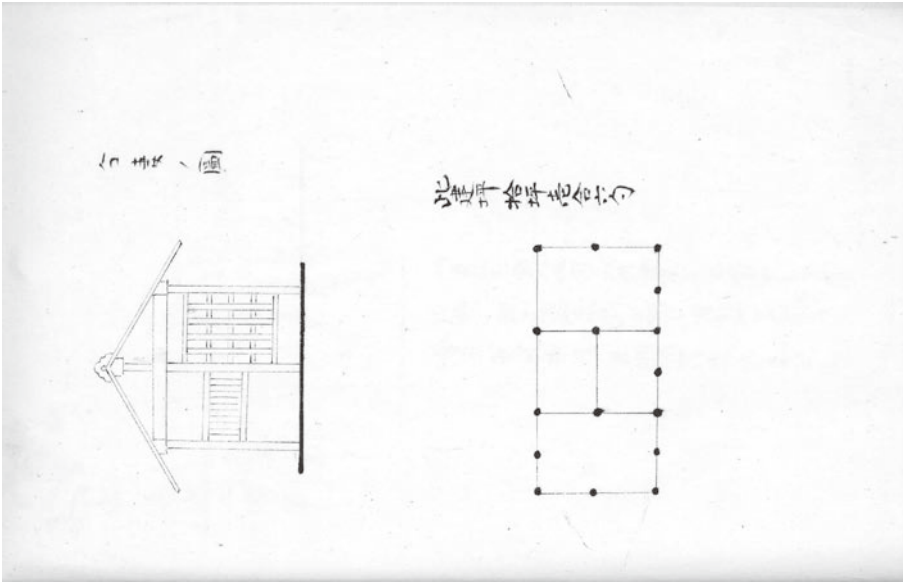
（58）

神馬屋　正面ノ図
平向造、白木



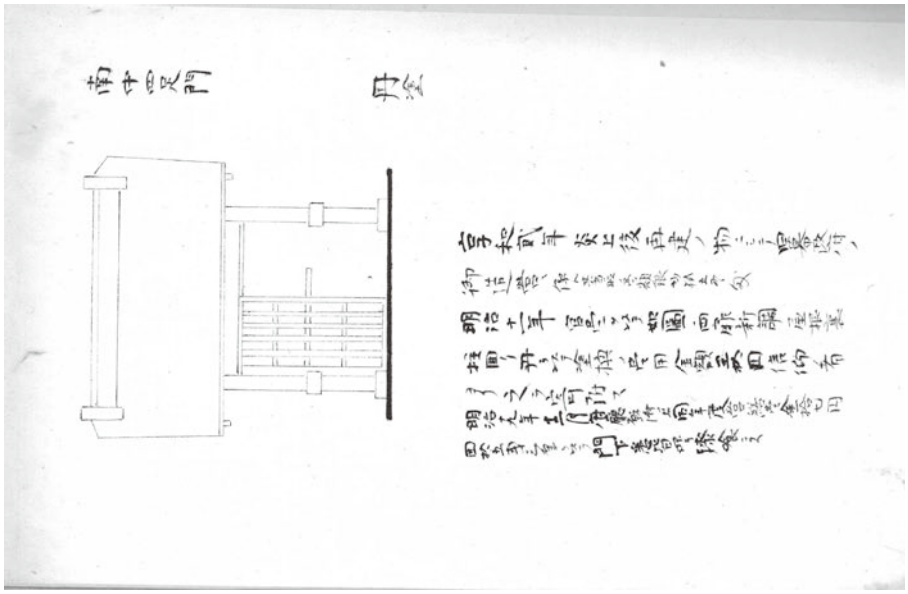
創立年月未詳、去明治廿六年十一月十八日ヲ以テ
府庁江願立、大阪炭問屋中ヨリ弐坪五合ヲ増築ス
此費額金八拾円八拾弐銭ヲ全問屋中ヨリ支出ス

（59）　全　妻ノ図



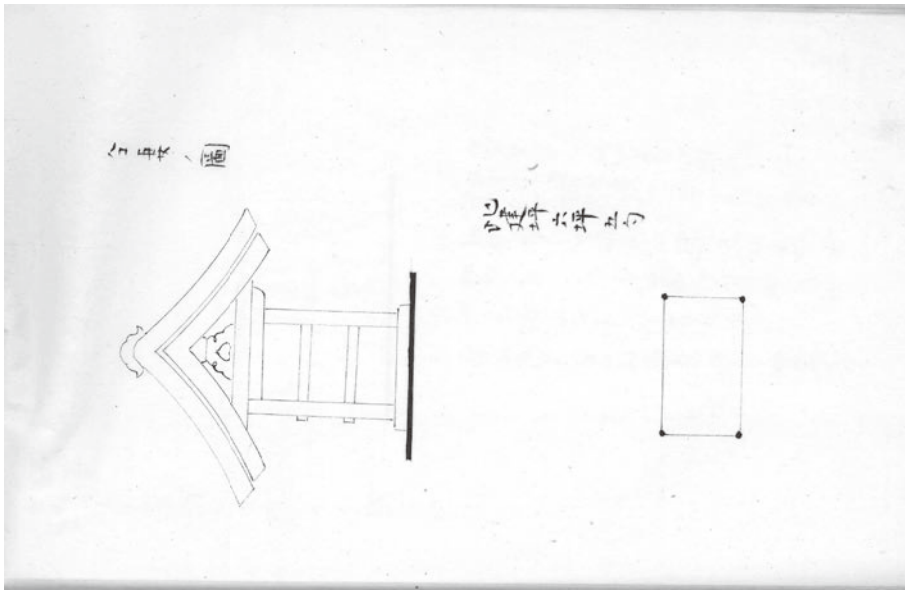
此建坪　拾坪壱合六勺

（60）南中四足門
丹塗



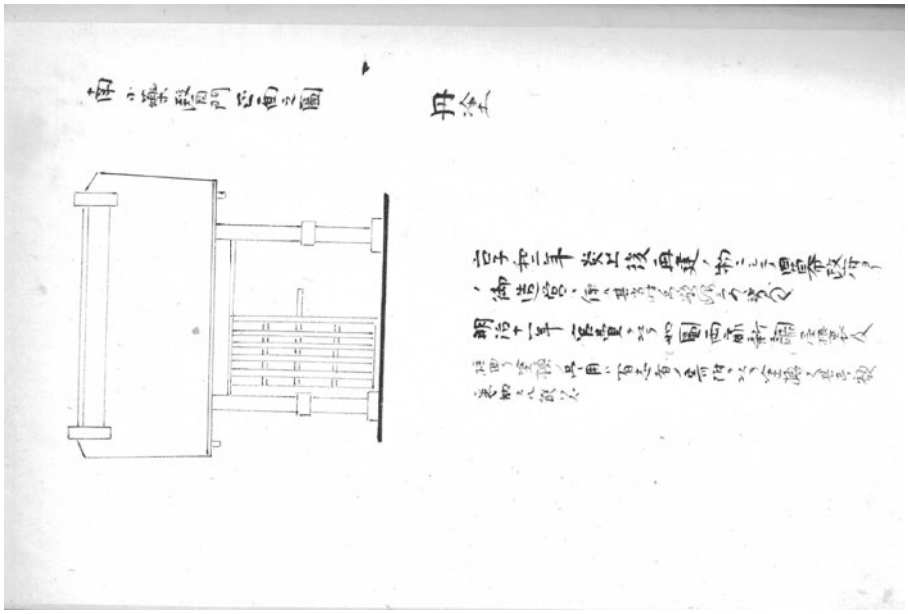
享和弐年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ノ
御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀弐拾五貫匁
明治十一年官費ヲ以テ如図両扉新調、屋根裏
柱回リ丹ヲ以テ塗換ノ費用金額三拾円、信仰ノ者
ヨリ之ヲ寄附ス
明治十九年十二月府庁願済ノ上、同年度営繕費金拾七円
四拾五銭三厘ヲ以テ門下悉皆叩キ漆喰ニス

（61）　全　妻ノ図



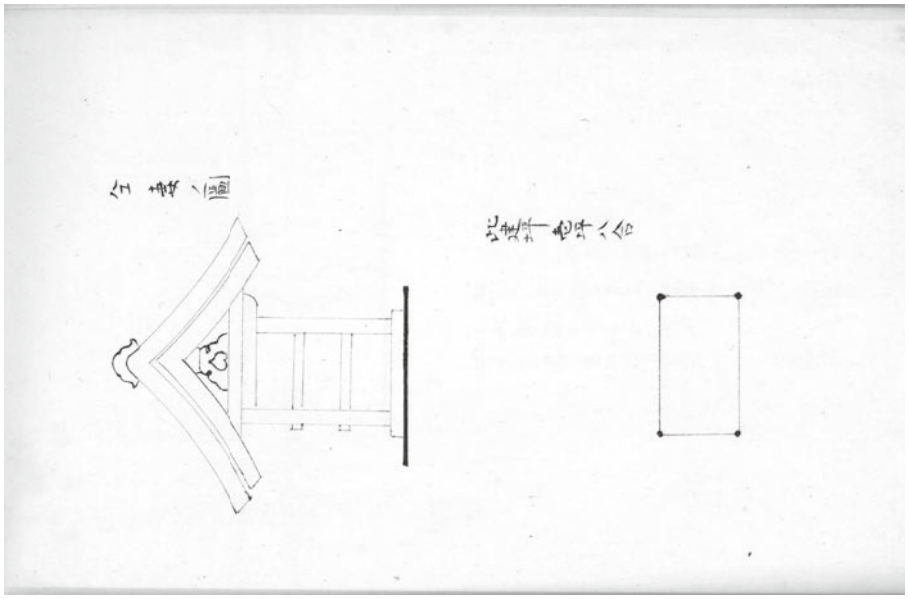
此建坪　六坪五勺

（62）　南小薬医門　正面之図
丹塗



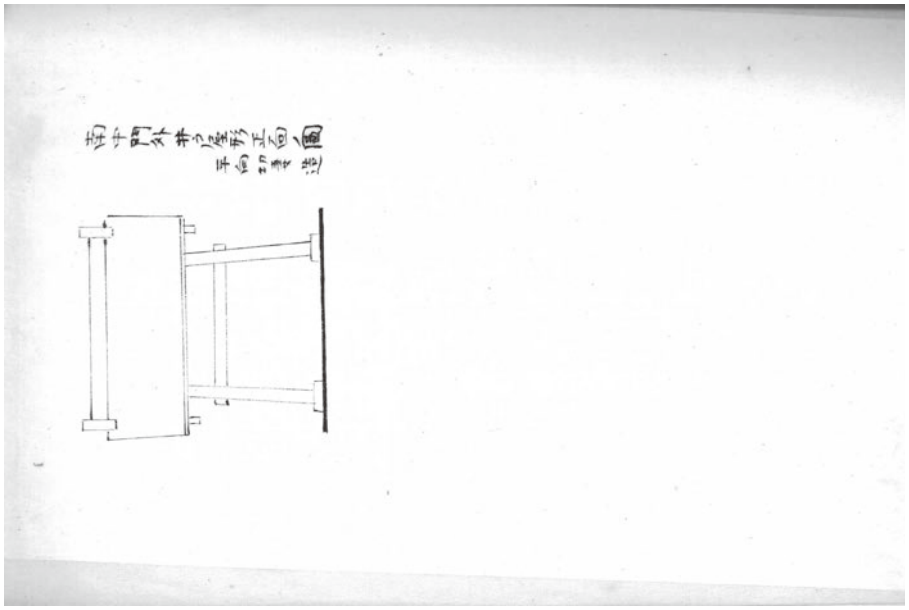
享和二年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府ヨリ
ノ御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀三貫弐百匁
明治十一年官費ヲ以テ如図両扉新調、屋根裏及
柱回リ塗換ノ費用ハ有志者ノ寄附ヲ以テ塗換ス、其費額
悉知スル能ハズ

（63）全　妻ノ図

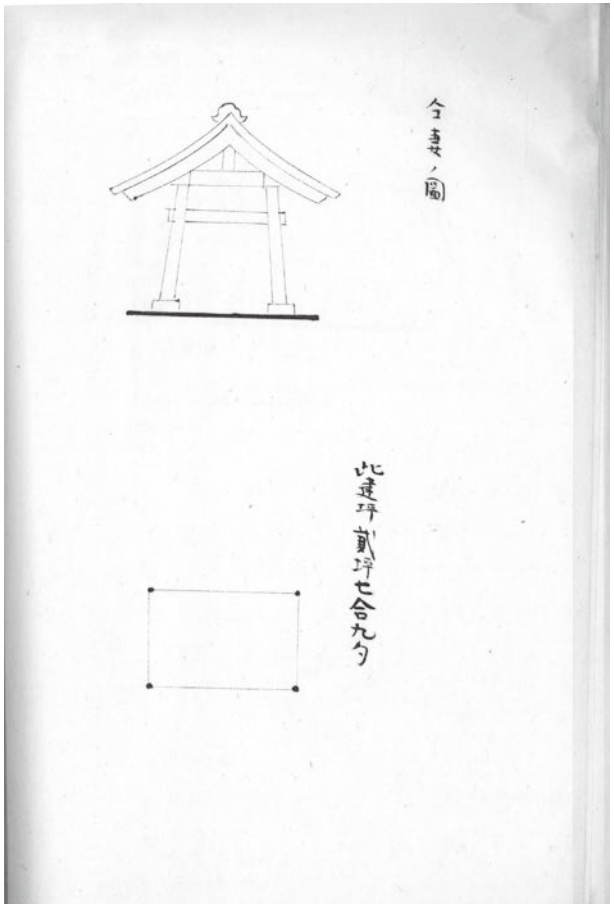


此建坪　壱坪八合

（64）南中門外井戸屋形　正面ノ図
平向切妻造

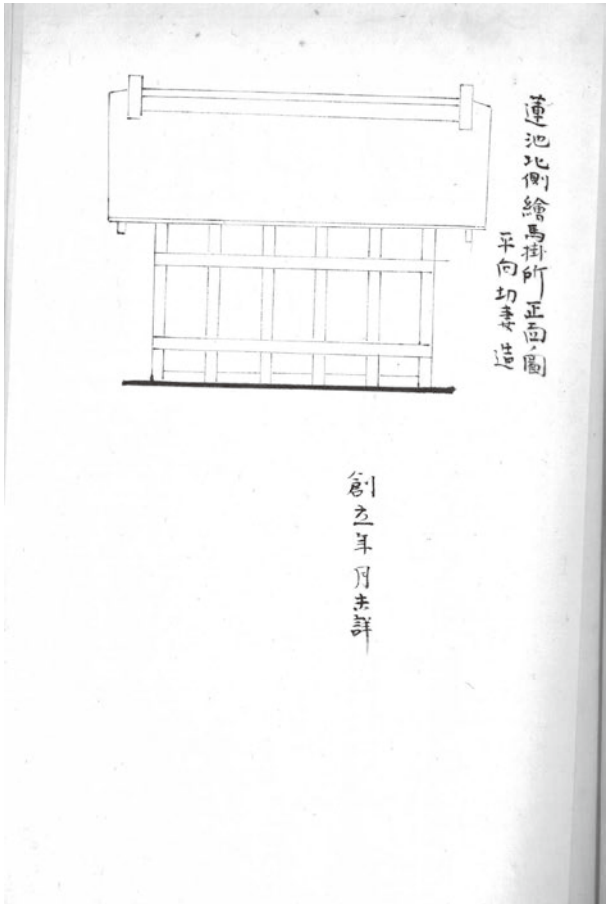


（65）全　妻ノ図



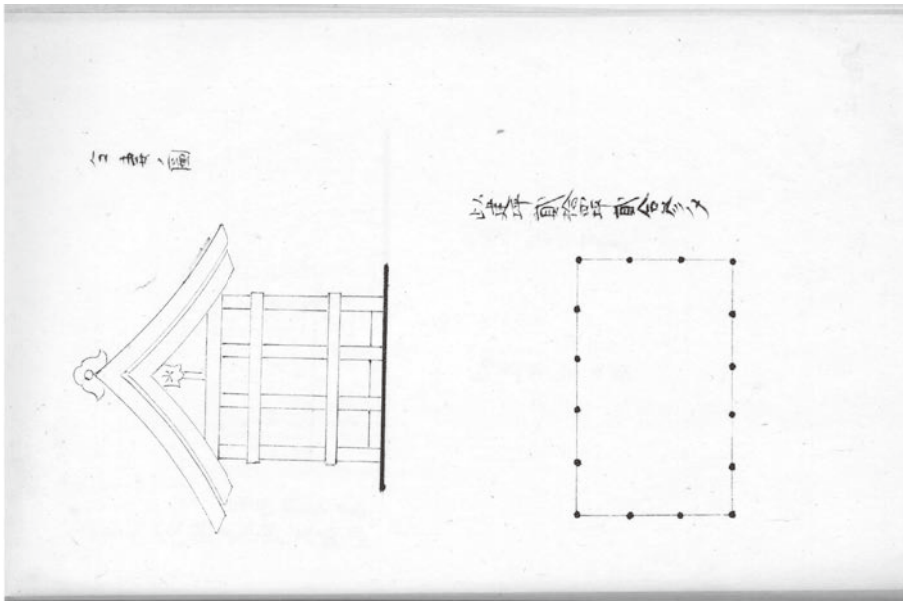
此建坪　弐坪七合九勺

（66）蓮池北側絵馬掛所　正面ノ図
平向切妻造



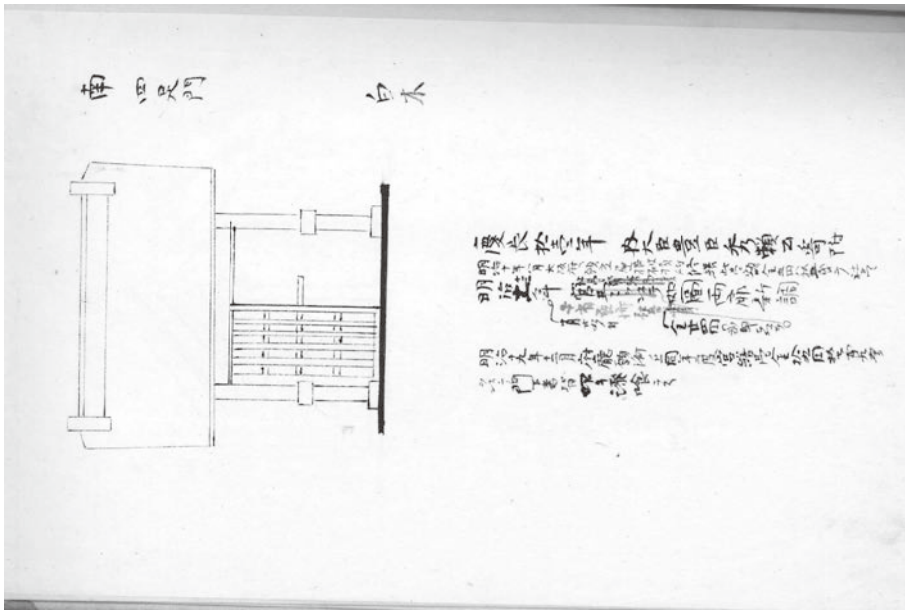
創立年月未詳

（67）　全　妻ノ図



此建坪　弐拾四坪弐合参勺

（68）南四足門
白木



慶長拾壱年内大臣豊臣秀頼公ノ寄附

明治十年八月大阪府ヘ願立、屋根破損所修繕、此費額金五円八拾五銭二厘社費

社費ヲ以繕費ヲ以

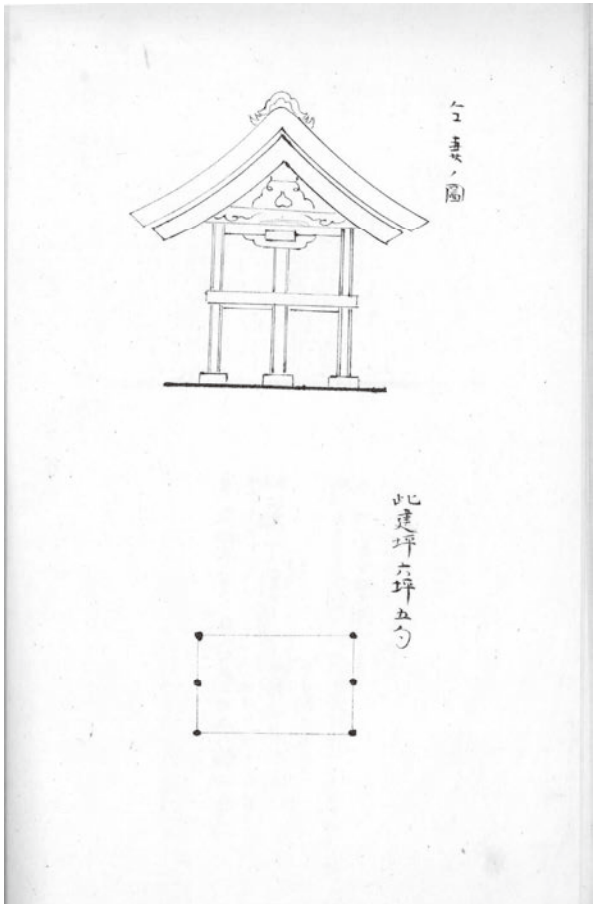
明治十三年十月廿九日付~~費ヲ以テ~~。如図両扉新調

『本省願済社費ヲ以テ』金廿四円弐銭ヲ以テ○

明治十九年十二月府庁願済上、同年度繕費金拾九円拾七銭九厘

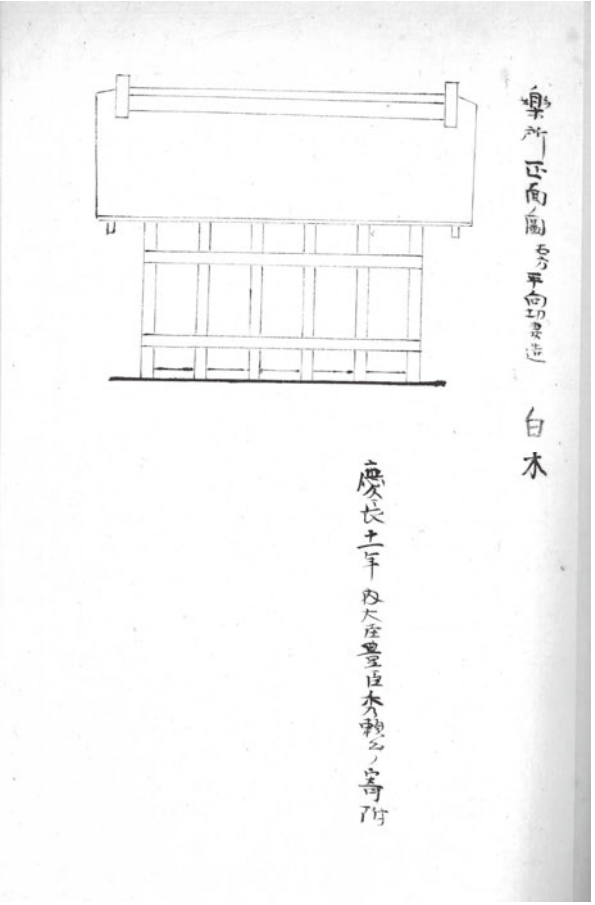
ヲ以テ門下悉皆叩キ漆喰ニス

（69）全　妻ノ図



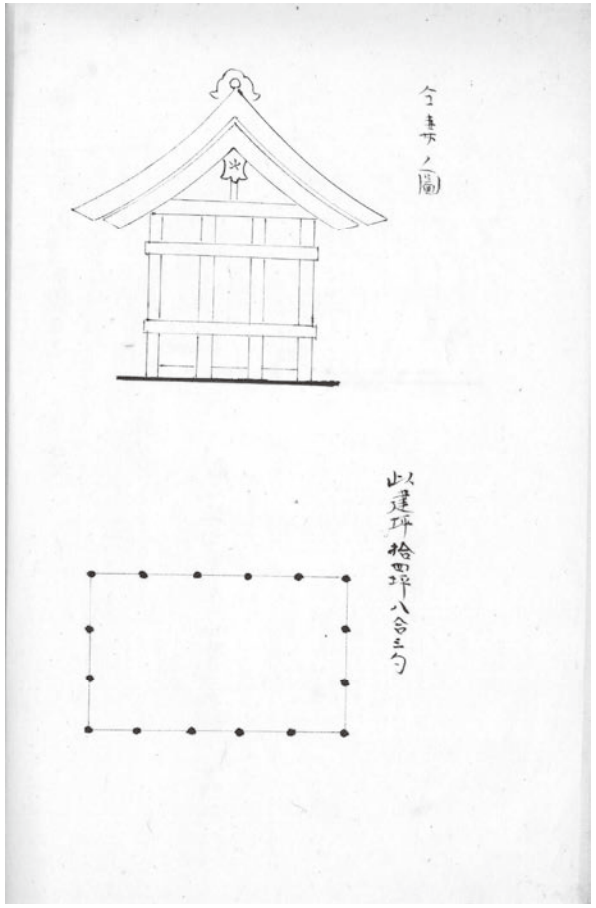
此建坪　六坪五勺

（70）楽所　正面ノ図右方
平向切妻造、白木



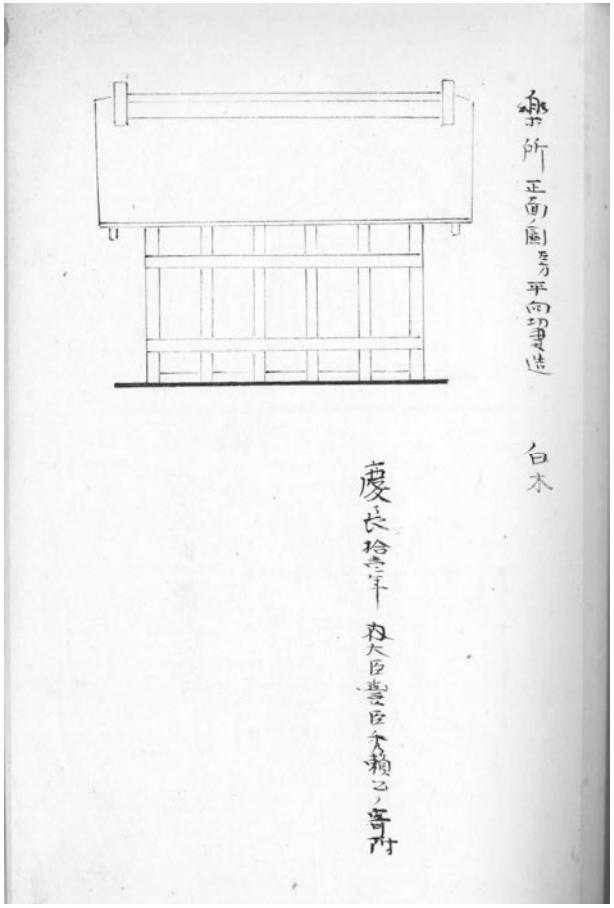
慶長十一年内大臣豊臣秀頼公ノ寄附

(71) 仝　妻ノ図



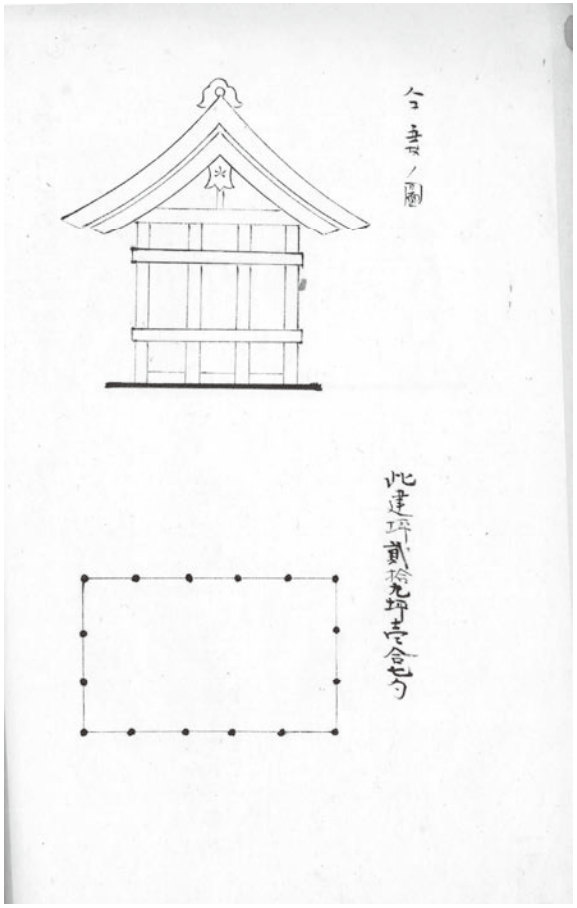
此建坪　拾四坪八合三勺

(72) 楽所　正面ノ図左方
平向切妻造、白木



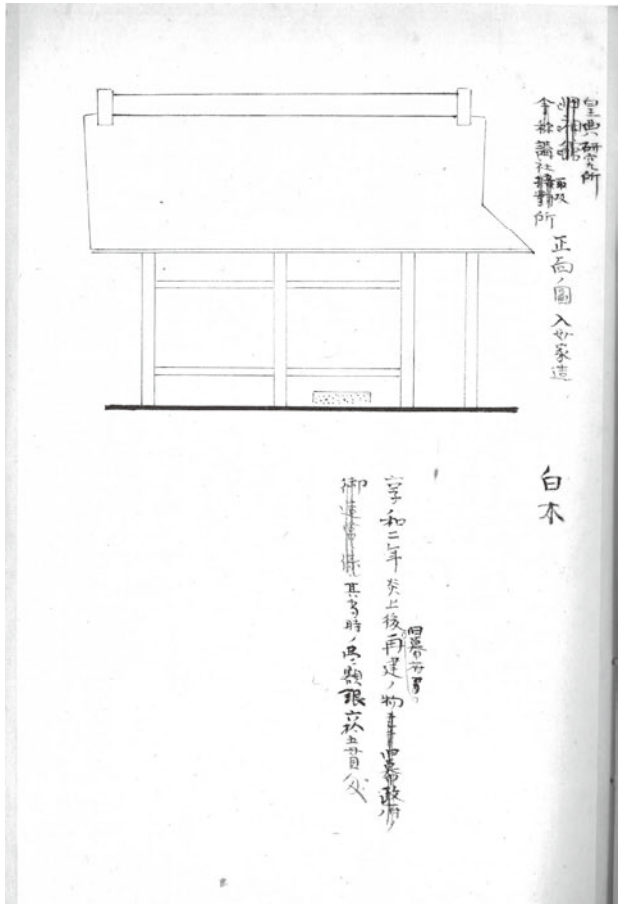
慶長拾壱年内大臣豊臣秀頼公ノ寄附

（73）全　妻ノ図



此建坪　弐拾九坪壱合七勺

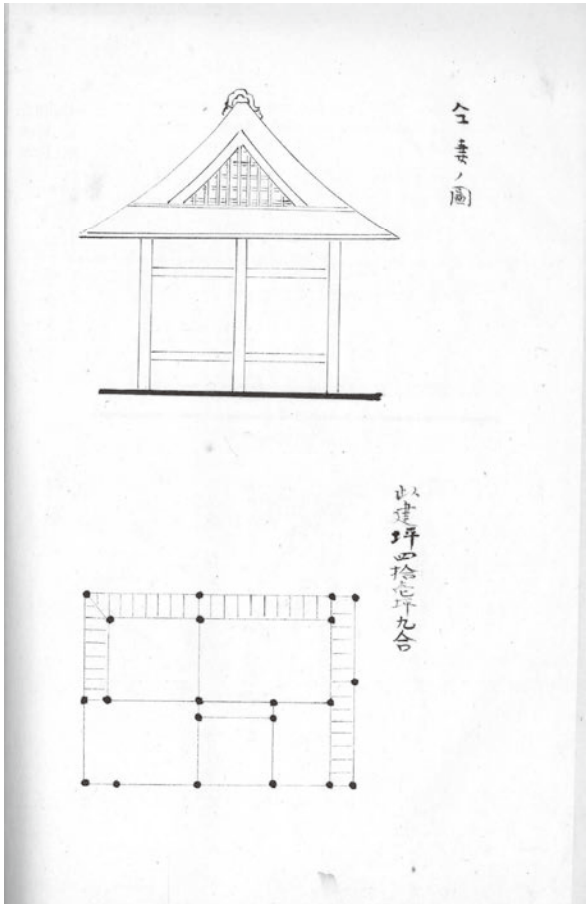
（74）皇典研究所　取扱
旧神館　今称講社接対所　正面ノ図
入母家造、白木



享和二年炎上後旧幕府ヨリ再建ノ物ニシテ旧幕政府ノ
御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀六拾五貫匁

（75）

仝　妻ノ図

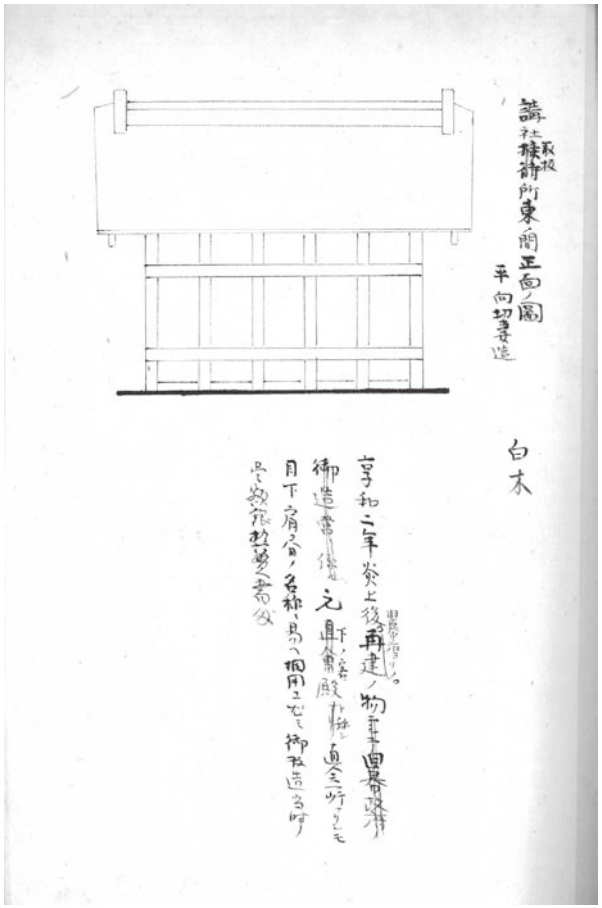


此建坪　四拾壱坪九合

（76）取扱

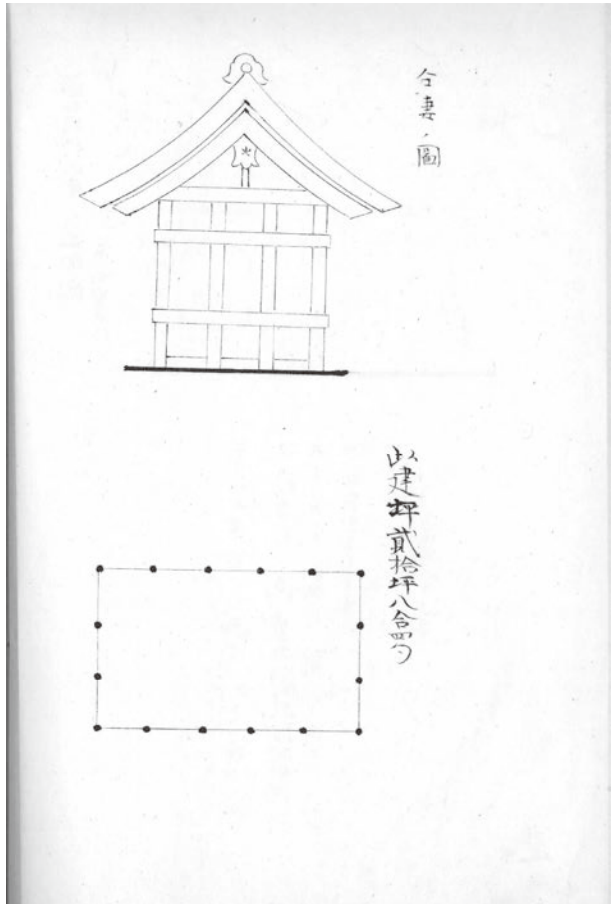
講社接待所東ノ間　正面ノ図

平向切妻造、白木



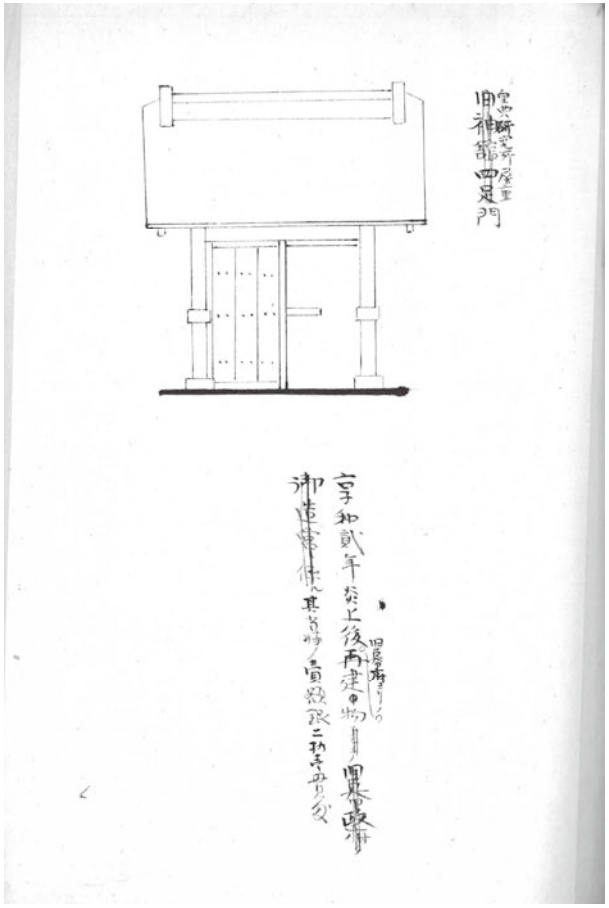
享和二年炎上後旧幕府ヨリノ再建ノ物ニシテ旧幕政府ノ御造営ニ係ル、元直会殿ナリ（下ノ客ト称シ）、直会一所ナリシモ目下肩書ノ名称ニ易ヘ相用ユ、尤モ御改造当時ノ費額銀拾六貫五百匁

（77）全　妻ノ図



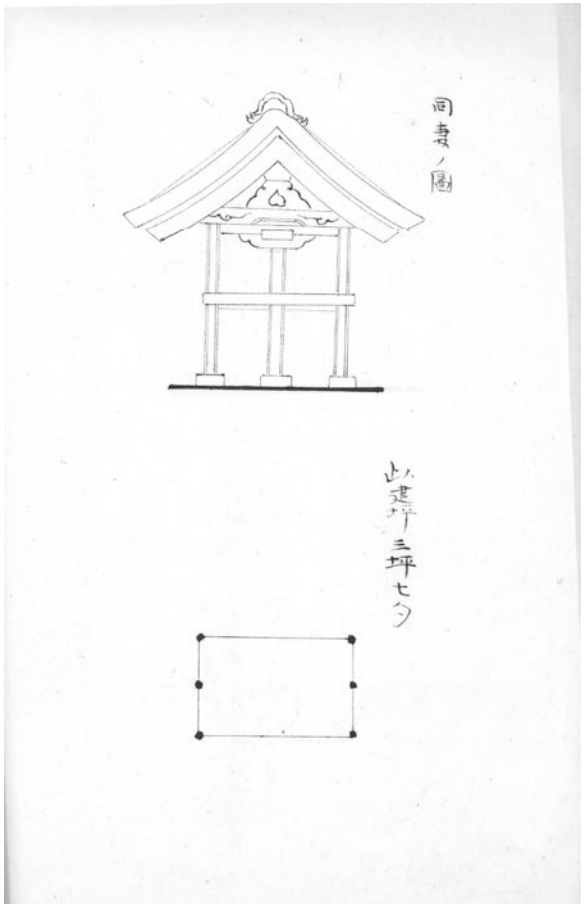
此建坪　貳拾坪八合四勺

（78）皇典研究所屏重
旧神館四足門



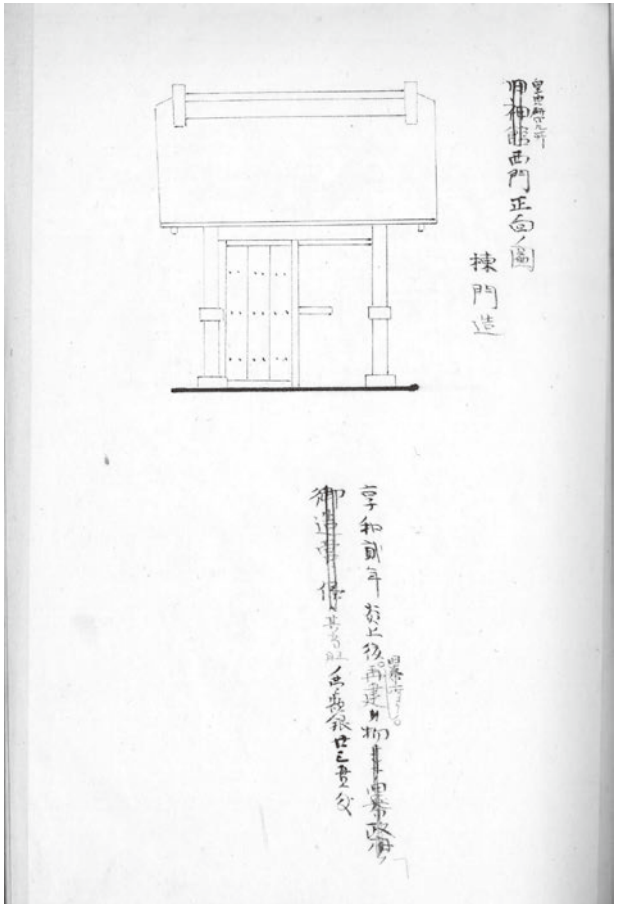
享和弐年炎上後旧幕府ヨリノ再建ノ物ニシテ旧幕政府ノ
御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀二拾壱貫匁

（79）同　妻ノ図



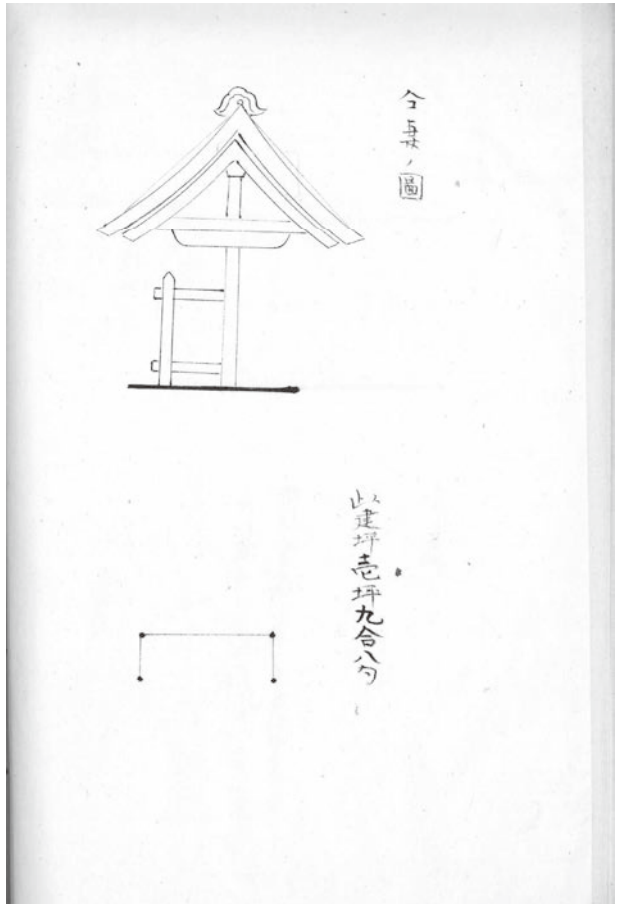
此建坪　三坪七勺

（80）皇典研究所旧神館西門　正面ノ図
棟門造



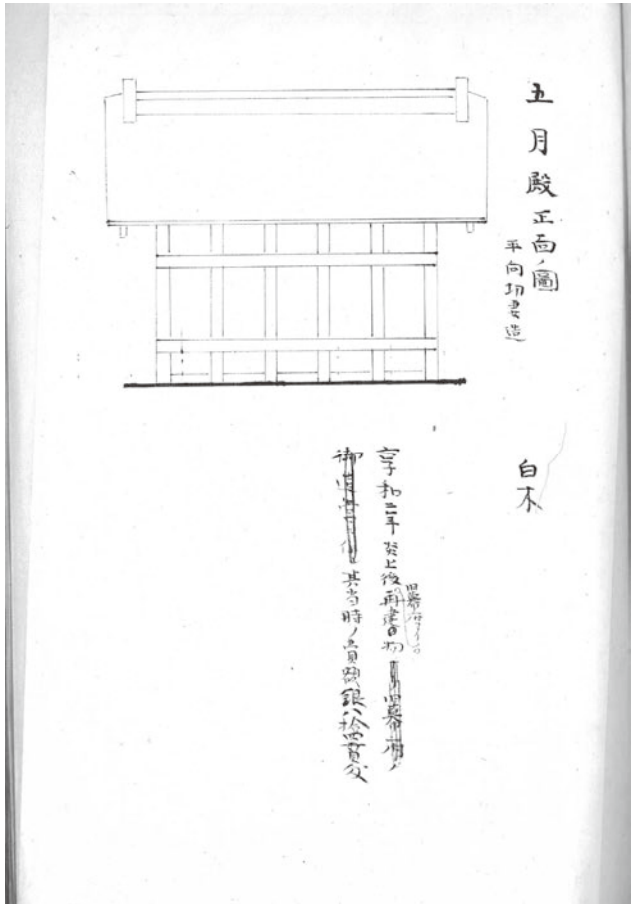
享和弐年炎上後旧幕府ヨリノ再建ノ物ニシテ旧幕政府ノ
御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀廿三貫匁

（81）全　妻ノ図



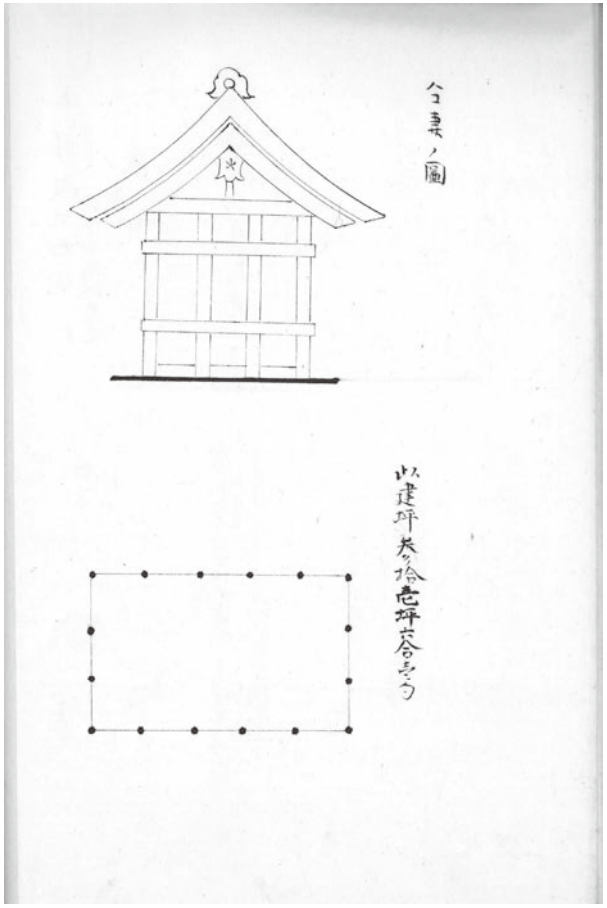
此建坪　壱坪九合八勺

（82）五月殿　正面ノ図
平向切妻造、白木



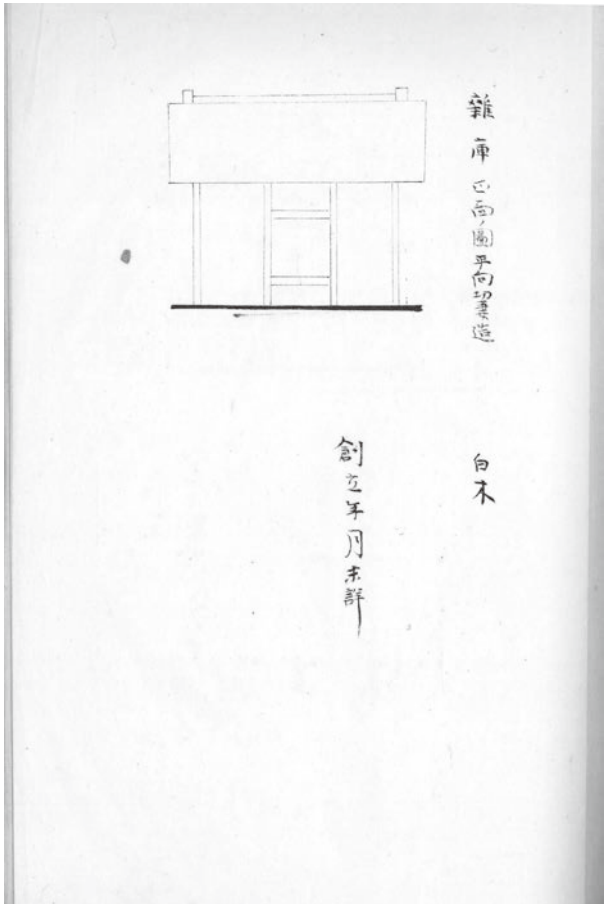
享和二年炎上後旧幕府ヨリノ再建ノ物ナシテ旧幕府ノ御造営ニ係ル、其当時ノ費額銀八拾四貫匁

（83）全　妻ノ図



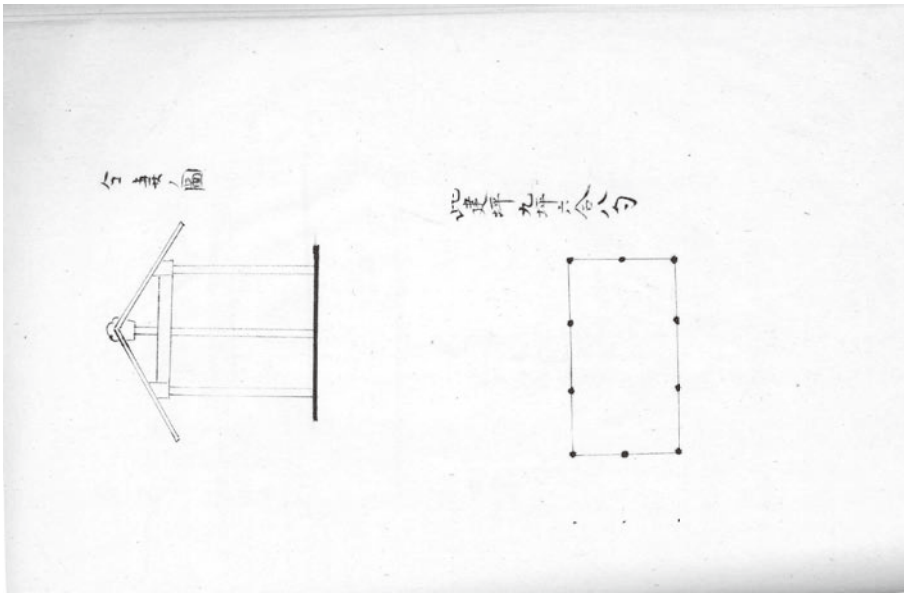
此建坪　参拾壱坪六合壱勺

（84）雑庫　正面ノ図
平向切妻造、白木



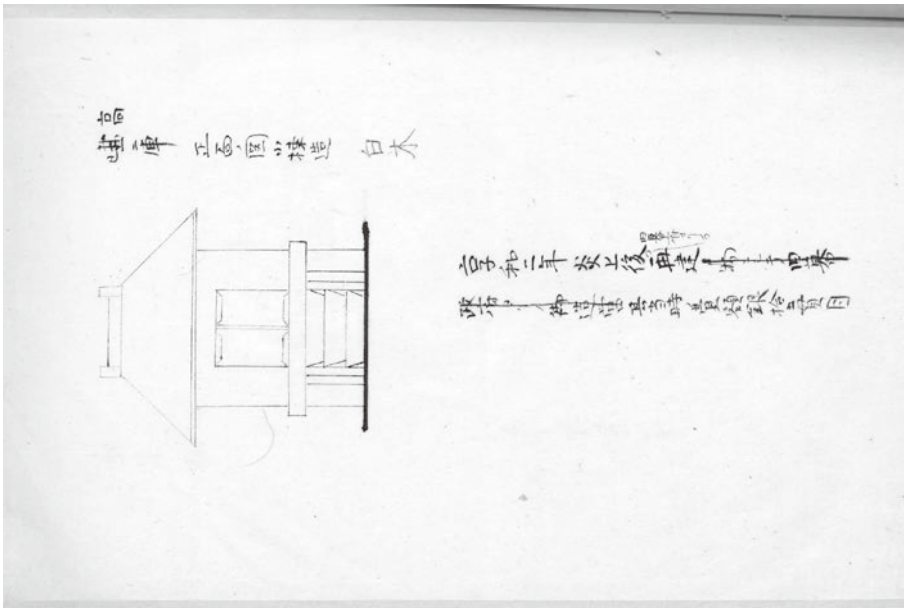
創立年月未詳

（85）全　妻ノ図



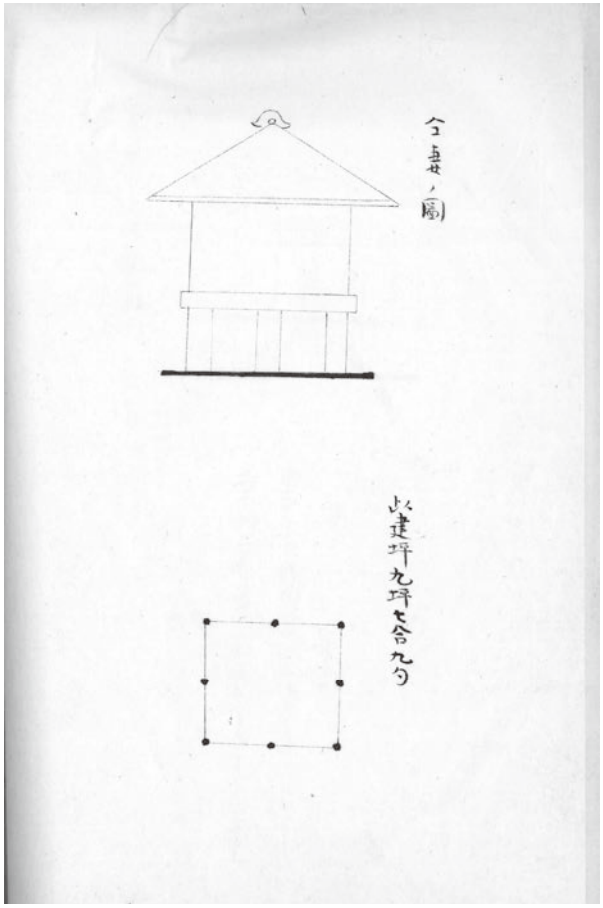
此建坪　九坪六合八勺

（86）高圭庫　正面ノ図
小棟造、白木



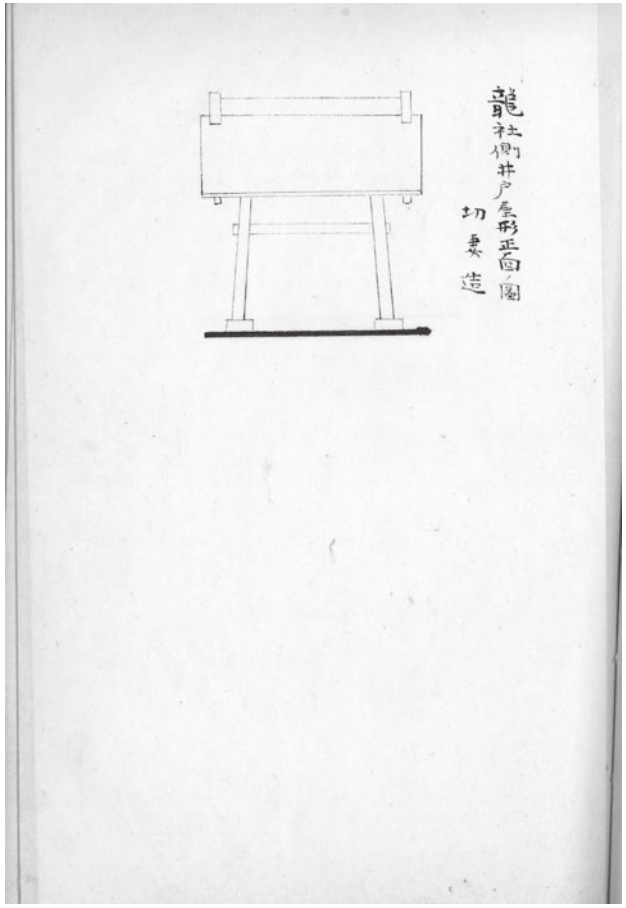
享和二年炎上後旧幕府ヨリノ再建ノ物ナレ共旧幕
政府ヨリノ御造営、其当時ノ費額銀拾五貫目

（87）全　妻ノ図

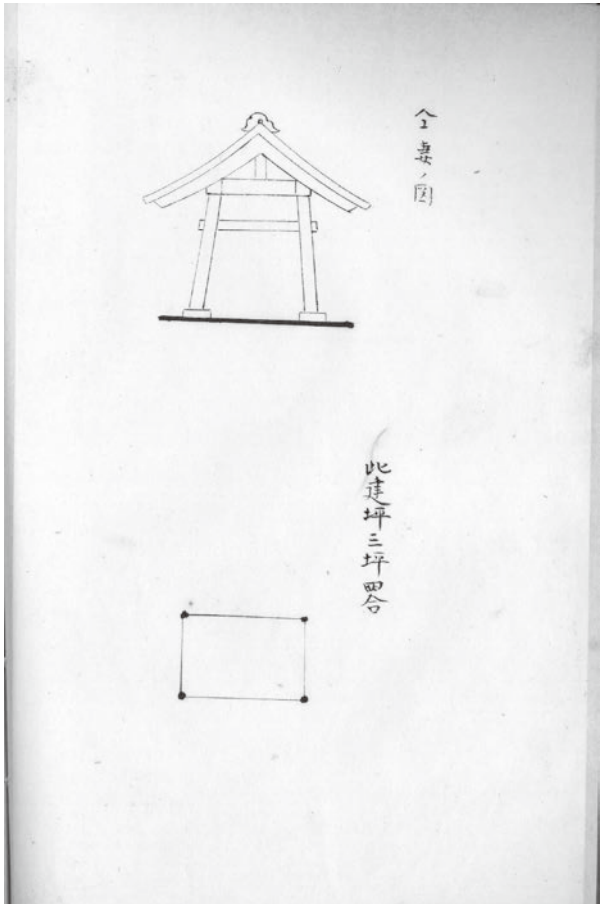


此建坪　九坪七合九勺

（88）龍社側井戸屋形　正面ノ図
切妻造

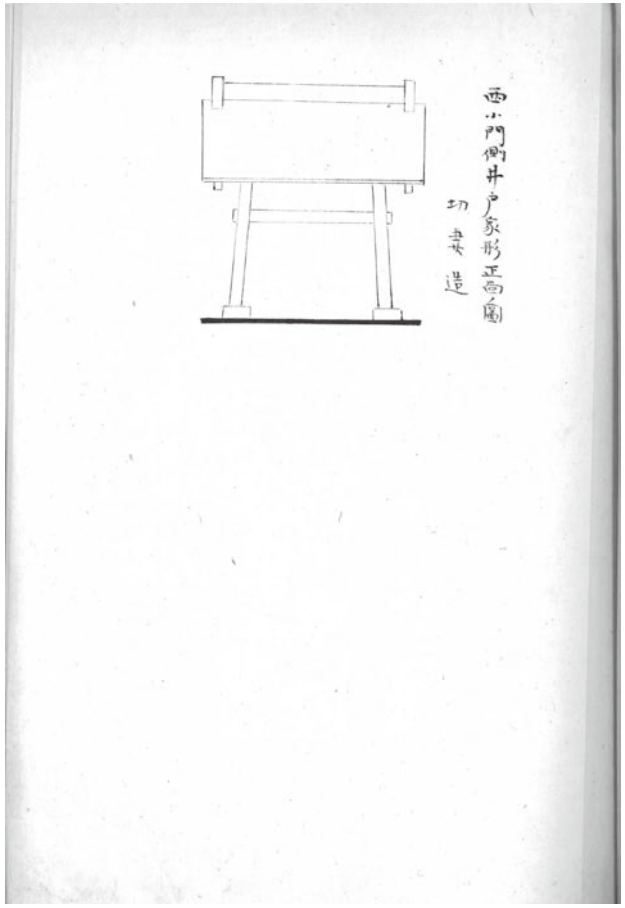


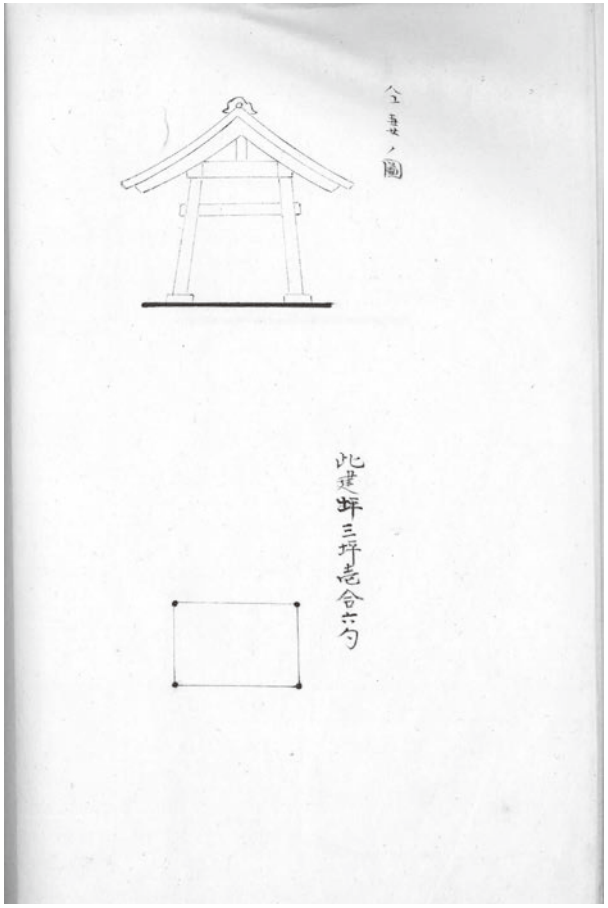
（89）全　妻ノ図



此建坪　三坪四合

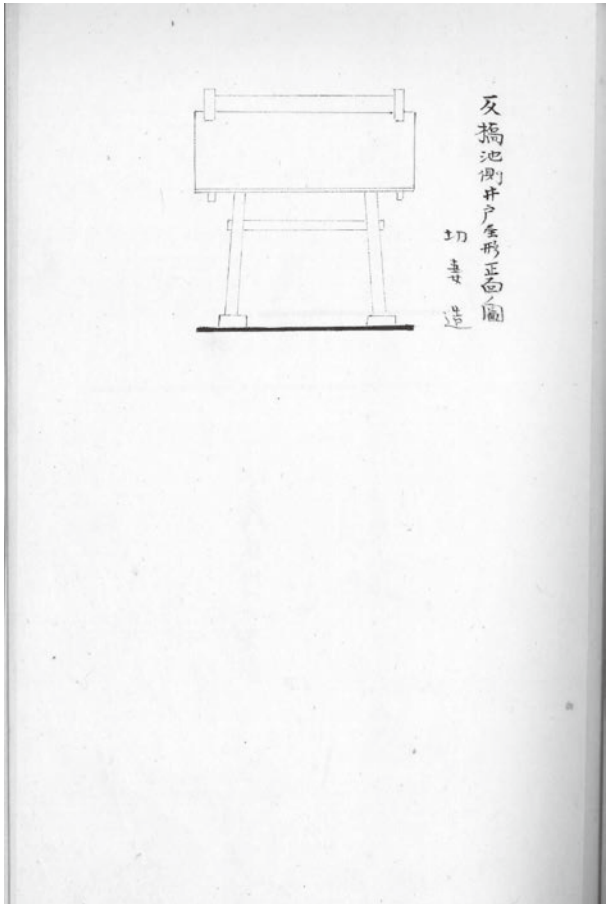
（90）西小門側井戸家形　正面ノ図
切妻造





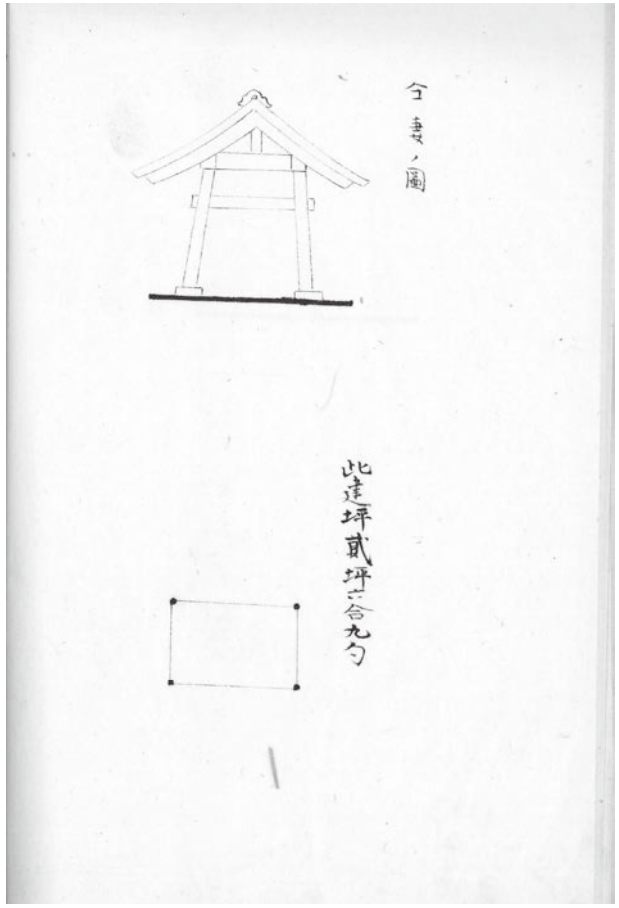
(91) 仝 妻ノ図

此建坪 三坪壱合六勺



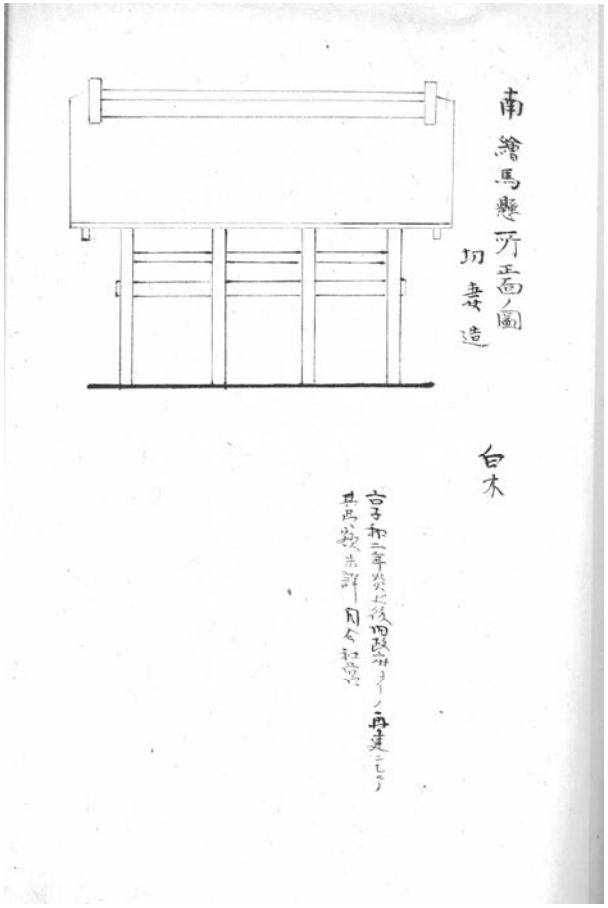
(92) 反橋池側井戸屋形 正面ノ図
切妻造

（93）仝　妻ノ図



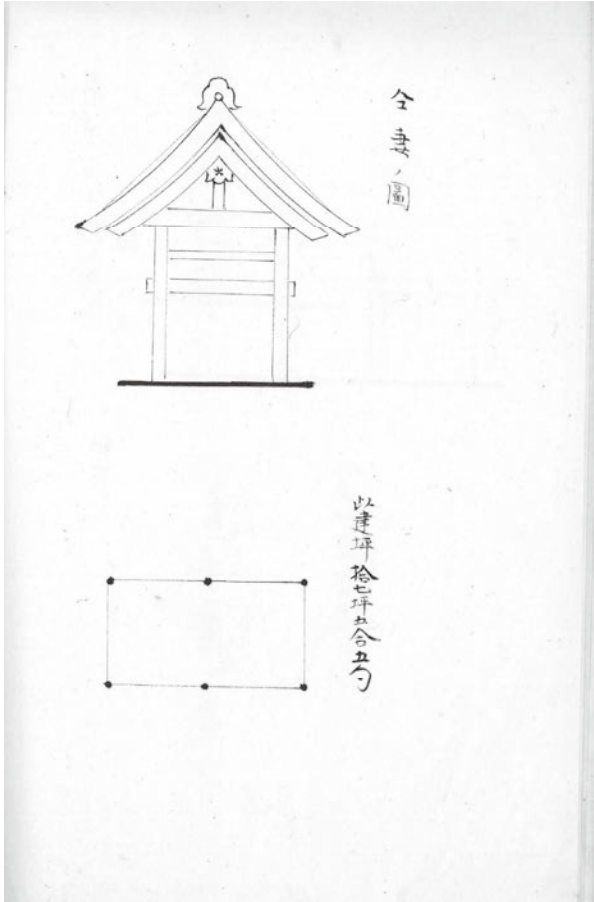
此建坪　弐坪六合九勺

（94）南絵馬懸所　正面ノ図
切妻造、白木



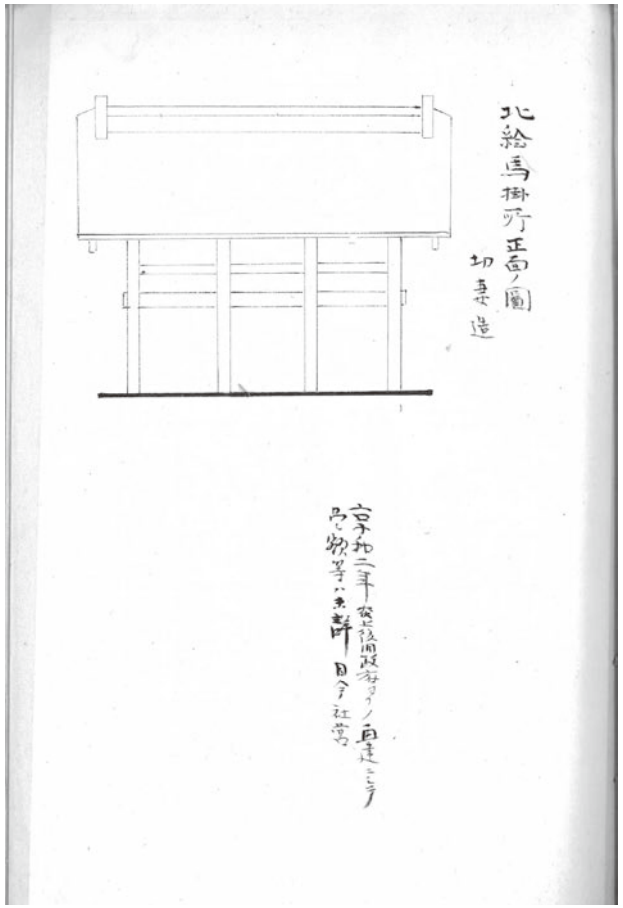
享和二年炎上後旧政府ヨリノ再建ニシテ
其費額未詳、目今社営

（95）全　妻ノ図



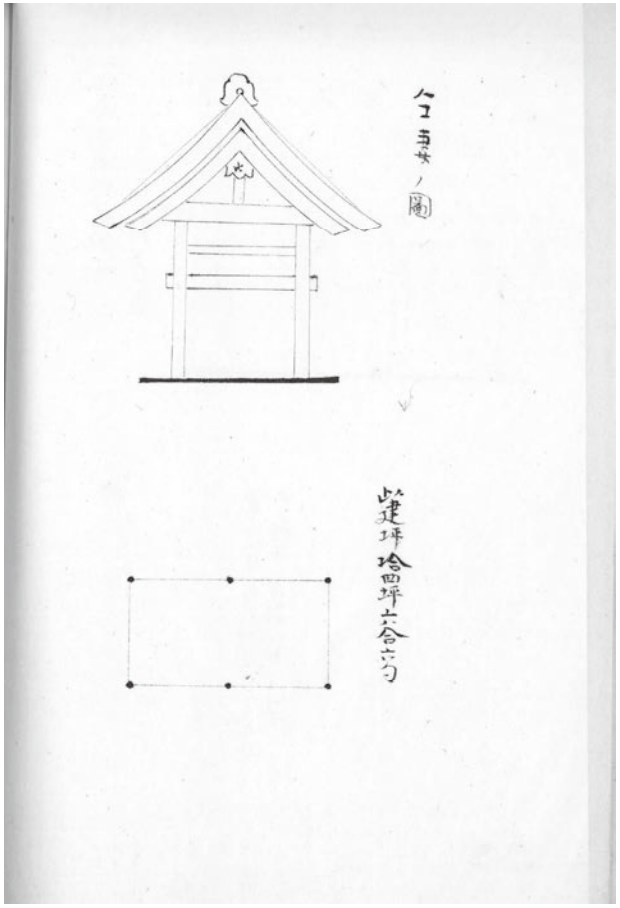
此建坪　拾七坪五合五勺

（96）北絵馬掛所　正面ノ図
切妻造



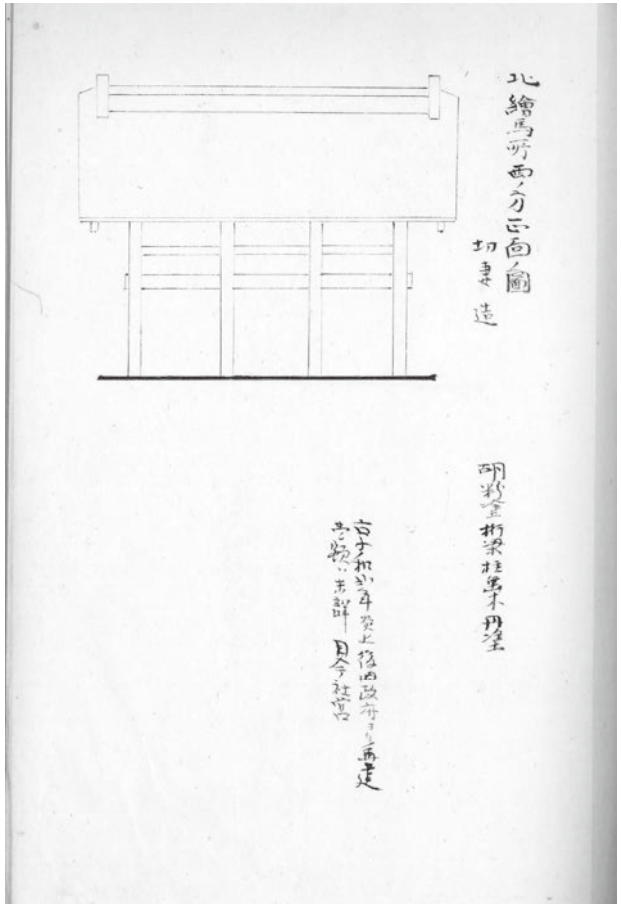
享和二年炎上後旧政府ヨリノ再建ニシテ
費額等ハ未詳、目今社営

（97）全　妻ノ図



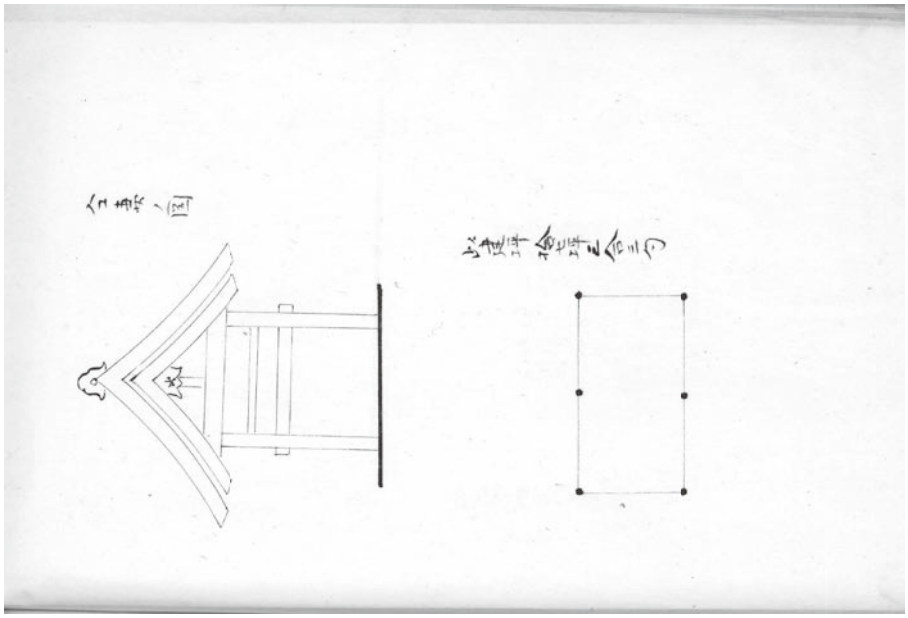
此建坪　拾四坪六合六勺

（98）北絵馬所西ノ方　正面ノ図
切妻造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗

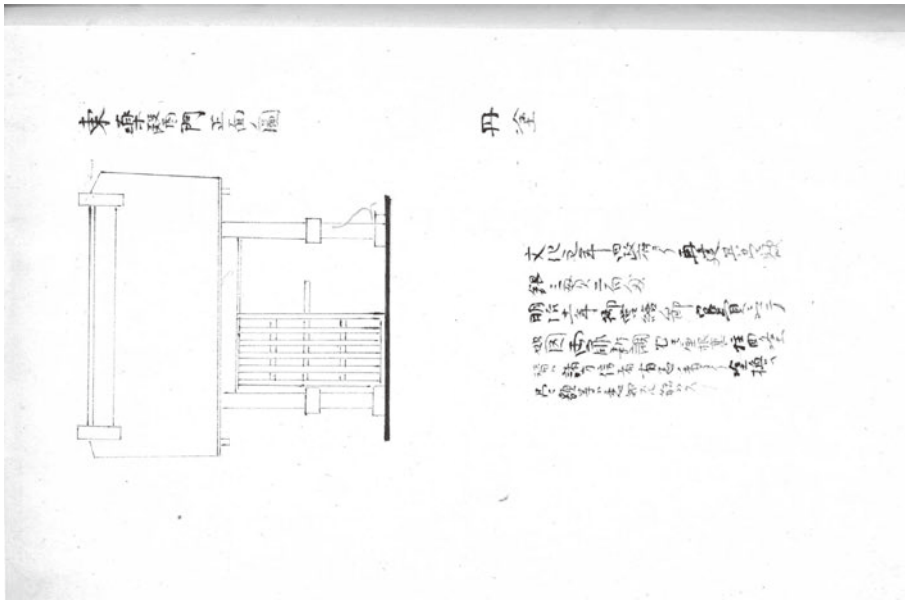


享和弐年炎上後旧政府ヨリノ再建
費額ハ未詳、目今社営

（99）　全　妻ノ図



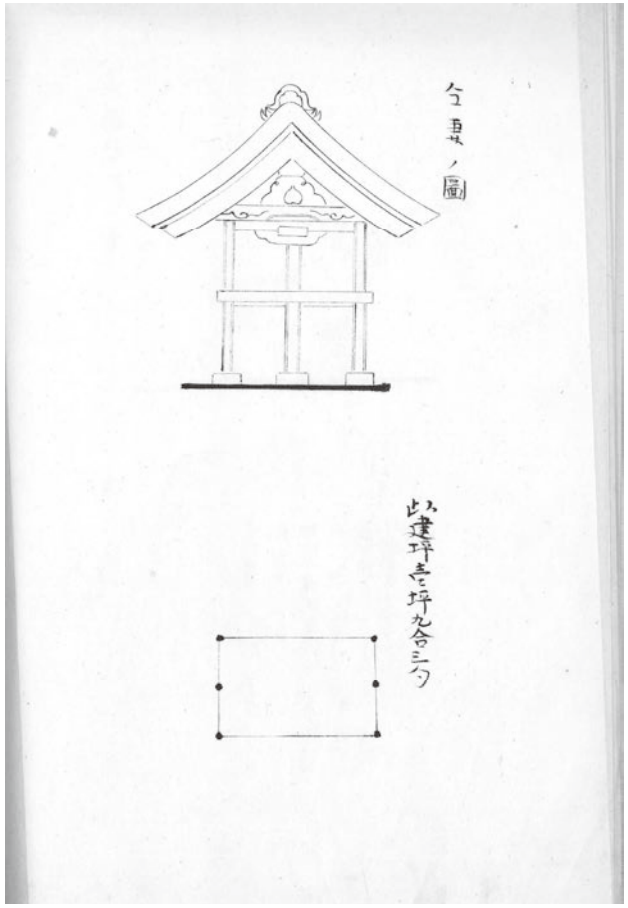
（100）東薬医門　正面ノ図
丹塗



文化元年旧政府ヨリ再建、其費額
銀三貫二百匁
明治十一年御営繕ノ節官費ヲ以テ
如図両扉新調、尤モ屋根裏柱回リ塗
替ハ諸方信者有志ノ者ヨリ塗換ヘ
費額等ハ悉知スル能ハス

101

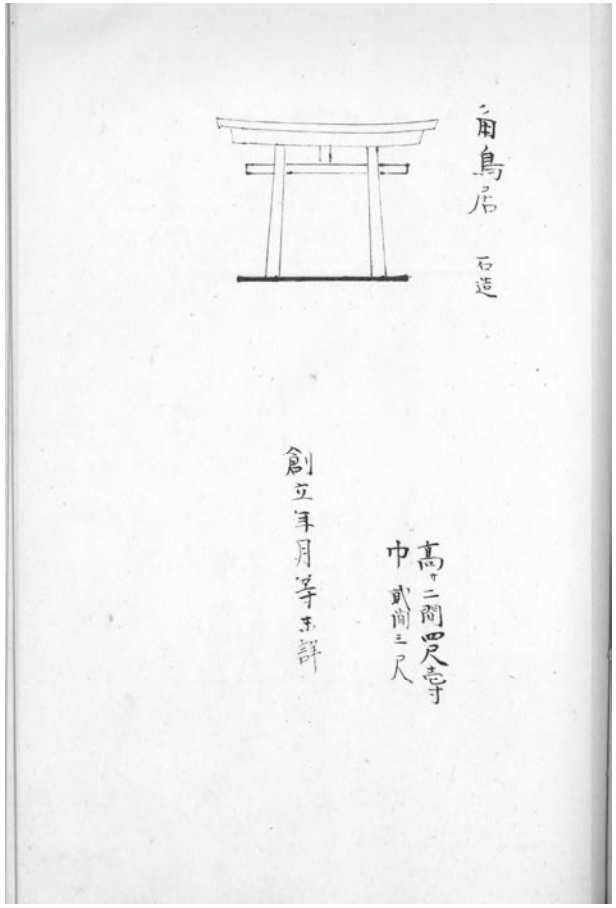
仝　妻ノ図



此建坪　壱坪九合三勺

102

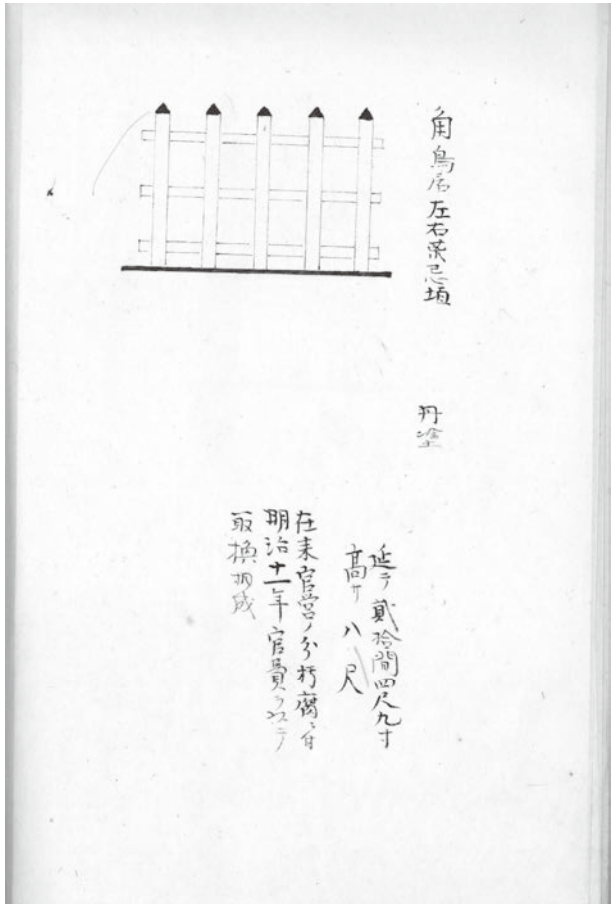
角鳥居
石造



高サ　二間四尺壱寸
巾　弐間三尺
創立年月等未詳

(103)

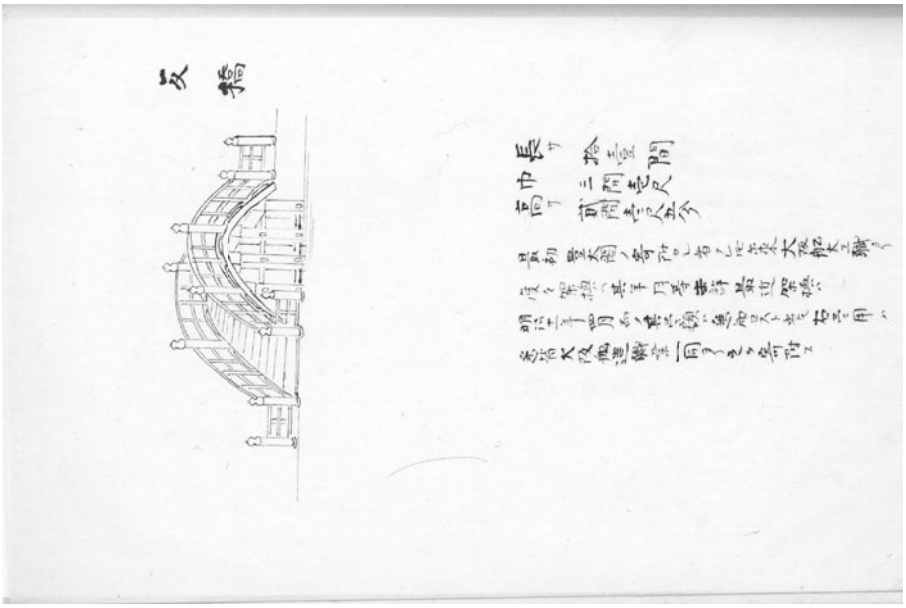
角鳥居左右荒忌垣
丹塗



延テ弐拾間四尺九寸
高サ　八尺

在来官営ノ分朽腐ニ付
明治十一年官費ヲ以テ
取換相成

（104）反橋



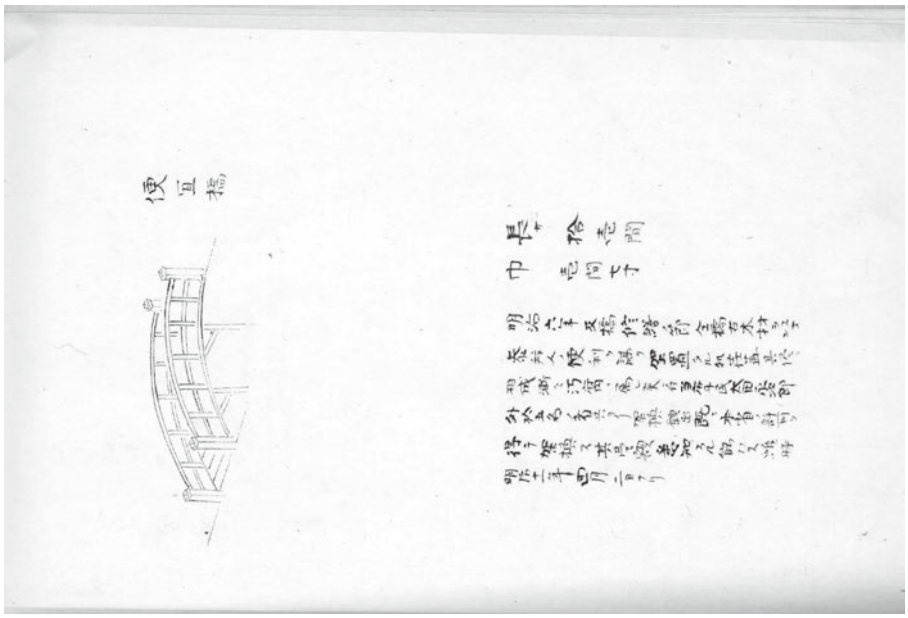
長サ　拾壱間

巾　　三間壱尺

高サ　弐間壱尺五分

最初豊太閤ノ寄附セシ者ナレドモ、爾来大阪船大工職ヨリ
度々架換ヘ、其年月等未詳、最近架換ハ
明治十一年四月、而シテ其費額ハ悉知セスト雖モ、右費用ハ
悉皆大阪船造職業一同ヨリ之ヲ寄附ス

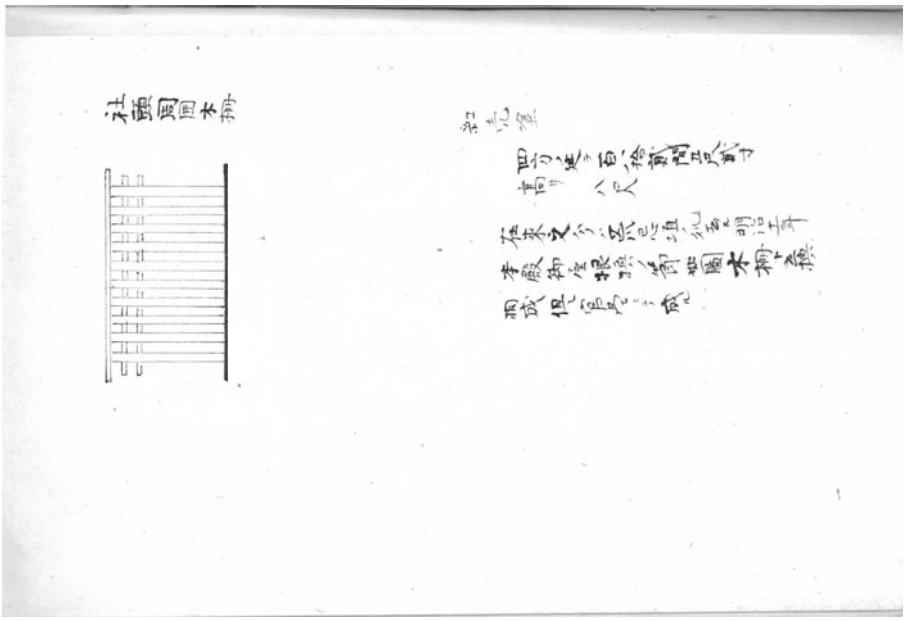
（105）　便宜橋



長サ　拾壱間
巾　　壱間七寸

明治六年反橋修繕ノ節仝橋古木材ヲ以テ
参拝人ノ便利ヲ謀リ架置タル処、荏苒其儘ニ
相成、漸々汚腐ニ属シ候ニ付、当府平民太田永次郎
外拾五名ノ者共ヨリ架換願出、既ニ本省ノ許可ヲ
得テ架換ス、其費額悉知スル能ハス、維時
明治十一年四月二日ナリ

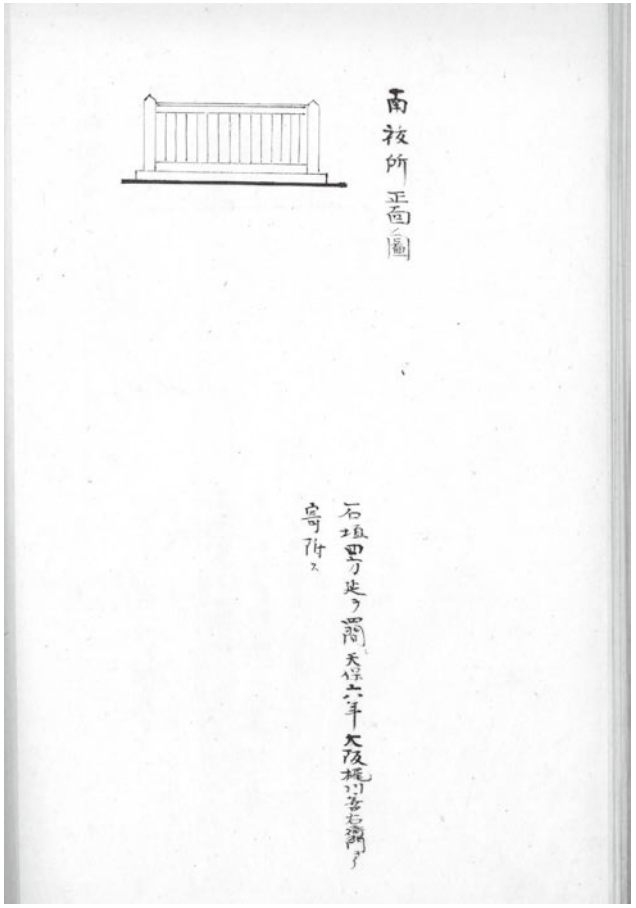
（106）社頭周囲木柵
紅殻（殻）塗



四方延テ百八拾弐間五尺弐寸
高サ　八尺

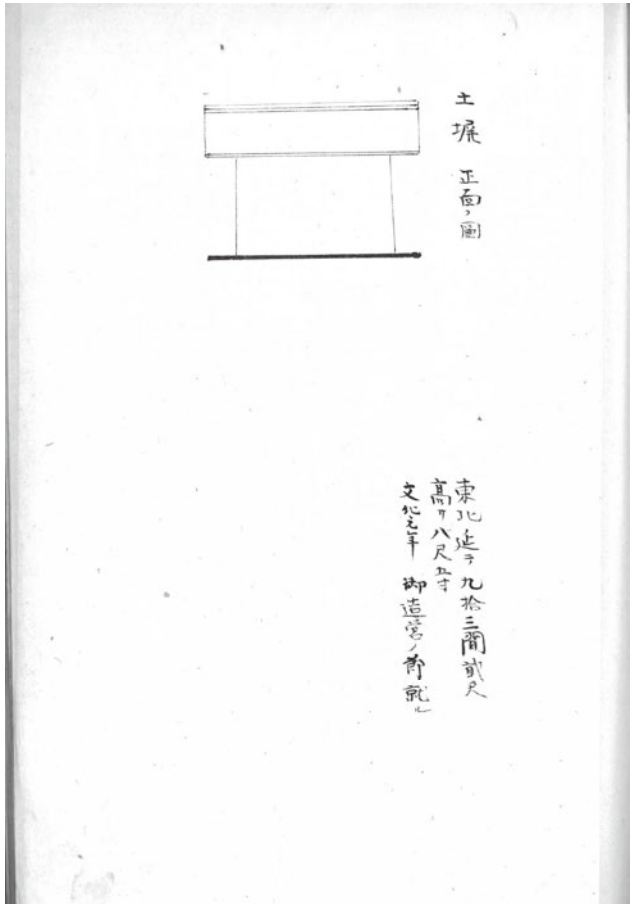
在来之分ハ荒忌垣ノ処、去ル明治十一年
本殿御屋根換ノ節如図木柵ト立換
相成、但シ官費ニテ成ル

(107) 南祓所　正面ノ図



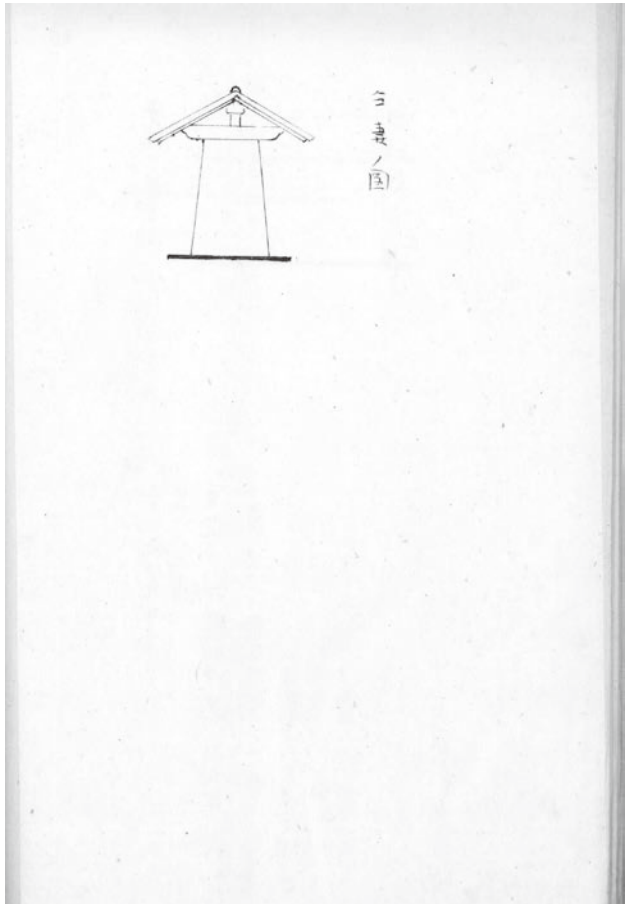
石垣四方延テ四間、天保六年大阪梶川善右衛門ヨリ
寄附ス

(108) 土塀　正面ノ図

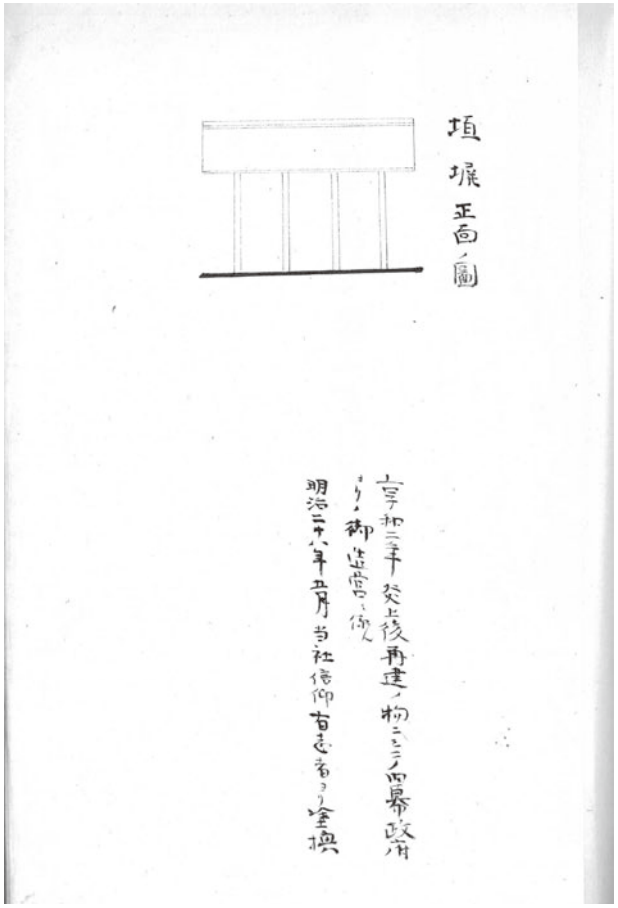


東北延テ九拾三間弐尺
高サ　八尺五寸
文化元年御造営ノ節就ル

(109) 仝　妻ノ図

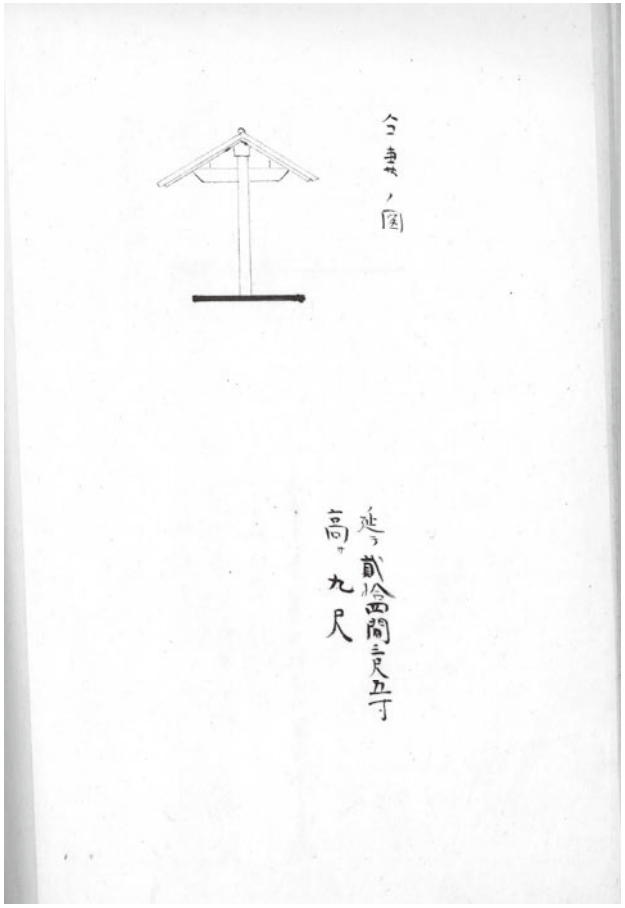


(110) 垣　塀　正面ノ図



享和二年炎上後再建ノ物ニシテ旧幕政府
ヨリノ御造営ニ係ル
明治二十八年五月当社信仰有志者ヨリ塗換

(111) 仝　妻ノ図

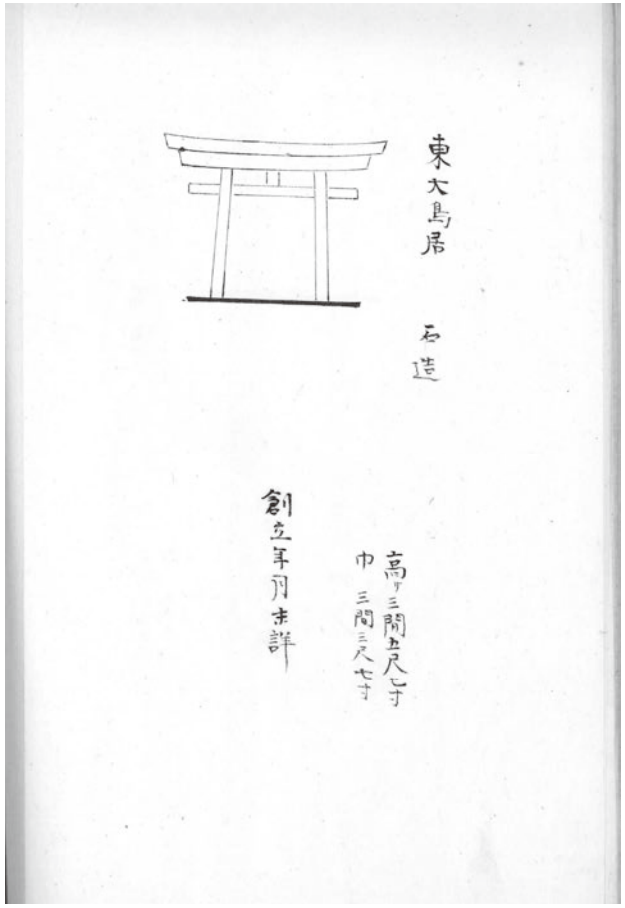


延テ弐拾四間三尺五寸
高サ　九尺

(112) 西大鳥居
石造

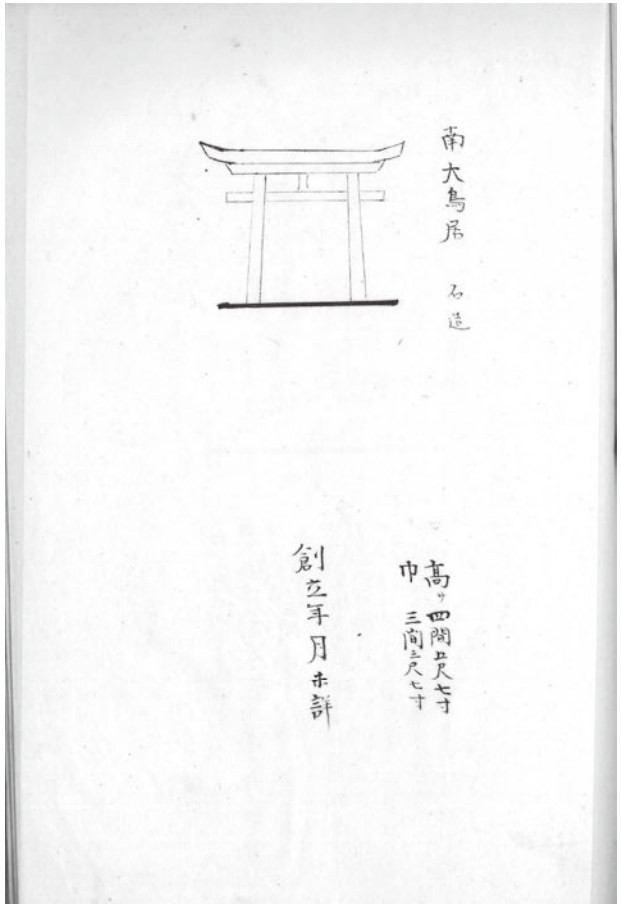
高サ　四間三尺八寸
巾　三間五尺四寸
創立年月未詳

(113) 東大鳥居
石造



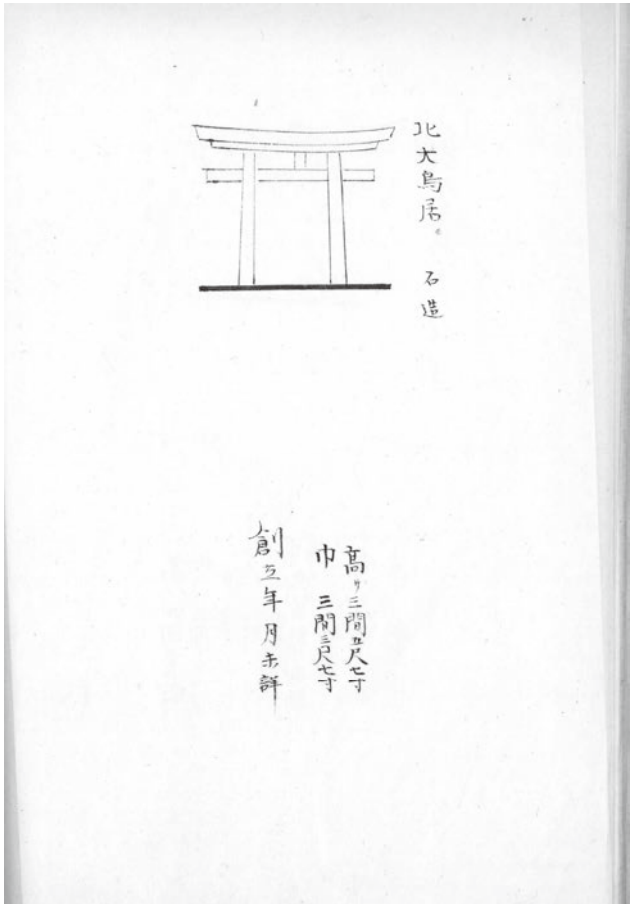
高サ　三間五尺七寸
巾　三間三尺七寸
創立年月未詳

(114) 南大鳥居
石造



高サ　四間五尺七寸
巾　三間三尺七寸
創立年月未詳

（115）北大鳥居 石造



高サ　三間五尺七寸

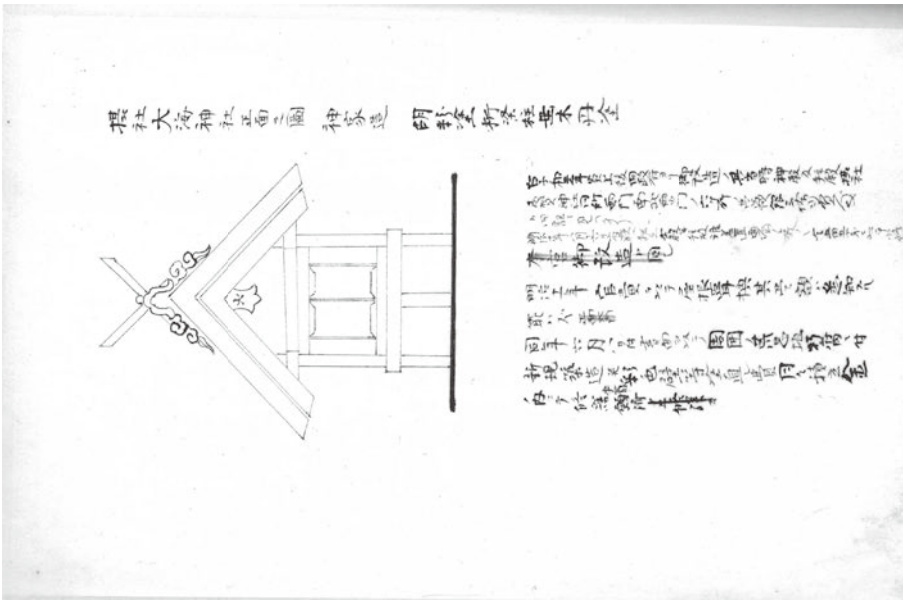
巾　三間三尺七寸

創立年月未詳

（116）

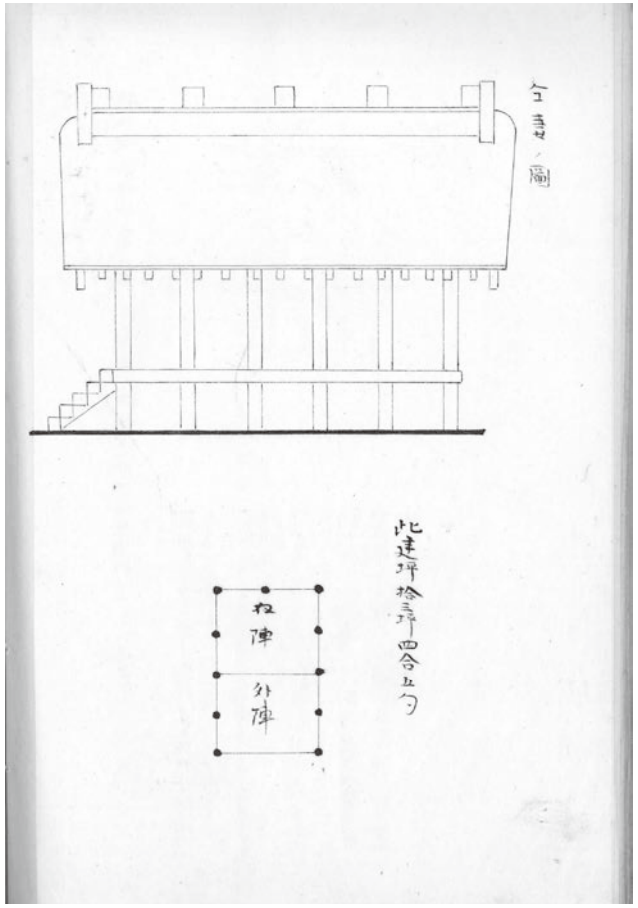
摂社大海神社　正面之図

神家造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



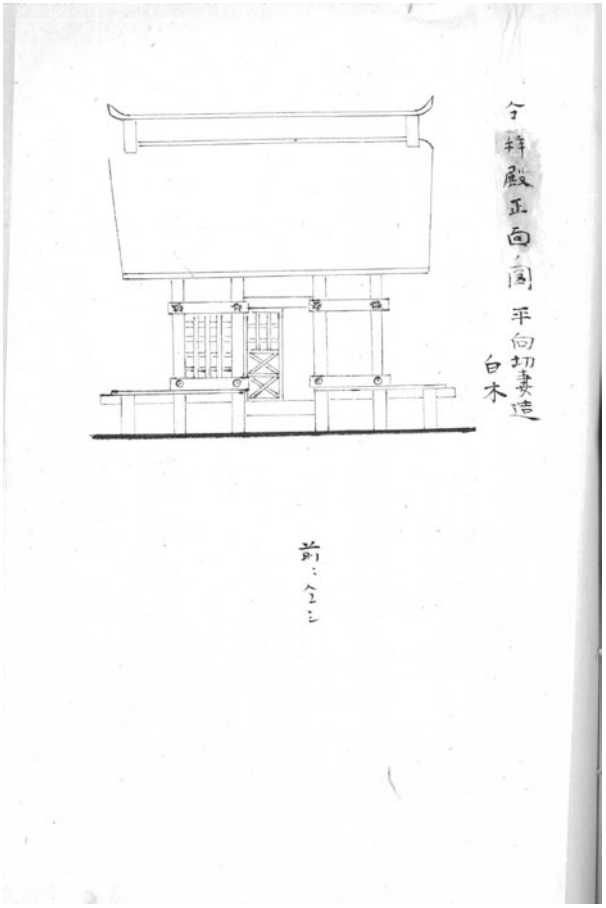
享和二年炎上後旧政府ヨリ御改造ノ其当時、神殿及拝殿、摂社
志賀神社、同所西門南北両小門ノ六ケ所ノ費額銀三拾弐貫匁
ト旧記ニ見ヘタリ
明治十年八月十六日府庁ヘ願立、本殿并拝殿難差置雨漏ノケ所ノミ金五円五十銭ヲ以テ小修繕
~~本冨御改造ト同シ~~
明治十一年官費ヲ以テ屋根葺換、其費額ハ悉知スル
能ハズ、正面北門
同年六月八日付書面ヲ以テ周囲ノ荒忌垣朽腐ニ付
新規築造并彩色壁等塗直シ費、月々積立金
ノ内ニテ修繕、本省願済ノ上修繕ス

(117) 仝　妻ノ図



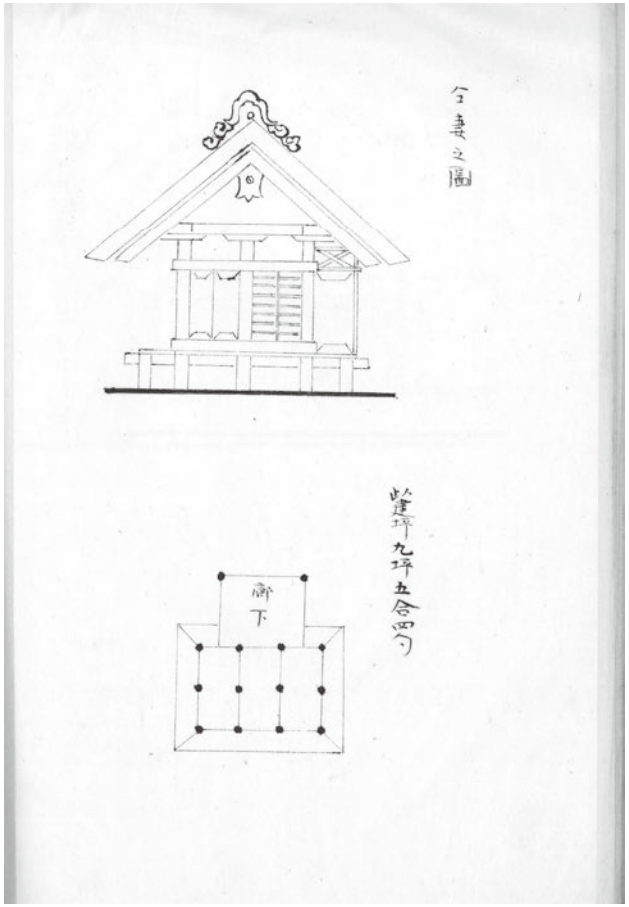
此建坪　拾三坪四合五勺

(118) 仝拝殿　正面ノ図
平向切妻造、白木



前ニ仝シ

(119) 仝　妻之図

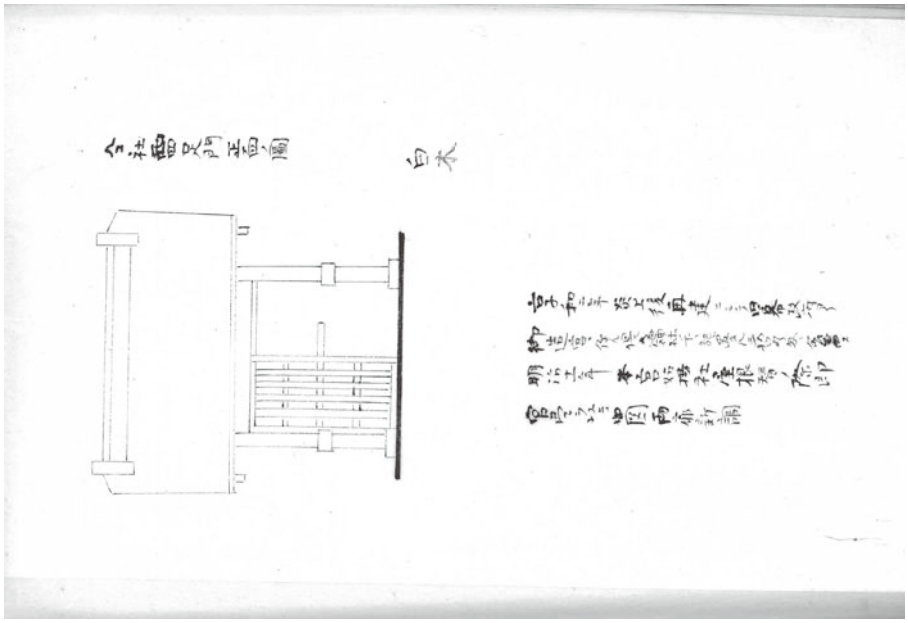


此建坪　九坪五合四勺

(120) 仝廊下　正面ノ図

此建坪　三坪九合壱勺

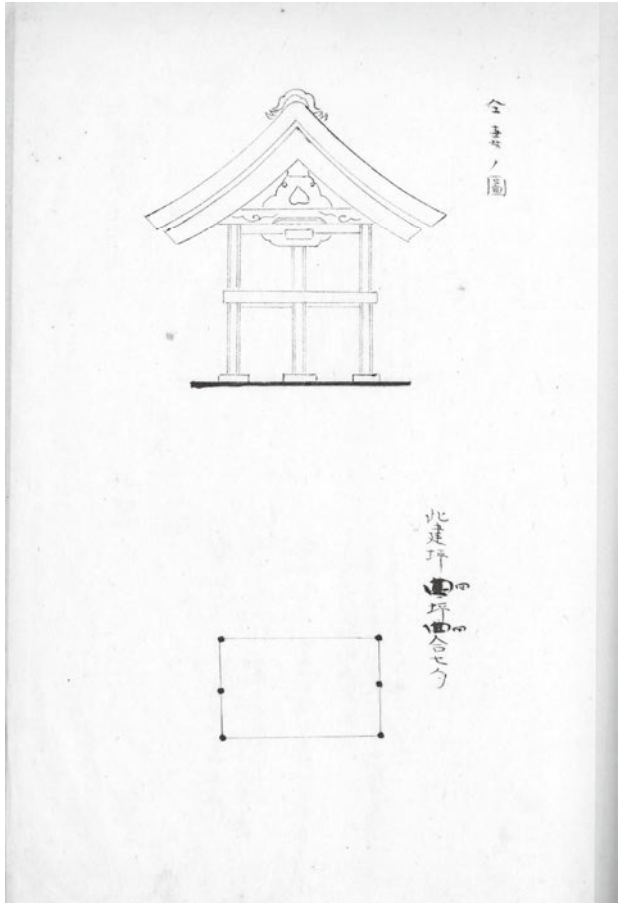
（121）全社西四足門　正面ノ図
白木



享和二年炎上後再建ニシテ旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル、但シ大海神社ノ下ニ記シ置タル二拾弐貫匁ニ合算ス
明治十一年本宮始摂社屋根替ノ際即
官費ヲ以テ如図両扉新調

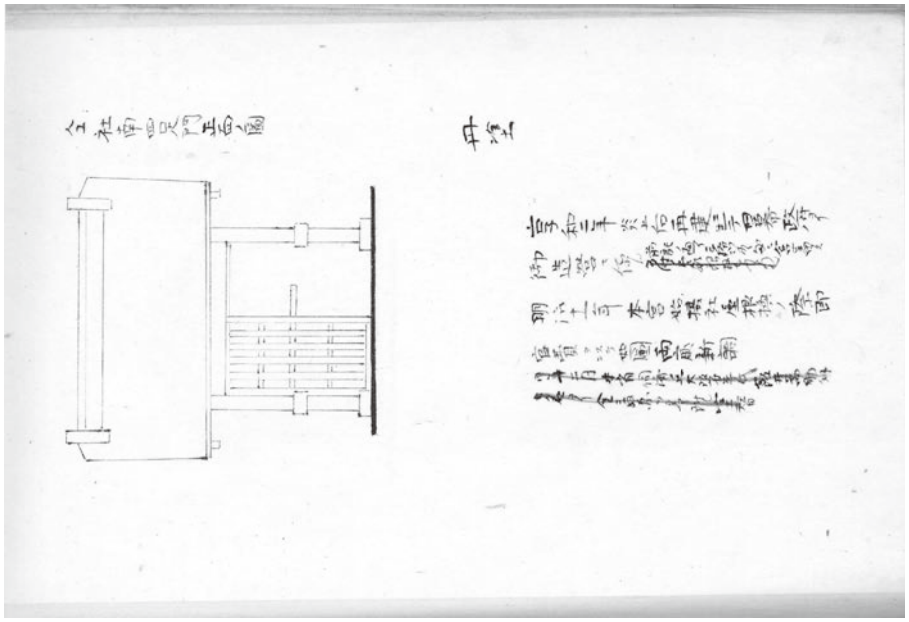
(122)

全妻ノ図



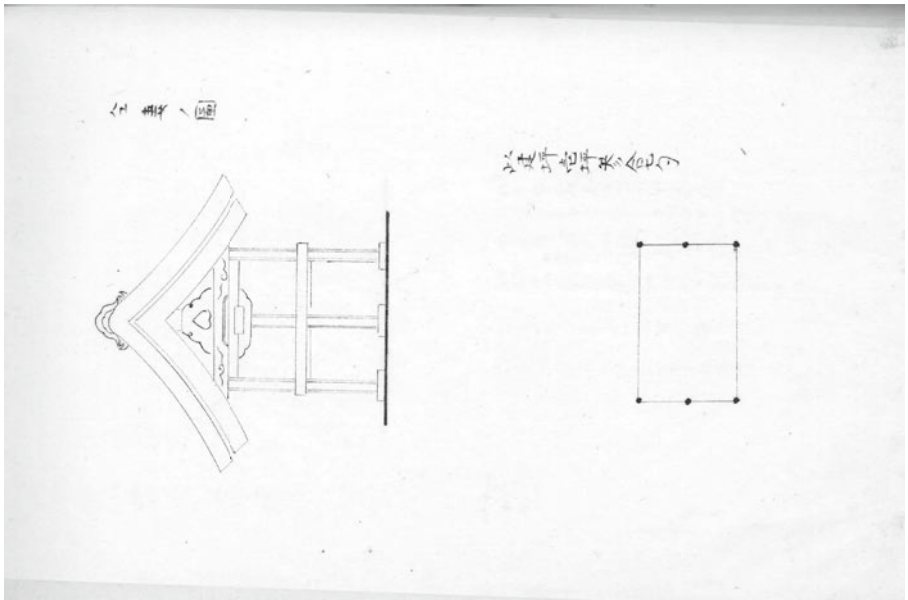
此建坪四坪四合七勺

（123）　全社南四足門　正面ノ図
丹塗



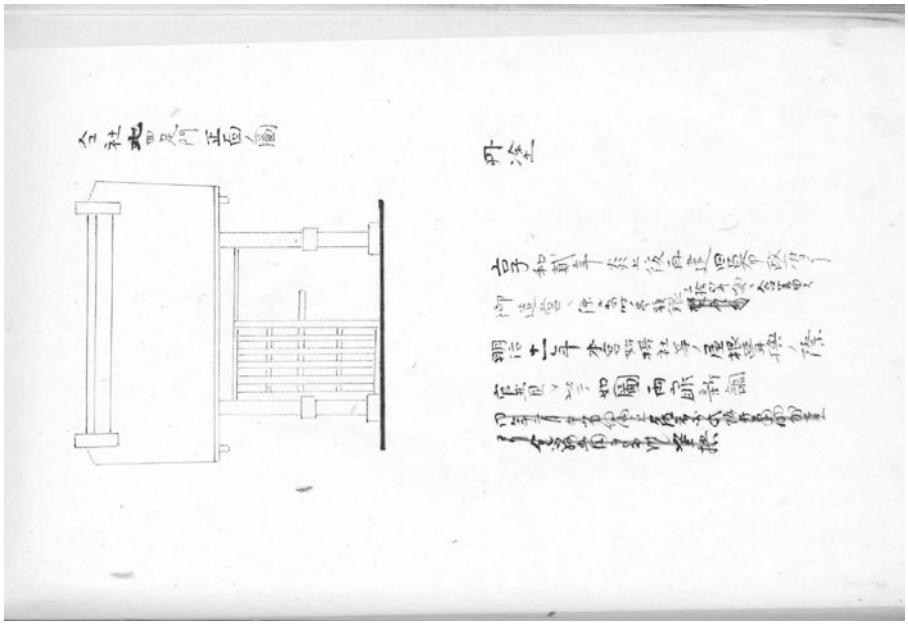
享和二年炎上后再建ニシテ旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル、当時ノ費額銀拾七貫匁（前記ノ通リ二拾弐貫匁ニ合算ス）
明治十一年本宮始摂社屋根換ノ際即
官費ヲ以テ如図両扉新調
~~同年十月本省願済ノ上、大阪府立民撰共商助外~~
~~十名ヨリ金三拾円ヲ寄附シ塗替~~

(124)　全　妻ノ図

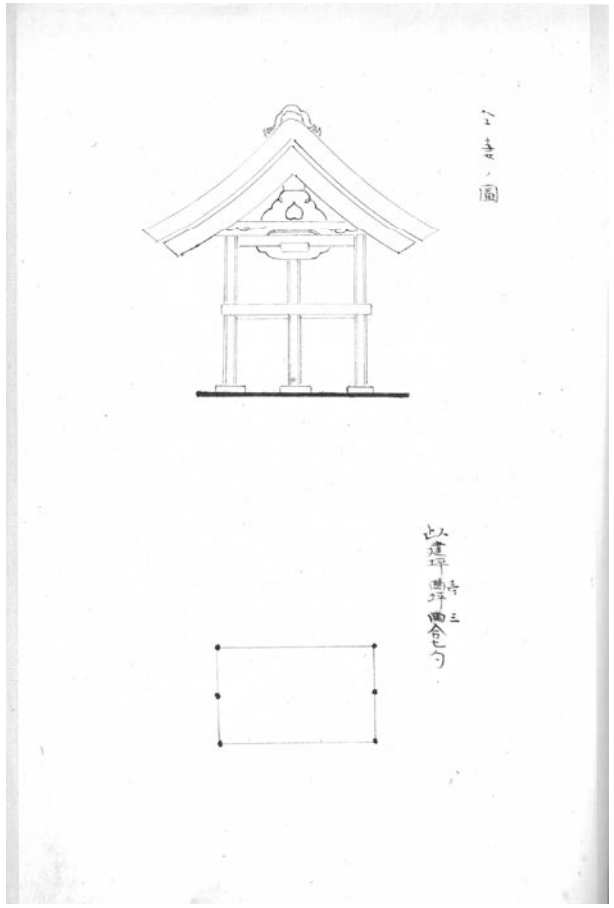


此建坪　壱坪参合七勺

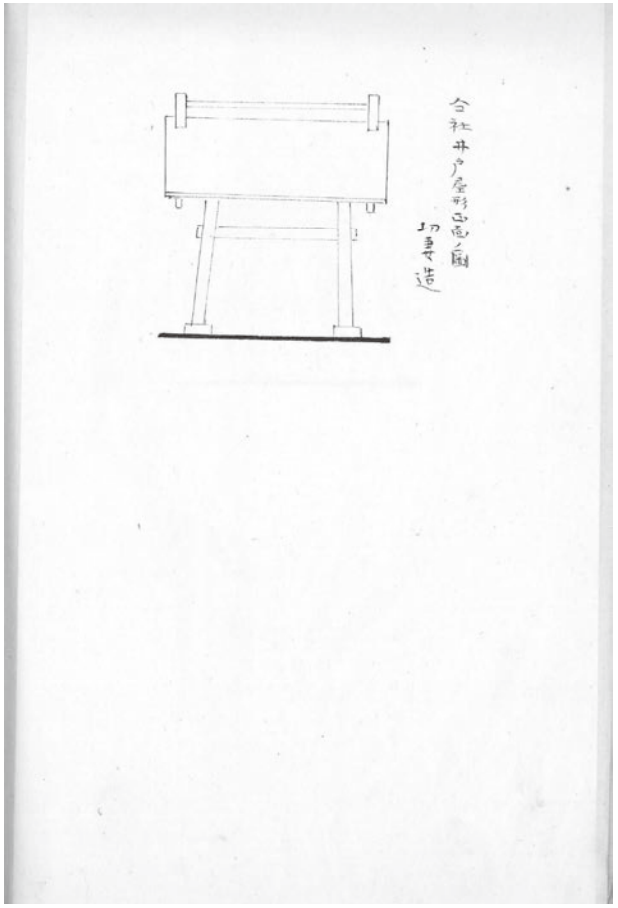
（125）全社北四足門　正面ノ図
丹塗



享和弐年炎上後再建、旧幕政府ヨリ
御造営ニ係ル、当時ノ費額銀~~拾七貫匁~~
三拾弐貫匁ニ合計ス
明治十一年本宮始摂社等ノ屋根葺換ノ際
官費ヲ以テ如図両扉新調
~~同年十月本省願済ノ上、大阪府立民阪兼勇助外七名~~
~~申リ金弐拾五円ヲ寄附シ塗換~~



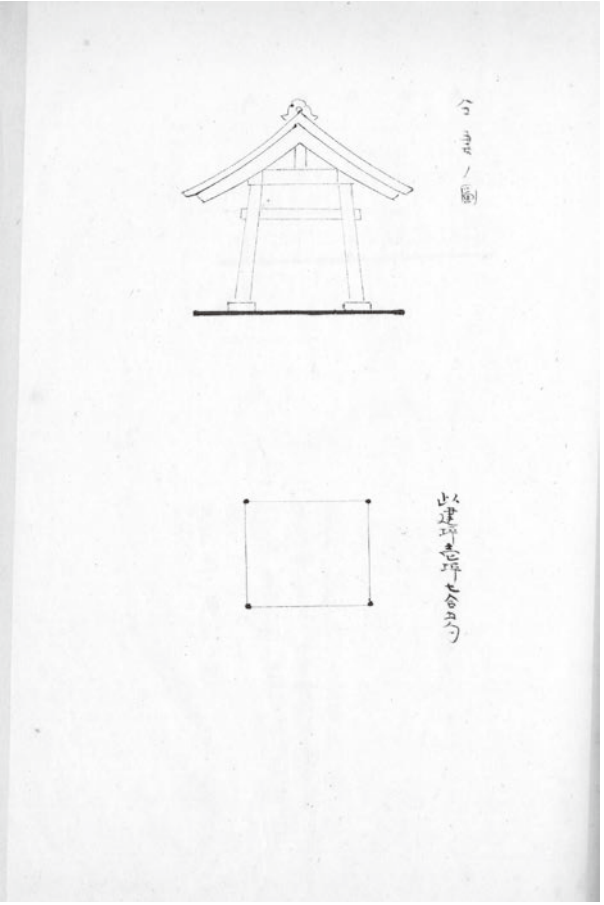
126 仝 妻ノ図



127 仝社井戸屋形 正面ノ図 切妻造

(128)

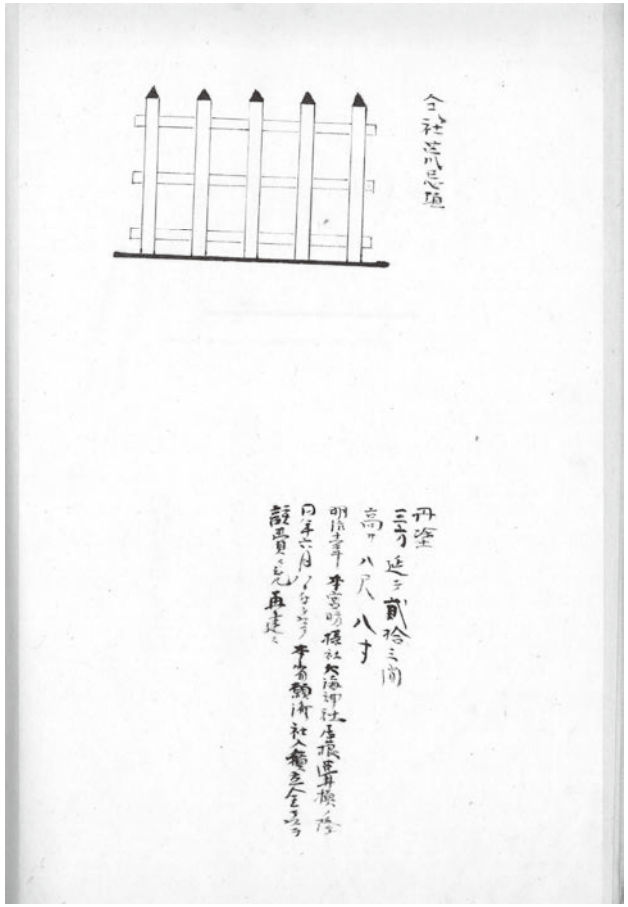
仝　妻ノ図



此建坪　壱坪七合五勺

(129)

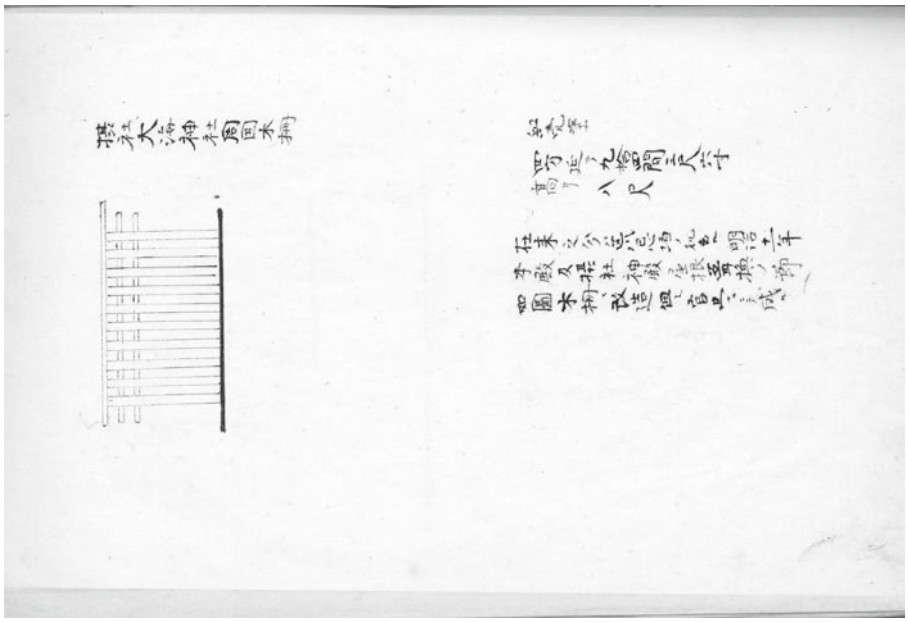
全社荒忌垣
丹塗



三方延テ弐拾三間
高サ　八尺八寸
明治十一年本宮昉摂社大海神社屋根葺換ノ際
同年六月八日付ヲ以テ本省願済、社入積立金ヲ以テ
該費ニ充再建ス

（130）摂社大海神社周囲木柵

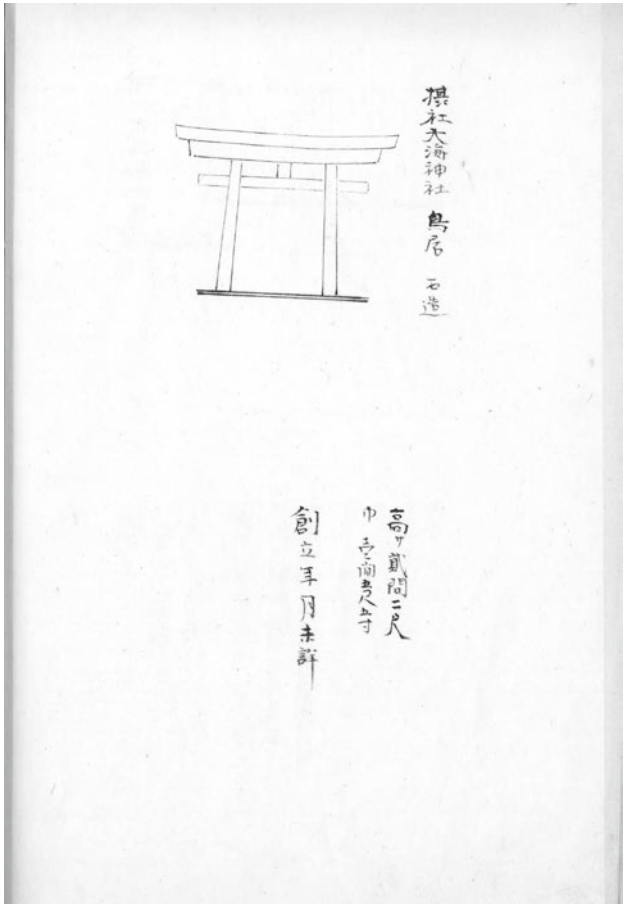
紅殻（愛）塗



四方延テ九拾四間三尺六寸
高サ　八尺

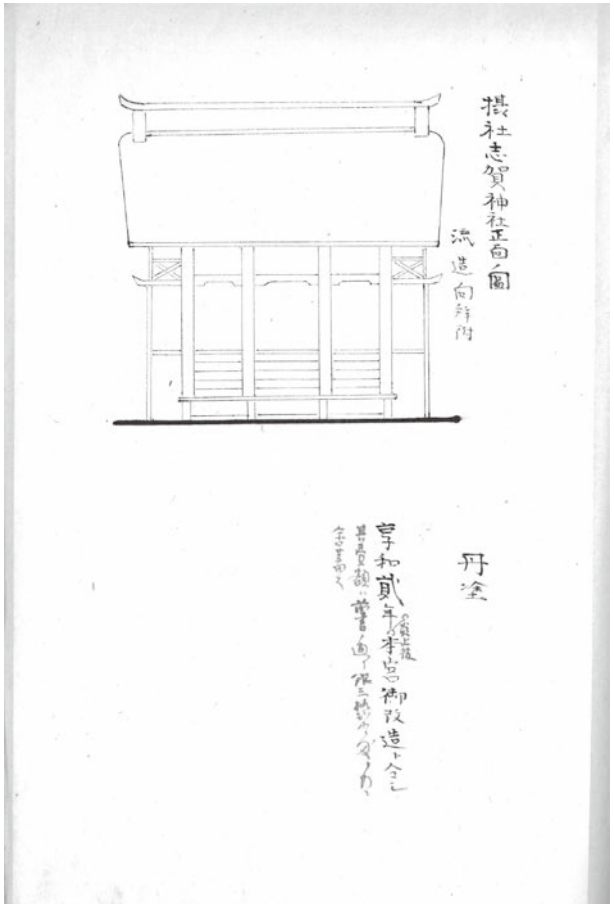
在来之分ハ荒忌垣ノ処、去ル明治十一年
本殿及摂社神殿屋根葺換ノ節
如図木柵ニ改造、但シ官費ニテ成ル

(131) 摂社大海神社鳥居
石造



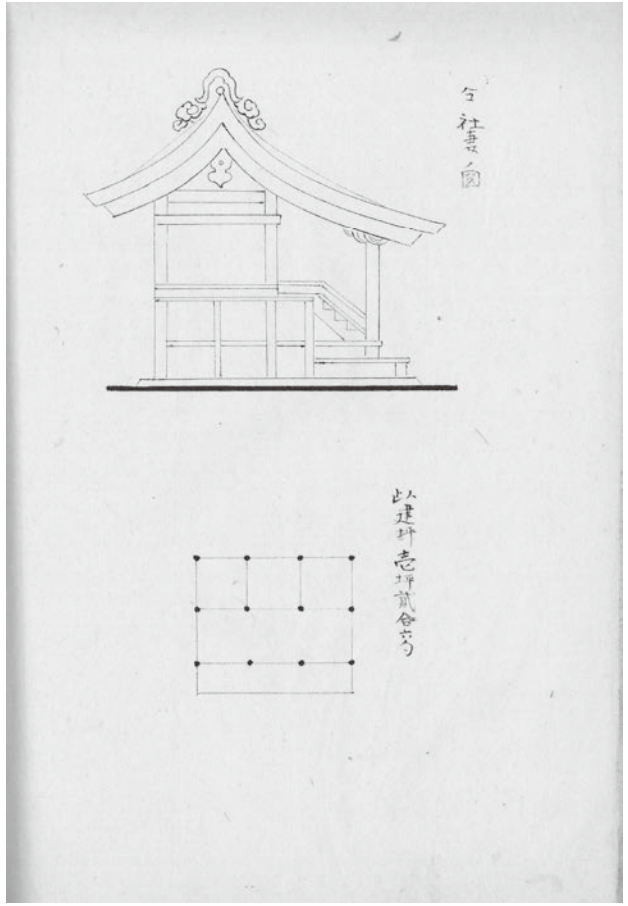
高サ　弐間二尺
巾　壱間五尺五寸
創立年月未詳

(132) 摂社志賀神社　正面ノ図
流造向拝附、丹塗



享和弐年『炎上後』本宮御改造ト仝シ
『其費額ハ前書ノ通リ銀三拾弐貫匁ノ内ニ』
『含蓄ス』

(133) 仝社　妻ノ図

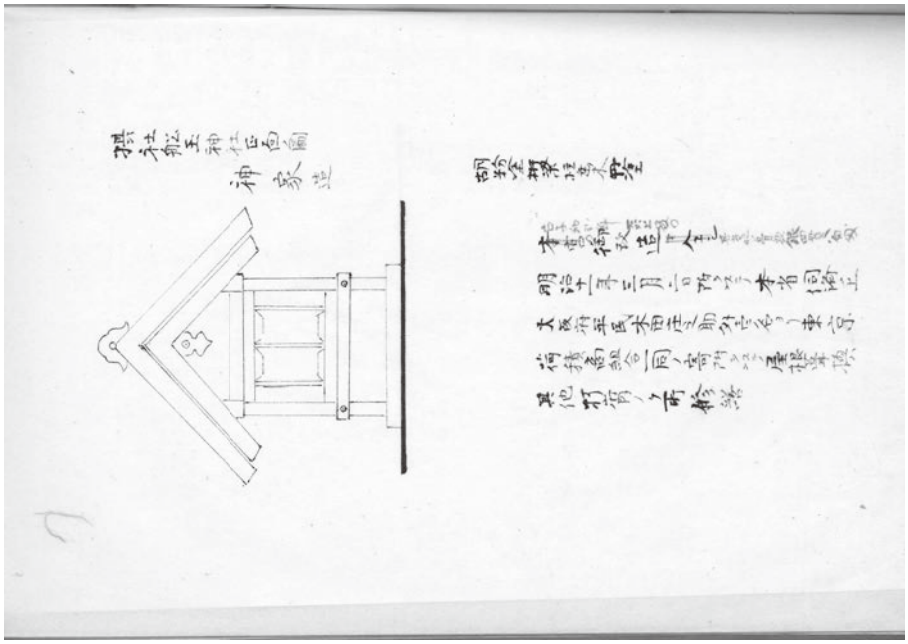


此建坪　壱坪弐合六勺

（134）

摂社船玉神社　正面ノ図

神家造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



本宮『享和弐年炎上後』御改造〔今ヲ〕、『其当時ノ費額銀四貫八百匁』

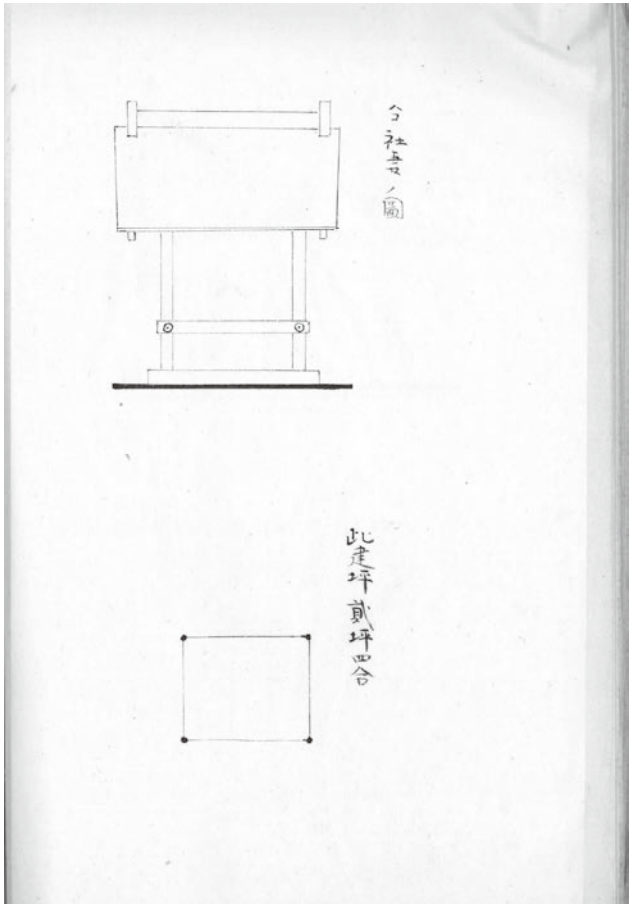
明治十一年三月二日附ヲ以テ本省伺済ノ上

大阪府平民木田庄之助外壱名ヨリ東京

荷積商組合一同ノ寄附ヲ以テ屋根葺換、

其他朽腐ノ所修繕

(135) 仝社　妻ノ図

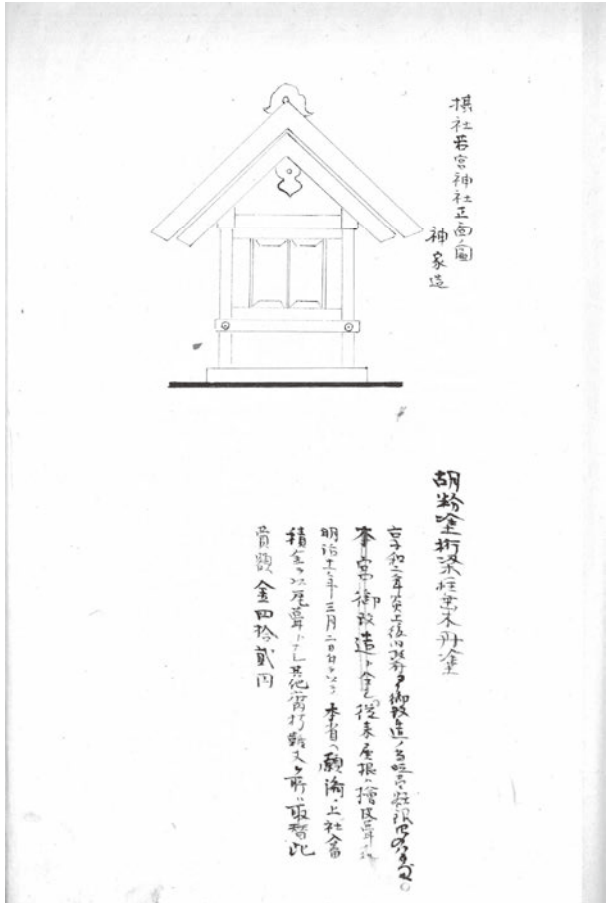


此建坪　弐坪四合

（136）

摂社若宮神社　正面ノ図

神家造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年炎上後旧政府ヨリ御改造ノ当時、費額銀四貫八百匁

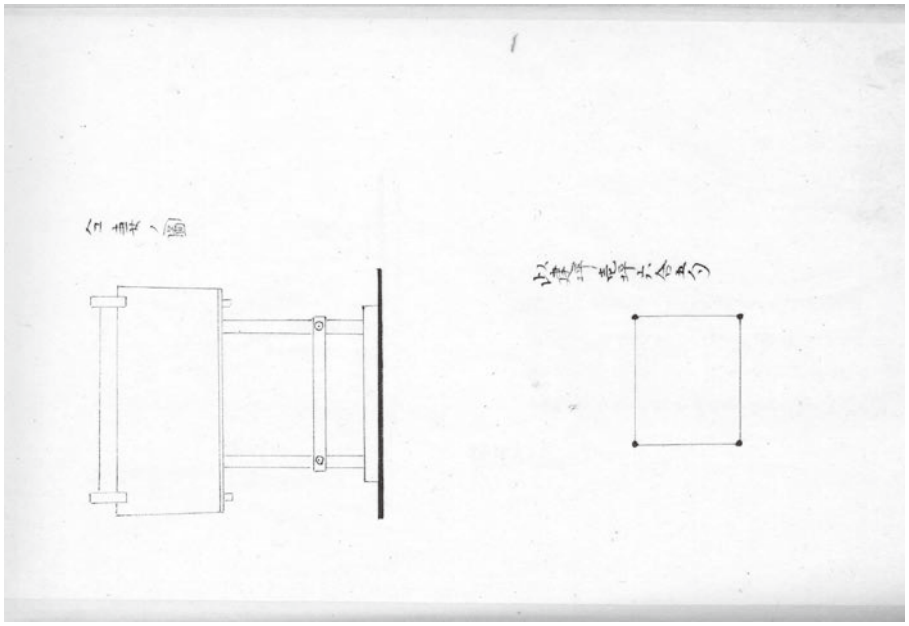
~~本宮御改造ト全シ~~、従来屋根ハ檜皮葺ノ処

明治十一年三月二日付ヲ以テ本省へ願済ノ上、社入蓄

積金ヲ以瓦葺トナシ、其他腐朽難支ケ所ハ取替、此

費額金四拾弐円

（137）　全　妻ノ図

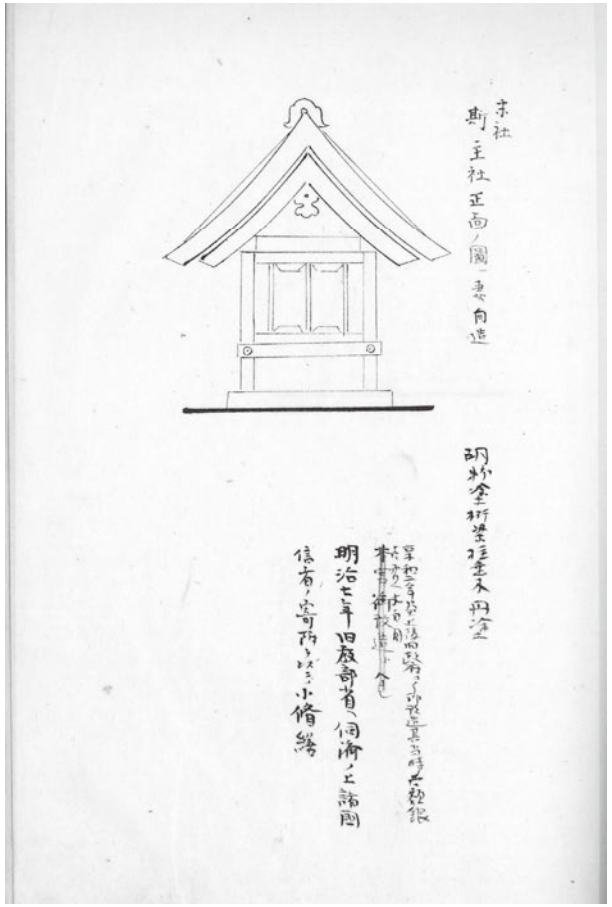


此建坪　壱坪六合五勺

（138）

末社斯主社　正面ノ図

妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年炎上後旧政府ヨリ御改造、其当時ノ費額銀

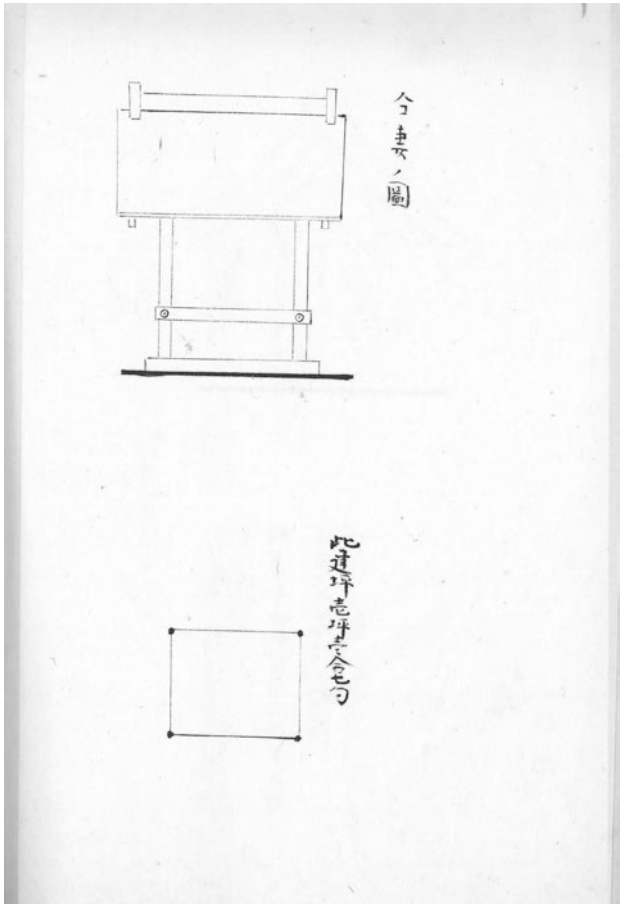
壱貫七百目

~~本宮御改造ト全ク~~

明治七年旧教部省ヘ伺済ノ上、諸国

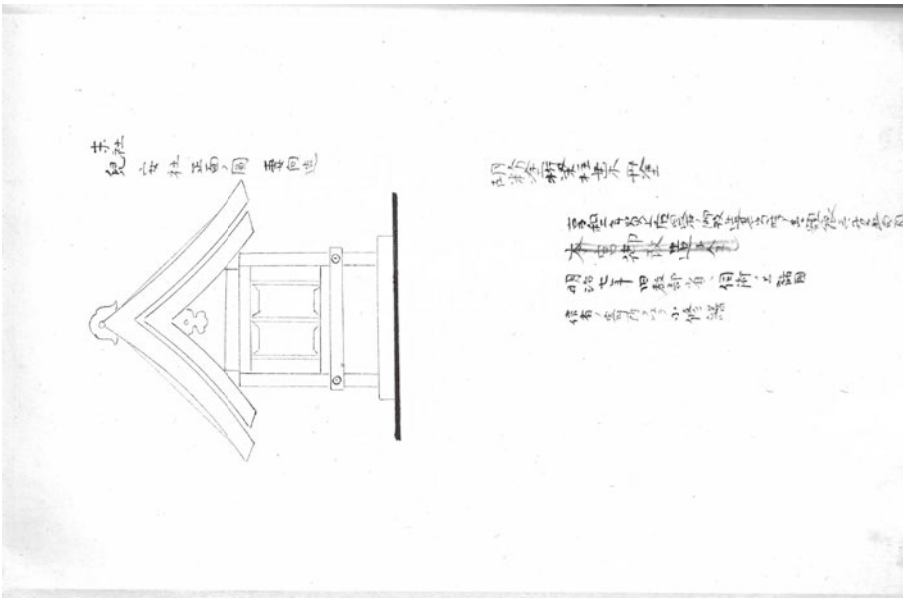
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(139) 仝　妻ノ図



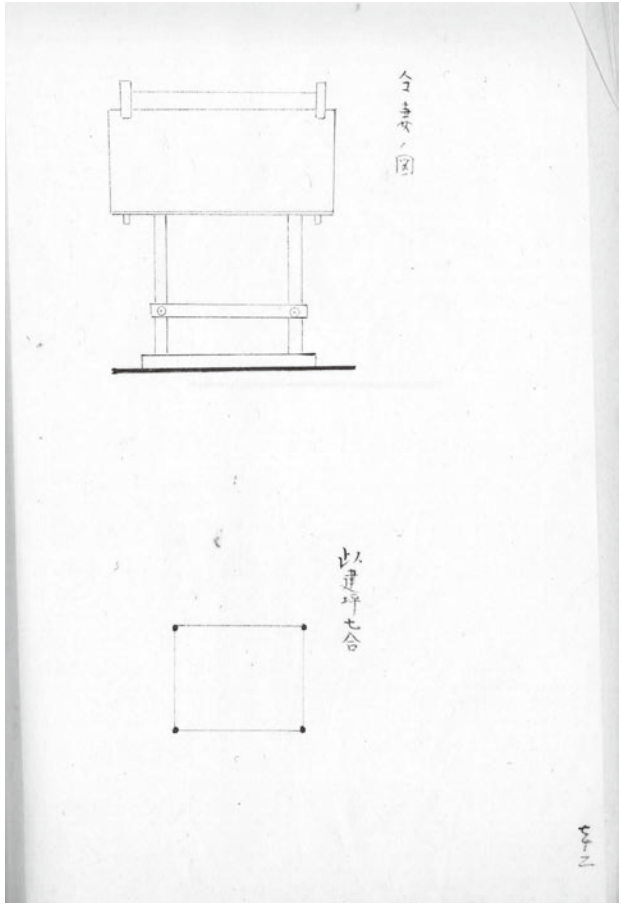
此建坪　壱坪壱合七勺

（140）　末社児安社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年炎上后旧政府ノ御改造、其当時ノ費額銀壱貫五百目
~~本冨御改造ト全シ~~
明治七年旧教部省ヘ伺済ノ上、諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(141) 仝 妻ノ図



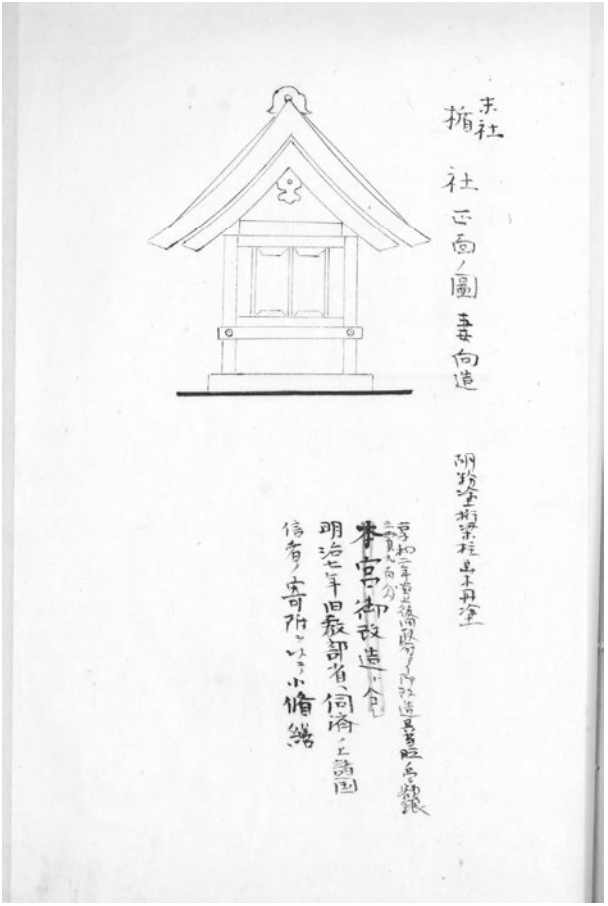
七十二

此建坪　七合

（142）

末社楯社　正面ノ図

妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年炎上後旧政府ヨリ御改造、其当時ノ費額銀

三貫九百匁

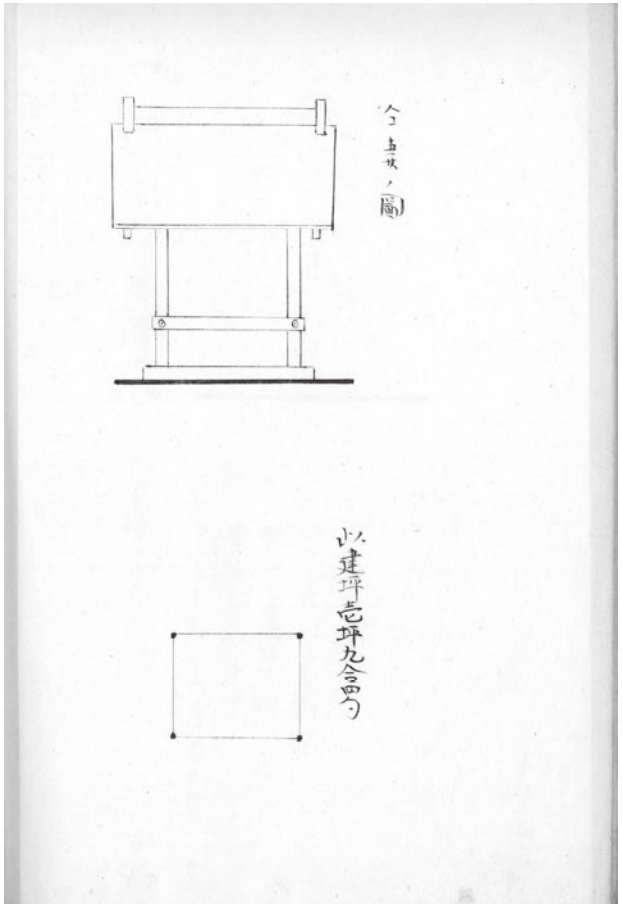
~~本宮御改造ニ付~~

明治七年旧教部省ヘ伺済ノ上諸国

信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(143)

仝　妻ノ図

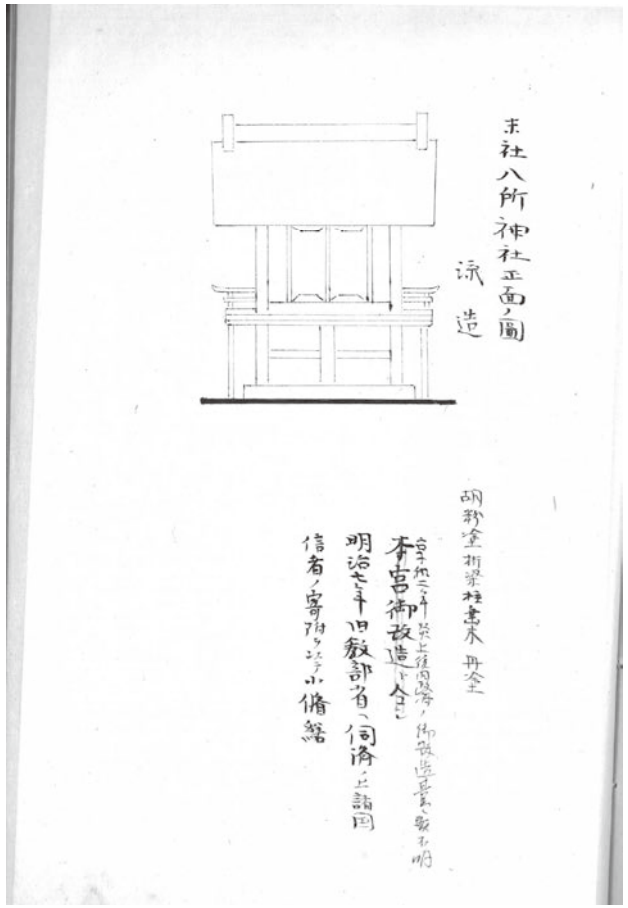


此建坪　壱坪九合四勺

(144)

末社八所神社　正面ノ図

流造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年炎上後旧政府ノ御改造、其費額不明

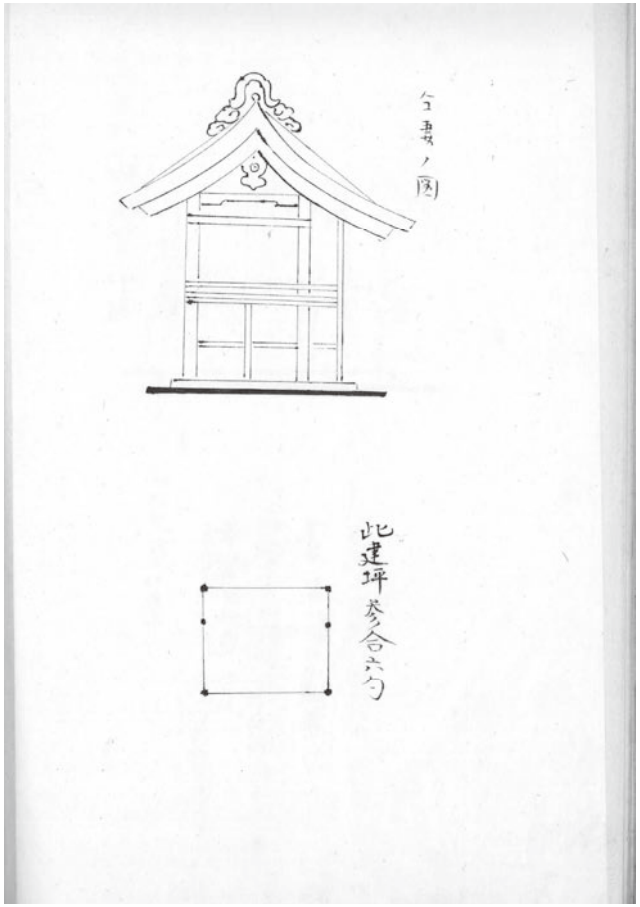
~~本宮御改造ト仝シ~~

明治七年旧教部省ヘ伺済ノ上諸国

信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(145)

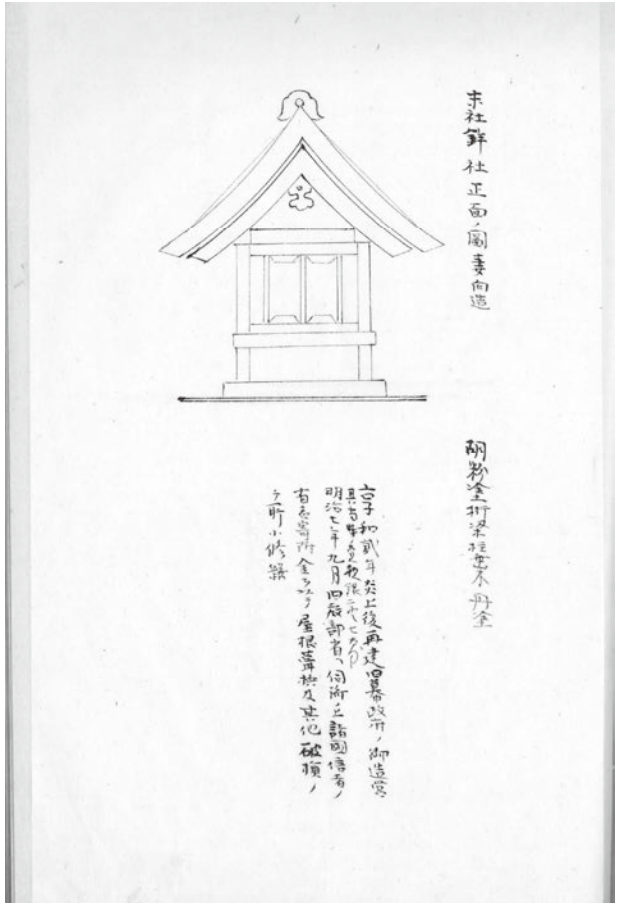
仝　妻ノ図



此建坪　参合六勺

（146）

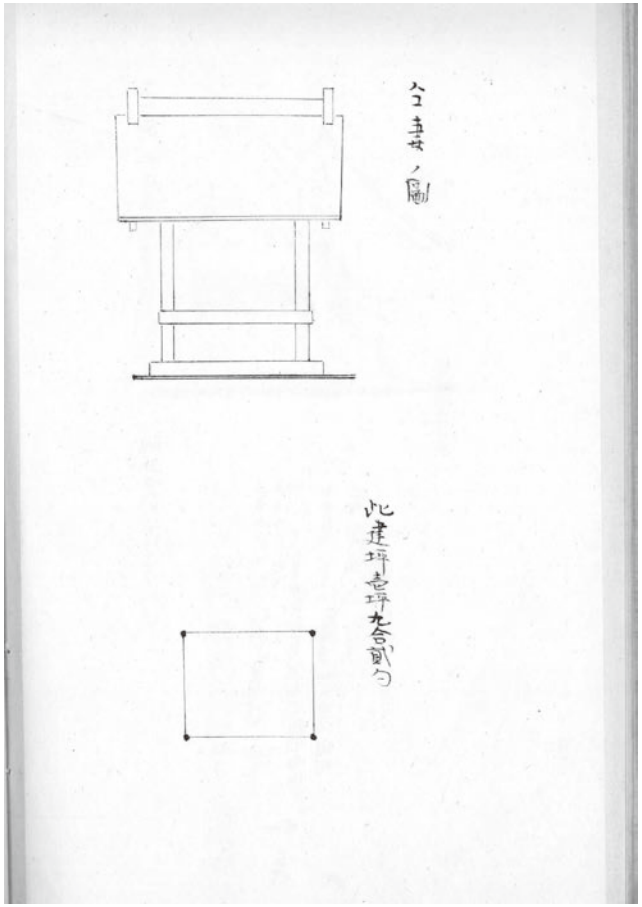
末社鉾社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和弐年炎上後再建、旧幕政府ノ御造営
其当時ノ費額銀二貫七百匁
明治七年九月旧教部省ヘ伺済ノ上、諸国信者ノ
有志寄附金ヲ以テ屋根葺換及其他破損ノ
ケ所小修繕

(147)

仝　妻ノ図

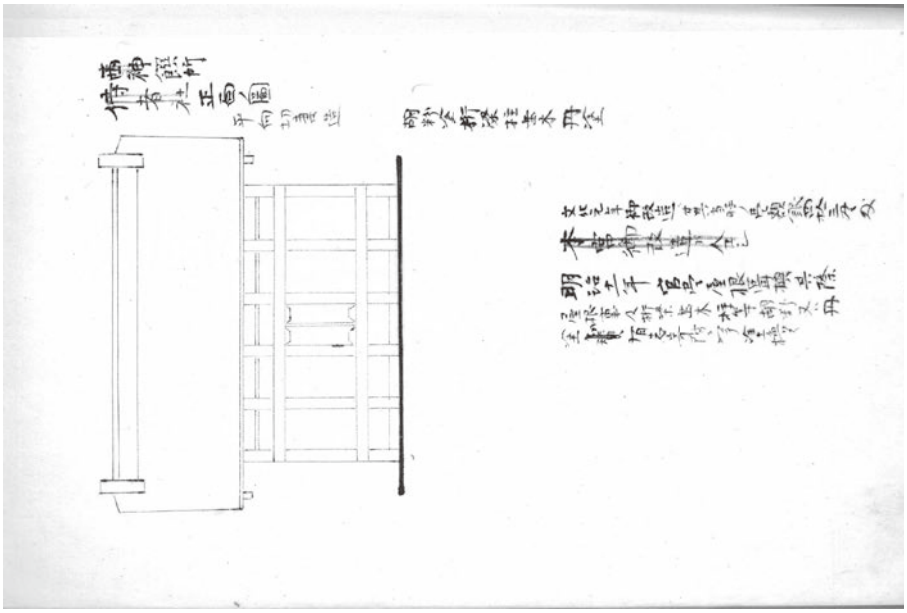


此建坪　壱坪九合弐勺

（148）

車神饌所　~~俳諧社~~　正面ノ図

平向切妻造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



文化元年御改造ニ付其当時ノ費額銀四拾三貫匁

~~本宮御改造ト今ノ~~

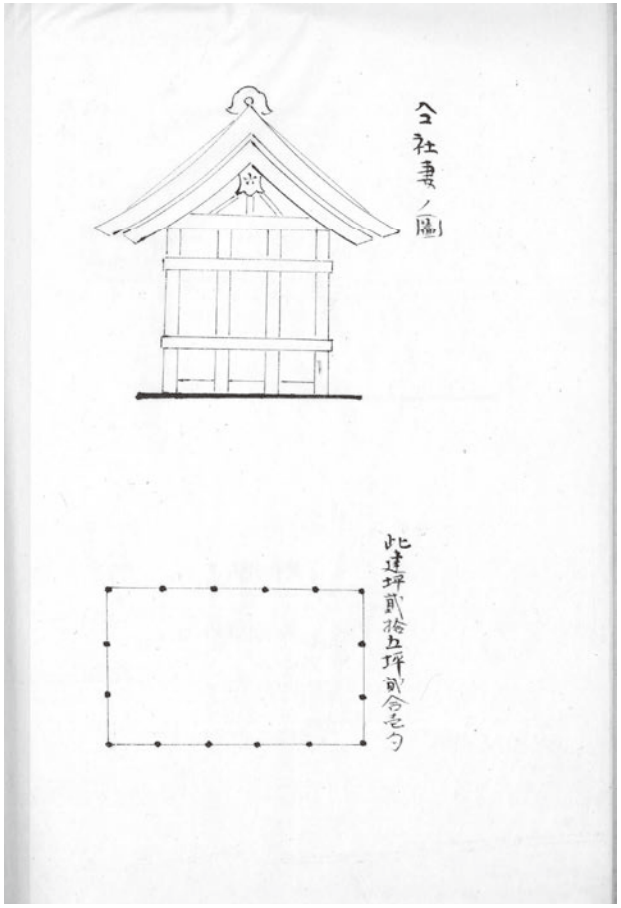
明治十一年官費屋根葺換、其際

屋根裏及桁梁垂木柱等胡粉又ハ丹

ハ

塗~~々~~替ハ有志寄附ヲ以テ塗換ス

(149) 仝社　妻ノ図

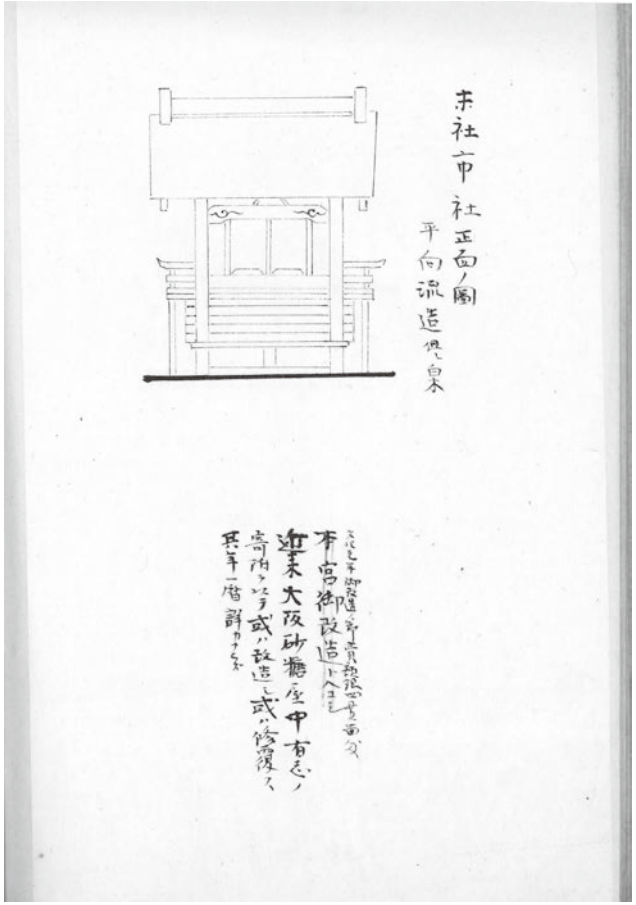


此建坪　弐拾五坪弐合壱勺

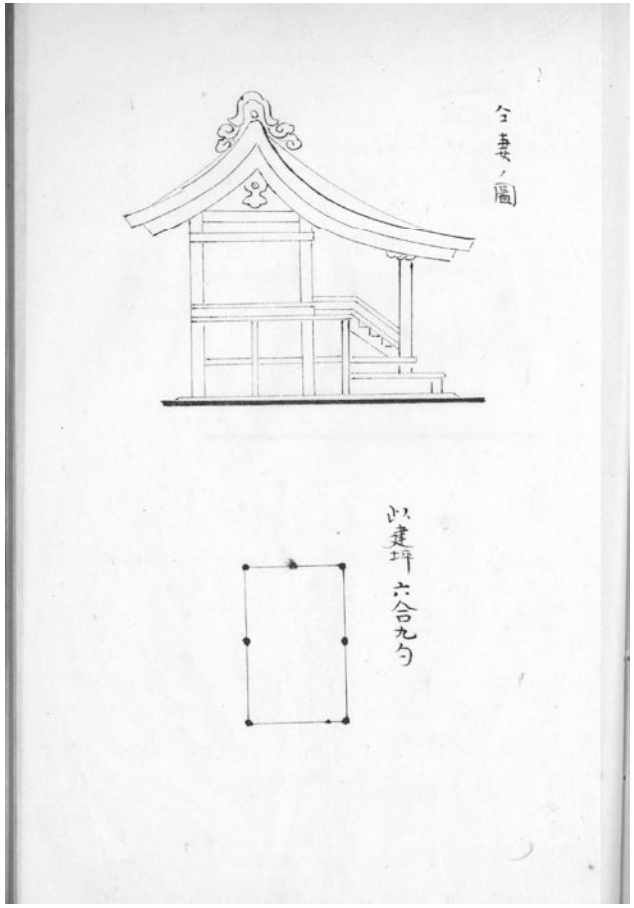
(150) 侍者社鳥居
木造、丹塗

本宮御改造ト仝シ
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(151) 末社市社　正面ノ図
平向流造、但シ白木

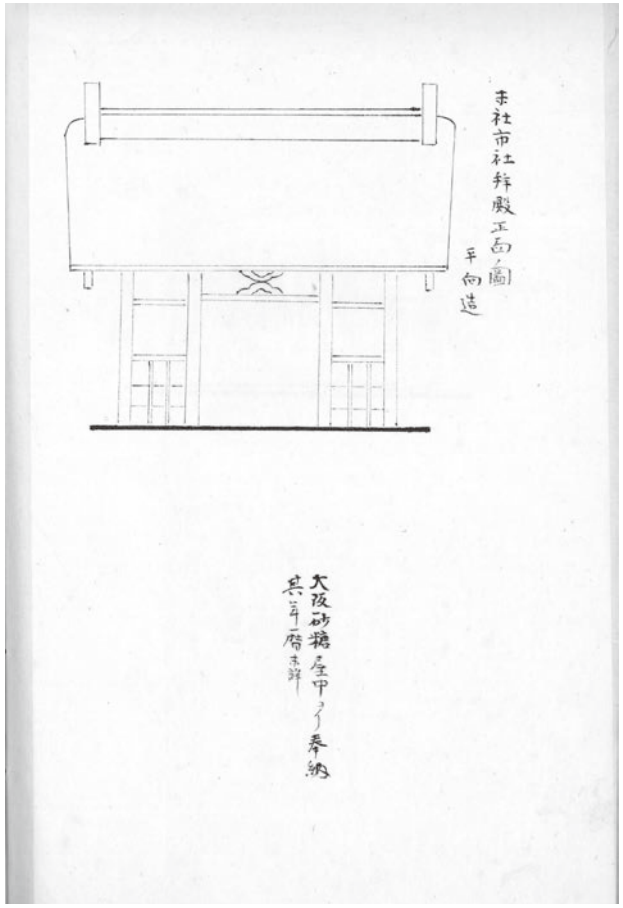


(152) 仝　妻ノ図



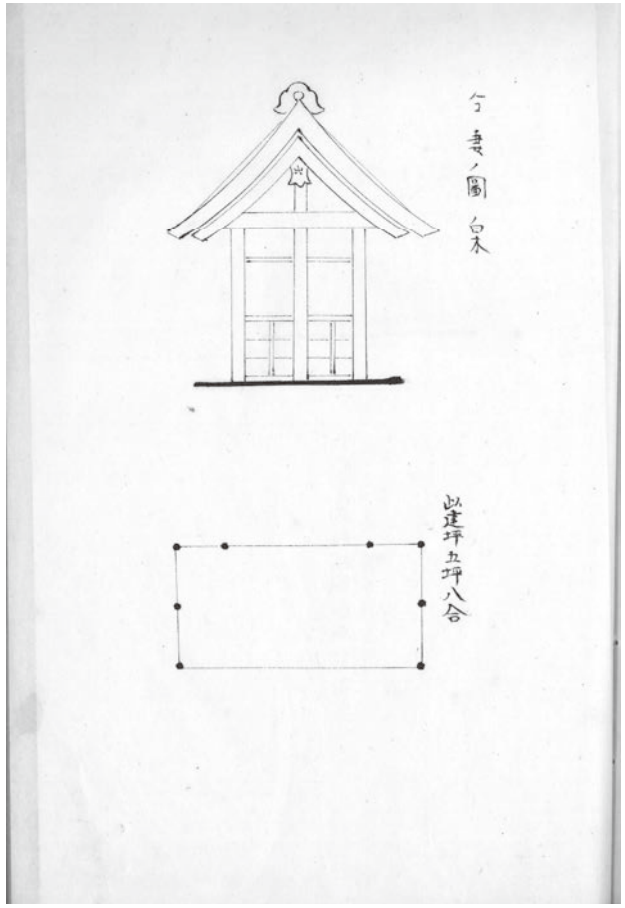
此建坪　六合九勺

(153) 末社市社拝殿　正面ノ図
平向造



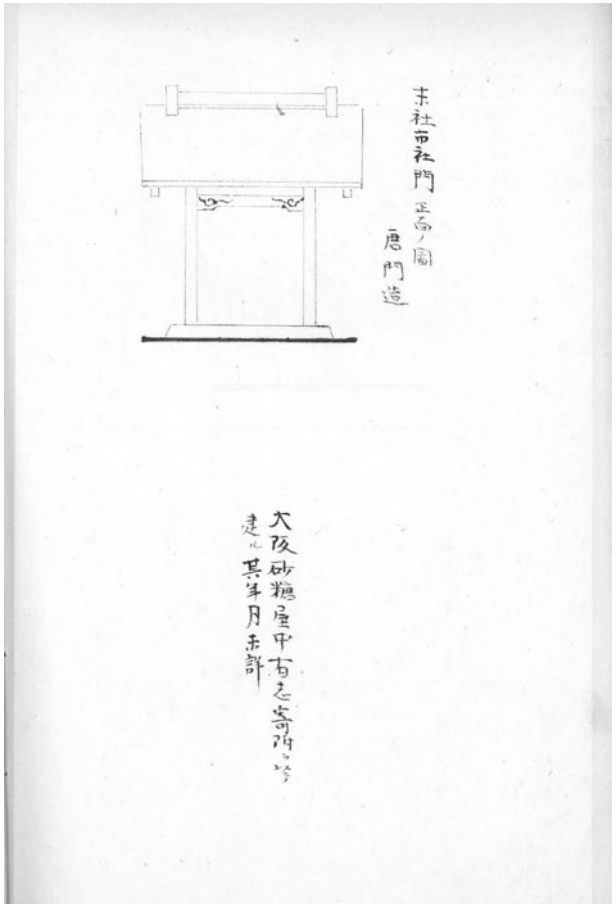
大阪砂糖屋中ヨリ奉納
其年暦未詳

(154) 仝　妻ノ図
白木



此建坪　五坪八合

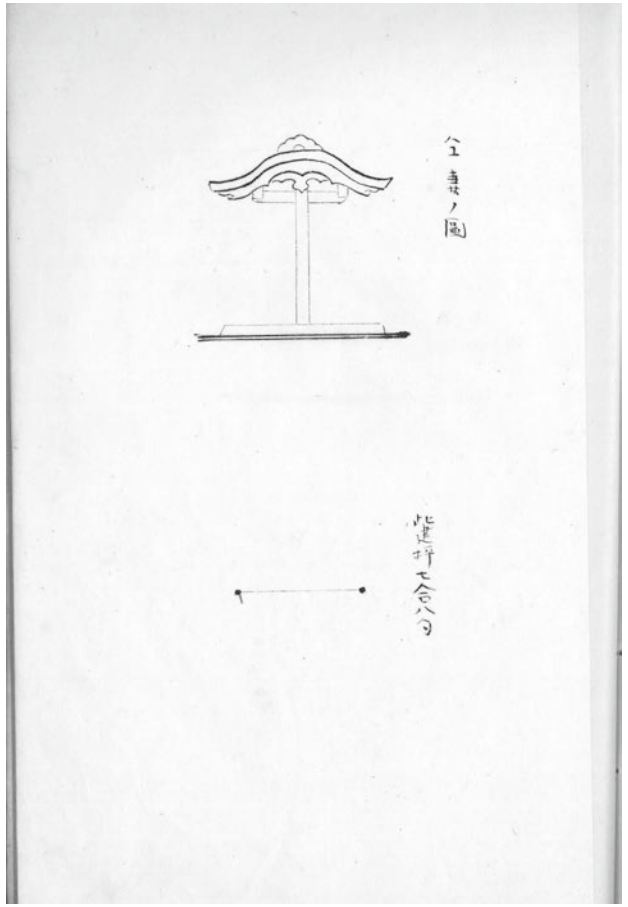
(155) 末社市社門　正面ノ図
唐門造



大阪砂糖屋中有志寄附ヲ以テ
建ル、其年月未詳

(156)

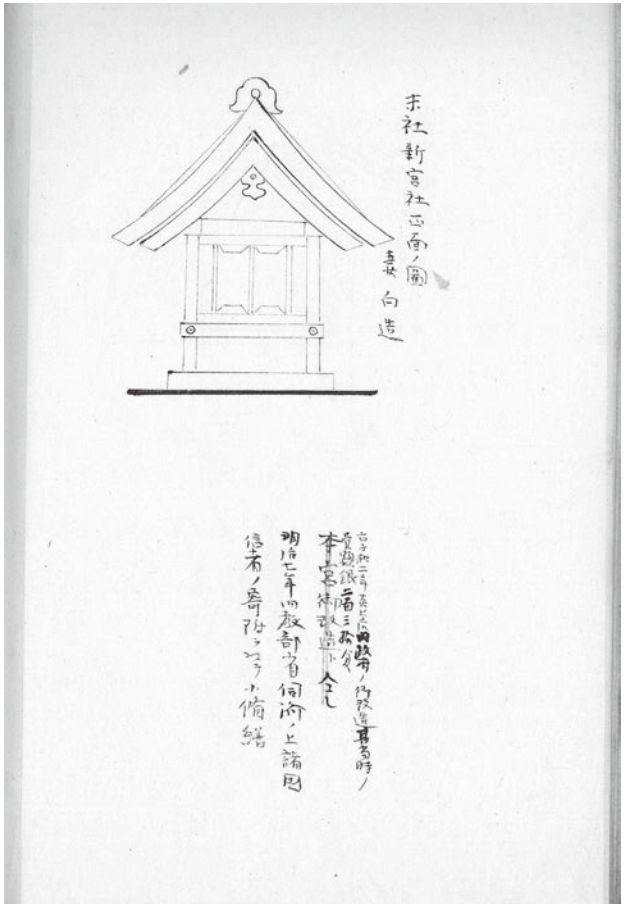
仝　妻ノ図



此建坪　七合八勺

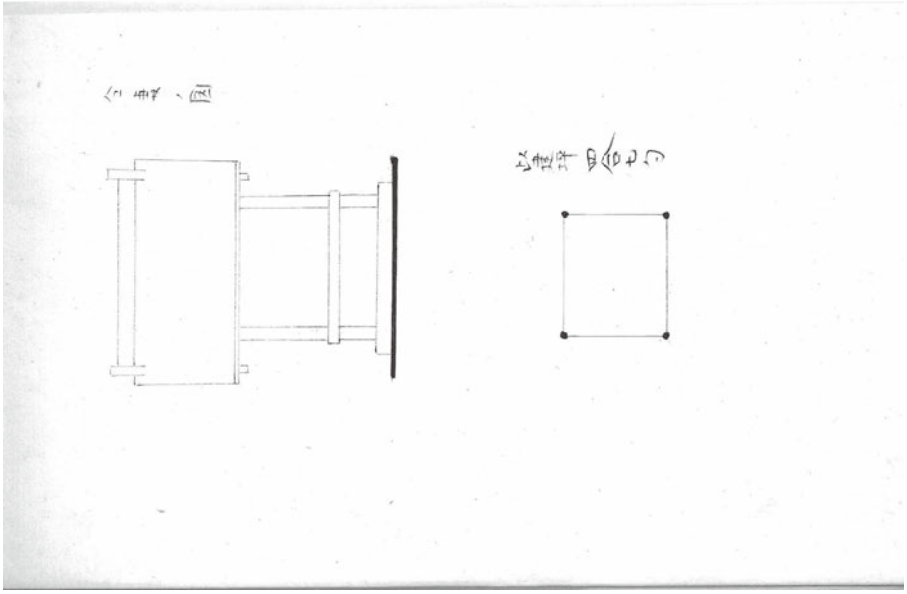
(157)

末社新宮社　正面ノ図
妻向造



享和二年炎上后旧政府ノ御改造、其当時ノ
費額銀二百三拾匁
~~本宮御改造ト全シ~~
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

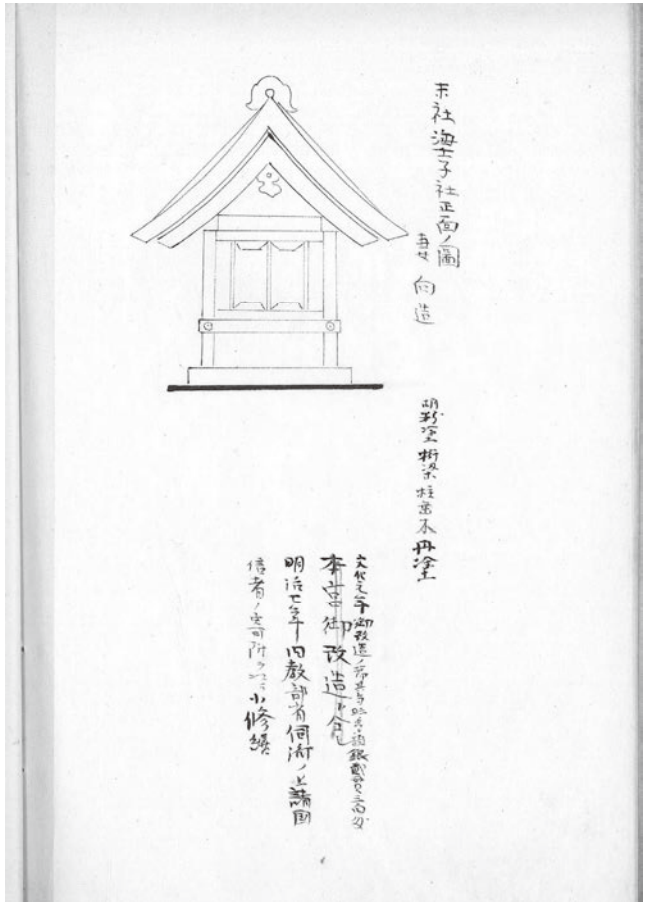
（158）　全　妻ノ図



此建坪　四合七勺

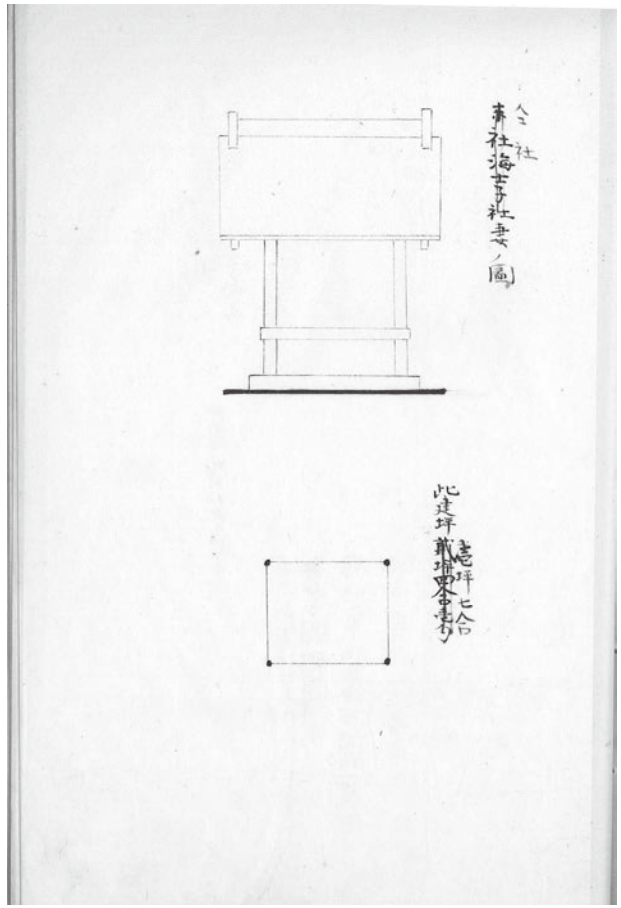
（159）

末社海士子社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



文化元年御改造ノ節、其当時費額銀弐貫三百匁
~~本宮御改造ト全シ~~
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

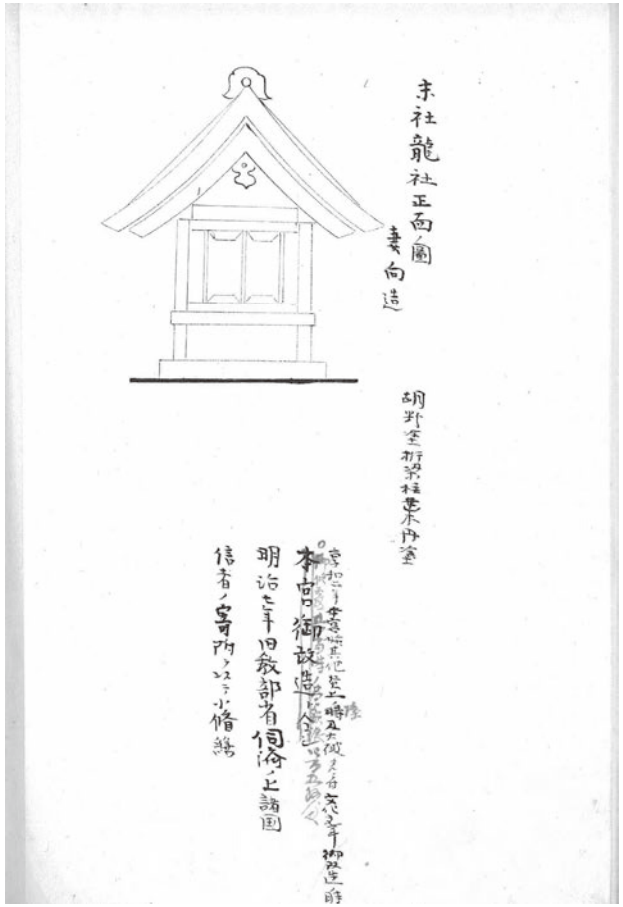
(160) 企社 末社海士之社 妻ノ図



壱坪七合

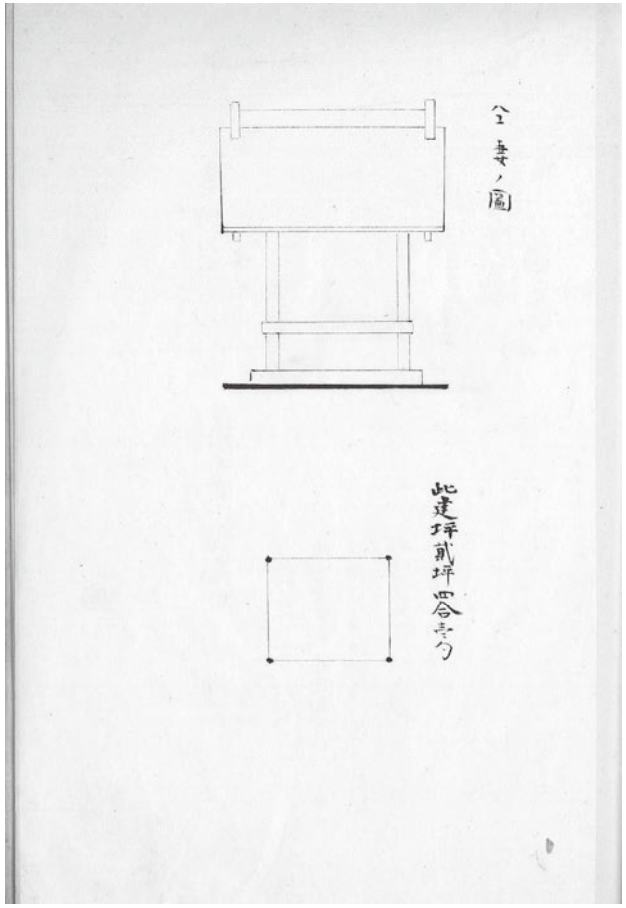
此建坪 弐坪四合壱勺

（161）末社龍社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



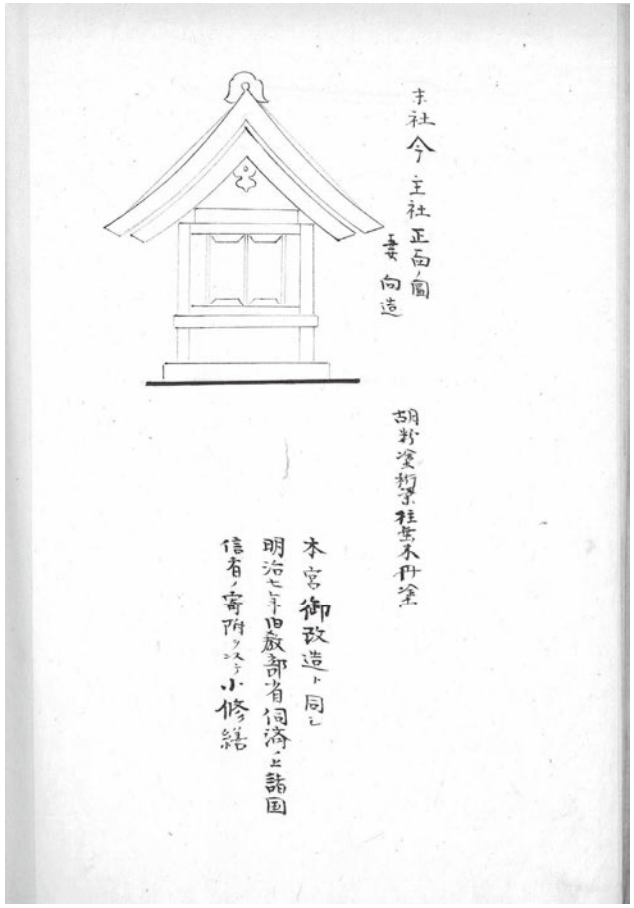
『際』

(162) 仝　妻ノ図



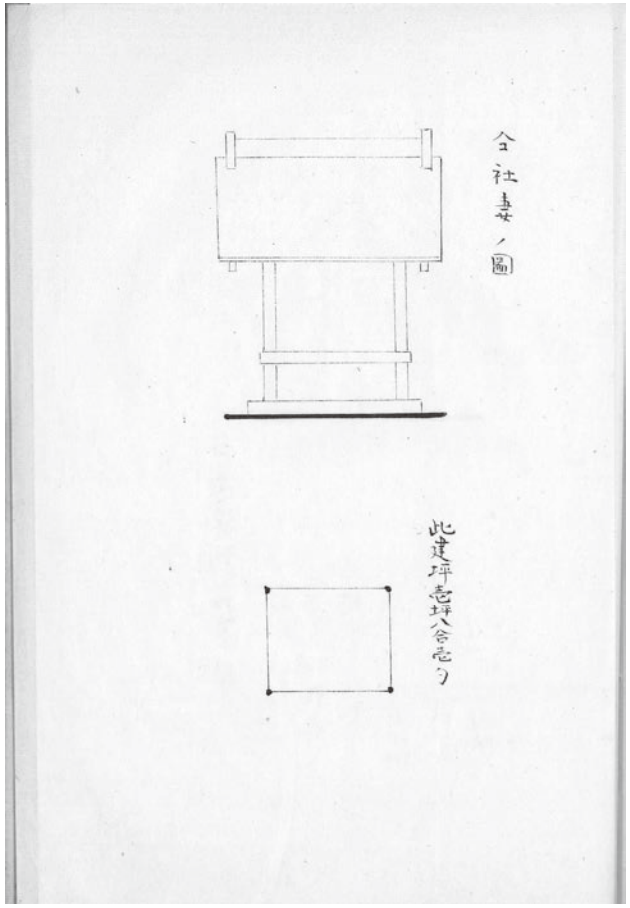
此建坪　弐坪四合壱勺

(163) 末社今主社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



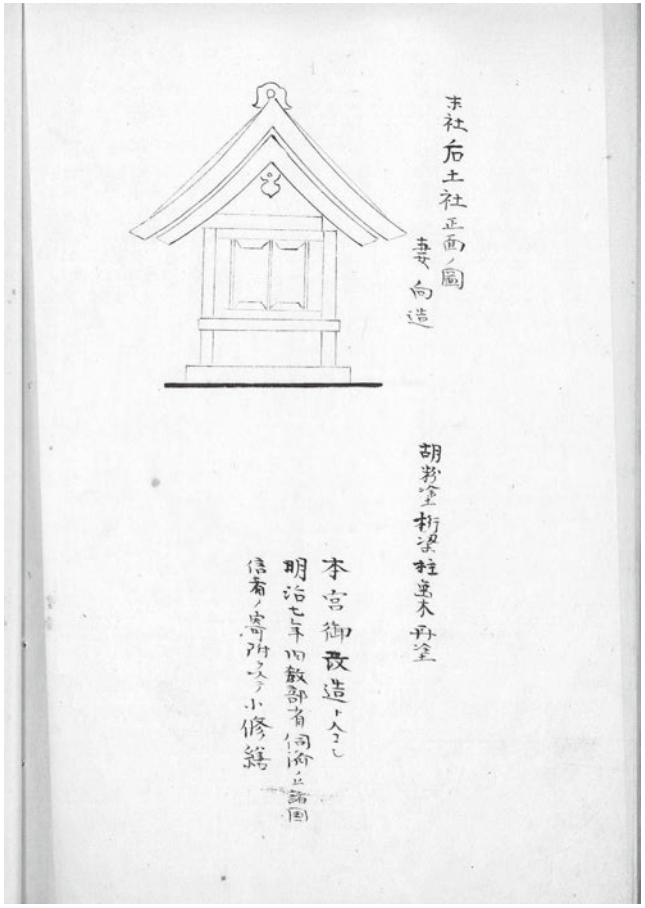
本宮御改造ト同シ
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(164) 仝社　妻ノ図



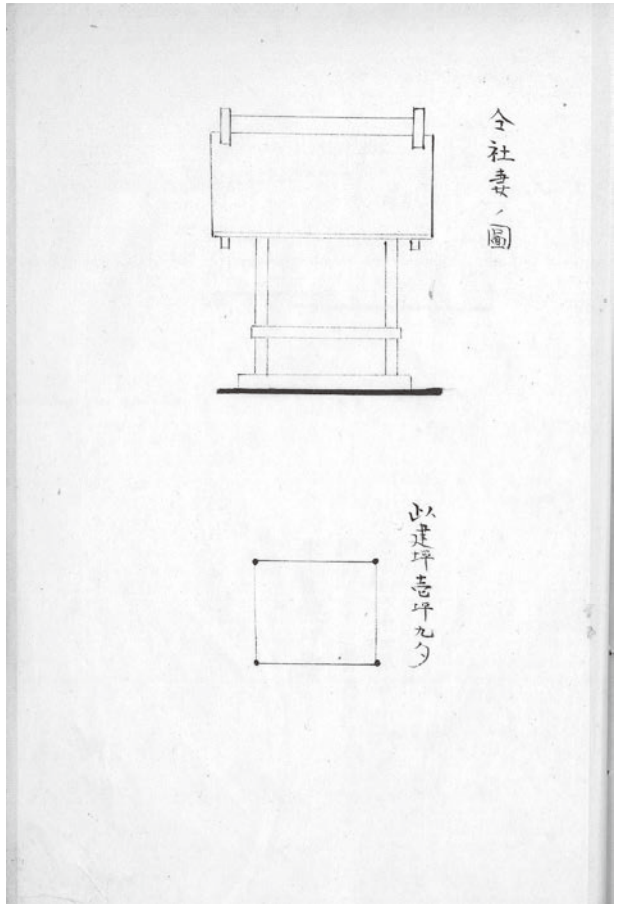
此建坪　壱坪八合壱勺

(165) 末社后土社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



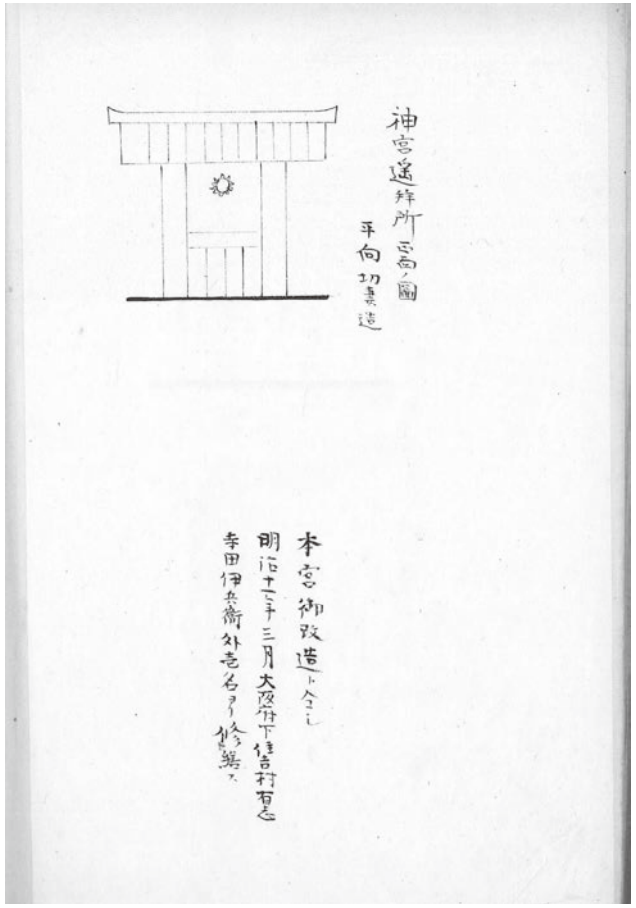
本宮御改造ト仝シ
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(166) 仝社　妻ノ図



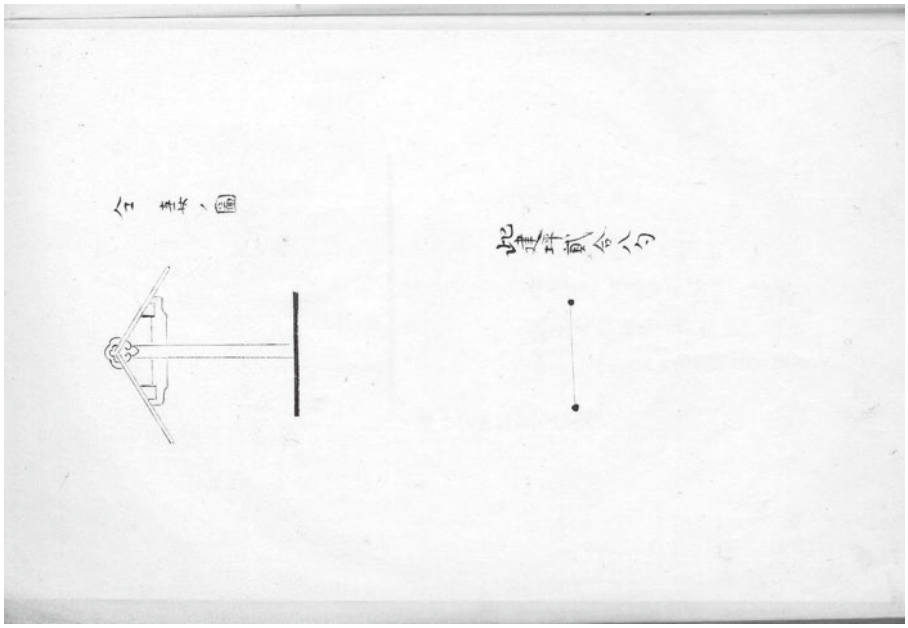
此建坪　壱坪九勺

(167) 神宮遥拝所　正面ノ図
平向切妻造



本宮御改造ト仝シ
明治十一年三月大阪府下住吉村有志
寺田伊兵衛外壱名ヨリ修繕ス

（168）　全　妻ノ図

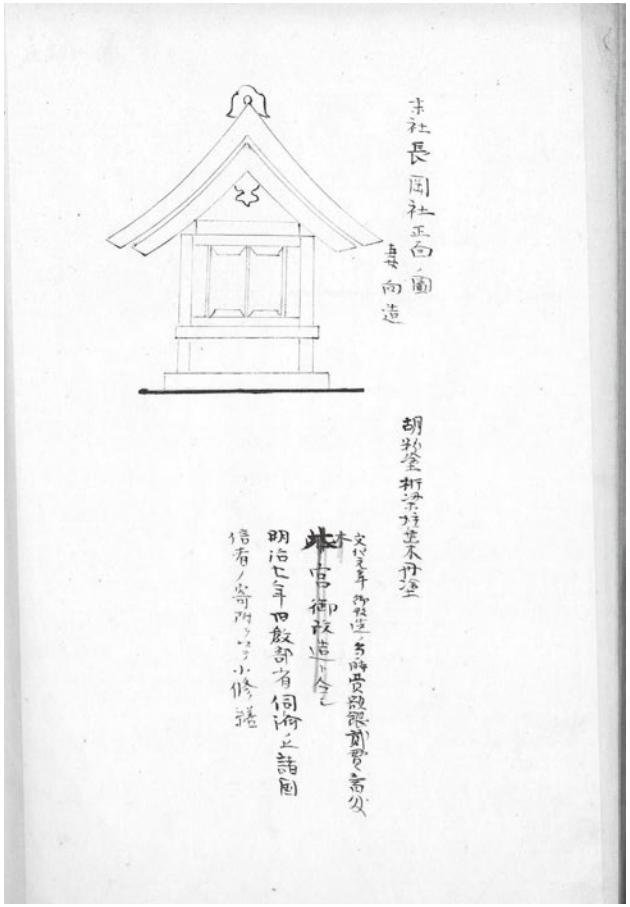


此建坪　弐合八勺

（169）

末社長岡社　正面ノ図

妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



文化元年御改造ノ当時、費額銀弐貫三百匁

本

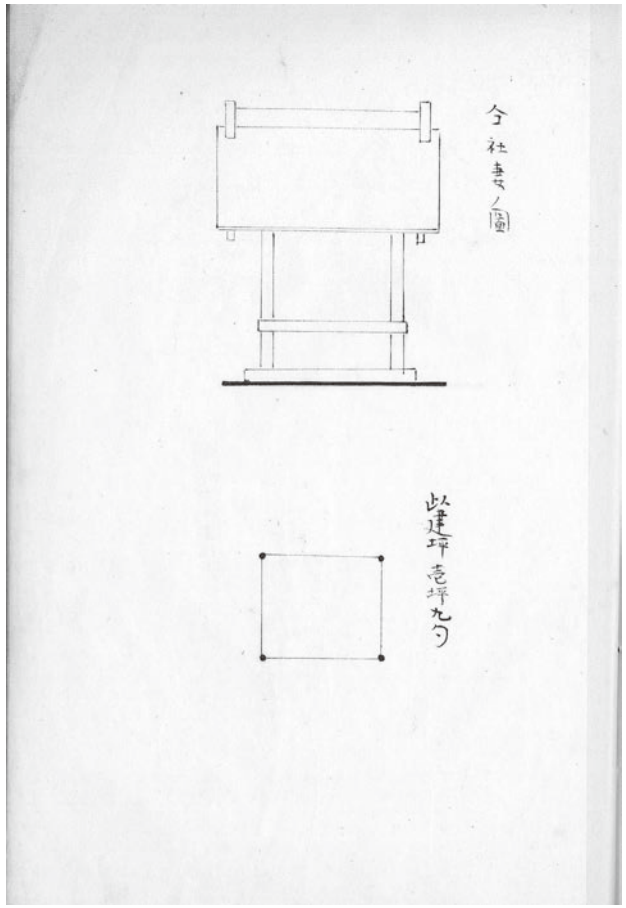
~~本宮御改造ト今ヒ~~

明治七年旧教部省伺済ノ上諸国

信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(170)

仝社　妻ノ図

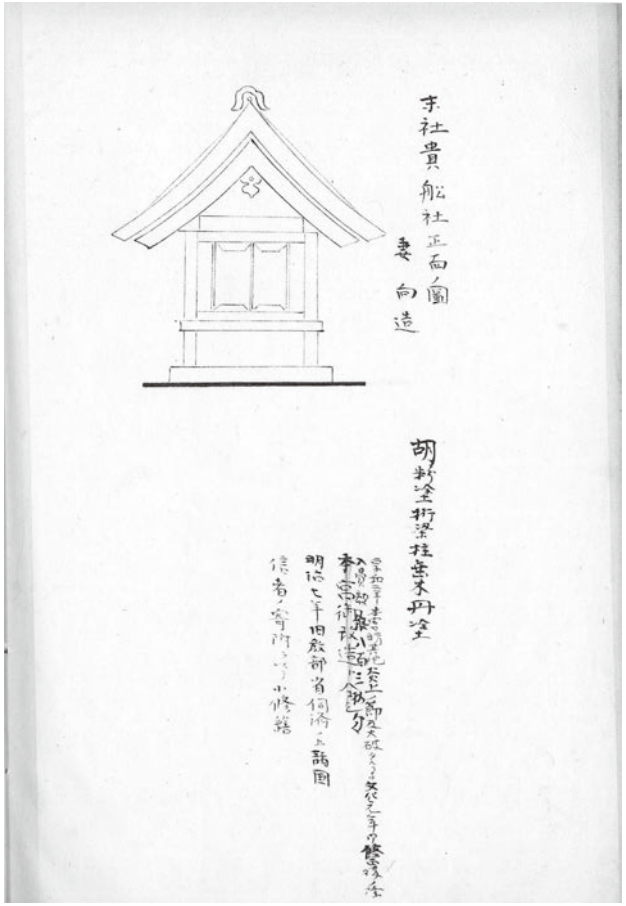


此建坪　壱坪九勺

(171)

末社貴船社　正面ノ図

妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



享和二年本宮昉其他炎上ノ節及大破タルニ付、文化元年御修覆ノ際

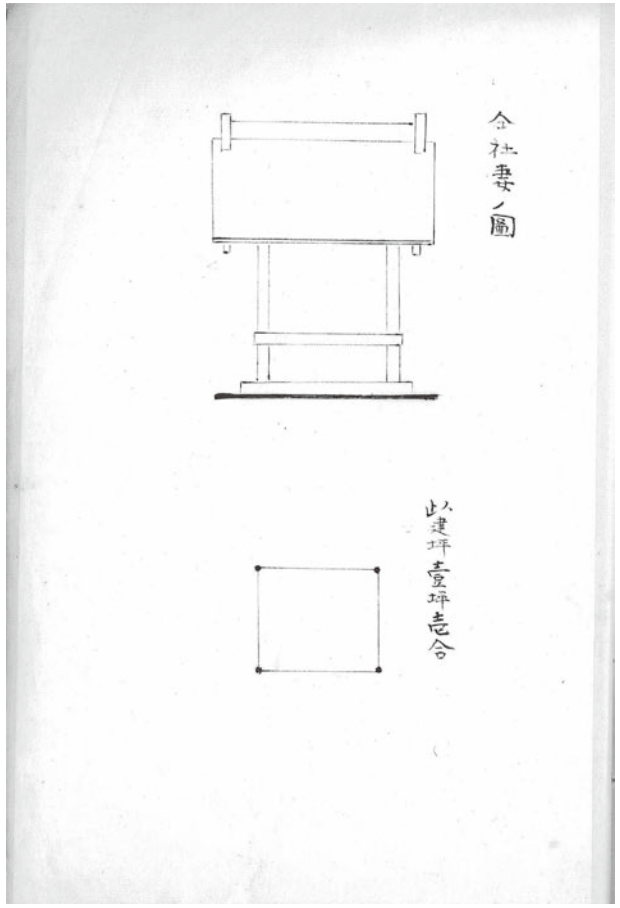
入費額銀八百三拾匁

本宮御改造ハ全シ

明治七年旧教部省伺済ノ上諸国

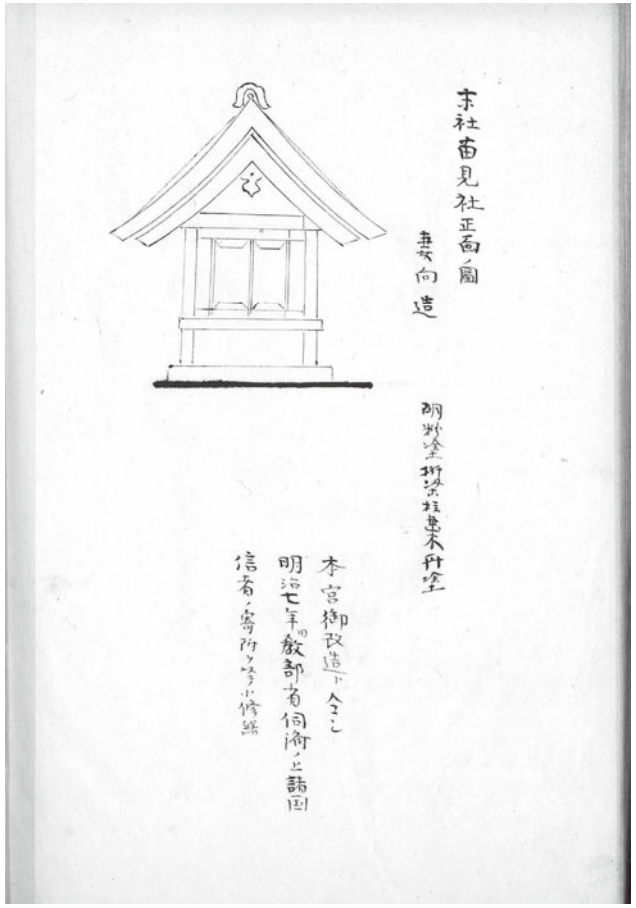
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(172) 仝社　妻ノ図



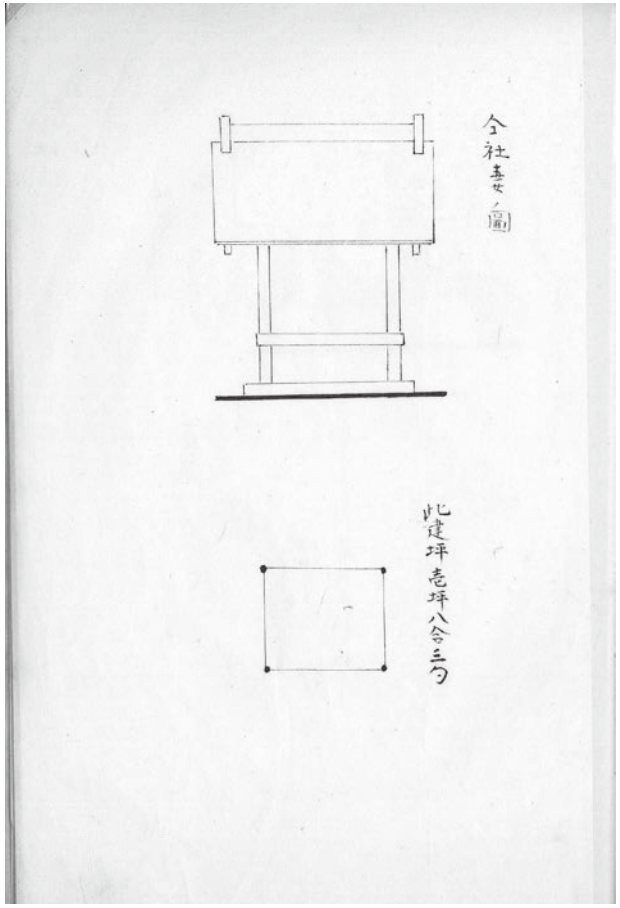
此建坪　壱坪壱合

(173) 末社苗見社　正面ノ図
妻向造、胡粉塗、桁梁柱垂木丹塗



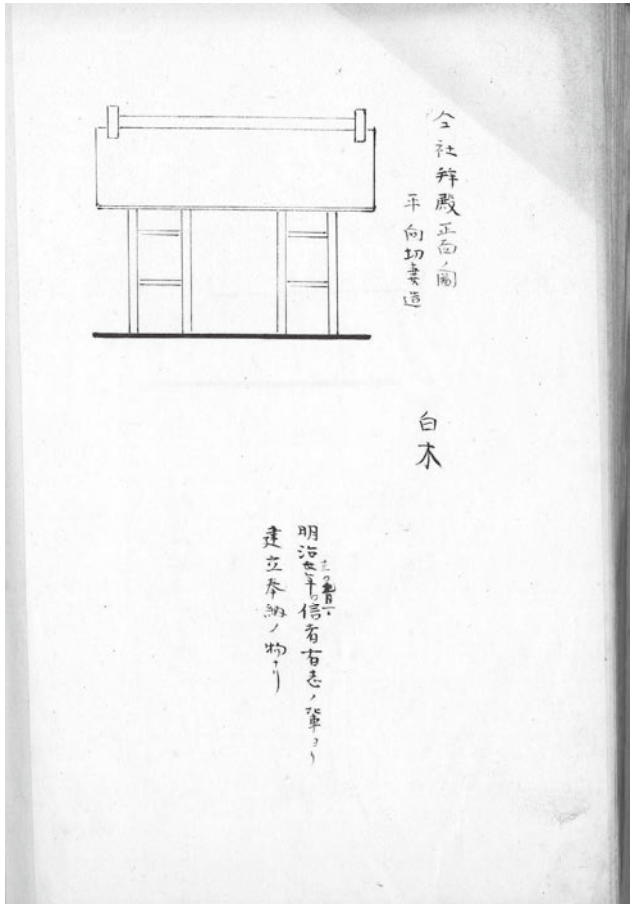
本宮御改造ト仝シ
明治七年旧教部省伺済ノ上諸国
信者ノ寄附ヲ以テ小修繕

(174) 仝社　妻ノ図



此建坪　壱坪八合三勺

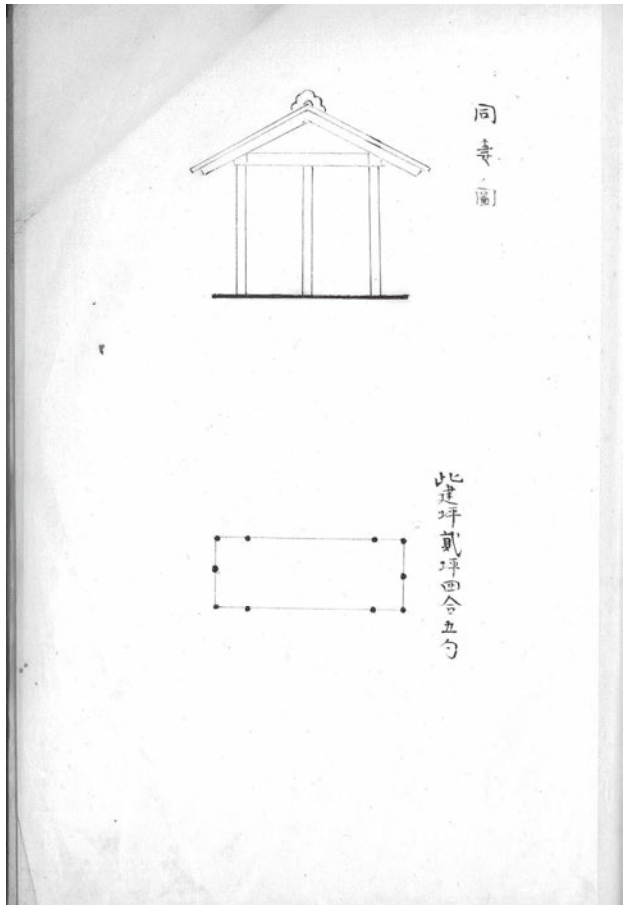
(175) 仝社拝殿　正面ノ図
平向切妻造、白木



十三
明治七年十一月一日信者有志ノ輩ヨリ
建立奉納ノ物ナリ

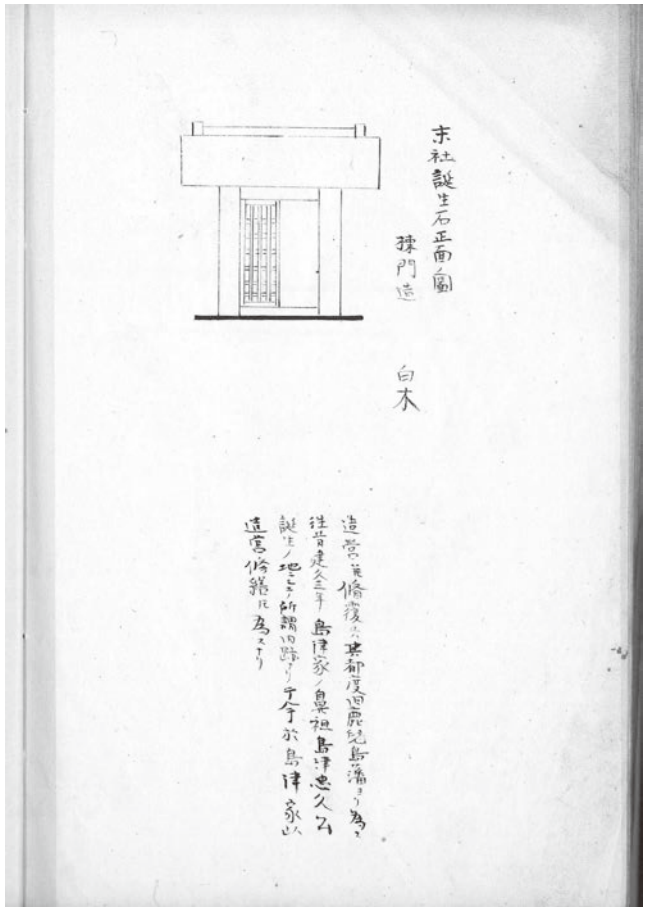
(176)

同　妻ノ図



此建坪　弐坪四合五勺

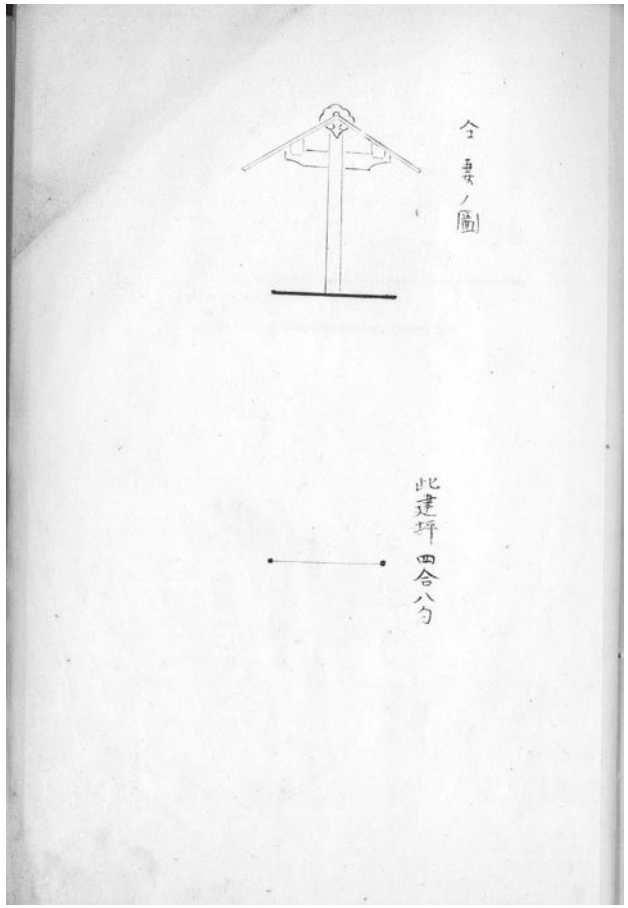
(177) 末社誕生石　正面ノ図
棟門造、白木



造営并修覆共其都度旧鹿児島藩ヨリ為ス
往昔建久三年島津家ノ鼻祖島津忠久公
誕生ノ地ニシテ所謂旧跡ナリ、于今於島津家以
造営修繕トモ為スナリ

(178)

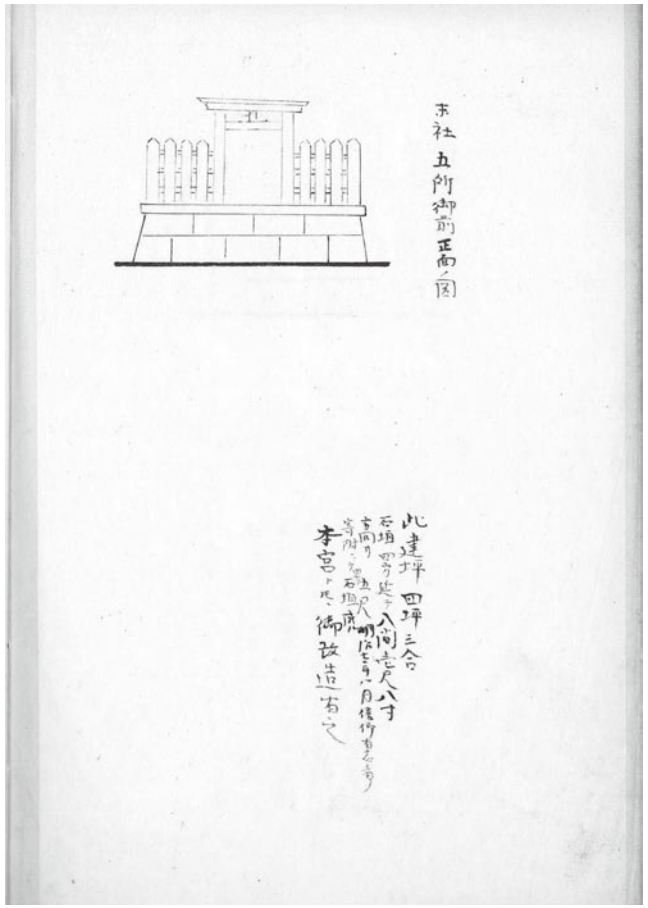
仝　妻ノ図



此建坪　四合八勺

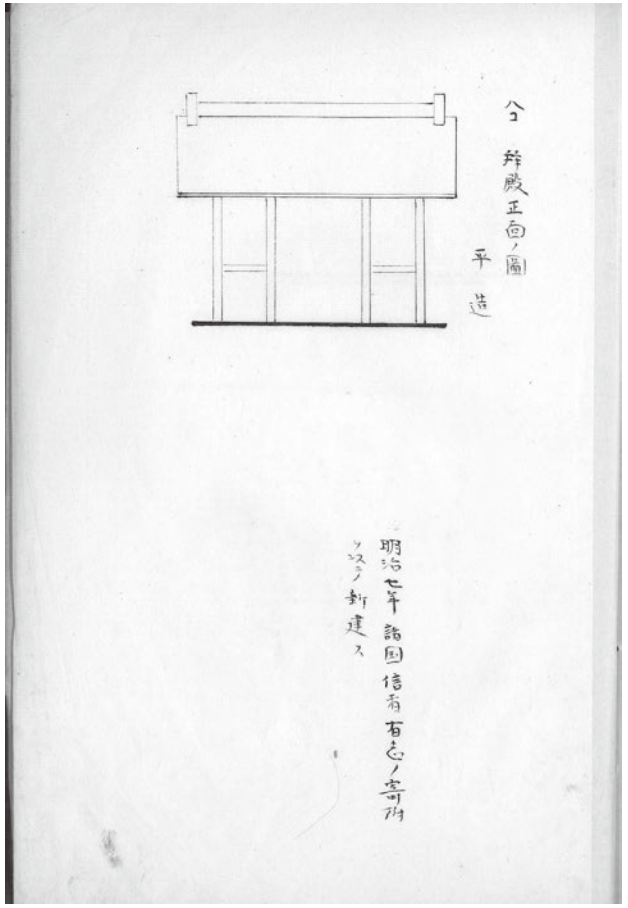
(179)

末社五所御前　正面ノ図



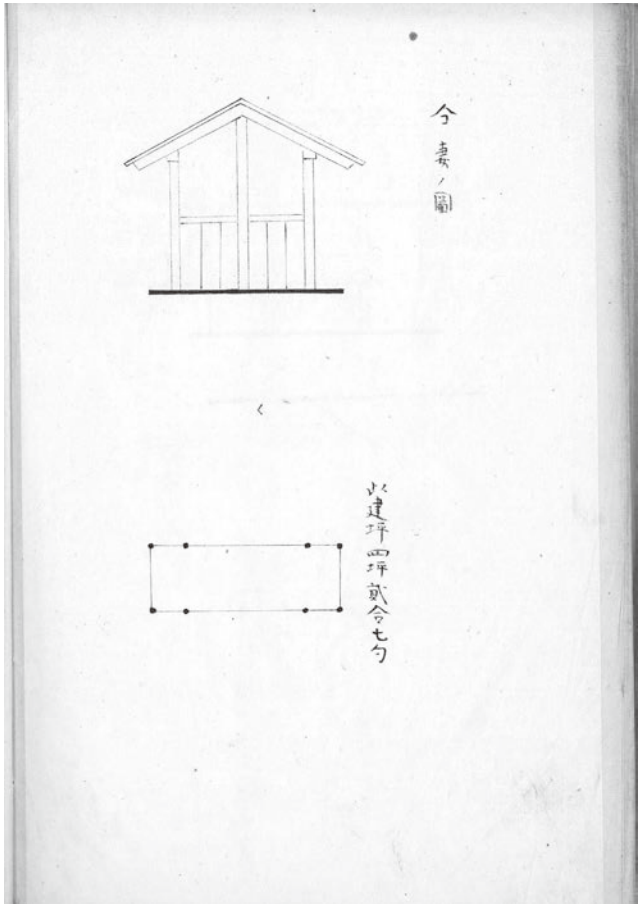
此建坪　四坪三合
石垣四方延テ八間壱尺八寸
高サ　五尺　明治七年八月信仰有志者ノ
寄附ニテ四方石垣成ル
本宮トトモニ御改造有之

(180) 仝拝殿　正面ノ図
平造



明治七年諸国信者有志ノ寄附
ヲ以テ新建ス

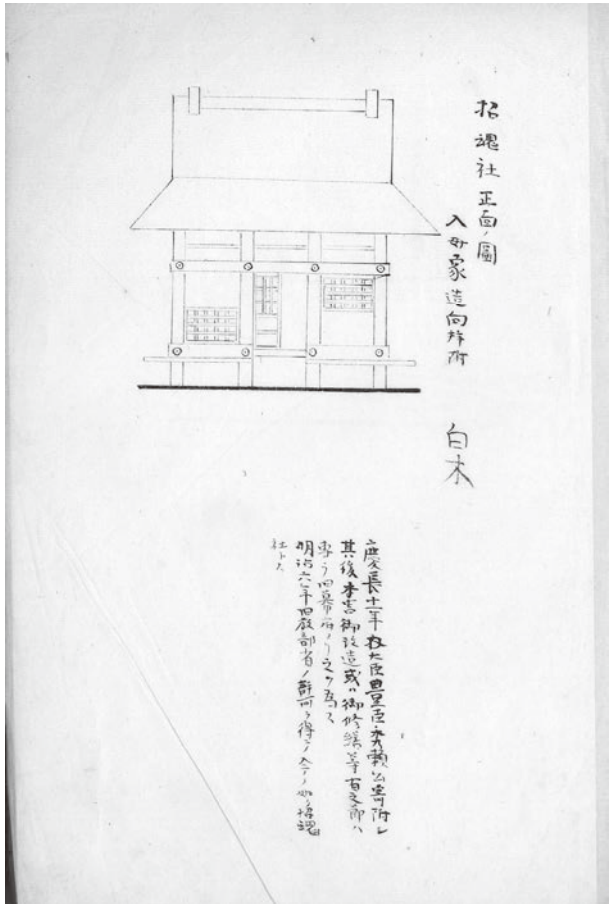
(181) 仝　妻ノ図



此建坪　四坪弐合七勺

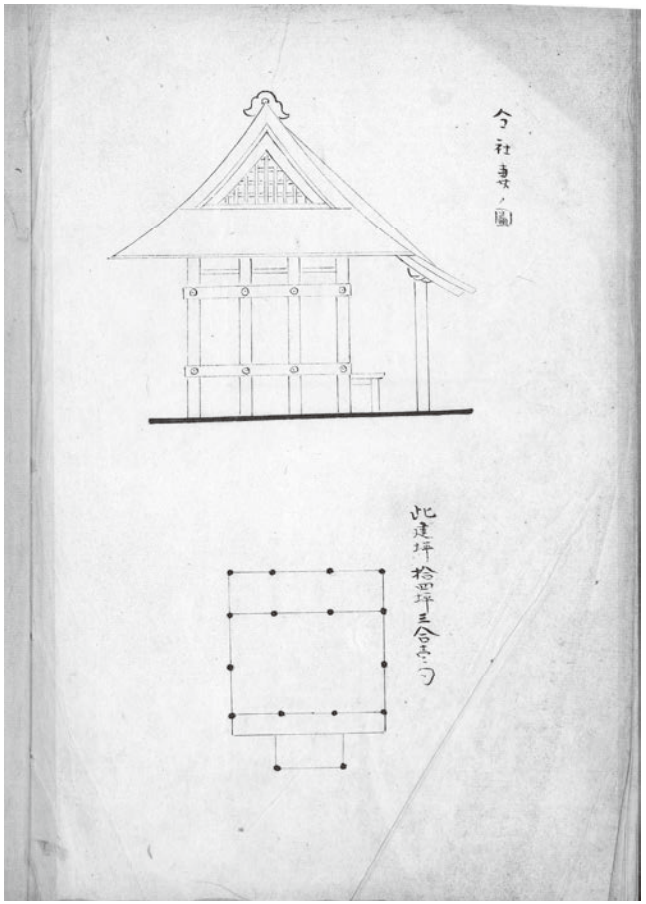
(182)

招魂社　正面ノ図
入母家造、向拝附、白木



慶長十一年内大臣豊臣秀頼公寄附シ
其後本宮御改造或ハ御修繕等有之節ハ
専ラ旧幕府ヨリ之ヲ為ス
明治六年旧教部省ノ許可ヲ得テ今ノ如ク招魂
社トス

(183) 仝社　妻ノ図



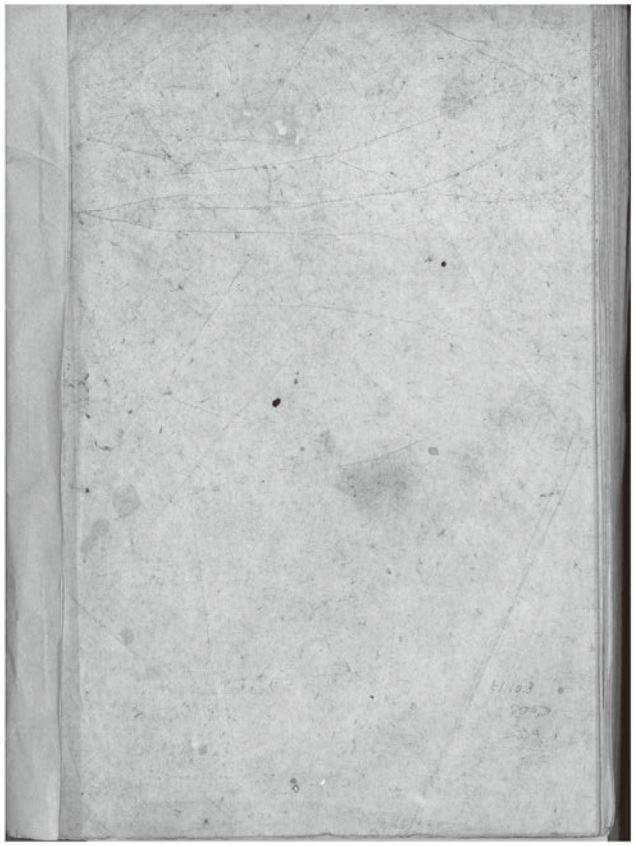
此建坪　拾四坪三合壱勺

(184) 招魂社鳥居
石造

高サ　壱間三尺五寸
巾　壱間弐尺五寸

（185）

（裏表紙）



『住吉松葉大記』からみた近世以前の住吉神宮寺

―その創建と伽藍景観―

櫻木　潤

はじめに

住吉大社の景観変遷を象徴的に示すのは、二層の東西両塔が聳え立つ神宮寺の存在であろう。明治以前の絵図には、本堂・東塔・西塔・法華三昧堂・常行三昧堂・大日堂・求聞持堂・護摩堂などのほか総棟数二十四を誇る壮麗な伽藍が描かれ、往時を偲ばせるが、明治初期の廃仏毀釈によって忽然と境内から姿を消してしまう。

住吉神宮寺については、絵図以外の史料が知られていないこともあり、文献学的研究はほとんどなされていない(1)。本稿では、十八世紀初頭に成立したとされる『住吉松葉大記』（以下、『松葉大記』）をもとに、近世以前の住吉神宮寺について考察したい(2)。

住吉神宮寺の創建

住吉神宮寺の由緒については、『松葉大記』巻第二十「寺院部十七」の冒頭に、次のように記される。

住吉大神宮勘文ニ曰、神宮寺ハ孝謙天皇天平宝字二年戊戌依テ霊告ニ経ニ始メ之ヲ云云、

「住吉大神宮勘文」（以下、「勘文」）が伝えるところによると、住吉神宮寺は、天平宝字二年（七五八）に霊告によって創建されたという。この「勘文」は、『松葉大記』巻第十・十一「勘文部十」に全文が載せられている。『松葉大記』の著者梅園惟朝によれば、「勘文」は、「応永・正長ノ間タ」（一三九四～一四二九年）に「髪徒の手」、すなわち僧侶によって書かれたものとする。したがって、「勘文」の内容は、中世の住吉神宮寺を知る貴重な手がかりとなる。

神宮寺については、巻第十一の「一、神宮寺之事」に、先にみた創建に関する記載につづいて、本尊や日々の勤行、年間の法会が記されている。注目したいのは、そうした記述の後に「今按スルニ」として述べられる惟朝の解釈である。そこには、神宮寺の別名が「新羅寺トモ云フ」とある。その由来については「別書」にもとづき、住吉大神が神功皇后の先鋒として「彼ノ国」を征伐した際に、怨敵といえども甚だ憐れむところがあって住吉に寺院を建立し、その「亡賊」のために法事を設けて冥福を祈ったことにあるとする。しかし、神宮寺の創建について、惟朝は、「勘文」に伝える通り「本朝仏法ノ盛ンナル聖武・孝謙ノ御時」に、「諸社ニ寺観ヲ接」することが起こったので、「天平宝字ノ比ナルベシ」と結論づけている。また、創建に関わる霊告について、『古今著聞集』の「住吉大明神ノ御託宣」を挙げている。

『古今著聞集』は、建長六年（一二五四）に橘成季によって著された全二〇巻の説話集

である。惟朝のいう「住吉大明神ノ御託宣」は、巻第一「神祇第一」の第五番目にある「慈覚大師如法経を書きける時住吉神託宣の事幷びに住吉社由来の事」とする説話にある託宣のことである。この説話の前半部は、住吉神宮寺の創建についての興味深い内容を伝えており、長文であるが引用する(3)。

慈覚大師如法経かきたまひける時、白髪の老翁杖にたづさはりて、山によぢのぼりけるが、「あなくるし。内裏の守護といひ、此如法経の守護といひ、年はたかく成てくるしう候ぞ」との給けり。「たが御渡候ぞ」とたづね申されければ、「住吉神也」とぞ名乗給ける。皇威も法威もめでたかりけるかな。住吉は四所おはします。一御前は高貴徳王大菩薩也。乗ル龍。御託宣云、「我是兜率天内高貴徳王菩薩也。為レ鎮二護国家一、垂二跡於当朝墨江辺一、松林下久送二風霜一。時有二受苦一。自当二北方一有二一勝地一。願奏二達公家一、建二立一伽藍一、転二法輪一云々」。これによりて神宮寺をば建立せられけるなり。（後略）

慈覚大師円仁が、一定の規則に従って法華経を書写していた時に、白髪の老翁が杖に寄りかかりながら比叡山に登ってきたところ、「ああつらい。内裏の守護といい、この法華経書写の守護といい、高齢になってつらくなりました」という。円仁が老翁は誰かと問うと、「住吉の神である」と名乗った。住吉には四柱の神が奉祀され、そのうち第一の御前は高貴徳王大菩薩であるが、老翁は「私は、弥勒菩薩がいる兜率天内の高貴徳王菩薩である。国家を鎮護するために墨江に垂迹し、松林の下で長らく月日を送っていたが、苦しみを受けることがあった。社の北方に、すぐれた土地がある。朝廷に奏達して伽藍を建立し、仏法を広めてほしい。」との託宣を発した。これによって神宮寺が建立されたのである、ということになろう。

『古今著聞集』が伝える住吉神宮寺円仁開創説や、一御前が高貴徳王大菩薩の垂迹であることについては稿を改めて論じることにし、ここでは、惟朝が天平宝字二年の霊告を、ここにみえる住吉神の託宣として「所謂霊告トハ蓋シ是ヲ云フナルベシ」としたことをおさえておくことにとどめたい。しかし、この惟朝の解釈には無理があろう。この説話にある託宣は、円仁の頃、すなわち平安時代初期のことと伝わるものであり、おそらく惟朝もそれを分かっていたとみえ、一方で「縦ヒ霊告託宣無トテモ強テ当社ニモ宮寺ヲ置セ給フナルベシ」との解釈も示している。したがって、「勘文」にある神宮寺創建に関わる霊告は、不明とせざるを得ない。

以上、みてきたように、住吉神宮寺の創建については、①「別書」にもとづく新羅寺由来説、②「勘文」にもとづく天平宝字二年説、③『古今著聞集』にもとづく円仁開創説の三説があることが知られる。①・②については、その依拠する史料が明らかではなく、③については十三世紀の説話集が伝えるものであるため、創建に関する明確な年代は、今のところ不明とせざるを得ない。②については、『古今著聞集』にある託宣の後半部が、初期の神仏習合思想にほかならず、「勘文」にある霊告はこの思想にもとづく託宣を意味するとして、天平宝字二年という年代に妥当性を認める逵日出典氏の見解がある(4)。しかし、『古

今著聞集』が何に拠っているのかが明らかでない以上、そこにある託宣を奈良時代へ遡及することは慎重でなければならない。ただ、『伝述一心戒文』には、弘仁三年（八一二）九月に、最澄が、弟子光定をともなって「渡海願」を果たすために、住吉大神に一万灯を供して大乗経典を読んだことが記されている。また、『叡山大師伝』には、最澄が、弘仁五年に、「渡海願」を遂げるため筑紫国に赴き、造像や写経、法華経の講会を行ったことが記されている。法華経の講会は、「八幡大神」の神宮寺と、「賀春神宮寺（院）」で行っており、弘仁三年に住吉大神のために一万灯を供し大乗経典を読んだのは、住吉神宮寺であった可能性も考えられる。最澄が参詣した頃には、住吉大社の境内に神宮寺が創建されていたとみるのが穏当であるように思われる。すなわち、惟朝が指摘する通り、聖武・孝謙朝から平安時代初期にかけて各地で起こった神仏習合の思潮の中で、住吉大社にも神宮寺が創建されたのであろう。

住吉神宮寺の伽藍景観

創建当初の住吉神宮寺がどのような伽藍を有していたのかは不明である。しかしながら、十一世紀半ば以降については、『松葉大記』巻第十九「氏族部十六」・巻第二十「氏族部十七」によってある程度の復元が可能となる。この二巻は、寛文十二年（一六七二）に勅によって、当時の神主津守国治が、霊元天皇の奏覧に供した「津守〻系図」で、天津彦彦火瓊瓊杵尊を始祖とした津守氏の系譜と、「住吉神主ノ始メ、津守氏ノ之祖」である初代の手搓足尼以下、「当正神主」の第六十七代国教までの歴代神主とその事績が記される。住吉神宮寺については、第三十七代保忠以降に散見するようになる。

保忠は、万寿二年（一〇二五）十二月に神主に補任された後、長元三年（一〇三〇）十月と長元九年七月に重任されるが、長元九年の重任について、惟朝は、「家譜」によって、勅を奉じて神宮寺を造進した功であるとする。このときの「造進」について、惟朝は、破損による修造とみる。しかしながら、その当時の神宮寺の伽藍景観については不明である。

保忠によって「造進」された神宮寺であったが、天喜元年（一〇五三）に火災の難に遭ったらしいことが、第四十七代国平の項に「天喜元年（後冷泉院年号）神宮寺回禄」とあることからわかる。保忠は「社務卅二年」とされ、次代の信国の神主補任が、康平元年（一〇五八）正月であったことからみると、保忠在任中のことであった。この火災は神宮寺の主要伽藍を焼盡するほどのものであったようで、その復興は、第三十九代国基によってなされることになるが、その復興の過程によって、当時の伽藍景観がある程度明らかとなる。

国平の項には、国基は神宮寺の復興に際して、「別（二）立願（一）」を起こして神宮寺西塔の造営を助けるとともに、東塔は、宇治関白、すなわち藤原頼通が創したとする。また、国基の項には、追記として、「同（延久）二年八月十五日神宮寺鐘楼（二）挂（ク）レ鐘（ヲ）」と記されており、延久二年（一〇七〇）に神宮寺の鐘楼に梵鐘が掛けられたことがわかる。承徳二年（一〇九八）二月二十三日には、神宮寺三昧堂の供養が執り行われている。これをもって国基による神宮寺の復興は完成したと考えられる。回禄以来、実に四十五年に及んでいる。ただ、

この時、本堂についての記載がないため、天喜元年の火災では、本堂は焼失を免れたのかもしれない。したがって、『松葉大記』によれば、十一世紀後半の住吉神宮寺の伽藍景観は、少なくとも、本堂・東塔・西塔・鐘楼・三昧堂が甍をならべていたことになろう。

神宮寺の復興を成し遂げた第三十九代国基は、応徳元年（一〇八四）には荘厳浄土寺を建立するなど、「好造寺堂」つたという。惟朝は、国基が津守家の「中興神主」とする一方、こうした仏教への傾倒に対しては、「大失神家者之体」し、「至下好而創寺堂一侯異端之事上、則吾為国基愧之」との評価を下している。

これ以後、神宮寺に関する記事としては、第四十二代盛宣の項に、保元三年（一一五八）八月、経蔵が建立されたことが記され、第四十四代長盛の項には、「此神主時供養西塔一置三綱・上座・権上座・寺主・権寺主・都維那・権都維那等僧位一」とある。長盛が神主であつた時期は、治承二年（一一七八）から承久二年（一二二〇）のこととされる。この時の西塔供養がどのようなものであつたか具体的には不明であるが、神宮寺に三綱以下の僧職が設置されたことからみれば、この時、初めて住吉神宮寺の僧官体制が整つたとも考えることができる。したがつて、国基による神宮寺の復興における西塔の落慶がこの時になつたとみることもできる。国基の立願以来、すでに百年以上が経過しているが、摂関期から院政期そして治承・寿永の内乱期という、時代が目まぐるしく変転する時期にあたつていることもあり、可能性としてあり得るが、第四十七代国平の項に、正元元年（一二五九）十二月に西塔供養が行われたとあるので、国基による神宮寺の復興の際に落慶した西塔が、その後百年を経て、修造されたとみておきたい。

第四十七代国平の項にある正元元年の西塔供養を最後に、「氏族部」での神宮寺の伽藍景観に関する記載はなくなる。『松葉大記』において、その後の神宮寺の伽藍景観に関する記述としては、巻第二十二の「造営部二十一」に掲げられる「御殿（津守ノ則氏）御修理日記」である。これは永正十四年（一五一七）十月十三日付とされ、十年前に東寺の海乗上人の内裏への申上によつて始められた住吉大社の修理についての記録である。そこに「護摩堂ニ厨ヲ作リ。副悉皆経営」とあり、神宮寺の護摩堂に修理本部が置かれ、修理に関する一切の経営が行われていたことがわかる。このことから、住吉大社における神宮寺の占める位置をうかがうことができるとともに、これまでの『松葉大記』の記載にはみえなかつた護摩堂が神宮寺に存在していたことが判明する。『扶桑略記』天慶三年（九四〇）十一月二十一日条には、勅によつて内供奉十禅師の明達を住吉神宮寺に派遣して、藤原純友が降伏するように、十四日間、毘沙門天調伏法を修せしめたところ、純友らが捕縛されたとある。毘沙門天調伏法とは、毘沙門天に敵を打ち破ることを願う密教修法のことである。その際には護摩が焚かれることから、住吉神宮寺には、この時すでに護摩堂があつたとも考えられる。天喜元年（一〇五三）以降の国基による神宮寺の復興において、護摩堂の記載がみえないことは、

本堂と同様に護摩堂も天喜の回禄の難を免れていたのかもしれない。

ついで、神宮寺の伽藍景観に関する記事は、同じ巻第二十二「造営部二十一」に引用された慶長十二年（一六〇七）の豊臣秀頼による造営について記された「慶長十一年津守ノ家盛ヵ記」である。その「慶長十二年分」との書き出しがある書き上げに、この時、造営された神宮寺の建物について記されている。すなわち、築地が再興されたほか、南大門や北西東の三つの門、西塔、両三昧堂、東塔、東西両僧房、護摩堂、鐘楼が挙げられている。住吉神宮寺にこれらの建物がいつ頃からあったのかは不明であるが、おそらく十二世紀半ばの住吉神宮寺の伽藍景観を伝えていると考えられる。十一世紀の国基による神宮寺の復興に際しても、それ以前の伽藍整備が目指されたと考えられるから、あるいは、この伽藍景観は、それ以前すなわち、保忠の修造時に遡るとみることもできるだろう。いずれにせよ、中世の住吉神宮寺の伽藍景観は、本堂と東西の二塔、二棟の三昧堂、護摩堂、鐘楼、経蔵、東西両僧房が建ち並び、その周囲を築地が囲み、南大門と北西東に三つの門が取りつく壮麗なものであったと考えられるのである。

おわりに

以上、本稿では、『住吉松葉大記』をもとに、近世以前の住吉神宮寺について考察した。今回は、神宮寺の伽藍景観に注目したが、『住吉松葉大記』には、神宮寺で執り行われていた法会についても詳細に記されている。また、御田植神事や住吉祭などで行われる住吉踊は、神宮寺の僧によって、現在の姿に整えられるとともに、各地に伝えられたとされている。住吉大社を考える上で、神宮寺は不可欠な存在である。住吉神宮寺の実態を解明するためには、法会やそこに出仕した社僧を始めとした分析が重要となろう。それらについては今後の課題である。憶測を重ねた部分も多いが、紙幅の都合もあり、ひとまず擱筆したい。

（注）

（1）管見に及んだものとして、生駒孝臣「平安・鎌倉期の住吉社境内寺院と津守氏―境内寺院別当職の変遷から―」（『大阪の歴史』七五、二〇一〇年）、同氏「住吉社と住吉社神主津守氏の軌跡」（『大阪春秋』一四二、二〇一一年）。

（2）『住吉松葉大記』は、大阪市史史料第五十八輯『住吉松葉大記（中）』（二〇〇二年）、同第六十三輯『住吉松葉大記（下）』（二〇〇四年）、いずれも加地宏江・中村直人・野高宏之編、大阪市史編纂所、に拠った。

（3）『日本古典文学大系 84　古今著聞集』（岩波書店、一九七九年）。

（4）逵日出典『八幡宮寺成立史の研究』（続群書類従刊行会、二〇〇三年）。

謝辞

本研究にあたり、以下の方々のご協力を得ました。ここに記して深く感謝申し上げます。

（敬称略）

住吉大社　高井　道弘宮司・神武　磐彦権宮司・小出　英詞権禰宜

平成 28 年度関西大学創立 130 周年記念特別研究費（なにわ大阪研究）報告書

住吉・堺の歴史的景観

発　行　日　2017 年 3 月 31 日

発　行　所　関西大学なにわ大阪研究センター

〒 564-8680　大阪府吹田市山手町 3-3-35

研究代表者　黒田　一充

印　刷　所　株式会社　遊文舎

ISBN978-4-946421-58-7　C3021

ISBN978-4-946421-58-7　C3021